近藤勇白書【新装版】

池波正太郎



角川文庫

近藤勇白書

池波正太郎



角川文庫 14192

近藤勇白書

池波正太郎



角川文庫 14192

近藤勇白書　目次

小日向・試衛館　七
乱　雲　四七
江戸に別れて　八五
新選組　一三三
京都動乱　一六〇
隊内粛清　一九七
池田屋襲撃　二三四
戦　火　二七二
江戸に帰る　二〇六

急流の淵　三四三
天皇と将軍の死　三八〇
迷　路　四一九
大政奉還　四五六
敗軍の将　四九三
甲陽鎮撫隊　五三一
挽　歌　五六〇
「近藤勇白書」と池波正太郎さん　中一彌　五九五

小日向・試衛館

一

飯田金十郎などという名はきいたこともないが、とにかく、すばらしい剣士であった。

毛がのびた坊主あたまに、洗いざらしの紺木綿の筒袖、同様の袴という風体で、陽に灼けつくしたこの五十男が、

「一手、御教授にあずかりたい」

と、小石川・小日向・柳町にある剣術道場〔試衛館〕へあらわれたときには、主の近藤勇が一目見て、

「間もなく昼どきだ。飯でも食べさせて帰せ」

門弟の中で最年少の沖田総司にいいつけ、朝からの稽古で汗みずくになった躰を下帯ひとつになって裏手の井戸端へはこび、水をかぶっていると、沖田が駆けて来て、

「やつ、どうしても立合うというのですが……」

にやにやしながらいう。

この文久元年（西暦一八六一）で十八歳になった沖田総司だが、剣は天才的なもので、このごろ稽古のときには師匠の勇も三本に一つはとられる。

沖田は奥州・白河藩の浪人の子で、いまは道場に住みこんでいて、勇をはじめ先輩の剣士たちから、

「総司、総司」

と可愛がられていた。

「不伝流の居合術をいささか学んだと申していますが……どうしますか、先生？」

むろん、師の近藤が相手をするまでもないことだが、撲りつけて追い返すのも気の毒ですね……と言いたげな沖田であった。

躰だけはむっくりと大きいのだが、どう推して見ても剣客とはおもえぬ飯田金十郎なのである。

「ではまあ……手加減をして、な……」

勇は筋骨たくましい躰を丹念にぬぐいつつ、

「はじめに、大沢を出してみろ」

と、いった。

大沢定吉は田安家の家来で、若いが相当につかう。

沖田が道場へ駆け戻って行くのを見送ってからも、勇はゆっくりと躰をぬぐいつづける。

二十八歳の体軀は若い精気が充満している感じであったが、勇の顔貌は十以上も老けて見えるということだ。

顴骨の突出した、眉のせまった、への字に引きむすんだ唇が異様に大きい勇の容貌を、道場へよく遊びに来る永倉新八という剣客が、

「近藤さんの角張った顔つきは、鉋をかけぬ材木みてえなもんだ。材木面だよ」

と評したそうだが、横顔、ことに右側からのそれは、人が違ったような端整さで、

「横顔はふしぎだね。年齢よりもむしろ若く見える」

と、これも永倉の言である。

ながい時間をかけて躰をぬぐい終え、裏口から母屋へ入ると、小さな庭に面した居間に、きちんとたたまれた衣服が勇を待っている。毎日かならず、このときに下帯から肌着のすべてを洗いたてのものに着替えるのが勇の習慣であり、妻のつねもまた無類の潔癖であるから、部屋も台所も塵ひとつとどめていない。

胸のすくような秋日和で、庭のどこかに鶸の鳴声がしていた。

勇が肌着を替えはじめたとき、また沖田総司が庭へ顔を見せ、

「先生。乞食坊主め、やりますよ、やりますよ」

切迫した声であった。

「どうしたのだ？」

「大沢さんも山口さんも、あっという間に打ちとられました。いま山南先生が出ると

ころですが……どうも、あぶないとおもいます」
沖田は思いきったことをずけずけという。
近藤勇も意外な面持となって、
「土方は……」
「土方先生は今朝から多摩へ……」
「あ、そうか」
多摩郡一帯は、勇の故郷でもあるし、先代の近藤周助（周斎）から引きつづいて、毎月、勇が剣術の出稽古へ行く。
同じ多摩の出身で、勇に兄事している土方歳三が、今月は自分に代って数日泊りの出稽古に出て行ったことを勇は思い出した。
「ま、いい。山南君ならわけもあるまい」
「そうでしょうか？」
「ふふん……もし山南が負けたら、お前、出ろ」
「かまいませんか」
と、沖田は闘志を露骨にして、
「よおし!!」
ぱんと手を打ち、また道場へ駆け去った。
そこへ、勇の妻女・つねが入って来た。

二人は去年三月に結婚。三つ年下のつねであるが、長らく江戸城・大奥に奥女中として奉公してきただけに、万事、ぬかりがなさすぎ、部屋の出入りにもいちいち三つ指をついての堅苦しさで、農家に生まれ育った勇が、いささかもてあますところもある。

つねは、このとき五ヵ月の身重で、腹もかなりふくらんできていた。

「御膳は、いかがなされます？」

昼飯のことだ。

勇は「うむ」といいかけて思い直し、

「ちょっと待て。道場をのぞいてくる」

「なにか？」

「いや、別に……」

つねが傍へ来て、着替えを手伝う。

勇が、蔭へまわっては、つねのことを、

「うちの馬御前」

と呼んでいるほどの長い顔だちだが、さすがに大奥づとめの品格そなわり、万事に四角張った態度を見て、

「あのお人を、近藤さんはどんな顔をして抱くものか……ちょいと見たいもんだな」

永倉新八が、けしからぬ冗談をとばしたことがある。

「先生……」

また、沖田が庭へあらわれた。

「山南君もやられたのか？」

「はあ。私が出ようとしましたら、永倉さんが飛び出してしまいました」

「そうか」

もう捨ててはおけない。

仙台脱藩の山南敬助は、この春、試衛館へあらわれ、近藤勇に竹刀を叩き落されてから妙に気が合い、そのまま道場にとどまり、勇のかわりに門人たちへ稽古をつけているほどの腕前であった。

この山南を打ち負かしたということは……。

（あの乞食浪人、どうも大変なやつらしい）

廊下へ出て行く勇を、つねが手をつかえて見送る。

つねの、目じりの少し下がった切長の眼に軽蔑の色がうかんだ。

二

こうしたことは、つねが嫁に来てからも三、四度あった。

試衛館は、江戸にある剣術道場の中でも先ず二流の下というところで、それはよいのだが強い剣客が試合を申しこんで来ると〔先生〕の近藤勇はどうも逃腰になる。

もし主が負けては道場の体面にかかわるというわけなのだろうが、これがどうも、つねにはおもしろくない。

八王子の千人同心・松井八十五郎のむすめに生まれたつねであるが、長年の大奥づとめで気位も高くなっているし、気性もつよい。

母屋から道場へは、ひとまたぎの渡り廊下でつながれている。

土方も沖田も山南も、近藤家に寄宿している連中は、夜になると道場の板の間へふとんをしいてねむるという……道場そのものも十坪ほどのささやかなものであった。

勇は、渡り廊下へ立ち、板戸のすき間から道場をのぞいて見て、

「あっ……」

おもわず、低い声を発した。

「飯でも食べさせて帰せ」

などといいおき、先刻、ここを出たときまでの飯田金十郎とは別人のような闘志にみちみちた彼が道場の真中に立ちはだかっている。

面をかぶっているので顔は見えぬが、その面金の間から金十郎のらんらんたる眼光が射つけるように永倉新八を迎えたところだ。

江戸育ちの永倉は、神道無念流の岡田十松にまなび、諸方を回遊して他流試合の経験も豊富であるし、これも沖田同様に天才的な剣士で、はじめて永倉が試衛館へあらわれたときには、土方歳三も手が出ず、たまりかねた勇が飛び出したが三本のうち二

本をとられてしまったものだ。

いまでも、稽古では永倉の飛燕のような剣さばきを勇はもてあましてしまう。

「あ、先生……」

近くの旗本の三男坊で、伊藤仙三郎というのが通路を横切りかけて声をかけるのを勇は手で制し、眼顔でまねいた。

「何でしょうか？」

「ここにいろ」

「とんでもないやつが来たもので……」

「叱っ……」

道場では……。

飯田金十郎と永倉新八が礼をかわして立ち上り、竹刀をかまえ合ったところだ。

大沢も、山口も、山南も、それから沖田も充血した顔つきで二人の立合いを見まもっている。

腰をすえ気味にした永倉独自の低いかまえに対して、金十郎は竹刀を右わきへそばめるようなふしぎなかまえ方で、

「や、やあ!!」

すさまじい気合を発した。

こういうのを、

「田舎剣術め」
いつもの永倉なら、せせら笑って相手にもせぬところだが、どうしたものか、いつもの伸びやかな剣さばきも見せぬままに、
「え、おう!!」
咆哮しつつ肉薄する飯田金十郎に圧され、じりじりと後退しはじめた。
その一瞬……。
鈍重な巨体に似合わぬ速さで金十郎が踏みこみ、小わきにそばめていた彼の竹刀は電光のごとく疾った。
「面!!」
あざやかに一本。
さすがの永倉が手も足も出ない。
二本目。
永倉は猛然と、いどみかかった。
せまい道場の中を目まぐるしく二人が飛びちがい、軽快をきわめる永倉のうごきに対して、金十郎は一歩も退かずに巨体をあやつる。
互いの胴へ、籠手へ、面へ……双方の竹刀が烈しく撃ち合ったのも一瞬のことで、
「たあっ!!」
右ななめに躰を引きざま金十郎の竹刀が、またも永倉の面を襲った。

（これでは、沖田が出てもいかんな）
見きわめるや、近藤勇は伊藤仙三郎の腕をつかみ、
「行け!!」
と、いった。
伊藤、心得たもので、
「はっ」
こたえると背をまるめて、はだしのまま廊下を駆け下り、門の外へ飛び出して行く。
勇は苦笑しながら居間へもどり、またも三つ指ついて迎えるつねに、
「飯」
「はい」
「道場の客人にも出してくれ」
「はい」
つねの眼が白く笑っている。
（また、お逃げになるのでございますね）
と、いいたげな皮肉さで笑っているのだ。
勇は気にしなかった。
あぐらをかいて、
「ゆっくりでいいぞ」

と、いった。
庭先から永倉新八が面を外したばかりの赤い顔を見せた。
「近藤さん。あの乞食坊主め、ひどいもんです」
「見たよ」
「どうします？　あなた出たらやられる」
永倉も、いいにくいことを平気でいう。
「やられるなあ」
つねが、眉をひそめて台所へ去った。
「近藤先生に一手御教授を……なぞと、乞食め、道場でわめいていますぜ」
「いま飯をくわせる。その間に渡辺さんが来る。伊藤を迎えにやった」
「へへえ」
永倉は負けたくせに口惜しい様子も見せず、縁先へ腰をかけ、湯気をたてているあたまや顔を手ぬぐいでふきながら、
「ああいう剣客がいるんですねえ」
微笑していう。
勇の頬にもふかい笑くぼが生まれた。
「いるなあ」
ぴたり、二人の眼と眼が合うや、

「は、はは……」
「うふ、ふ、ふ……」
笑い出していた。
そこへ、勇の養父・近藤周斎が七十の老体を奥の間からはこんで来て、
「勝太よ、どうした？」
勇の幼名をよび、
「つねが、わしのところへ来て、旦那さまが、またお逃げなさいますといったぞ」
「左様で」
「出てみたらどうだ？」
「やられてもかまいませんか」
「そりゃ困るが……」
「やせても枯れても試衛館です。あんな男にやられては私ばかりか父上のお名にかかわる」
「わしなんか、どうでもいいがな」
などと、永倉をまじえて三人とも、これが道場破りの腕力に困りぬいた人たちとも思えぬほどの〔のん気〕な声であった。

三

試衛館の危急を助けるために、渡辺昇が駆けつけて来たのは、それから半刻（一時間）後のことである。

渡辺は、当時、江戸随一の繁栄をうたわれた神道無念流・斎藤弥九郎道場〔練兵館〕の塾頭をつとめている。

肥前・大村藩から江戸へ修行に出て来ている青年だが、近藤道場とはくらべものにならぬ超一流の練兵館の塾頭を、この夏から命ぜられているだけあって、

「練兵館の渡辺昇」

といえば、江戸の剣道界で知らぬものはない。

渡辺も、乞食剣客の飯田金十郎同様の巨体ながら平常の挙動は颯爽たるものがあり、加えて童顔の人なつかしげな性格で、近藤勇が渡辺と知り合ったのは、市ヶ谷八幡境内の茶店においてであった。

これが二年前のことで、

「失礼ですが、試衛館の近藤先生ではありませんか」

渡辺のほうから声をかけてきたものである。

だからといって、

「一手御教授を……」

などと野暮なことはいわぬし、それからは、ときどき柳町の試衛館へ遊びに来ては若い連中と冷酒をくみかわすのが常となった。

興がおもむくままに、ときどきは土方、山南、沖田などを相手に稽古をするが、とても試衛館の剣士たちでは歯がたたない。

こころやすくなると、近藤勇は率直なもので、

「当方で手におえぬ相手が来たら、助けに来て下さい」

と、渡辺にたのんだものだ。

去年の正月。その第一回目のときに、渡辺が駆けつけて強敵を追い払ってくれた翌日に、勇は供につれた沖田総司に角樽の冷酒を持たせ、羽織・袴の正装で練兵館をおとずれ、

「昨日は、まことにありがとう存じました」

悪びれるところもなく、こころからの礼をのべたものである。

こういう勇の人柄は練兵館の人々にも好感をもたれ、渡辺の前に塾頭をつとめていた太田市之進なども、

「近藤さんはいい人だ。いつでも行ってやれ」

と、渡辺の助太刀を黙認してくれた。

練兵館の大先生、斎藤弥九郎は何事にもやかましく、他の道場の助勢などを決してゆるさぬが、いまや老齢でもあるし、天下の名士としての交際が多忙で、代々木の隠居所にいることが多い。

だから道場は弥九郎の長男・新太郎が先に立って運営しているのだが、この若先生

も近藤勇の人柄を好み、沖田などが、
「たのみます」
と駆け込んで来るのを見ても、知らぬふりをしていてくれるのだ。
「どんなやつです？」
渡辺昇は気やすげに庭先から上って来て、
「乞食だとか何だとか、伊藤がいっておりましたが……」
近藤があたまを下げ、
「永倉君までやられましてね」
「ほほう」
「たのみます」
「やってみましょう」
渡辺は、すぐに道場へ出て行った。
飯田金十郎は味噌汁と魚の干物の昼飯をたいらげて一休みしているところであったが、
「当道場の井口伝八郎というものです」
渡辺が挨拶をするや、うんざりとした顔つきで、
「近藤先生はどうなされた？」
「おられます」

「近藤先生に出ていただきたい」
「拙者が、もしも負けましたら、先生が……」
「本当か。本当ですな」
「御念にはおよばぬ」
「よろしい」
二人は、道具をつけはじめた。
近藤勇は道場へ出てこなかった。居間で、きちんと正座したまま、養父が丹精している鉢の菊をながめている。
つねが入って来た。
「つね。渡辺さんに、いつもの仕度を……」
勇が断定的にいう。
いつもの仕度……というのは、渡辺が相手を追い払ってくれたときに謝礼の意味をふくめて酒を出すことをさす。
つねが、
「勝てましょうか、渡辺さま」
いい返すと、
「むろんだ」
事もなげな勇の返事なのである。

果して……。
渡辺昇が勝って居間へ戻って来た。
「どうでした?」
と、勇。
「いい年をしているが、かなりつかいますね」
「うむ、うむ」
「いま、肩をそびやかして帰って行きましたよ」
永倉、山南、沖田などが、どっと庭先へ集まり、
「いやあ、大したもんだ」
「見とれましたよ」
しきりに渡辺をほめそやす。
はじめの一本は飯田金十郎の面がきまったそうだが、二本目は、いきなり渡辺が飛びかかって体当りをくわせたという。巨体と巨体がぶつかり合って、
「いやどうも、道場の羽目板がやぶれるかと思いましたがね」
と、永倉が笑う。
ぶつかり合って離れたとき、金十郎の竹刀は見事に渡辺の竹刀に巻き落されていた。
これで衝撃をうけたものか、昼前から何人も相手にした疲労もあってか、飯田金十郎は三本目に渡辺の胴払いをうけて、

「これまで」
自分から声をあげ、堂々と胸を張り、
「近藤先生によろしゅう」
あっさりと引き上げたそうだ。
「ありゃ、何者だろう?」
ということだ。
つねがはこんで来た冷酒を茶碗であおりつつ、乞食浪人の剣法をみんなで論じ合う。
剣術が飯よりも好きな連中にとって、もっともたのしい時間なのである。
酒の肴には、丼鉢に沢庵を山のように盛ったのが出る。
「このように見ともないものを出せませぬ」
と、はじめはつねが顔をしかめたものだが、
「当道場のならわしというものだ」
めずらしく勇がきびしい声を出した。
この助勢謝礼の沢庵を、練兵館道場では、
「米国の刺身（チーズのこと）」
と名をつけたものだが、酒ものまず女も買わぬという前塾頭の太田市之進が、
「まるで糞の刺身だ」
まじめな顔つきでいったのには、渡辺昇も「もっと、ほかにいいようがあるだろう

に」と、あきれ返ったことがある。

酒がまわるにしたがい、一同、いつの間にか飯田金十郎のことを忘れてしまったし、勇もまた再び、あのふしぎな剣士を見ることもないとおもっていたのだが、約半年を経て、勇は彼との再会を余儀なくされることになるのだ。

四

近藤勇は、天保五年の生まれで、生家は武州・調布町上石原の農家である。

現在の多磨墓地の東方一キロほどのところで、三鷹の方向からの道が二つに別れる、その角地にあった。いまも、この地形は残されている。

勇の父の名を宮川久次郎という。

このあたりでは屈指の豪農であったし、村の肝煎のような役をつとめてもい、垣根をめぐらした広い敷地の南面に藁屋根のついた門があり、正面が母屋、右手に土蔵、馬小屋。そして庭の西側に剣術道場があった。

武州多摩は、いわゆる〔武州気質〕といって、むかしから武道のさかんなところで、鋤鍬を握る百姓たちに竹刀胝や面ずれのあとを見るのは決してめずらしいことではない。

〔御料百姓〕といい、このあたりの村々は徳川将軍直轄の地で、代官・江川太郎左衛門の支配に属している。

したがって、いざともなれば百姓も武器をとって将軍のためにはたらこうといった気概も誇りも強烈であり、宮川久次郎も、みずから〔久次〕と名乗ったりしたほどだ。文字通りの士農工商の順位をそのままに信じ、これを実践しており、正月などは宮川久次郎、羽織・袴に大小の刀をさしこみ年始にまわったという。

この人の長男が音五郎、次男・粂次郎、三男が勝太で、これが近藤勇である。

久次郎は三人の男子に幼少のころから剣も弓もまなばせたし、自分も熱心に稽古をしたものだ。

この宮川家の道場へ、月に一度か二度、天然理心流の剣客・近藤周助邦武が出張稽古に来て、宮川家のみか近くの子弟たちに剣術を指導した。

「勝太を、わしの養子にくれんか」

と、近藤周助が宮川久次郎へ申出たのは嘉永二年というから、勝太が十六歳のときである。

「願ってもないことで」

久次郎にも異存はない。

このころの宮川勝太が特別に群をぬいた剣技の持主だったわけではなく、むしろ鈍重なほどだし、一説によれば長男・音五郎のほうが稽古では冴えていたともいうが、

「わしが流儀をつぐには、勝太がぴったりじゃと思う」

と、近藤周助がいえば宮川久次郎も、

「いかにも、な」

我意を得たとばかり、うれしげにひざをたたいた。

ここに宮川勝太あらため近藤勇昌宜となる。

ちなみにのべておこう。

近藤周助も同じ南多摩・境村の出身である。

その剣法、天然理心流というのは遠江の近藤長裕から出ている。長裕は、かの飯篠長威斎の後裔ともいわれ、江戸へ出て道場をひらいたが実子にめぐまれず、門弟の一人を養子に迎えた。これが南多摩出身の近藤方昌だ。

近藤方昌もまた実子がなく、門弟・島崎周助を養子とした。

その周助の養子が近藤勇ということになる。

こうして三代つづいて南多摩出身の当主を得、天然理心流は多摩郡へ大いにひろまり、近藤勇の代になると、諸方に同流の道場もふえたし、門人も二百をこえた。

で……。

近藤周助は、江戸へ連れ帰った養子の勇に以後三年、ほとんど竹刀をにぎらせず、みずから手をとって天然理心流の〔組太刀〕を徹底的にたたきこんだものだ。

いま、勇直筆の〔奥義書〕が残っているが、

――表太刀として、序中剣・平晴眼・車剣・手鏡剣・山影剣の五本があり、次に時眼・無明・左足・霞・虎逢・雲向・龍尾の七本がある。

このほかに、居合、立合、柄砕、鐺捌などにもおよび、さらに雁行剣ほか四本。無一剣ほか五本など、なかなかに多彩だ。

要は実戦に際しての気力を最も重んじた剣法で、組太刀の型をつかうときには真剣と同じ重量の木刀を用いる。

勇愛用の木刀を見ると、まるで丸太のごときかたちのもので、手につかめば、たちどころに真剣の重味を感ずることができる。

勇は二十歳の夏ごろから、養父にかわって故郷の南多摩へ出稽古に来るようになった。

江戸の道場を経営する上にも、この出稽古は大切なものであった。

市ケ谷にあった道場がせまくなったので、小石川の柳町へ移転したのも、そのころであったろう。

近藤周助は、いったん道場を勇にまかせるといっさい口出しをせず、四谷・舟板横丁へささやかな隠居所をかまえ、そこへ移ったが、三日に一度は道場へ泊りに来て、竹刀の音をきくのがたのしみだったという。

道場荒しの飯田金十郎があらわれた日も、周助あらため周斎老人が丁度三日に一度の泊り日にあたっていたことになる。

周斎は、会う人ごとに、

「わしは幸福ものですよ。これまでに九人も妻を替えたほどだし、しかも一人の子を

もうけることも出来ず、家の中は実にそれは暗いものでしたが……しかしいま、勇を得たことによって、いっさいの苦労が消え果てたおもいがします」

実に、うれしげな顔、たのしげな顔で語らずにはいられなかったそうだ。

道場としては二流の下でも、勇の人柄がよいので、永倉、山南などの勇と同格の技量をもつ剣士たちも集まって来るし、勇もまたよく世話をつくしてやったものである。

勇とは切っても切れぬ間柄の土方歳三は、勇のというよりも先代・周助の門人といってよかろう。

土方は勇より一つ年下で、多摩の石田村の農家に生まれた。

十一歳で、江戸の下谷上野広小路の〔いとう松坂屋〕へ奉公に上ったが、半年もたぬうちに店の番頭と大喧嘩をし、飛出してしまい、二度目の江戸奉公では年上の下女と関係が出来て、その〔もめごと〕が原因となって、

「もう奉公はいやだ」

さっさと故郷へ戻り、姉が嫁入っていた日野宿の名主・佐藤彦五郎方の厄介者となり、家伝〔石田散薬〕と称する打身の妙薬を行商して歩くようになった。

剣術に熱心となったのはこのころからで、土方少年は薬をつめた荷へ竹刀や面籠手をむすびつけ、武州から甲州へかけ、いたるところの道場を訪問しては稽古をつけてもらった。

近藤周斎が土方に目をつけて、

「江戸へ来いよ」

といったのは、勇を養子にしてから三年目のことであった。

土方歳三は、ふっくらとした面だちの美少年で、才気もするどいものだし、道場の経営から門弟たちへの応接まで万端ぬけ目もなく勇にかわって取りしきってゆくようになり、なかなか愛想もよく多弁で、後年に新選組の〔鬼〕とよばれた凄味などは、さらさら無く、近藤勇も、

「おれは歳三がいてくれるので、養父の半分も苦労をせずにすむ」

と、いった。

苦労とは道場経営のそれをさすこと、いうをまたない。

その土方歳三が多摩の出稽古から帰って来たのは、飯田金十郎があらわれた五日後のことであった。

「只今もどりました」

勇の居間へ来て挨拶をするときの土方は妙に四角張っているが、挨拶がすむと、すぐにくだけた口調になって、

「妙なやつが飛びこんで来たそうですね」

「きいたか」

「沖田から、ね。ところで勇さん」

「何だね？」

「そんなやつが何人こようとも、たった一人でさばいてくれようという、とんでもなく強いのを見つけて来ましたよ」
「ほう……」
「もう、練兵館なぞへ助勢をたのみに行かんでもいい。私はどうも、あの渡辺昇というのは好かんのでね」
勇は、にやにやしていた。
表向きは愛想がよくても、土方の好き嫌いの烈しさは人間関係から食物に至るまで、まったく妥協の余地がないらしい。
つねと夫婦になる前のことだが……。
「たまには、ゆるりと遊んでこいよ」
近藤周斎に金をもらって、深川へ二人が女遊びに出かけたことがある。
朝になって道場へ帰る道すがらに、
「どうだった？」
勇がきくと、土方は、
「どうって……どうでもない」
憮然としている。
女を金で買って、ひとつ夜具にねむりながら、ゆび一本ふれなかったというのだ。
このときは勇もあきれて、

「どうしたんだ、いったい……？」
「どうもしませんよ」
「しかし、お前……」
「抱こうとしたら、昨夜の女、鼻を鳴らしゃあがった……」
「いいじゃないか。お前ほどのいい男の相手になろうというんだ。うれしかったんじゃないか」
「しかし……その鼻の鳴らし方が気にくわんのです」
土方が、苦い薬でも無理にのまされたような顔つきで吐き捨てるようにいう。勇が帰ってから、これを周斎にはなすと、老人、腹を抱えて笑ったものだ。
その土方が八王子の荒川道場で出会って、気に入ったという剣客を、
「どれ、見てこようか」
勇が土方と共に道場へ行くと、早くもその男、道具をつけて沖田総司を相手に稽古をはじめようというところだ。これも剣術きちがいの口らしい。
でっぷりとした体つきの、きょとんとした眼つきの、髭あとの青々とした若者である。
「や、近藤先生ですか。厄介になります。原田佐之助というもんです」
ぱきぱきとした威勢のいい伝法な口調で、まくしたてるようにいってよこした。

五

原田佐之助は、伊予・松山藩の足軽あがりで、故郷では〔ごろんぼ〕の異名をとった。

つまり、破落戸とか、ならずものとか、悪漢とかいう意味であろう。

だから剣術も正式にならったものではないらしく、

「御流儀は？」

近藤勇が訊くや、

「ま、原田流というようなもんです」

と、こたえたものだ。

これは後になって勇が耳にしたことだが……原田は永倉新八とたちまちに意気投合し、

「おれはね、永倉さん。もう十何人も斬っているよ」

片眼をいたずらっぽくつぶって見せながら、こうささやいたという。

とにかく得体の知れぬ荒っぽい剣術で、これが試衛館の雰囲気にぴたりはまったようだ。

格は二流でも、試衛館の荒稽古は評判のもので、勇をはじめ、土方、沖田、永倉など興がのればたてつづけに立ち切り四刻（八時間）の稽古などはめずらしくない。

むろん、剣術が好きだからなのだが、このころの江戸で少くとも剣を帯し、剣をまなぶものにとっては、

「これからの世には、何が起るか知れたものではない」

という危機感が募るばかりで、その非常のときに対処するべく、

「うっかりしてはおられぬ」

との緊迫があり、江戸のみならず、日本の剣道界は、この幕末期にあたって非常な隆盛を見つつあった。

当然である。

八年前の嘉永六年。

突如、アメリカ艦隊が相州（神奈川県）浦賀へ入港し、通商と開港の実施を幕府にせまった。

遠因は種々あったのだけれども……このときから、二百五十年もの間、日本の政権をにぎり、天下に号令しつづけてきた徳川幕府の柱礎が音をたててゆるぎはじめたのである。

これより先、三十年も前からロシアが日本の北辺をねらいはじめていたし、蝦夷（北海道）を侵略せんとするロシアに対しては、幕府も非常な苦労をかさねてきている。

ようやくにロシアが手を引いたと思うと、次にはヨーロッパ諸国が日本に目をつけ

はじめた。

阿片戦争によって支那を侵し、香港をつかみとったイギリスも、フランスもアメリカも、それぞれの国情と意図を背景に、日本へせまった。

ペリイ提督のひきいるアメリカ艦隊、その恐るべき科学文明と財力を背景にした傲然たる鉄の軍艦……。

これが将軍おわすところの江戸のすぐ近くの海へあらわれたのを見て、幕府は観念せざるを得ない。

好むと好まざるとにかかわらず国をひらき、アメリカの要求に応ずるよりほかに道はないのである。

かくて、翌年の春にはアメリカとの和親条約が成立をしたわけだが、同時に海外からの侵入に対する防備も泥縄式にととのえねばならぬことになった。

平穏な、あまい〔鎖国〕の夢は、ついにやぶれた。

二百年も前に〔鎖国令〕を発し、武力によって諸国大名を屈服せしめてきた幕府であるが、いまや、その威力はない。

そもそも、外敵にそなえるといっても幕府一個のちからでは何事も出来ぬ。金も人も不足をきわめているのだ。

かつては諸大名たちが規定以上の武力をもつことをきびしく禁じ、監視をおこたらなかった幕府も、いまこの非常時に、そのようなことを持続しつづけられるものでは

なかった。

国防は、諸大名によって分担されることになった。

こうなってくれば大名たちの幕府へ対する姿勢も、おのずから従来のものとはちがってくる。

薩摩、長州、土佐、水戸など、実力をそなえた大名たちは、もはや将軍や幕府のいうことをおとなしくきいてはいなくなった。

ちからおとろえた幕府政治は下らぬ慣例や複雑な制度関係の網の目におおわれ、することなすことが一時しのぎの尻ぬぐいに終り、その幕府への批判は、

「外敵をしりぞけよ!!」

の叫びとなる。

二百余年もの間、国をとざして外国との交渉を絶っていたのだから無理もないところだが、その根本をなすものは、外国事情への無智がよぶ不安と恐怖にほかならない。

「日本は神の子の天皇がおわす神国であって、獣のごとき異人種の侵入をゆるしてはならぬ」

という思想が、幕府政治への批判と表裏一体となった。

これが、

「尊王攘夷」

のスローガンであって、いわゆる維新革命の発火点となるのである。

幕府は、近江彦根の城主、井伊直弼を大老職に任じて、内外の危急を切りぬけようとした。

さらに……。

井伊が、幕閣最高位の大老職へ就いた裏面には、次代将軍をめぐる有力大名たちの政争があった。

病弱で子もなく、役にもたたぬ十三代将軍・家定では、とてもこの時局を乗りきれぬ。

一時も早く次代将軍をきめておかねばならない。

「一橋慶喜公を迎えよ」

と、主張するのは阿部正弘（福山藩主）、松平慶永（福井藩主）、島津斉彬などの大名たちで、慶喜の実父である徳川斉昭も当然、これに属する。

これら〔慶喜擁立派〕の大名たちは、

「新しい将軍・慶喜を中心にして協力一致の政権を……」

とのぞむ、いえば幕政革新派といってよかろう。

これに対して……。

「将軍家に、もっとも血すじの近い紀州家の慶福公を次の将軍位に……」

と主張するのが、井伊直弼をはじめ紀州派大名たちの〔保守党〕ということになる。

ところが両派の政争は、革新派の巨頭・阿部正弘と島津斉彬の急死によって、にわ

かに〔紀州派〕の勝利へかたむいてしまった。

後になっていえることだが、この阿部と島津の両大名を失ったのは、幕府にとって井伊直弼を大老に任ずることなどとはくらべものにならぬ痛撃であったといえよう。

彼を知るもののすべてを心服させたといわれる阿部正弘の政治力と、七十七万石の実力を背景にした島津斉彬の英邁な行動の発揮が、あと数年もつづけられていたら、おそらく明治維新の様相は別のものとなっていたろう。

アメリカに引きつづき、イギリス・ロシア・オランダとも和親条約をむすんだ幕府に対して、

「異狄（外国の野蛮人）を追いはらえ!!」

の叫びは、京都朝廷を中心にすさまじい火の手をあげはじめる。

この尊王攘夷運動に対し、井伊大老は敢然と大弾圧へふみきった。

これが〔安政の大獄〕とよばれるもので、井伊は、公卿・大名・志士をふくむ百余名を罰し、吉田松陰・橋本左内・頼三樹三郎など八名が死刑となった。

井伊の立場としては当然のことであったろうが、ここに一橋慶喜を擁立する革新派勢力は破砕され、慶喜も隠居を命ぜられてしまう。

かくて井伊大老の独裁政権が生まれたわけだが、きびしい弾圧への反動は層倍のはげしさをもって井伊に襲いかかったのである。

すなわち、万延元年三月三日。

井伊直弼が藩邸とは目と鼻の先の、しかも江戸城・城門の前で水戸浪士らに暗殺されたのだ。

六十余名をもってととのえられた大老の行列へ襲いかかった浪士は十八名。

井伊の家来三十余名が抜刀して、これを迎え撃ったが、たちまちに切りくずされ、井伊は駕籠から引き出されて、首を討たれてしまった。

最後まで大老の駕籠をまもって闘った者は八名にすぎなかったといわれている。

まったく無傷の家来さえいて、彼らは、浪士襲撃と知るや先を争うように、

「一大事にござる!!」

藩邸へ注進におよんだのはよいが、その後、どこかへ隠れてしまい、事件後どこからともなくあらわれ、同僚の死体の整理にあたったりした。

譜代の大名のうちでも将軍家がもっともたのみとする大名のひとりである彦根三十五万石の大藩・井伊家が、これほどまでにちからおとろえていたというのは、取りも直さず幕府自体の衰亡をしめすものであった。

井伊大老は、徳川幕府権力の最後のシンボルといってよかろう。

彼が暗殺されたときから、幕府の栄光は消えたといってよい。

これが、去年のことだ。

練兵館の渡辺昇が、近藤勇にこんなことをいったものだ。

「あの大雪の朝に、老中の安藤侯が襲われたという、知らせが練兵館へ入りましてね。

拙者、前の塾頭の太田さんと一緒に桜田門へ駆けつけて見ましたところ、殺されたのは安藤侯ではなくて井伊大老だったわけで……万事、終ったあとでしてね。井伊家の人たちが死体をかたづけているところでした。いやもう雪と泥と血をこねまわしたようなもので……太田さんが血相を変えましてね……」

そのとき、市之進は渡辺昇の腕をつかみ、

「こりゃあ、大変なことだ。天下の大老が江戸城の前で殺された。これは渡辺君、大変なことだよ」

ものにつかれたような声で何度も何度もいったそうである。

勇は、これに対して無言であったけれども、

（いずれにしても、このままではすむまい）

と、考えている。

外からは欧米列強の圧力。

内には勤王革命の暴力運動。

いやしくも剣をとる男であるかぎり、いずれにしても行手の騒乱へ巻きこまれてはたらくことになろう。

近藤勇としては、いうまでもなく、おとろえかかった徳川幕府をささえる微力ともなって活動したい存念であった。

この段階においては、幕府にも革命の志士にも、どちらが〔正〕で、どちらが

〔邪〕か、などということを論断しきれるものではない。
論断は、後世の人びとが自由勝手におこなうものである。
双方が互いに傷つけ合い、叩き合い、そのたびに反動が反動をよび、その振幅の度が次第に強烈な叫びをあげて大きくひろがってゆく革命前期の様相の中では、どのような論断も決定的な意味をもたぬ。

六

文久二年となった。
近藤勇二十九歳。
妻つね二十六歳で、つねはこの年の二月十五日に女の子を産んだ。
勇は、
「はじめての子だから、お初と名をつけよう」
と、いい出したが、つねは、その単純さを軽侮したような表情をみせ、
「名は、わたしがつけまする」
きっぱりという。
「ふむ。それもいいだろう」
勇は、こだわらなかった。
つねは、

「瓊子」
と命名した。
「仮名のたまじゃないのか、むずかしい字だな」
「瓊の一字は、彩色美しき玉の意にて、万象の上の美しき物の形容にもちいまする」
奥方、なかなかにうるさい。
「ふむ、なるほどな……」
つねの傍で泣声をあげている猿の子のようなのを見ていて、どこが美しいのかわからぬが、
（悪い名ではない）
と、おもった。
隠居の周斎は初孫の誕生だし、
「よい名だ、よい名だ」
大よろこびであった。
つねは周斎につかえて一点の隙も見せない。
舟板横丁の隠居所には下女をひとり雇って周斎の世話をさせているけれども、つねは絶えず気をくばり、周斎の好物を晩酌の膳につけるよう手配をおこたらぬ。道場へ泊りに来たときはむろんのことで、
「養子も貰いあてたが、嫁も、な……」

と、周斎老人は大満足なのである。

それは、瓊子のお七夜がすんでからどれほどを経てからだろう。

「たしか十日目のことだ」

のちに近藤勇がのべているが、とにかくその前日から、泊りがけで、目黒・行人坂上の森対馬守屋敷へ出張稽古に出かけたものである。

森家は、播州・三日月一万五千石の小さな大名で、幕府にとっては毒にも薬にもならぬという……だから当時は江戸市中とはいえぬ郊外の目黒なぞに本邸があるのだ。

試衛館と森家の関係は、先々代の近藤方昌が森家の年寄・河合鉱之進と昵懇であり、以来、月に一度の出稽古がならわしとなっている。

日が決まると、その月のはじめに森家から使いが来て、勇は泊りがけで出かけて行き、家来たちに稽古をつける。

森家には、額田八蔵という周斎老人の高弟がいて、平常はこの人が師南役なのだ。

勇は、沖田総司と、これは自分より五つ年長の井上源三郎という温厚な門人をつれて森邸へ出かけた。

稽古を終えて、その翌日の午後もおそくなってから、勇は森邸を辞去した。

そのころの目黒は、まったくの田舎であった。

現在の目黒駅前の通りの両側は、俗に六軒茶屋町といって町家もあるし茶店も並び、さすがに名高い目黒不動へ通ずる道すじのにぎわいだが、裏側は一面の田地で、大名

の下屋敷が点在するといった風景である。
近藤勇は二人をつれて、森邸の正門を出るや、塀に沿って右へまがった。
段丘の左上に畑地をへだてて、六軒茶屋町の家並がのぞまれる。
森邸の塀が切れると、右側の谷間から畑がうねりながら眼前にせまる。
「春だなあ」
勇は、おもわずつぶやいた。
「土の色が、めっきりと違ってきた。匂いもな……」
「はあ、はあ」
と、井上源三郎。
沖田は例によって、にやにやしている。
何か、けだるい曇り日であった。
総髪、たぶさにゆいあげた勇は、小倉の袴に黒木綿の紋付、羽織で、ゆったりと歩む。
左に、茶屋町通りへぬける小道が見えた。
と……。
その小道へ雑木林の中から、ふらりと人影が一つ、にじみ出すようにあらわれたものである。
「あ……」

と、沖田総司が、
「先生。この間の乞食坊主ですよ」
すばやく見つけて、
「何だ、あいつ……？」
勇は立ち止った。
まさに、飯田金十郎なのだ。
去年の秋、試衛館へあらわれたときと同様の紺木綿の筒袖を着て、今日は袴もつけていず、裾をからげた腰に大刀一本の落し差しであった。
むさくるしい坊主頭に破れのひどい菅笠をかぶっている。
「待っていた」
声をかけ、金十郎が近づいて来、勇と約三間をへだててぴたりと止る。
「何用ですかな？」
勇の平然たる声だ。
「わからぬかい」
白いものがまじったあごひげを指でいじくりまわしつつ、金十郎が、
「お前、ひどいやつだな」
「何が？」
「去年だ。おれを打ち負かした井口何とやらというやつ、ありゃ、お前の門人ではな

いではないか」
「む……」
「一昨日、九段の練兵館へ勝負に行ったら、やつがいたぞ。塾頭の渡辺昇というんではないか」
「左様」
「何が左様だ、こら。やい近藤」
「はい」
「けしからんではないか、けしからんとは思わんか」
「黙れ!!」
と、沖田が口をはさんだ。
「文句があるなら、おれが相手……」
「黙れ、小僧。きさま、去年、おれに手もなく負けたではないか、ばか!!」
「何を……」
むきになる沖田を押えて、勇が、
「飯田うじ。ま、今日は一緒に酒などくもうではないか」
おだやかにいった。
こういうところは年齢に似合わず、なかなか練れていて、決して怒ったりはしない。
井上源三郎は、うしろから黙って見ている。

「酒などいらん!!」
叫ぶや、飯田金十郎がいきなり大刀をぬきはらい、
「卑怯者(ひきょうもの)め、真剣だ!!」
「怒っておられるのか？」
「当り前だぞ」
「ふむ……」
うなずいた転瞬、目にもとまらぬ速さで勇が羽織をぬぎ捨てて抜刀した。
この、平常に似合わぬ俊敏な勇のうごきに、沖田も井上も息をのんだほどである。

乱　雲

一

大刀を抜きはらったとき、近藤勇は草履をぬぎ飛ばし、
「おおう!!」
何とも形容のつかぬ凄(すさ)まじい咆哮(ほうこう)をあげて、飯田金十郎へせまった。
「あっ……」

金十郎は狼狽の声を発し、土けむりをたてて後退をした。

彼は右に大刀をぬき、左手に菅笠のひもを解こうとしたのだが、その一瞬の間隙をすらあたえぬほどに、勇の肉迫は機敏をきわめていた。

「私は、なんとしても……」

と、のちに目撃者の沖田が土方歳三へ、このときのことを語っている。

「私は、なんとしても、あのときの近藤先生が別人に思われてならぬほどですよ。いやもう、刀をぬいたときの身のこなしの素早さというものは……、実に全くそれ、目にもとまらぬという……こういっては何だが、ふだんの、道場で稽古をしているときの先生の、あの、のろまな恰好とは……」

「総司。ずけずけいうなあ、お前は……」

「だって、そうだもの」

「ふ、ふふ……ま、いい」

「そればかりじゃあない、あの気合声の物凄さ。見ていたこっちの五体がぴりぴりしたもんです」

すると、土方はにんまりとして、

「総司は、近藤さんの真剣勝負を見たことがないからさ」

「では土方さん。あなた、見たのですか？」

「さあね……」

いざとなると、煮えきらぬ返事をするのが当時の土方の癖で、
「ま、総司は近藤さんの斬合いを見たのだから、それでいいじゃあないか」
あとはもう、沖田が何をたずねても笑っているばかりなのである。
場面をもどそう。
飯田金十郎は飛びさがりつつ、笠をはねのけようとしたようだが……。
ついに、その余裕を失った。
大刀を右手ひとつに提げたままのかたちで、勇が息もつかせず追いこんで来たものだから、
「や、やあ!!」
金十郎は笠をかぶったまま、両手に大刀をかまえて、裂帛の一声を発した。
これで、近藤勇の足もとまる。
両者は約一間半をへだてて睨み合った。
金十郎の魁偉な顔貌が鉛色に変じているのが、沖田にも井上源三郎にも、はっきりと見てとれた。
沖田や井上が、勇の猛烈果敢な肉迫ぶりに瞠目したのと同様、飯田金十郎にとっても、
（こ、これが近藤か……？）
であったろう。

去年、自分が道場破りをかけたときには、自信を喪失して、練兵館から渡辺昇を助勢にたのんだほどの近藤ではないか……。

その弱いやつに、自分が追いまくられている。

しかもだ。

近藤勇は、晴眼にかまえた自分の剣の前へ全身をさらけ出し、おのが剣をだらりとひっさげたままの不敵なかたちで、ジリジリと恐れげもなく尚もせまってくるのである。

「あ……うう……」

勇の細い切長の両眼から発する光芒に射すくめられ、飯田金十郎は低く、うめいた。

が、うめいたと思った瞬間、彼は刀をかまえたまま横ざまに思いきって走り、道を横断するや、森対馬守屋敷の塀の切目から畑地へ曲がりこみ、ここでようやく笠をとった。

勇は追わなかった。

体の向きを変え、相変らず刀を提げたまま、飯田金十郎を凝視している。

金十郎は、あのむさ苦しい坊主頭をふりたて、

「や、おう!!」

大刀を平晴眼につけたかと思うと、猛然、勇へ襲いかかったものだ。

間をせばめつつ、その大刀が頭上へふりかぶられ、うなりを生じて勇へ撃ちこまれ

た。

同時に、勇の右手に提げられた一刀も生暖い春の大気を引裂いて宙に躍った。

「曳(えい)!!」

飯田金十郎の体軀(たいく)がへし折れたようになった。

撃ちこんだ彼の刃を、下から擦り上げた勇の刃にはね飛ばされてしまったのである。

さらに、勇の刀は空間に一回転し、その余勢を駆って、飛び逃げんとする金十郎の横面をざくりと切った。

「わ、わあっ……」

絶叫をあげて、満面を血みどろにした金十郎が恥も外聞もなく、雑木林の中へころげこみ、必死で逃亡にかかった。

「待て、こいつ……」

沖田が追わんとするのを、勇が、

「総司。やめろ」

「しかし、先生……」

「いいさ。おれも殺したくはなかったんだから……」

井上源三郎が道へ屈(かが)みこんで、

「やつの耳が切り落されている。これあ、左の耳ですな」

ぼそりといった。

二

勇は、沖田と井上へ、
「みんなには黙っているように」
釘をさしておいたが、寡黙な井上源三郎はともかく、沖田にしてみれば、
「これが黙っていられるものか」
であった。
夜になって、道場に泊りこんでいる者や、居合せた永倉新八などの耳へも、すっかり入ってしまったらしい。
勇が裏手の小さな風呂場で躰を洗っていると、
「近藤さん。いま、沖田から聞きましたよ」
永倉新八が裏庭に面した窓を外から開け、人なつかしげな童顔をのぞかせた。
「何をね？」
「何をって、近藤さん。何もおかくしになるにゃあおよばないではないですか」
「総司は、おしゃべりだな」
「いや実に凄いもんだったそうで……」
「別にね……ただ、こっちも死ものぐるいというやつで……」
「いわっしゃる、いわっしゃる」

「いや、本当のことさ」
「見たかったなあ、私も……」
「なに、君だって真剣をとれば飯田金十郎に負けはとらない。そのことは先ず第一に君自身が知っている」
「とんでもない」
「いわっしゃる、いわっしゃる」
と、勇が永倉の口まねで応じた。こういうところ、思いもかけぬときに勇の素朴な戯謔が出るのを永倉は好ましくおもっている。
勇もまた、腹中に一物もない、いかにも江戸育ちらしい、この青年剣士を愛していて、自分の稽古に興が乗ってくると、
「永倉君、もっとやろう」
きまって相手は永倉新八。
ああでもない、こうでもないと二人きりで小一日を稽古でつぶすのであった。
それだけに、永倉が好きな剣の道でもあるし、執拗に問いかけてゆくと、
「あれはね……」
勇も、にやりとなって、
「天然理心流、陰橈の内の、龍尾の剣というやつさ」
と洩らした。

龍尾の剣法は、諸流さまざまにあるというが、つまり敵の攻撃力を逆用して反撃する一手であって、

「尾を打てば頭来り、頭を打てば尾来る」

といわれるものだ。

「ふうむ……」

たちまちに永倉は眼をかがやかせ、

「明日、教えて下さい」

と、せがむ。

「むう……」

勇は、ちょっとためらう。

流儀にもよるが、このころの剣術は諸流ともに非開放的であって、切紙をゆるした門人にはこれだけ、さらに進歩して本目録をゆるしたときにはこれとこれを……などと、自流の奥義をつたえるためには、やたらに小むずかしい段階をふませなくてはならぬ。

まして永倉は、義父・近藤周斎取立の門人でもないし、他流の神道無念流をまなんだ男である。

で、ためらったが、

「よろしい」

勇は、にこりとして、
「みんなにも見てもらおうよ」
「本当ですか。それあ、ありがたい、ありがたい」
永倉は小躍をして道場のほうへ駆け去った。
風呂からあがり、居間へ入ると、遅い夕飯の膳が出ている。
その膳の上を見て、
「何んだ……？」
勇は、いぶかしげにつぶやいた。
見事な鯛が尻尾をはねあげてい、貝柱と三葉の酢のものだとか、蛤の吸ものだとか……。
平常の近藤家の膳には、めったにのぼったこともないような御馳走がならんでいるではないか。
道場の経営もらくではないので、魚といえば干物ばかりだし、それに豆腐の煮しめでもつけば上等のほうなのである。
「これは、その……」
勇が膳の上へ屈みこんだとき、
「おそくなりました……」
つねが燗のついた徳利を二本、盆の上へささげ持ってあらわれた。

「あ……」

勇は妻の顔を見て、むしろ度をうしなったものである。

（つねには、こんな顔もあったのか……）

であった。

にこやかに、艶やかに、つねが笑っている。

夫婦になってから、つねが笑顔を見せるといえば、それはほとんど軽侮の笑いであったといえよう。

永年、江戸城大奥に奉公し、将軍や将軍夫人につかえていたほどのつねであるから、武州・多摩の農家に生まれ、いまも尚、武骨の気風を佳とし清貧に甘んじて剣術の稽古にのみ明け暮れるといった夫の、することなすことが、つねには気に入らなかったようだ。

そのつねが、こぼれんばかりの笑みをたたえている。しかも産後間もないというのに、臨時にたのんだ下女と共に台所へ出て、これだけの御馳走をつくり、産後のやつれで尚も細長く見える顔へ白粉をつけ紅をぬってあらわれたのであるから、勇がおどろくのもむりはない。

「つね……」

「あい」

こたえる声も変になまめいているのだ。

「あの、おい……」
「あい？」
「こりゃあ、お前……大変な御馳走だ」
「いけませぬか？」
「いや、いかんというわけではないが……」
呆気にとられて膳の前へすわると、
「お酌を……」
例のごとく折目は正しいが、何となく寄りそうような気配をほのめかせて、つねが徳利をとった。
「む……」
どうも、わからない。
半月ほど前の、瓊子誕生の祝いの膳にも、これだけの御馳走はつかなかった。
「しかし、これは、いったいどうしたわけだ？」
杯をほし、鯛に箸をつけながら訊くと、
「あい」
つねが色気をたたえた上眼づかいに勇を見て、
「うれしいのでございますもの」
と、こういうのだ。

「うれしい？」
「あい」
「なぜだ？」
「今日、森対馬様御屋敷よりの帰途、目黒で、あの……」
「きいたか？」
「沖田さんから、うけたまわりました」
「総司め、お前にまで……」
「まあ、けっこうな、うれしいことでございますもの、よいではございませぬか」
「しかし、何も、こんなに馳走を……」
「わたくしの、せめてものこころざしにございますの」
「ははあ……？」
「去年の、あの飯田金十郎とか申しました屈強の剣客を、見事に打ち負かされましたこと……」
「もういい」
「でも……」
「それが、お前、うれしいのかね？」
「申すまでもございませぬ」
気位の高いつねだけに、強い剣客が試合を申しこむと、勇がいつも逃げて、他の道

場から助勢をたのむことを耐えがたい恥辱と感じていたことは、勇にもわかっていた。だからといって、今日、目黒での勝負が、これほどまでに妻を歓喜させようとは、思ってもみなかった勇であった。

つねは、そばをはなれず給仕にかかる。

その最中に、廊下を通りかかった土方歳三がちらと居間の様子を眼に入れ、ぎょっとしたような顔つきになった。

めったに物に動じない土方がおどろいたのであるから、勇の驚嘆も当然というべきであろう。

この夜から、つねは変貌した。

三

まさか、毎日のように鯛の尾頭つきの膳が出るわけではないが、勇へ対するつねの挙動には、従来までの、あの何となく冷笑のいろをふくんだよそよそしさが影をひそめてしまった。

身のまわりの世話をしてくれるときも、食事の給仕の折も、勇を見入るつねの双眸には夫への敬愛の情が判然としている。

勇、わるい気持ではない。

永倉も沖田も負け、勇自身も手合せを逃げたほどの飯田金十郎を、いざ、真剣をと

っての勝負となれば、

「御新造さまにも、そりゃお見せしたかったなあ」

と、歯に衣をきせぬ沖田総司が感嘆してつねにも語ったほどの強剛ぶりを発揮。これを撃退してしまった夫の実力を、

（平常は真の底力をおかくしになっていて、いざというときには、いかな強敵にもおくれをとらぬ。そのように奥ゆかしいお人だったのか……）

つね、結婚二年目にして勇を見直したということになる。

「奥方の眼つきが、だいぶ変ってきましたね」

土方歳三が、勇をからかった。

「そうかね」

「そうかねもないもんだ。目黒の喧嘩も、とんだ御利益があったもんですね」

「まさか」

「いや本当だ。御新造さんは、あんたの強さをはじめて知って……つまりその惚れ直したというわけだ」

「歳さん。ばかをいっちゃあいけない。女がお前、そんなことを……」

「いや、そうしたもんだ。ことに、大奥づとめを永らくしてきた御新造だけに、よっぽどうれしかったんですよ」

「もう、よせ。つまらん」

「勇さん」
「む？」
「夜なんざ、どうです？」
「え……？」
ちょっと、勇も土方がいうことをのみこめなかったようだが、すぐに気づいたらしく、横一文字に張った大きな口をゆるませ、
「よせよ」
勇は照れた。
たしかに、土方のいう通りであった。
まさに〔夫婦の夜〕に大変革があったのである。
丁稚（でっち）奉公に出て、奉公先の下女と関係したほどの土方歳三とはちがい、勇は酒色の道に奥手であって、
「もう、よかろう」
養父・近藤周斎が、勇を〔男〕にしてくれたのは、忘れもせぬ安政三年、勇が二十三歳の春であった。
酒をゆるされたのも、この年からだ。
周斎は、
「はじめてのことだから」

といい、奮発をして吉原へくりこみ、引手茶屋〔一文字や〕から大籬稲本楼へあがり、染川という遊女を勇にあてがってくれた。

そればかりではない。

「はじめてのことだから……」

と、また周斎は、三月に一度ほどの間隔で、数度、勇を稲本楼へ通わせてくれたものだ。

だが、吉原の一流の遊女を相手にすることなど、試衛館のような貧乏道場の主の身として、つづけられるわけのものではない。

以後は、養父のゆるしを得て深川の岡場所へ出かけることが精一杯のところで、多摩育ちの勇が女をあつかう術に長じていたわけでもなく、愛撫の所作も荒っぽいものだし、つねと夫婦になった初夜の床で、勇が新妻のえりもとを押しひらき、その乳房をまさぐったときは、

「あ……」

つねは顔をしかめ、それでもゆるしてくれたが、羽二重のしごきをほどき、女体の下半身を露出させようとするや、

「な、何をなされます」

屹となって、勇の手をはらいのけたものである。

「しかし……」

「いやでございます」
「何が？」
「はしたないまねをなされますな」
つまり、寝衣をつけたまま、品よく裾をひらき、おとなしく事をおこなうべし、と、新妻が命じたのである。
稲本楼の染川は、童貞の勇と知って破天荒の接待ぶりをしめしてくれたし、以後、相手にした深川の女たちは、いずれも、いざとなれば身に一片もまとわぬ姿となってもてなしてくれたものだ。
だから、そのつもりで勇は……。
それが、はしたないという……。
さらに……。
自分のみか、つねは、勇が、裸体になることも好まぬのだ。
これでは、いかに急所が接してはいても、男女たがいの肌と肌のぬくもりが通い合わぬ。
唇を吸おうとすれば、
「はしたない」
である。
（はしたないという面か、この馬女め）

いつか一度、勇がたまりかねて、猛然といどみかかり、つねの下腹へ顔を突き込んでやると、

「いやしくも一城の主たる剣士が、けだもののごとき、所業をなさるとは……」

きびしく、つねにたしなめられ、一月余も遠去けられてしまったことがあった。

そのつねが、である。

このごろは、さしのべる勇の腕に眉をひそめることもなく、むしろこれを待ちかねてでもいたように身を投げかけてくるのである。

それぱかりではない。

しごきも解き外し、寝衣もはしたなくぬぎみだして呼吸を切迫させ、みずから勇のふといくびを双腕に巻きしめてくるようになったものだ。

こうなると、

(ほう……馬御前も、まんざらではないな)

勢い、勇のほうでも張合いが出て、懸命の愛撫を加えるものだから周斎老人が舟板横丁の隠居所にいて留守のときなどは、思わず取りみだして妙な声をあげるつねを、

「おい、これ……」

勇が、あわてて制すほどになってきた。

瓊子を生んだ後の生理もあってか、つねの女体が微妙にふくらみをたたえてき、曾つては骨太の、女にしては肩の張った痩身だったものが、

（こりゃあ、いつの間にか抱きごたえのある躰つきになったものだ）

勇も、目をみはるおもいがする。

春は過ぎようとしていた。

瓊子は、よく泣く赤子で、あまり丈夫のようにも思えなかったけれども、勇にとっては初めての子供であるし、道場で稽古をしていてもふっと我子の顔が見たくなり、

「ちょっと失礼する」

いいおいて奥へ入り、針仕事をしているつねの傍で眠ったり泣いたりしている瓊子の顔をのぞいたりした。

そんなときにも、つねは勇を見ては得もいわれぬ色気を長い顔にうかべて笑いかけるのである。

勇は、幸福であった。

そのためか、道場へ出ても、さっぱりしまらない。

去年の秋から道場に住みついてしまった松山藩・足軽あがりの原田佐之助の荒っぽい稽古の相手をしたりすると、勇は、ぽんぽん打ちこまれてしまい、原田が沖田総司や井上源三郎をつかまえて、

「おい、近藤さんの目黒の一件。ありゃ、ほんとかえ？」

「私は嘘をいったことのない男だ」

と、沖田がやり返す。

「わからねえなあ」
原田は口をとがらせ、どこまでも信じきれぬ様子であった。
この原田が沖田にかかると、三本のうち二本はとられてしまう。
「お前さんは大したもんだ、子供のくせによ」
原田にいわせると、沖田総司の剣は試衛館随一だそうで、沖田もまた、
「私は、試衛館の人たちと真剣をぬいて闘ったら誰にも負けませんよ」
臆面もなく、いいはなつ。
が……そういっておいて、
「でも、只ひとり、どうしても勝てない人がいる」
永倉新八が、
「それはだれだ？」
からかい半分に問うと、沖田は、
「近藤先生ですよ。目黒での、あの勝負を見てから、私はもう、勝てないと思いきわめてしまった。竹刀なら別ですがね」
何か、しんみりとした口調でこたえたそうな。
いま、道場に寝とまりしているのは、土方歳三のほかに沖田と原田だけで、永倉も山南も井上も毎日のように顔は見せるが、それぞれに住居をもっている。
それは、永倉新八が、

「鉄砲洲の石垣で釣ってきましたよ」
かいずを三びきほど魚籠へ入れて道場へあらわれた夜のことだから、もう初夏になっていたのであろう。
〔かいず〕は黒鯛の幼魚のことで、初夏のころ、江戸湾に面した築地の河岸が釣場とされている。
道場には、めずらしく沖田も原田もいない。
あたたかい夜の匂いにさそわれて、どこかへ遊びに出かけたものか……。
土方は例によって多摩へ出張していた。
隠居の周斎老人も舟板横丁だし、試衛館には近藤夫婦と瓊子のみの、しずかな夜であった。
それと知って永倉新八は、
「ちょうどいい。沖田なんかがいたら、みんな食われてしまいますからね」
みずから庖丁をとって魚をさばきはじめた。
夕飯はすんでしまっていたが、
「つね、酒を……」
勇が命じると、
「あい」
つねが甘ったるい声を出すのだ。

永倉は、台所でくすくす笑っている。
〔かいず〕は塩焼にし……心得たもので永倉が芽の生姜まで仕こんできたので、これをそえた。
「こいつは少々、泥くさいのでね。芽生姜がぴったりですよ」
永倉がいった。こういうところは近藤勇や土方歳三にはない江戸育ちの神経がゆきとどいている永倉新八で、
「ほほう……」
勇は感心するばかりであった。
居間で、二人は酒をのみはじめた。
練兵館の渡辺昇がやって来たのは、それから間もなくのことである。
連れが一人。
「ぜひとも、近藤先生に引き合わせてくれとたのまれましてね」
と、渡辺が連れの男をかえり見た。
その男、美男子である。
すらりとした長身に黒の紋服を着て、仙台平の袴をつけたその男は、
「藤堂平助と申します」
と、名乗った。
いいりゅうとした服装がぴたりとはまって気品がただよい、色白の、下ぶくれの顔貌を

見たつねの面へ微かに血がのぼったほどである。
「藤堂さんは北辰一刀流でしてな。先ごろ、練兵館へ見えられたとき先生のことをはなしましたところ、ぜひ一度、お目にかかりたいといわれるので」
渡辺昇が、どこまでも自分を「先生」とよぶのをあらためてくれないので、勇は大いに照れて、
「いやあ……近藤です。武骨者でして……」
「突然に参上いたしまして、失礼の段、ひらにおゆるし下さいますよう」
藤堂は両手をつかえ、丁重なあいさつぶりであった。
それでいて、永倉新八が名乗ってあいさつをするや、
「藤堂です」
ろくに頭も下げずに、すげない応じ方をする。
永倉は、おもしろくない。
ぷいと立って、
「近藤さん。では、また明日。渡辺さん、ごめんなさいよ」
さっさと帰ってしまった。
この永倉の態度を見て、藤堂平助の顔色が少し変ったようだ。
それまでは、永倉を通りいっぺんの門人のひとりだときめこんでいたらしい。
藤堂は、立派な角樽の清酒を持ってきた。金まわりもわるくないらしい。

この夜は、さしさわりのない剣術談義をして別れたのだが、
「これからは、稽古もつけていただきとうございます」
藤堂が帰りぎわにいった。
「いつでもどうぞ。剣術が飯より好きな連中ばかりでしてな」
勇は例のごとく、こだわらなかったが……。
藤堂と渡辺が帰ってから、つねが、
「あのお方が道場へ見えるようになりますと、何やら、もめごとが起きませぬか？」
「そうかな？」
「先刻も、永倉さんが……」
「あ、そうか……藤堂平助という男、人を見て物をいう……」
「はい」
翌日になって、渡辺昇がまたあらわれた。
「昨夜はどうも……」
これから道場へ出ようとして、居間で仕度をしている勇へ、庭先から上りこんで来た渡辺が、
「昨夜の、藤堂平助殿ですが……」
「ああ？」
「ぜひにもというので引き合せましたが、人物は拙者、保証しません」

「ほほう」
「藤堂はいま、深川・佐賀町で道場をひらいている伊東甲子太郎のところに身を寄せているらしい。伊東も北辰一刀流です」
「同門？」
「らしい」
「ふむ。なかなかに立派な風采でしたな、藤堂さんは」
「それが、近藤先生……」
渡辺が声をひそめて、
「なんでも藤堂侯の落胤だというわさもありましてね」
勇もこれにはおどろいた。
伊勢・津の城主、三十二万三千石の大名である藤堂和泉守が手をつけた女の腹から生まれた藤堂平助だというのだ。
「拙者は田舎者で、どうも、ああいう人物はわからない。それで一応……」
渡辺は頭をかいて、
「御迷惑でしたかなあ」
「いや別に……どうせ、こんな貧乏道場ですよ。藤堂さんがあらわれたところで、どうということもない」
それにしても、

「そううかがえば、たしかに藤堂さまの御落胤にちがいありませぬ」
後になって、つねが勇に洩らしたのには何か真実感があった。
大奥づとめをしていたつねの直感だけに、勇にも納得がゆくのである。
だが、もしそうなら、藤堂平助のような男がなぜに、試衛館のような貧乏道場へ接近したがっているのか、
（わからぬ……）
勇も、くびをかしげてしまった。
数日して、藤堂があらわれた。
土方も多摩から帰って来たし、その他の試衛館一党も顔をそろえ、朝から激烈な稽古をくり返していたところへである。
勇が一同へ引き合せると、
「一手、御教授にあずかりたい」
藤堂平助は、すぐ身仕度にかかった。
竹刀をとると、藤堂の剣術は堂々たるもので、沖田総司にはやられたが、山南、井上、原田など、ほとんど互角に競り合うし、
「女が見たらよだれをたらす面だね。それにしちゃあ相当なもんだ」
人をほめたことがない原田佐之助が後で、こういったほどである。
夏になった。

藤堂、三日に一度はやって来る。
剣術が好きでたまらぬらしい……と、一同は見ている。
来れば倦むことなく稽古をやるし、来るたびに角樽の酒やら、結構な料理をつめた折をはこびこんで、みんなにふるまう。
いささか気取ったところもあるけれども、口のききようもていねいだし、みんな、悪くいわぬ。
永倉新八だけは初対面のときの不快さがしこりになっているらしく、
「永倉先生。一手、御教授を……」
態度をあらためた藤堂平助が、ばかていねいによびかけても、
「とんでもねえ。あんたの竹刀をぶっつけられて粉々になりたくはありませんよ」
永倉は決して相手をしない。
もう一人、藤堂と竹刀を交えない者がいる。
土方歳三であった。
かといって、土方は藤堂を毛ぎらいしている様子もないのだが、藤堂がさそうと、
「いやもう、やらんでもわかっていますよ。私がやられるにきまっている」
にこにこしながら避けてしまうのだ。
或日、周斎老人が道場の稽古をのぞいて見て、後で勇にいった。
「藤堂平助ね、ありゃあ、かなりのものだよ」

「やはり……」
「厭味な男に見えるが、いざとなれば肝はすわるというやつだ。あの男はな、剣術が好きだ、だけでおさまるものではない」
「と、申しますと？」
「この騒がしい御時世に一旗も二旗も上げようというやつじゃよ」

四

その時世は、予断をゆるさぬ様相を呈してきはじめている。
大老・井伊直弼の変死後、幕府政治の中心となったのは、老中・安藤信正であった。
安藤信正は、奥州・磐城平五万石の領主だ。
井伊大老が暗殺されたときの事後処理において、安藤老中は卓抜の政治的手腕をふるい、さらに故大老の遺志であった和宮内親王を将軍・家茂夫人に迎えることに成功をした。
幕府保守派が革新大名たちを押えて将軍にした家茂は、当時十六歳。
家茂が紀州家から迎えられ、新将軍の座についたときは、わずかに十三歳であった。
和宮は孝明天皇の御妹である。将軍と皇妹との結婚。
これこそ、井伊が意図した公（朝廷）と武（将軍家）との合体であり、いうまでもなく、幕府が難局を突破するための政略結婚なのだが、いやいや江戸へ下った和宮も、

のちには純心誠実な若き将軍と愛情が通い合うようになる。

このように、大老亡きのちも、幕府は安藤老中の活躍を主軸にし、辛うじて体面をたもちつづけてきたのだが……。

今年の正月十五日。

登城すべく、江戸城・坂下門へかかった安藤老中が、またも襲撃をされた。

刺客は、水戸浪士をふくむ六名の志士であったが、今度は、一昨年の桜田門のようにはゆかなかった。

近藤道場がある小日向・柳町一帯は幕臣の屋敷地であって、この異変はすぐさまつたえられたものだから、

「それ!!」

勇をはじめ、土方、沖田、井上などが坂下門へ駆けつけてみると、安藤屋敷からの藩士や、幕府・先手方の出役もあって、物々しい警備網が張りめぐらされていた。

だが、

「御老中は、ごぶじ」

の声がきこえたので、

「先ず、よかった……」

勇も胸をなでおろすおもいがしたものである。

安藤老中は軽傷を負ったけれども、刺客六人はその場で斬殪されてしまった。

勇たちの耳へもとどくほどに、安藤信正の政治家としての手腕は相当なもので、アメリカ、イギリスをはじめ諸外国の公使たちですら、口をそろえ、

「まことに優秀なる政治家であり、外交官である」

と、賞讃している。

安藤の、外国列強に対する応接ぶりは堂に入ったものであって、諸外国とむすんだ通商条約にともなう過激尊王分子たちの乱暴狼藉（たとえば、アメリカ通訳官、ヒュースケンの斬殺）などに対する諸外国のきびしい抗議を迎えても、物やわらかく、ぬらりくらりと切りぬけてしまうし、

「いや、あれでいて、なかなかに腰も強うござったようで」

と、藤堂平助が、どこから得た情報なのか知らぬが、

「フランスの公使館の使用人が浪士どもに傷つけられたというので、フランスの公使代理のベル……左様、ベル何とやら申すものがすさまじい見幕で御老中へ怒鳴りこんだそうです。ところが……」

ところが安藤信正、いささかも動ずることなく、

「そのようなつまらんことを取り上げて、貴国は日本へ戦さを仕かけようと申さるるのか。それはフランス国のたしかなる申し入れでござるか、それとも貴公御一人の御考えであるか……？」

問うや、代理公使、ド・ベルクールがぐっとつまってしまい、さらに安藤は、

「フランス国の御考えなら、好きなようになさるがよろしい。これほどの小事をおだやかにおさめ得ぬとなれば、われらも貴国への認識をあらためねばなるまい。ただちに諸外国の公使たちにもこのことをつたえ、われらも一応は戦さの準備をいたしておきましょう」

平然といい捨て、ベルクールを追い帰してしまったというのだ。

フランスでは大いにあわて、アメリカ総領事・ハリスにたのんで、日本へあやまってきたそうな。

「いや、そればかりではない」

と、藤堂平助は、試衛館の連中が知らぬことを次々に披露する。

「オロシア（露国）の軍艦が対馬へあらわれ、これをうばい取ろうとしたとき……」

そのとき、安藤老中は、たくみにイギリスをたきつけ、これをあやつり、イギリス軍艦に対馬へ行ってもらい、露艦・ポサドニックを追いはらってもらったという。

こうなると、情報通の藤堂平助に、いろいろなはなしをきくのを試衛館の人びとは待ちかねるようになってきた。

「あれは、お前のいうように、藤堂侯の御落胤らしいな。だからこそ要路の事が耳へ入ってくるのだろう」

と、勇がつねにいった。

藤堂平助が、老中・安藤信正の事蹟をしのび、いま勇たちへ語りきかせているとき、

安藤はすでに老中の座から下りてしまっている。

今年一月の坂下門襲撃事件がきっかけとなり、安藤信正と久世広周（関宿四万八千石の領主）の幕府連立内閣は倒れてしまったのだ。

五

この年……、文久二年になると、徳川幕府の政体の腐敗は、だれの目にもあきらかになってきた。

将軍や幕府の威信は、老中・安藤対馬守信正の下野をきっかけにして、判然、地に墜ちたといえよう。

安藤は、激昂する人心の中にあって、一方には幕府と皇室をむすび、さらに実力派の諸大名をも次第に幕府政体の中へつつみこんでゆくべく努力をかさねてきていたのだが、安藤の幕閣を去るや、

「もう幕府に日本をまかせておくことはできない」

「徳川を倒して、新しい政権をうちたてるべし!!」

の叫びが革命運動の主張の一つになってくるのである。

のちに、この革命派の先鋒となって疾走する長州藩でも、安藤老中がいたころには、「外国列強の恐るべき武力と財力はだれの目にもあきらかではないか。これを追いはらう（攘夷）などとは、とんでもないことである」

と、重臣の長井雅楽という人物が藩論をまとめ、
「いまは、一時も早く、国内が、攘夷と開国に分れている現状を統一せねばならぬ」
だから、長州藩も幕府の開国政策に協力し、さらに朝廷と幕府を合体協力させようというので、長州の殿さま毛利敬親も、
「たのむ」
と、長井雅楽に万事をまかせていたほどなのだ。
安藤老中は、どうも長州藩の協力を好まぬ。
しかし、久世老中の積極的な主張で、幕府は長州藩を中央政界に登場させることにしたのだ。
世に、維新革命の二大主力といわれる長州と薩摩であるが、すでに薩摩は故島津斉彬によって実力を誇示し、幕政に強い影響をあたえるようになってきている。
そこへ、長井雅楽が出て長州藩を中央へ進出させたわけである。
長井は百五十石の馬廻役から殿さまの抜擢をうけ、小姓役から直目付という重職へ上り、藩政の重要人物となったほどの英才であった。
こうして、長井の活躍が開始され、京都朝廷と幕府の間を、長井は斡旋これつとめることになる。
けれども……。
たとえば機会あるなら幕府と将軍のためにはたらこうと考えている近藤勇をはじめ

試衛館の連中たちでも、
「いまにな、眼の青い、乳くさい毛唐どもと戦さでもするようになってみろ。おれたちがどんなはたらきをするか、こいつは見ものだぜ」
などと、原田佐之助でさえ、こんなことをいっているほどであったのだから、
「外国勢力を追いはらえ!!」
と、攘夷のスローガンをかかげて幕府に反抗する革命志士たちが、長井雅楽の開国論に共鳴するわけがない。
長州藩士の中でも、桂小五郎（のちの木戸孝允）、久坂義助（玄瑞）など若手の藩士を中心にする革新派は、
「長井を倒して、藩論を攘夷の一点にしぼれ!!」
と、息まいている。
ところが薩摩藩では……。
先藩主・斉彬の弟である島津久光が藩の実権をにぎり、
「長州におくれをとってはならぬ」
中央へのり出し、公武合体に大役を買って出て薩摩藩の威勢をしめそうという。
薩摩にも、長州同様に、
「攘夷、倒幕」
を叫ぶ志士がいるわけだから、これらが革命浪人たちと手をむすび、

「安藤老中を殺せ」
「幕府に通じている朝廷がわの巨頭・九条関白を暗殺せよ」
「京都を手中につかめ」
「薩摩藩を押したてて外国勢力を追いはらえ!!」
おとそ、こうした計画を実行にうつすため、田中河内介という人物を指導者にして、五十名ほどが京都から伏見へ集結をした。
五十名のうち三十余名が薩摩藩士であったから、
「けしからぬやつどもめ!!」
島津久光は、折から藩兵をひきいて京都へ出て来ていたところで、
「みなの者を捕えよ!!」
と、命じた。
それで、八名の藩士が伏見の寺田屋へ向い、ここに集まって暴動の準備をしている志士たちを説得した。
志士たちもなかなかにいうことをきかず、ついに激烈な決闘となった。
薩人同士だけに、八名の死傷者が出たところで、残る二十余名の志士たちは京都藩邸へもどり、帰国謹慎を命ぜられた。
一同、海路を鹿児島へ護送されたが、この船中で、田中河内介父子がひそかに殺害されてしまった。

河内介は、公卿・中山忠能（ただやす）の元家来で、幼年の明治天皇の教育にあたったこともある。

これが有名な〔寺田屋騒動〕で、この年の四月二十三日夜の出来事だ。

これより先、十一日に安藤信正が老中をやめている。

「もう薩摩藩はたのみにならぬ!!」

と革命志士たちは、一途に長州藩をたよることになった。

安藤と久世の幕府内閣が倒れ、長州藩も長井雅楽をしりぞけてしまい、藩の動向は、まっしぐらに少壮藩士の革命運動が代表するようになってゆくのである。

「どうも、大変な世の中になってきたものだ」

と、近藤勇も竹刀をにぎって道場へ出るだけでは落ちつかぬ気持になってきている。

そこへまた、藤堂平助が集めてきた情報を披露するものだから、

「いったい、世の中はどうなるのですかなあ?」

或夜（あるよ）、道場へあそびに来た渡辺昇と冷酒をくみかわしつつ、問いかけると、渡辺はこれにこたえず、別のことを反問してきた。

「このごろ、藤堂平助はやって来ますか?」

「このところ、ちょいと来ませんがね」

夏もすぎようとしている。

せまい庭に虫が鳴いていた。

「そうですか……」
いいさして、渡辺昇は妙な沈黙の仕方で、勇から視線をはずし、暗い庭のあたりを見つめながら茶碗酒をのむ。
「藤堂君が、どうかしましたかな？」
さり気なく、勇がきいた。
「いや……藤堂というよりも、実は近藤さん、藤堂平助が先日、市ヶ谷の通りを妙な男と歩いていたのを見かけたものだから……」
「ほう、だれと？」
「清河八郎という……」
「清河八郎……」
この名は、勇も耳にしたことがある。
清河八郎は羽州（山形県）庄内の郷士の家に生まれ、十八歳の折に江戸へ出て文武をまなんだという。
剣は、藤堂平助と同じ北辰一刀流千葉道場で仕上げたそうで、勇もいつか藤堂自身の口から清河のことを聞いたこともあった。
だから、藤堂と清河が一緒に歩いていることは何のふしぎもないといえようが、
「拙者はねえ、近藤先生……」
と、渡辺昇は、

「清河という男、信ずるにたる男ではないと思うのだが……」
「しかし、渡辺さん。私は別に清河八郎を見たこともなければ口をきいたこともないのだが……」
「それはそうでしょうけれども……」
「どうもわからぬ。何か気になることがあれば、ひとつ遠慮なくいっていただきたい」
「と申されても、はっきり、これといって……」
「ははあ……？」
「拙者はただ、あの清河と藤堂が親密な間柄であったとすればだ、その藤堂が……」
いいかけたが、急に渡辺昇はかたちをあらため、
「これは内密のことですがね」
「うむ？」
「おききおよびでしょうが、去る四月、伏見の寺田屋の騒動……」
「うむ」
「あのとき、志士たちをあやつり、さわぎを起そうとした黒幕は、清河八郎だというのです」

江戸に別れて

一

近藤勇は、渡辺昇からひそかにきいた藤堂平助や清河八郎のことなぞを、試衛館の連中には洩らさなかった。

（おれには、別に、かかわり合いのないことだ）

と、そのときはおもっていたからである。

渡辺昇が塾頭をつとめている練兵館は江戸屈指の大道場であるばかりではなく、大先生の斎藤弥九郎は、かつての高弟桂小五郎のたのみで、長州藩の政治改革にまで首をさし入れているそうな。

桂小五郎といえば、現在の長州藩を代表する人物だし、したがって練兵館には長州の士が多数入門をしている。

「渡辺昇は九州・大村だというが、とにかく、練兵館は勤王方で凝りかたまっている」

と見ていいと、土方歳三はいうのだ。

「近藤さん。だから私は、渡辺を近よせるのがいやなのだ」

「勤王、けっこうじゃないか。天皇をうやまうことはおれたちだって同じことだし、将軍家だとて同様……」

「いや、私のいうのは、練兵館には長州の息がかかっているということなんだ。やつら、いまに世の中を引っくり返そうとしている」

土方は、こういうときになると細い眼から、勇でさえ不気味になるほどのすさまじい光りを発して興奮する。

こうした〔姿〕を、土方は勇にだけしか見せぬ。

それだけに、勇は、

（歳三も、やはり多摩の男だなあ……）

つくづくとおもうのであった。

「われわれは、将軍の御百姓である！」

という誇りと気概が、平常は肚の内さえめったにのぞかせぬ土方歳三の肉体そのものと化しきっていることを、勇だけは、よく知っている。

夏から秋へ……。

そして冬が来た。

時勢の緊迫を感じつつも、近藤勇は、わが日常に、一個の夫として父親としての充実をおぼえぬわけにはゆかなかった。

妻のつねは、母親になると同時に女としても充分に花をひらいた。

おそ咲きの花であっただけに、それはまた、ひとしおにゆたかなものであり、烈しくもあって、

「勇さん……」

めったに冗談をいわぬ土方でさえ、

「御新造は変りましたな」

「どういうことだ、歳さん」

「腰まわりがしぶとくなって見えてきた」

これはまたずけりといったものである。

勇は顔をしかめた。

「いやあ、こいつはいかん。ま、かんべんして下さい」

しかめた勇の顔が次第にゆるむ……と、こういうわけで、このごろは道場へ来る連中も、

「いかになんでも御新造が、ああべたべたする必要はないだろう」

「これでは若い連中の稽古がしまらん」

などと、いい出す始末であった。

乳くさい瓊子を抱き、夕飯の膳に向い、つねの給仕でささやかな晩酌をたのしむとき、

（人という生きものの暮し、生きていることの意義は、こんなに簡単な事にすぎぬの

だな。世の中がいかに変ろうとも、つまりはここへ到達せざるを得ぬのか……）

本能の奥底から発する幸福に、勇は酔っていた。

だから……。

あの話がもちこまれたときにも、はじめ勇自身は、それほどに乗気でもなかったのである。

そのことを、先ず最初に試衛館道場へもたらしたのは余人ならぬ藤堂平助であった。

文久二年という年も、残りわずかとなったその日の午後。

「近藤先生のお耳に入れたいことが……」

と、やって来た藤堂は道場へも行かず、いきなり勇の居室へ庭からあがりこんで来た。

「何かな？」

「近いうちに、御公儀が諸国の浪士を募り、これをもって一隊を組織し、京へ差し向ける意向のようです」

「ほほう……」

藤堂平助の早耳が知ったところによれば……。

近ごろは、京都を中心に攘夷（じょうい）の浪人たちのうごきが殺伐をきわめている。

これらの浪人の大半が、例の勤王運動に便乗し、なにか甘い汁にでもありつこうというので、やたらめったに、

「毛唐どもを追い払え！」
「幕府を倒せ！」
と叫びわめき、いま一度、戦国の世を現出せしめたようなさわぎをする。
「ま、家柄も金も、身分もない浪人どもゆえ、何を仕出かすやら知れたものではございませぬ」
と、藤堂平助は、いかにも大名の落胤らしい意識を露骨にし、
「こやつらをですな、いわゆる勤王の志士を任ずる連中がたくみにあやつり、うまくけしかけて、天子おわすところの京の都を騒乱せしめよう……という」
それならば、いっそ、このような浪人たちを幕府があつめて治安をまもるためにはたらかせようというのが〔浪士募集〕の意向であるらしい。
来年は、徳川将軍みずから京へのぼり、天下の情勢および幕府の立場を朝廷に釈明し、天皇のお怒りを解こうという……それならば尚更のこと、将軍上洛に際し、京都の治安をととのえておくべきだというので、
「その浪士隊を京へ送ったらどうだろう」
という意見も出ているらしい。
いま、幕府の総理大臣ともいうべき〔政治総裁〕に任じているのは、松平慶永で、これへ浪士隊一件をもちこんだのは松平上総介忠敏である。
この松平上総介という人物は、徳川将軍の一族だ。禄高は三百石そこそこなのだが

身分としては譜代大名の上席にも在ろうというので、幕閣にも顔はきくし、当時は幕府講武所の剣術教授方をつとめていたほどの剣士でもあった。

このとき近藤勇も、そして藤堂平助すらも知らなかった〔事実〕がある。

それは……。

あの渡辺昇が勇に、

「寺田屋騒動の折の、志士たちをあやつり、さわぎを起そうとした黒幕は清河八郎だといいますよ」

ひそかに告げた、その清河が今度も松平上総介のうしろにかくれ、糸を引いていたという事実であった。

二

藤堂平助が帰ってから、

「歳さん。ちょいと来いよ」

勇は、土方歳三を道場から居室へ呼び、

「久しぶりだ。晩酌の相手をしないか」

「ふ、ふふ……御新造に恨まれやしませんかね」

「ばか！」

「では、ちょいと躰を洗って来ます」

で、夕飯を共にしながら、勇は藤堂からきいた浪士募集のはなしを土方のみに洩らした。

「藤堂はね、この試衛館をあげて、その浪士隊へ加わり、御公儀の御役にも立つと同時に、一剣をもって天下におのが力を問おうではないか……と、まあこういうのだがね」

「ふむ」

土方は黙然と杯をなめている。

土方よりもむしろ、勇に寄りそって酌をしているつねの顔に見る見る血がのぼってきた。

勇は、ふと気づき、

「つね。ちょいと、さがっていてくれ」

「はい」

つねは、このごろ夫に少しもさからわぬ。

「歳三さん。お酒が無くなったら手をたたいて下され」

いいおいて、部屋を出て行った。

「下されときたね」

土方が、にやりという。

「ばか」

「大奥づとめをしてこられたおんなは、さすがにちがう」
「ふざけるな」
「あのおひとをひいひい鳴かすようになったんだから、勇さんも大したもんですな」
「下卑たことをいうな、こいつ」
「ところで……」
「うむ」
「その浪士隊のはなし。勇さんはどう思います？」
「いや、おれよりもだ。藤堂平助は、もっと話がくわしくなったら、うちの道場の連中へもさそいをかけるというのだ。だからさ、塾頭のお前の耳に、先ず入れておこうと考えたまでのことだよ」
「だから勇さん。あんたの考えはどうだというんですよ」
「おれか……」
「ええ」
「さて、な……」
このときは、それだけで終った。
そして年も暮れ、文久三年の年が明けた。
この正月七日。
幕府は、松平上総介に対し、正式の浪士募集の沙汰を下した。

この日の昼すぎに、近藤勇は永倉新八と共に外出をしていた。
只の外出ではない。
他の道場の危急を救いに出かけたのである。
いつもは強敵あらわれるとなって練兵館へ助勢をもとめる近藤道場へ、
「御助勢を願います！」
飛びこんで来たのは、程近い小石川・指ケ谷二丁目にある岸淵兵介道場の門人であった。
岸淵兵介は直心影流の剣客で、剣もすぐれていたが人柄も温厚円熟の人物だというので、むしろ門弟は試衛館よりも多いほどだ。
このとき、折悪しく当主の岸淵は、下総の剣客の招きで江戸を留守にしていた。
そこへ、三人の水野藩士と称する剣士たちが乗りこんで来て、
「一手、御教授をねがいたい」
という。
当主が不在ゆえ……と、ことわってしまえばよかったのだが、留守をあずかる磯野養之助以下十名ほどの門人が与しやすしと見て道場へ迎え入れ、水野の藩士たちの挑戦を受けたものである。
いざ、立合って見ると、水野の家来三名は岸淵道場の十名をさんざんに打ちこみ、
「それっ！」

「表看板を引き外せ！」
というさわぎになった。
先生の留守中に道場の看板を奪われては門人たるもの、先生に顔向けがならぬ。
そこで磯野養之助が窮余の一策というやつで、
「しばらくお待ち下さい。いま、当道場の高弟を呼びにやります」
と、いったものだ。
このとき磯野の脳裏にひらめいたのが、永倉新八の童顔なのである。
磯野は、旗本磯野弥市郎の次男坊だが、深川の岡場所で永倉と遊び友達だったのだ。
磯野の命をうけた若い門人が試衛館へ駆けつけ、急をうったえたのも、こうしたつながりがあったわけで、もしも永倉不在のときは、
「おれと永倉さんとの交際をはなし、近藤先生にたのめ。おれはここを外すわけにはゆかぬ」
と、磯野はことづけた。
折よく永倉新八は道場にいた。
「よろしい」
にっこりと受け合い、
「すぐに駆けつけると養さんにつたえなさい」
「はっ」

門人、泪をながさんばかりによろこび、弾丸のように駆け去るのを見送り、
「近藤さん。御一緒にいかがですか」
と、永倉がいう。
道場には、土方も、原田、沖田もいなかった。
「おれもかね？」
「私の立合いを見ていただきたいのですよ」
「ほほう」
何かあるな、と、勇はおもった。
「よし、行こう」
井上源三郎に後をまかせ、勇は永倉と共に岸淵道場へ向った。

三

岸淵道場の西側は蓮華寺という大きな寺院で、その東門へ通ずる道の左手傍に、道場の門があった。
どんよりと曇った底冷えの強い日だが、永倉新八は素肌に稽古着、黒の袴の上から黒木綿の紋つき羽織をひっかけ、大小は腰にせず、ただ手製の木刀をひっさげていた。
近藤勇は平常の服装で、これは大小を帯している。
二人が蓮華寺東口へ駆けこんで行くと、

「あっ！」
「見えました、見えました！」
道場の門外に立っていた門人どもが口々に叫ぶ。
磯野養之助も走り出て来て、
「永倉さん、よう来てくれた」
「うむ。近藤先生も来て下すったよ」
「えっ……」
磯野は恐縮の極に達し、
「近藤先生。このことは、なにとぞ他言なきよう、伏してお願い申し上げます」
門外の道へ、いまにもひれ伏さんばかりである。
永倉が笑って、
「おい磯野。おぬし、これで案外、一所懸命のところもあるのだなあ」
「当り前です。岸淵先生の御名を汚したくはない。私あ、腹を切っても……」
「ふっふふ……」
「な、なにが可笑しいのです！」
「まあまあ……」
と、勇が、
「町道場は相身互いだ。さ、早く」

うながした。
磯野に案内された二人は、そっと、庭から母屋の一室へ招じ入れられる。
「磯野。ぬるい白湯を、な」
「心得た」
永倉は羽織をぬいだ。
「その木刀でやるつもりなのか？」
と、勇。
「ええ」
防具なしでやろうという永倉新八なのだ。
このとき、しずかに襖が開き、若い女が白湯をくんだ茶碗二個をのせた盆をささげ、部屋へ入って来た。
勇も永倉も、はっと瞠目したほどの美女であった。
顔つきもからだつきも、ふっくりと白く匂いたつばかりの初々しさで、
「父が不在中にて、御二方に、わざわざ御足労をおかけ申しまして、まことに申しわけもございませぬ」
わるびれることもなく、すずやかに二人を見て、両手をつく。
これが岸淵兵介の娘で文。当年十八歳だという。
永倉が白湯をのみ終えたところへ、

「永倉さん。もうよろしいか？」
廊下から磯野養之助が声をかけてきた。
「いいとも」
永倉と勇は廊下づたいに道場へ向った。
途中で永倉が、
「近藤さん。美い女ですなあ」
ささやきかけてきたものだ。まず余裕たっぷりというところであろう。
「うむ。いいな」
「深川の、私のなじみの遊女で豊浦というのと、そっくりですよ顔がね……」
「ほほう」
「だが匂いがちがう。処女というものを私あ一度も知らないんだが……いい匂いがするもんですなあ」
勇、苦笑をもらすばかりであった。
道場へ出た。
なるほど、見るからに強そうな男が三人、道場の中央に座をしめ、あたりを睥睨している。
これが、下総・結城一万八千石・水野日向守の家来だという。三人とも稽古着で、岸淵道場の門人たちを叩きのめした後だけに意気軒昂たるものがある。

「これはこれは……」
と、永倉新八は愛想よく三人の前へ行き、
「当道場の門人にて、石井新十郎と申す者でござる。よろしゅう」
偽名をつかって、あいさつをした。
「遅うござるな」
「ちょっと他行中でしたので……迎えをうけ、ただちに」
「うむ。よう戻られた！」
水野の家来のうち、もっとも若い精悍なのが、
「長谷村権造」
と名乗った。
「お手前さまからで？」
「いかにも」
「では……」
永倉は木刀をとって位置をしめる。
持参の防具をつけかけていた長谷村がこれを見て、意外そうな表情になったが、たちまちに激怒し、
「木刀でか？」
「そちらは竹刀にても結構。御遠慮なく、面、籠手もつけられたい」

永倉は平然とこたえる。

「だまれ！」

長谷村は、岸淵門人から木刀を受けとり、永倉へ立ち向った。

立ったかと思うと……。

「む！」

腹の底から発した、うなり声のような永倉の気合と共に、長谷村某は喉を突かれ、もんどりうって転倒している。

次の水野家来が、

「徳田左兵衛」

名乗るや、猛然と永倉に迫る。

数合、撃ち合って飛びはなれた二人の躰が、ふたたびぶつかり合ったとき、徳田某は見事に胴を払われて片ひざをつく。

まるで実戦さながらのすさまじい試合ぶりに、道場に居ならぶ門人たちは只もう固唾をのむばかりであった。

近藤勇は、にんまりと永倉の試合ぶりをながめていた。

（これが、永倉の本当の剣だ）

と、そう思わざるを得ない。

これだけの闘志をむき出しにした永倉新八を、勇は久しぶりに見た。

「松山彦五郎」
最後の一人が、悠然と名乗りをあげて進み出て来た。
その挙動からおして見ても、なみなみの剣士ではないことがわかる。
岸淵門下では屈指の腕前をもつ磯野養之助が手もなくあしらわれたというのは、この男にちがいない。
年齢は三十五、六というところか……。中肉中背の均斉のとれた体格で近藤勇は、
（一分の隙もない）
と見た。
（名も知れぬこれだけの剣客が江戸には、いくらもいるのだから世の中はひろい）
であった。
永倉新八が、擦りよって来て、
「近藤さん、今度のを、よく見ていて下さいよ」
ささやいておいて、松山彦五郎と相対した。
立って、二人がぱっと飛びはなれる。
松山は晴眼につけたが、永倉は、だらりとおのが木刀をさげたまま立ちはだかっているではないか。
（ははあ、なるほど……）
勇は、はじめてこのとき、永倉が自分をここまで附き合せた理由がのみこめたので

ある。

去年の春。目黒で、あの乞食浪人の飯田金十郎を破った近藤の龍尾の剣を、永倉はここに再現して見せようというのだ。

あれから約一年。

永倉新八は、この天然理心流・陰橈のうち、龍尾の剣の型をくり返しくり返し、勇から教えられてきている。型をつかうときの木刀に、永倉がわざわざ三枚重ねの革製の鍔をはめこんだのもこのためであった。

「むう……」

松山彦五郎の顔面が紅潮し、晴眼につけた木刀がかすかにうごきはじめた。

永倉は、依然、木刀をさげたまま全身を相手の剣の前へさらけ出している。

松山の木刀は、晴眼から平晴眼に変る……と見えたそのとき、永倉が、まるで水でものみに行くような無造作な足どりで、すーっと松山へ近づいて行った。

「曳！」

道場の羽目板が破れんばかりの松山の気合がほとばしり、平晴眼からななめ上段へ変った彼の木刀は電光のように永倉新八の頭上へ疾った。

がっと、はげしい音響が道場の天井でした。

（やった！）

勇は双眸をかがやかせた。

撃ちこんで来た松山の木刀は、これを下からすり上げた永倉の木刀にはね飛ばされ、天井に打ち当って落ちている。

このときすでに、

「う、ううっ……」

松山彦五郎は横面を押え、崩れ折れていた。

彼の木刀をはね飛ばした永倉の木刀は余勢を駆って空間を一回転し、そのまま松山の横面を撃ちこんだものであった。

四

打ちこんだ松山の刀勢もすばらしかったが、これをすり上げた永倉のちからも凄い。あとでわかったことだが、永倉の木刀の革鍔はへし折れたようになって少し裂け、鍔もとにあった永倉の右拳が紫色に腫れあがっていた。

水野の家来たちを追い払い、感謝感激の岸淵門人に見送られて試衛館へ帰る道すがら、永倉新八も近藤勇も一言もかわさなかったが、たがいに眼と眼を見合せては微笑し合った。

木刀とはいえ、永倉は真剣勝負のつもりで立合っている。

（よく、おぼえてくれた）

と、勇がおもうこころは、すぐさまぴいんと永倉にも通じるのである。

（この男、おれの門人でもないのだが、実によいやつだ）

いまさらながら勇は、永倉の率直無類の性格をこのもしく感じたのである。

試衛館へ着くと、藤堂平助が勇の帰りを待ちかねていた。

彼は、すぐに勇の居室へ押しかけ、

「いよいよ、正式に浪士募集のことが決まりましたぞ」

と、いう。

「先生、いかがです。一門をひきいられて京へのぼり、天下に試衛館の名を知らしめようではありませぬか。不肖、藤堂平助、一命を先生におあずけして御供をいたします」

「うむ……だがね、藤堂さん。土方をはじめ、当道場の者がなんというかだ」

「沖田、原田、山南の諸氏は賛成です」

「ほう、そうかね」

「肝心なのは先生の御決心だ」

ま、考えておきましょう……と、藤堂を帰し、正月早々、多摩の片里へ帰省していた土方歳三が、この夜ふけに道場へもどって来たので、勇はすべてを語り、

「おれは気がのらんのだがね」

そういうと、土方は意外にも、

「やって見てもいい」

と、いい出したものだ。

「しかし歳さん。練兵館の渡辺昇さんにいわせると、藤堂平助という男、どうも信頼はしかねるようにおもうが……」

「藤堂なんかどうでもいい」

「ふうん……」

「私が、このことに賛成なのは、ともかくも松平上総介様が中に入られ、幕府の賛同を得て為されることという、その一事にある。どんな浪人たちがあつまるか、それは知れたものではないが、われわれ試衛館一同がこの浪士隊へ参加すれば、決して余人におくれをとる筈がない」

「それは、まあ、な……」

「でしょう？」

「うん」

「とすればだ。いやでも御公儀の目にとまることになる。このすさまじい御時世ですよ、ちからある者を御公儀が放っておく筈がない」

「そう、うまくゆくかね」

「せっかくに、いままで、勇さんも私も精魂こめてみがきにみがいた天然理心流ですよ。天下のためにはたらこうという気にならんのですかね」

「そりゃあ、おれだって……」

「疲れているから、また明日にしましょう」
「うん」
土方が自室へ引き取ってから、勇が寝間へ入ってゆくと、つねは、まだ起きていた。
「なんだ、先へ寝ていろといったのに……」
「いいえ、まだ……熱いお茶がはいりました」
「ありがとう」
「まことに失礼ながら、つい、歳三さんとのおはなしを耳に入れてしまいましたの」
「声が大きかったからな」
「御決心が、まだつきませぬのか？」
と、つねが凝とこちらを見つめているのに気づき、勇は、
「お前……」
「はい？」
「おれに、行けというのか？」
「はい」
なんと、つねは、きっぱりうなずいたものである。
「将軍家のおために、旦那さまが、その剣術をもっておはたらき下さるならば、つねはうれしゅう存じます」
なるほど、江戸城大奥につとめていた妻としては、その勝気な性格ゆえに、むざむ

ざと夫の勇を一介の町道場の主に終らせたくはないのであろう。
「ふうむ……」
ここに至って、近藤勇も考えこまざるを得ないことになった。
貧しくとも春風吹きわたる感のあるこのごろの家庭生活に、まんぞくしきっていた自分であり、このささやかな幸福を捨てて、動乱の京都へおもむくことを、むしろ、わずらわしいとさえおもっていた勇なのだが、
（つねでさえ、これほどにつよいことをいう。おれも、ここで思いきって起ちあがるべきなのだろうか……）
そうおもいはじめると、むらむらとして腕が鳴るのをおぼえないでもない。
翌々日となって……。
近藤勇は土方歳三以下をひきつれ、藤堂平助の肝煎によって、牛込・二合半坂に屋敷をかまえる松平上総介をたずねた。
藤堂は、上総介とも親しげに口をきくし、いまさらながら、その顔のひろいのを勇たちもみとめざるを得なかった。
松平上総介は、かねて藤堂から試衛館のことをききおよんでいたらしく、大いによろこび、
「ま、京に群れあつまり、さわぎたてている勤王浪人といっても、その中には、長年にわたって世に容れられず、武士でありながら武士として生きてはゆけぬという……

そこの不満から御公儀へ楯突くことにもなる。こうした者たちが多いようじゃ。そこもとたちのように衷心から将軍家の御為にはたらこうという人たちが浪士隊をたばねてくれるならば、これほど心強いことはないとおもう」

と、いってくれた。

一介の町道場の者たちへ、将軍一族である天下の名士が、これだけの言葉をかけてくれたのだから、近藤勇もわるい気持ではなかった。

道場へ帰って来て、

「よし、やるか！」

「おもしろくなってきたぞ」

一同、さかんに気勢があがったし、はじめは反対だった永倉新八も、

「近藤さんが行くなら、おれも行く！」

と、いい出した。

指ヶ谷の岸淵兵介が試衛館をたずねて来たのは、この夜のことであった。

勇は居室で夕飯の膳に向っていて、岸淵の来訪を告げに来た沖田総司へ、

「永倉君は、まだいるのか？」

「います」

「では、永倉に会ってもらえ。おれが何したわけでもないのだから……」

だが、岸淵兵介は永倉新八に礼をのべたあと、ぜひにもといい、勇の居室まで挨拶

に来た。

「留守中、いかい御世話に相成りました」

と、岸淵はこころから勇にも礼をのべる。

中年の、落ちついた立派な人物であった。

勇も丁重に岸淵をもてなし、岸淵も勇と永倉の二人に非常な好意を抱いたようである。

この岸淵の二人によせた好意が、数年後の近藤勇へ重大な影響をもたらそうとは、勇たちはむろんのこと、岸淵兵介もこのときは思ってもみなかったろう。

五

募集に応じ、かなり浪人たちがあつまった。

「いささか、あつまりすぎたようじゃな」

幕府老中で、浪士隊の掛りということになった板倉周防守（備中松山五万石の藩主）も、松平上総介も、

「五十名ほどもあつまれば……」

と考え、仕度金として一人当り金五十両、合計二千五百両の予算のもとに事をすすめてきたのだが、

「とんでもないこと」

と、いったのが例の清河八郎である。

果して清河は、この浪士隊結成の黒幕であったのだが、このときまだ彼の姿は表面にあらわれてはいない。

去年の四月。

清河八郎は、薩摩の勤王志士を主隊とする一隊を陰からあやつり、京都へ入って、九条関白や所司代屋敷を襲撃、朝廷から攘夷の勅諚を得んとした。

これが寺田屋事件となり、薩摩藩の手によって鎮圧されたことはすでにのべたが……。

今度は清河、江戸へ舞いもどり、大胆にも幕府要路へ近づき、松平上総介をひそかにあやつり、浪士たちをあつめさせている。

この清河の意図は、どのようなものなのか……。

「このように多勢あつまっては、とても、わしの手には、はからいきれぬ」

と、松平上総介は責任を回避する始末であった。

二月四日。

小石川の伝通院に、第一回の浪士集合がおこなわれて、近藤勇はじめ試衛館一同も出席をしたが、

「どうも御公儀は、こちらが考えているほどに乗気ではないようだな」

道場へ帰って、勇が土方歳三にいうと、

「物事というものは、こうしたものですよ」
「そうかね」
「しかし、いったん御公儀も乗りかかった舟だ。ここで見捨てるようなまねはしますまい」
「それは、な……」
「船出さえすりゃあ後は、こっちが舵を取るのだ。勇さん、どこまでもやって見ましょうよ」
　怜悧でいて、そのくせ慎重で、いつもなかなかに結論を出さぬ土方が、めずらしく決然としていいきる。
　松平上総介にかわり、浪士取扱いとなったのは、幕臣・鵜殿甚左衛門であった。
　これに、同じく幕臣・山岡鉄太郎（のちの鉄舟）が浪士取締りに任じた。
　鵜殿は仕方なく、浪士たちをあつめ、
「仕度金が不足であるけれども、御一同は尽忠報国の意気をもって天下のためにはたらこうという方々である。がまんをして京へのぼってくれることとおもうが、もしも不満あらば遠慮なく引き取っていただきたい」
と、いった。
　こういえば、半分ほどは減るとおもったのだが、浪士たちは引き下らぬ。
　もっとも集まった連中は、あまり質のよくないものが多く、中には博徒あがりの男

もいたほどだ。

「どうも、ろくなものはいないらしい。これは一時も早く、京へ差し向けてしまおう」

と、幕府側も考えたらしく、

「江戸出発は八日。前夜の五ッ（午後八時）までに仕度をととのえ、伝通院内・学習院へ集合のこと」

こうふれ出した。

まるで、鳥がたつようなあわただしさで、仕度金も一人五十両とはゆかぬが、いくらかのものは出た。

六日の夕暮れになって、近藤勇は四谷舟板横丁の隠居所へ、養父の近藤周斎をたずねた。

周斎老人は、このごろどうも健康がおもわしくない。

この日も、朝から床にふせっていたが、

「勇。いよいよ行くのかえ」

と、起き上り、下女に酒肴の仕度を命じた。

この下女は、近藤勇父子の郷里、多摩から来た出戻り女で、無口だがよくはたらくので老人の気に入りである。

当時の二月六日は、現代の三月上旬にあたる。

空も土も、町のたたずまいも、それはまだ冬のものでありながら、どこやらともなく、なまあたたかい春の気配が匂いたってきていた。

軍鶏鍋に、下女がどこかでつみとってきた蕗の薹の吸物で、二人酒をくみかわした。

「よいのですか、のんでも……」

「いや、ちょいと風邪気味なだけじゃよ」

「大事にして下さらんと……」

「わかっている、わかっている」

「あの……」

「なんだえ？」

「私はどうも気乗りがせぬのでして……土方がもう、やたらに気負いこんでおりますが、御病気のあなたをのこし、さらに道場をたたんでまで行って見たところで、どうもぱっとした扱いではありませんしな」

「ま、行って見るさ」

「そうでしょうか……」

「京へついて見て、よほど腹にすえかねたら、また江戸へ戻って来ればいいではないか」

「それもそうですが……」

「これを機会に、旅をして見るのもよいことだぐらいの、かるい気持で行け」

「はあ……」
「ま、のめよ。わしゃ、ひかえているが遠慮なしにやれ」
「ですが、道場をたたむということが……」
「かまわんさ。どうせ儲かる道場じゃあない。そうだろうが……」
「私が微力でして……」
「それだ。すぐにお前はそう生まじめに、しゃっちょこばるからいけない」
「はあ……」
「おもいきってやって見ろ。わしゃ、どうも、歳三のいう通り、天然理心流の真価を世に問う機会が来たような気がしてならぬ。なあに、わしだって、まだまだ大丈夫。あとのことは引きうけたよ」
「つねが申しているのですが、このさい、あなたと御一緒に暮したいと……」
「ああ、いいとも」
「では、思いきって出かけてみますかな」
「そうしろ、そうしろ」
翌七日。
昼すぎから一同が試衛館へあつまることになっていたが、永倉新八も原田佐之助、山南敬助などは、
「かならず時刻までには伝通院へまいります」

といい、それぞれに江戸の名残りを惜しんでいる様子だ。
「永倉は深川の女のところだな」
勇がいうと、土方歳三がにやりとして、
「私も、ちょいと出かけて来るかな」
「どこへ？」
「女のところへね」
「ふうん。お前にも、そんな気のきいた女がいたのか」
勇は、からかったつもりだが、すぐに土方が、
「こっちは勇さんと御新造のことを考えてやっているのに……」
「ばかいえ」
「沖田も、そのつもりらしい。いましがた出て行きましたぜ」
「なにを、ばかな……」
「まあ、そんなに照れることはない、照れることはない。暮六ツまでには戻りますよ」
土方は、さっさと出て行ってしまった。
井上源三郎も芝にいる親類をたずねるといって朝からいない。
土方が出て行くと……。
「ごめん下さいませ」

つねが、ふわりと居室へ入って来た。
昨夜は、たがいに愛撫のかぎりをつくして名残りを惜しんだのだが、つねのくびすじのあたりは凝脂がねっとりと浮き、ぽっと紅味がさしている。
「どなたもみな、お出かけでございますね」
「うむ」
「歳三さんも？」
「暮六ツまでには帰るそうだ」
「ま、さようで……」
うるみきった双眸をひたと勇のそれへ射つけながら、つねが寄りそって来て、
「お茶でも？」
「うむ」
「はい」
庭に面した障子が開いていたのを、つねは立って出て行きながら何気なく閉めた。
勇の顔に、つよい酒でものんだように血がのぼってきていた。
快晴であった。
陽ざしが庭にみちていた。
茶をもって、ふたたび入って来たつねが、
「今日は、あたたかいこと……」

つぶやくようにいい、勇に茶を差し出した。
つねは、うす化粧をしている。
その白粉の香と、つねの肌から発散する濃厚なにおいに、勇は、たまりかねて、
「おい」
と、いった。
こたえもせず、いきなり、つねが勇のふといくびへかじりついてきたものである。
すでに語り合うべきことは語りつくしている夫婦であった。
それでも勇は、押し倒したつねの豊満な乳房へ顔を埋めつつ、
「瓊子は……？」と、きいた。
つねはもう夢中の態で、両眼をとじ、あえぎをたかめながら、
「いま、ようねむって……」
うわごとのようにこたえた。

六

文久三年二月八日。
浪士隊一行、二百三十四名は小石川・伝通院を発し、中仙道を京都へのぼって行った。
浪士取扱いの鵜殿、山岡の幕臣のほかに数名、人格・武道にすぐれた旗本が浪士一

行を監督するため、参加している。

浪士たちは、七つの隊にわけられた。

それぞれの隊には、浪士の中から選抜した三名を〈伍長(ごちょう)〉に任じ、自主的に、それぞれの隊を取りしまらせることにしたが、近藤勇ほか試衛館一党は一人も〈伍長〉にえらばれてはいない。

沖田総司は若いだけに、

「ばかにしすぎている。近藤先生は、いやしくも江戸において一国一城の主(あるじ)であった人物だ」

大いに怒ったが、土方歳三はこれをなだめて、

「ま、いいじゃないか」

「よくはありませんよ、よくはない！」

「まあ総司。はじめのうちだけのことだ」

にやりと、土方は笑って見せた。

近藤勇も、内心はおもしろくなかったろうが、いったん事をはじめたとなれば、これしきのことに不満をいいたてる彼ではない。

勇の誠実な人柄を、早くも取締下役の池田徳太郎が見てとり、

「すまぬがあんた。わしの手伝役になってくれぬか」と、たのんだ。

「は。御役にたちますなら」

「たのみます」
近藤一党は、平隊士として六番隊三十名の中にふくまれていたが、井上源三郎のみは三番隊に編入させられた。
板橋の宿をすぎるころ、ようやくに朝の陽がのぼりはじめた。
勇は、靄がたちこめる街道を歩みつつ、ふっと、一昨夜の渡辺昇の顔や言葉をおもい起していた。
養父の隠居所からの帰途、勇は九段の練兵館へ渡辺昇をたずねている。
渡辺は折よく道場にいた。
角樽につめた清酒を差し出して、勇が渡辺にあいさつをした。
「いろいろと御世話をかけました。いよいよ、お別れですよ」
「やはり、京へ行きますか……」
「そうなりましてね」
「ま、お上り下さい。折角のおみやげだ。二人で……」
「いや、父とやってきたところでね」
「いいじゃありませんか」
「では……」
渡辺昇の小さな部屋で冷酒をくみかわした。
「近藤先生。ところで、これは若いもののいうことと思ってくれて結構なんですが

ね」
「なんなりといって下さい」
「浪士隊のことですが……例の、いつか申しあげた清河八郎という人物が蔭にいるらしい」
「そのことは昨日、浪士隊の人びともうわさしてましたよ」
「清河という人物、いろいろとうわさをききますが、信ずるに足る男ですかな？」
「拙者には、よくわからぬ」
「ま、御油断なく……」
「ありがとう。あんたには、試衛館もずいぶんと助けてもらいましたな」
「とんでもないこと」
「あらためて礼をいいます」
勇は、きちんと両手をついた。
あわてて、渡辺はこの勇の手をつかんで、
「よして下さい。どうもいかんなあ」
「あは、は、は……」
「私もね、近藤先生。国もとの兄が、しきりに帰って来いといってきましてね」
渡辺昇の主家である大村藩は、九州・長崎に近い大村湾をひかえていて、二万七千石の小藩ながら、こういう時勢ともなれば居眠りをしているわけにもゆかぬ。

渡辺の兄の清左衛門は、殿さまの大村丹後守の信任も厚く、海防・兵制の改革を命ぜられ、

「帰って来て手伝え」

江戸にいる弟へ、しきりにいってよこすらしい。

別れるとき、渡辺昇はもう一度、勇に念を入れた。

「清河八郎に御油断なく……」

その清河が、一行からやや遅れて只一人、これも京へ向いつつあることを、いまは浪士隊のだれもが知っていた。

「近藤先生。なにを考えこんでおられますか？」

となりにいて歩む藤堂平助の声に、勇は我に返った。

「先生。御不満でしょうが、京へ着くまでです」

藤堂は、勇が〔伍長〕にもならぬことを案じていたのであろう。真剣になって、

「いまに、いやでも先生をみとめざるを得ぬことになりましょう」

しきりに、なぐさめてくれる。勇は苦笑をもって、こたえた。

板橋の宿場をぬけ、王子稲荷への別れ道へさしかかった時であった。

「先生……」

前にいた沖田総司が、顔色を引きしめた感じで、勇へ呼びかけた。

「なんだ？」

「あれを……」

沖田が目顔でさし示したところは、その別れ道の角にある茶店である。

茶店前の縁台で一人の男が焼だんごをほおばっているのが勇の眼にとまった。

（や……あいつは……）勇も忘れてはいない。

乞食浪人の飯田金十郎なのである。

風体は一年前と同じ、ぼろぼろ姿の金十郎だが、今日は笠もかぶらず、むさ苦しい坊主頭を朝の大気にさらし、むしゃむしゃとだんごにかじりついている。

その前を、浪士隊一行が通りすぎて行く。

近藤勇の視線が、何気なく見上げた飯田金十郎のそれとぴったり合った。

「あっ……」と、金十郎が口をあけた。

その口から、だんごが一つ、ぽとりと街道の土の上へ落ちた。

金十郎の左の耳が押しつぶされたように、みにくい傷痕を残しているのを、はっきりと見ながら、勇は彼の前を通りすぎた。

浦和、大宮とすぎ、上尾の宿へさしかかったとき、小用をすまして隊列へもどって来た沖田総司が、勇へこういった。

「先生。乞食の金さん、後をつけて来ますよ」

新選組

一

江戸を発って二日目。

浪士隊一行は、武州・本庄の宿場へ入った。

これより一足先に、近藤勇は沖田と永倉の両人をつれ、本庄へ到着している。

これは、浪士隊・取締り付きの池田徳太郎から、

「みんな威張り返っている連中ばかりだものだから、先に立ってはたらいてくれる人がいない。近藤さん、まことにすまぬことだが……ひとつ、あなたを見こんでたのむ。一行より先発して、泊り泊りの宿割りをしてもらえまいか」

と、たのみこまれたからである。

沖田総司などは黙っていなかった。

「それならば、公平に籤をひいたらどうです」

露骨に不満をあらわしたが、池田は、苦笑をうかべるばかりで、いかにも困惑の態であった。

それも、むりはなかった。

何しろ、腕におぼえの浪士たちの寄りあつまりだから、たがいに意地をたて、見得を張り、京へつくまでは、

「安く見られてたまるものか」

それぞれに決意をかためている。

まるで、一行の下ばたらきのような〔宿割り〕の役などを押しつけられたら、激怒して暴れ出す者もいるだろうし、「馬鹿くさいことを……」と、さっさと江戸へ帰ってしまう者も必ず出てこよう。

中でも……。

常陸・芹沢村の郷士の出で芹沢鴨という人物。この男には、荒くれの浪士たちも、

「芹沢さんには、うかつに近寄るな」

と、いい合ったほどで、三十をこえたばかりの芹沢が、でっぷりとした巨体を悠々としてはこびつつ、

「御一同、ぺちゃくちゃと女郎のごとく、しゃべりながらの道中は感心せん。もっとさむらいはさむらいらしくせい!!」

——尽忠報国の士・芹沢鴨——の文字を彫りこんだ大きな鉄扇を縦横にふりまわしつつ、怒号したりする。

そのくせ、自分は大きな竹の水筒につめた冷酒をのみながら真赤な顔をして街道を歩むのだ。この芹沢には平山五郎・平間重助という、これも常陸出身〔水戸脱藩〕の

浪士二人がつきそい、芹沢の水筒に酒が無くなったりすると、すぐに茶店へ走って酒をみたしてきたりしている。

飲むほどに、芹沢の赤い顔の色が青白く沈み、こうなってくると、

「馬鹿もの!!」

喉が張りさけんばかりの大声をあげ、「われわれは馬ではないぞ。いつまで歩かせるつもりだ!!」

幕府が監督につけてよこした鵜殿甚左衛門や山岡鉄太郎なども眼中には入らぬ傲慢さで、

「文句があるやつは、いつでも来い。いつでも来い!!」

怒号をつづける。

おそるべき酒乱であった。

しかし、いまのところ、芹沢を取りしずめようとする者は一人もいなかった。

芹沢鴨は、水戸の天狗党（水戸藩の急進派で、保守派と対立した）にいたこともあるとかで、そのころ、これといった理由もないのに部下三名の首を斬ったり、鹿島神宮へ参詣したときなど、

「拝殿の太鼓のかたちが気にくわん!!」

といい、太鼓の皮を例の鉄扇でたたきやぶったりしたこともあるそうな。

あまりに乱暴がすぎるので、捕えられて江戸送りとなり、牢へ押しこめられたこと

もあって、このときなどは、

「けしからん!!」

芹沢は怒って牢内で断食を決行し、わがゆびを嚙み切り、そのゆびからしたたる血をもって、

「雪霜に色よく花のさきがけて、散りても後に匂う梅が香」

などと〔辞世の歌〕を血書し、この紙きれを牢の前格子へ飯つぶではりつけたりしたものだ。

剣術は、神道無念流の免許を得てい、見るからに血なまぐさい剣風が芹沢鴨の体軀から吹きたつようなおもいがする。

あの土方歳三さえも、

「総司。たしかに芹沢は強いぜ」

と、沖田にささやいていたほどだ。

江戸の伝通院で浪士隊の会合があったときから、

「拙者を組頭にしていただきたい。不肖芹沢鴨、御公儀御役目についてはだれにも負けはとりませぬ」

と、いい出し、強引に取締下役になってしまったものだ。

とにかく、こういう連中をなだめなだめ京都まで送りとどけなくてはならない。

つきそいの幕臣たちも非常な苦労をした。

池田徳太郎は、芸州（げいしゅう）・広島の浪人だが温和な人物で、早くから近藤勇の誠実な人がらを見こんでいた。

「たのむ。たのむからひとつ……」

池田があまりに真剣にたのむので、勇も、

「よろしゅうござる。やってみましょう」

ついに、ひきうけたのであった。

さて。

一行より先発して本庄へ到着した勇は、

「手わけをして宿割りを、な」

一行二百三十余名の宿割りを三人でするのだから、いそがしいことおびただしい。

夕闇の中で、汗みずくになって駆けまわり、三人が〔ひろ木屋〕という旅籠（はたご）の前へあつまって、

「総司、永倉君。二人とも、すんだな!?」

勇がいうと、

「終りました」

「ええと……大丈夫」

沖田も永倉も、うなずいた。

しかし、このとき芹沢鴨の宿舎を取り忘れてしまったのだ。

故意に忘れたのではない。

〔宿割り係〕をひきうけてからの第一日目であったし、馴れないところへ、時間はせまる、人手は足りないというので、つい芹沢の名を見落してしまったのである。

二

浪士隊一行が、本庄の宿場へ入って来た。

（しまった……）

近藤勇は、はじめて芹沢の宿割りに気づいたけれども、すでにおそい。

「拙者の宿はどこだ、拙者の宿はないのか。拙者を野宿させるつもりか!!」

冷酒がつきた水筒を叩きつけ、芹沢鴨が烈火のように怒り出した。

「困ったな、どうも……」

池田徳太郎は勇からきいて顔をしかめ、

「どうする!?」

「いや、私があやまってきます」

「大丈夫かね、あんた……」

「大丈夫ですよ」

宿場の本通りで、わめきつづける芹沢の前へ、勇はのそのそと出て行った。

浪士たちも、宿の人びとも、息をのんで、このさまを見まもっている。

「芹沢先生」
と、勇はあくまでも下手に出て、
「宿割りをひきうけた私の粗忽でした。おゆるし下さい」
きちんとあたまを下げ、
「しばらくお待ち下さい。すぐに宿割りをいたします」
素直にわびたものである。
この〔素直さ〕というものは、
「只ごとではなかった」
と、のちに池田徳太郎がいったそうだ。
仲間の浪士たちが見まもる中で、勇は一片の見得もなく、ただひたすらに、自分の手落ちゆえに、みなにめいわくをかけたということを、
「申しわけない」
と、わびているのである。
さすがの芹沢鴨も、この勇の出かたに接しては、勇を叱りつけるわけにも、なぐりつけるわけにもゆかない。
そのかわり、芹沢は拗ねた。
「いや近藤うじ。けっこう、けっこう」
と、いうのである。

「は……？」
「宿なし、けっこうでござるよ」
「芹沢先生。それは私の……」
「いやよろしい。宿なしの拙者、宿なし相応の仕様がござる」
「は……!?」
いきなり芹沢は、取巻きの平山と平間に命じ、手あたり次第に木材をあつめ、これを宿場の中央に山のごとくつみあげ、火をつけたものだ。
焚火も焚火、大焚火である。
「火の粉が飛んで来るぞ」
「水桶を出せ」
「屋根に水を……早く水をかけろ!!」
宿場中が大さわぎになってしまった。
その火の粉を浴びて仁王立ちになっている芹沢鴨の前へ、近藤勇がぴたりとすわって、
「私の粗忽でござる。おゆるしねがいたい」
これも一歩も退かずに、あやまっている。
試衛館一党は、ひとかたまりになり「近藤先生謝罪の図」を、むしろ呆気にとられて見つめていたが……。

沖田総司は顔面蒼白となり、
「畜生め、叩き斬ってやる!!」
刀の鯉口を切って、芹沢へ飛びかかろうとした。
「おい、よせ」
これを土方歳三がぐいと羽がいじめに抱き押え、
「総司、がまんしろ」
「だって土方さん……」
「ま、いい。それよりも勇さんの、あの姿をよく見ておけ。あれは、芹沢にあやまっているんじゃない」
「何ですって……」
「どこまでも自分の手落ちを恥じているんだ。大の男が宿割りひとつ満足に出来ないようで、これから京へのぼっても何が出来るというのか……そのことを勇さんは恥じているのさ」
永倉新八も藤堂平助も、この土方のつぶやきが耳へ入り、あらためて、勇が頭を下げてはわびつづける姿を見直したようであった。
もう一人、近江屋という旅籠の軒下にたたずみ、この近藤勇を複雑な表情で凝視している男がいる。
尻端折りの素足にわらじばきの乞食浪人、飯田金十郎であった。

板橋で、浪士隊一行に勇がいることを発見した金十郎は、ついに笠も買い、わらじも買って後をつけて来た。

（……？）

金十郎は、何度も首をかしげている。

去年、目黒での決闘で、

（おれほどの男の片耳を切り落したやつが、見得も体裁もなく、ぺこぺことあやまっている。ありゃ、どういうわけなのか……近藤勇というやつ、どういう男なのか……？）

決闘のときの勇と、いま、ここに見る勇と……二つの勇が金十郎にとっては、どうしても一つにならないらしい。

鵜殿、山岡、松岡などの幕臣も、黙念として勇の執拗な謝罪ぶりを見つめているのみであった。

「もう、よろしい」

ついに、芹沢鴨、勇の根気に負けてしまったらしい。

「平山、平間。火を消せい」

いい捨てるや、池田徳太郎に、

「あんたのところへ泊る」

と、折れた。

しかし、これで芹沢の〔わがまま〕が熄んだわけではない。

江戸から木曾路をこえて、中仙道を京都まで百三十余里。十六日にわたる道中の明け暮れに、芹沢鴨の暴慢は言語に絶するものがあった。

ついに……。

〔もめごと〕つづきながら、一名の落伍者もなく、一行は京都へ到着をした。

この間、近藤勇は、いささかもたゆむところなく宿割りの役を懸命につとめ、浪士たちも、

「なかなか、あのまねは出来ぬ」

「近藤さんは、大した人物だな」

却って近藤勇の人気がたかまり、

「手つだいましょう」

宿割りの助勢を買って出るものが日毎にふえた。

飯田金十郎については、

「美濃の加納を発ったとき、ちらと見たよ」

永倉新八が沖田総司に洩らしたが、あとはもう、どこへ行ったものか……。

「ここまで来りゃあ、京まで来るさ。あの乞食浪人め、近藤さんの片耳を切り取らねえじゃあ、おさまらないのさ」

と、これも永倉のことばであった。

三

京都へ到着した浪士隊一行は、壬生村の郷士の家や寺院へ入り、旅装をといた。

ここは京都郊外であるけれども、市中にも近いし、二条城にも近い。

壬生村の東面には人家も多く、このつらなりがそのまま市中へつづいているのだが、あとはもう畑と竹藪と雑木林がひろがっているばかりで、

「ねむくなるようなところだ」

浪士たちが、何かがっかりしたような顔つきになったほどである。

一行は、六か所に分散した。

近藤勇と試衛館一党は、壬生村の郷士・八木源之丞の屋敷が宿舎にあてられたが、あの芹沢鴨も同宿であった。

これもまた、山岡鉄太郎が池田徳太郎とはからい、

「本庄以来、芹沢も近藤君には一目おいているようだから、同宿させてしまったほうがよい。なにかにつけて、近藤君がそばにいたほうが便利だ」

と、いうことになったものらしい。

「あいつと一緒か……」

「たまらんな」

沖田も原田も永倉も、みんな実に厭な顔つきになったが、土方歳三のみは、

「ま、いいさ」
と、これだけは沖田総司のみに、
「芹沢というやつは、われわれの中から、きっとはみ出してしまう男だよ。長く一緒にいるわけもないし、いられるわけもない」
わかったような、わからぬようなことを洩らした。
「そりゃ土方さん。どういうことですか!?」
「総司。芹沢なんかに、いつまでも一緒にいられたら、公儀御役目など、つとまるわけはないよ」
「はあ……」
「こんなことは、だれにもいうなよ」
「わかりました」
八木家では、庭の東側にある四間ほどの〔離れ〕を提供してくれた。
すぐに芹沢鴨は、
「拙者は、この部屋にきめた」
さっさと、いちばん立派な八畳間を占領してしまう。
土方歳三も、このときはさすがに、おもしろくないといった顔つきになり、低く舌うちを鳴らしたものだ。
この舌うちが、芹沢の耳へ入ってしまったからたまらぬ。

「これ、土方」
と、芹沢は呼びすてにして、
「きさま。いま舌うちをしたな。拙者のすることに言い分あるならばいえ。おい、いえ、いえ!!」
「別に……」
「何が別にだ、何が別にだ!!」
土方は、ひんやりと笑いをうかべ、
「およしなさい。つまらん」
吐きすてるように、いいはなった。
いままで、芹沢へまともに向って、これだけのことをいった者は一人としていない。
芹沢鴨の満面、朱をそそいだようになったが、声はなかった。
しかし、土方歳三をにらみつけている芹沢の大きな両眼がじわじわと殺気をおびてきはじめるのが、だれにも、よくわかった。
土方は両腕を組み、これも無言で、庭に面した白い障子を見つめていた。彼の視線は芹沢に向けられていないけれども、
(歳三は、やるつもりだ……)と、近藤勇は直感をした。
切長の土方の両眼は、さらに、まるで眠ってでもいるように細くなってきている。

彼が真剣をとって人を斬る瞬間を勇は二度ほど目撃しているが、そのときの土方の眼つきが今のそれであった。

と……。

芹沢鴨が、傍の大刀をつかみ、片ひざを立てた。

間髪を入れず、これに応じた土方歳三の左手も愛刀へのびた。

勇は、

（これはもう、とめてもとまるまいが……しかし、歳三は芹沢に勝てまい。とめるだけは、とめて見なくては……）

と、腰を浮かしかけた瞬間であった。

「芹沢さん……」

永倉新八が廊下から入って来て、

「よしましょうよ」

と、いった。

すると、あの芹沢が妙に照れくさそうに鼻へしわをよせ、ぽいと大刀を畳におき、

「でも永倉君よ。おれは、この部屋にきめたよ」

玩具でもねだるような口調なのだ。

「ま、そりゃあ……いいでしょうよ」

永倉も気やすげにこたえる。

江戸から中仙道を上る道中で、芹沢鴨はどこが気に入ったものか、永倉新八にだけは、自分からにこにこと笑いかけたり、しまいには宿割り役の勇に、

「だれかと永倉君とを取りかえてもらえぬだろうか」

と、たのみこむ始末であった。

「私は、いやですよ」

永倉も気はすすまないのだが、

「芹沢を怒らせてもはじまるまいから……たのむ、相手になってやってくれ」

勇にいわれると、ことわりきれぬ永倉だし、木曾へかかるころから芹沢と同宿になった。

「いったい、どういうわけなんだね？」

そっと、勇が訊いてみると、

「それがね、近藤さん……」

永倉は、さも可笑しげに笑って、

「あの乱暴者も、やはり人間なんですなあ」

「ほほう……」

「私がね、芹沢の死んだ弟に、そっくりだというんですよ」

「ふうん……」

芹沢は、こういったそうだ。

「おれはその、両親に早く死に別れたもので、弟の由之助をな、ま、親がわりに育ててきたものだ。可哀想に、二十一で死んでしまってなあ……」

その由之助に顔かたち、というよりも気性や挙動、もののいいようなどが〔生きうつし〕なのだという。

「そりゃあ、見こまれたもんだな」

「よして下さい、近藤さん。あんなのに見こまれたところで、こっちは迷惑千万だ」

「ま、そういうな」

「どうも困った、困った……」

「いいではないか。ああいう男に君のような人がついていてくれれば何かにつけて、みなも助かる。ま、おもりをしてやってくれ」

まず、こうしたわけで、上洛第一夜が明けたときなども、芹沢鴨は朝飯の前に、平山五郎をよんで剃刀をとらせ、

「ていねいにやれよ」

顔をあたらせたが、自分の〔ひげそり〕がすむと、今度は平山の手から剃刀をうけとり、

「おい、永倉君。ちょいと来い、来いよ」

次の間で刀の手入れをしている永倉新八をよぶ。

「なんですかな？」

「ひげをあたってやろう」
「いや、けっこうです」
「いいから、いいから……」
勇も土方も、山南も沖田も、みんな顔を見合せるばかりだ。
いやいやながら仕方もなく、永倉が行くと、芹沢は剃刀をつかって彼のひげを剃ってやりながら、
「由之助も、君のようにひげが濃くてなあ」
人がちがったように、やさしげにはなしかける。
(芹沢さんも、あれで、なかなかよいところがあるのだな)
近藤勇は、そうおもいつつながめていたが、ふっと気づくと、すぐ傍の土方歳三が嘔吐でもしそうな顔つきになって、芹沢と永倉を見やっている。
もう一人、これは芹沢腹心の平山五郎がぷいと立ちあがり、するどい音をたてて障子をしめきり何処かへ出て行ってしまった。

四

その日の昼すぎになって、浪士隊全員が、近くの新徳寺という寺院へあつめられた。
すでに新徳寺へは、浪士隊をあやつる黒幕の清河八郎が到着している。
清河は、京都へついて早々に、出羽・庄内の郷里にいる父親へ送った手紙で、こう

いっている。

「……私も浪士一行をともない、無事に京へつきました。ここまで事をはこぶには昼夜ねむる間もなく心労をしましたが……道中も鬼神の往来のごとく、先ばらいにて堂々と上洛いたしました。さて、これからは天下の大事が相迫っておりますので、もしも天下の安危にかかわることともなれば千万のこともなげうって、国事にはたらくつもりであります」

と、ある。

清河八郎、ときに三十四歳。

新徳寺本堂に集合した浪士たちの前へあらわれた清河八郎は、ま新しい黒羽二重の紋服に仙台平の袴をつけ、厳然として、

「出羽庄内の清河八郎でござる」

と、名乗った。

東北出身らしい色白の、役者を見るような美男の上に、諸国をまわって勤王派志士たちにも重きをなした一種の貫禄がそなわり、実に立派なものだ。

清河は、さわやかな声で弁説をはじめる。

「……われら浪士隊の目ざすところのものは何か。諸君はそれぞれに大志を抱き、はるばると京へのぼられた。これは、近く上洛のことある将軍家を守護し、合せて京の都の治安をまもらんとする名目なれど……」

悠然として一同をながめまわしてから、
「その名目は、どこまでも表向きのこと」
と、いった。
では、裏にひそむ真の目的とは何か!?
浪士たちが騒然となりかける機先を制し、
「まこと、われらの目ざすところのものは……」
凛々と清河が押しかぶせる。
ざわめきが、はたと熄んだ。
「目ざすところのものは、尊王攘夷のさきがけとなり、一天万乗の大君をいただき、天下のため粉骨するにある。以後は、この清河八郎が指揮をとらせていただく」
つまり、幕府の募集に応じてあつまりはしたが、将軍も上洛し、天皇の命を奉じて諸外国の勢力を日本から追いのけようというからには、尊王攘夷の〔ありかた〕に変りはない。
「なれども万一……、万一にも、将軍家が皇命に従わず、これからも外国との交際をつづけるようなれば、われらが起って、その公儀の弱腰をたたき直さねばなるまいと考える」
魔力的な情熱をもって、清河は滔々とのべたてる。
一同、気をのまれてしまい、

「何が何だか、わからん」

芹沢鴨なども煙にまかれたような顔つきで、浪士たちは新徳寺から散会した。

その後で、清河八郎は浪士一同の名をもって、朝廷へ建白書をたてまつった。

幕府がつけてよこした鵜殿、山岡なども呆然としていたようだが、山岡鉄太郎だけは清河と肝胆を相照らした友人同士であったとかで、このときの山岡の胸中すこぶる複雑なものがあったろう。

京都へついてからは何事も清河の一存で、てきぱきとはこばれてゆくのだ。

「朝廷におかせられても、わが浪士隊を勤王の士の集合と見ていただきたい」

との口上と共に差し出した「建白書」は、およそ、新徳寺でやった演説と同じようなもので、

「万一、皇命をさまたげ、私意をくわだて候輩あるにおいては、たとえ有司の人たりといえど、いささかもゆるさぬつもりであります。この、われらの志をおくみとり下され、われらの微心が徹底いたしますよう、おはからい願いたし」

と、むすんでいる。

さすがに鵜殿甚左衛門の名だけは除外してあったけれども、山岡鉄太郎の名は連名中にのこっている。山岡も清河の真意を知らぬわけではなかったのであろう。

朝廷では、この建白書をとりあげ、次いで孝明天皇から、鷹司関白を通じて、次のような御製を浪士隊にたまわった。

雲きりをしなとの風に払わせてたかまの原の月のきよけさ

さあ、清河八郎は欣喜雀躍である。

御製の〔……月のきよけさ〕のきよ、すなわち清河八郎の清にかけて、天皇が歌に詠じられたとおもい、

「もはや何もおもいのこすことはない。これよりは一命を捨てて王事に邁進せん」

すぐさま、ふたたび浪士一同を新徳寺へあつめ、この御製をかかげて、

「かしこくも御製までたまわり申した。まことに、わが浪士隊にとって名誉なことではないか。これからのわれらは、ただひたすらに天皇のおんためにこそはたらこう」

おごそかに、いいわたした上、

「かならず……かならず諸君の将来については、この清河がお引きうけいたす」

と、自分についてくれば、きっと身を立てることが出来るという〔ふくみ〕をしめしたので、一同は、

（とにかく、青い眼をした乳くさい毛唐どもをやっつけることに変りはないのだから……）

というので、清河の熱弁に酔ったように興奮し、共鳴の声を合せはじめる。

ここぞと清河は、たたみこむように、

「諸君。いま、朝廷の命によって、われらはただちに江戸へもどり、攘夷のため活動

をおこなう!!」

宣言をしたものである。

着いたばかりなのに、もう江戸へ帰るというわけであった。

清河八郎の計画とは……。

浪士隊を江戸へもどし、まず横浜市中へ放火をする。

そして外国船を焼きはらい、浪士隊が抜刀して市中の外国人を片端から斬ってまわった後、一転して甲府へ急行。甲府城を攻めとり、ここへ立てこもるつもりであった。

甲府城を本拠として倒幕の旗をかかげ、全国の勤王派によびかけ、一挙に徳川政権を打ち倒そうというのである。

むろん、この計画は清河の胸三寸にかくしこまれていたけれども、

「一言、申しあげたい」

突然、近藤勇が立ちあがった。

「何か、近藤君……」

「私は、清河先生のおことばに従いかねます」

「何!!」

「われわれは、京へ花見にまいったのではありません。将軍家が上洛されるのは天皇のお怒りをとかれ、夷狄を追いのけるため、いろいろ御談合のことあるためときおよんでおります。かように、天下のため国のために上洛される将軍家を守護せよとの

命をうけたまわって集まった私どもです。将軍家の命もなきうちに、あなた一人の采配によって江戸へまいもどるなどとは、まことにすじみちが通りませぬ。まことに面妖、不思議なることだ」

これまでは、黙々としておとなしくはたらいてきた〔平隊士〕の近藤勇が、清河をすさまじくにらみつけ、甲高い大声を張りあげて怒り出している。

浪士たちも、この勇の猛然たる態度に固唾をのんだ。

いうまでもない。

理屈としては近藤勇のいうことが正しい。

それだけに清河八郎は色白の顔を見る見る充血させ、

「近藤君、それは……」

何やらいいかけたとたんに、何と今度は芹沢鴨が突立ち、

「拙者、近藤うじの申されること、まことにもっともと存ずる!!」

われ鐘のごとく怒鳴った。

「だまんなさい!!」

清河が叱りつけるや、

「そちらこそだまれい!!」

芹沢の声が清河のそれを上廻るすばらしい迫力で、

「甘言をもって公儀へはたらきかけ、われわれをかりあつめておいてからに、いざと

なると寝返りをうち、おのれのために浪士隊を利用するとは、まことにもってけしからん。ええ、けしからん、けしからん、けしからんぞ!!」

左手に大刀の柄をたたき、右手に四百匁の鉄扇をふりまわしつつ、何か清河がいい返せば、すぐさま斬って捨てようという意気ごみである。

真赤な清河の顔が青くなった。

唇のあたりを、ひくひくとふるわせ、芹沢と近藤をにらみすえていた清河八郎は、

「勝手にせい」

いい捨てるや、身をひるがえして本堂を出て行った。

五

これで浪士たちが、勇や芹沢に同意したかというと、そうではない。

八木家に泊っていた勇たち十三名を残し、浪士隊二百二十余名は清河八郎に従い、さっさと江戸へ引きあげてしまったものである。

「清河はね、近藤、芹沢、それにわれわれ試衛館の連中をけむったくおもっていたらしい。われわれを八木家へ、ひとかためにして入れたのも清河の指図があったからだときいている。つまり、われわれを前々からのけものにしておき、他の浪士たちへはいろいろとその、はたらきかけて手なずけてしまっていたふしもある」

と、これは大正四年まで、七十七歳の長寿をたもって生きていた永倉新八あらため

杉村義衛翁の遺談である。

近藤勇は、

「こうなれば十三人だけでよろしい。あくまでも初めの志をつらぬき通そう!!」

いいはなった。

芹沢鴨が眼をまるくして、

「近藤うじに、そんな強いところがあるとは思わなんだよ」

まったく、勇を見直したようである。

一方……。

幕府も、この清河八郎の言動を知って、あきれもしたし、おどろきもした。

ことに、京都守護職をつとめている会津二十八万石の藩主・松平肥後守（容保）は、

「清河を野放しにしておいてはならぬ」

と考え、手配をするところがあったらしい。

京都へ来ている幕府老中の板倉周防守も、清河の弁説にだまされ、浪士隊結成に一役買っただけに、

「只ではおかぬ!!」

ひそかに手をまわしはじめる。

江戸へ帰った清河八郎の横浜焼き打ち計画について、彼の同志でもあり、のちに山岡鉄太郎の義弟となった石坂周造が、明治末年になってから、当時のありさまを語っ

ている。

この準備に千両あまりの金が入用だというので、清河一党の中には「天下国家のためにすることであるから、あくどい儲けをむさぼる商人どもを脅やかして、うばい取ろうではないか。横浜あたりの外国人を相手に甘い汁を吸っている商人どもの金などは、うばい取ってもよろしい」

などといい出す者もいたが、池田徳太郎が、「これはよしたほうがいい。尽忠報国のためにはたらくわれわれが盗名を着ることになる。これはいかん」

と、反対をとなえ、ついに取りやめとなった。

徳川政権の実情も、老朽化した政治組織が危急動乱の世に対して敏活にうごかぬありさまとなったが、勤王革命に奔走する人びとも、世界の事情をほとんどわきまえぬし、いったん条約をむすんだ外国の居留民や役人を相手に暴動、暴乱をもって革命の発火点にしようという……。

日本国の代表政権たる幕府としては、これを見すごしているわけにはゆかぬ。

清河一党は、盗みをはたらくことはやめたが、江戸の富商をねらっては、ちからずくで金を献納させたものだ。

横浜一帯をくわしく調査した清河八郎が、

「四月十五日をもって、焼き打ちを断行する」

と、発表をした。

その二日前の四月十三日。

風邪気味の清河は発熱をおして、麻布一ノ橋にある出羽・上ノ山藩邸内にいる友人の金子与三郎をたずねた。

用談を終え、清河が麻布の赤羽橋へかかると、前方から近づいて来た二人の武士が、

「これは、清河先生ではありませぬか」

と、声をかけ、かぶっていた陣笠をとり、ていねいに頭を下げてあいさつをした。

見ると、浪士隊に出役を命じられ、京都から共に江戸へもどった幕臣の佐々木只三郎と速見又四郎なのである。

この二人は、京都市中の警戒にあたる幕府・見廻組の士で、清河が一行を連れて江戸へもどるとき、にわかに出役して道中に加わった。それもこれも、

（おれの首をねらっているらしい）

と、清河八郎は充分に気をつけ、道中いささかも油断をしなかったものだ。

だが、いかにも親しげに、いかにも丁重に二人が笠をとってまで、ふかぶかと頭を下げたものだから、

「これは、御両所……」

清河も思わず、かぶっていた陣笠をぬいで答礼しようとした。

その、清河が笠をとった一瞬……。

いつの間にか背後へ、音もなく近寄って来た別の武士が、物もいわずに、清河の後

頭部へ斬りつけたものだ。

「あっ……」

叫んだ清河、北辰一刀流の手練者ときいているが、あまりにも烈しい決定的な斬撃(ざんげき)を、しかも急所にうけたものだから、

「ざ、残念……」

柄に手をかけた大刀を、ついに抜けなかった。

どっと転倒し、そのまま動かなくなった清河八郎を見て、

「とどめはいいよ」

佐々木只三郎が、清河のうしろから襲いかかった三名の浪人風の男たちへ声をかけ、さっと引きあげてしまう。

この三人の浪士は、京都で板倉周防守の命をうけ、新たに浪士隊へ加わったもので、なにくわぬ顔をして清河一党になりすましていたのだから、清河の行動は公儀すじへ〔筒ぬけ〕になっていたわけである。

やがて、石坂周造が馳(は)せつけ、警吏監視の中で、

「こやつめは、拙者の父の仇(かたき)でござる」

といい、すばやく清河の首を切り取り、駆けもどって山岡鉄太郎家へかくしたことは有名なはなしだ。

清河亡きのちの〔浪士隊〕は、清河の同志たちをそれぞれ処罰した上で再組織され、

幕府の一隊として〔新徴組〕と命名され、江戸市中の警備にあたることとなる。

ところで、京都に居残った十三名の〔浪士隊〕は、どうなったろうか。

六

壬生村の八木屋敷へ残った近藤勇、芹沢鴨たちは、すぐさま、京都守護職・松平肥後守へ、嘆願書を差し出した。

すでに将軍徳川家茂は、江戸を発し、京都・二条城へ入っている。

この将軍家をまもるために組織された〔浪士隊〕ではないか……。

「どうあっても、このまま江戸へは帰れませぬ。なにとぞ、われわれにもはたらく場所をあたえていただきたい」

という近藤らの嘆願をきいて、

「めんどうを見てつかわせ」

松平肥後守は、清河八郎への憎しみがあるだけに、却って、

「どこまでも初志をつらぬこうとする彼らを見捨てるわけにはまいらぬ」

同情をよせ〔会津藩御あずかり〕として近藤らを処遇することになった。

「よかった、よかった」

十三名は胸のつかえが一時にとれたおもいである。

敢然として居残った連中だけに、いずれも剣術の達人ぞろいといってよい。

「これだけで、どんなことでもやって見せようではないか」
芹沢鴨が鉄扇をふりふり昂然として叫ぶ。
「これこそ、新しく選ばれたる男たちだ。なにか、よい隊名をつけねばならんが……」
芹沢がいうと、山南敬助が、
「その芹沢先生のおことば通り、新選組とつけたらどうでありましょう」
「ふむ、ふむ。よい……よいな、よろしい」
めずらしく芹沢が同意したので、一同大いに笑った。
「なにが、諸君……可笑しいのだ」
と、芹沢。
「いや、なにね……」
永倉新八が、ずけりと、
「今日は芹沢さんが、ばかに素直だからですよ」
「うふ、ふふ……」
芹沢、永倉のいうことなら腹をたてぬ。
上機嫌であった。
ここに、新選組誕生のときの十三名の隊士の名を記しておこう。
近藤、土方、沖田、山南、原田、井上、藤堂、永倉など試衛館一党八名のほかに、芹沢鴨。

そして、あとは芹沢と同郷の水戸脱藩の人びとである。

すなわち、新見錦（にいみにしき）

野口健司（けんじ）

平山五郎

平間重助

の四名で、いえば近藤一党と芹沢一党が合流して居残ったことになる。

八木源之丞方では、

「このまま居残られてはたまったものではないが……」

おもいつつも、世話をしないわけにはゆかない。

達筆の山南敬助が、

〔松平肥後守御預・新選組宿〕

と大書した檜板（ひのきいた）を八木家の表門へかかげた。

「いかになんでも十三名では……」

と、会津藩がうごき出してくれ、京都・大坂一帯にふれ出し、新たに浪士募集をおこなうと、半月足らずのうちに百余名があつまった。

どこにもここにも、浪人たちがうようよしているのだ。

この中から二十余名をふり落した。

沖田や永倉、土方などが一応、彼らの武芸のほどを見とどけ、残った八十余名を、

八木邸と通り一つをへだてた前川荘司邸へ入れた。
前川家も壬生村の郷士であるが、
「こうなればもう、一緒にはとても住めませぬ。どうか勝手におつかい下され」
といい、前川家の人びとは六角通りの親類のところへ逃げて行ってしまった。
「新選組の隊旗をきめなくてはならん」
と、またも芹沢鴨がいい出す。
「なるほど……」
近藤勇がうなずき、
「誠の一字をそめぬいた旗がよろしいかと思う」
「まこと……下らん、下らん」
「いや、下らなくはないと思う」
勇の主張も強固であった。
誠の一字……とは、（いかにも近藤先生らしいな）
沖田総司が、そばから、
「私は賛成です、いいじゃありませんか」
勇に応援しかけるや、
「子供は、だまっていろ!!」
芹沢が眼をむいて怒鳴りつける。

すると、平間や平山という芹沢の配下どもが、
「やあ、こども、こども」
「総司は飴玉でもしゃぶっとればいいのだ」
はやしたてる。
沖田はこのとき怒らず、にやっと、それはなんともいえぬ凄味のこもったうす笑いをうかべたという。
「よし、拙者がきめた」
芹沢がわめいた。
「拙者は龍の一字をそめぬきたい。龍のごとく天へ向って駆けのぼる勢いこそ、われらののぞむところのものだ」
すると平山五郎が、
「その通り」
平間重助が、
「実によいな」
と雷同する。
このとき、永倉新八がまたも口をはさんだ。
「芹沢さん」
「なんだな？」

「私は、龍より誠のほうがよいと思いますがね」
「え……」
「だまれ、永倉!!」
と、平山。
かまわずに永倉が、
「龍なんて大げさですよ。芹沢さんらしくもないではありませんか」
「そうか……拙者らしくないか……」
と、芹沢鴨は首をかしげていたが、
「ま、いいだろう。永倉君がいいというのなら、拙者、承知する」
まるで他愛(たわ)いがなかった。
ところで……。
隊旗をきめても、これをあつらえる資金がないのだ。
春もたけなわというのに、みんな江戸から着て来たままの衣服ひとつで、
「もうもう、臭うてかなわん」
八木家の人たちが鼻をつまんで、こぼしぬく。
清河八郎が暗殺されたとの報が京都へとどいたとき、一同大いに胸がすいたものだが、
「これでは、まるで乞食(こじき)だ。よし、拙者が何とかしてくる」

芹沢もしらみたかりになってしまい、ついに先に立って大坂へ出かけ、豪商・鴻池(こうのいけ)へ、

「天下のために金二百両を申しうけたい」

強引に談じこんだものである。

なにしろ芹沢鴨が、いざとなれば大刀を引きぬいて暴れ出そうという気がまえなものだから鴻池でも仕方なく、二百両を出した。

意気揚々として芹沢が引きあげて来ると間もなく、この一件をきいた会津藩が、

「そのような乱暴をしては困る」

と、いってよこした。

「なにを申される」

芹沢は一歩も退かず、

「会津侯から下しおかれる御手当のみでは、われら九十名が腹をみたすに精いっぱいのところでござる。しらみたかりの乞食浪人が群れ集っているだけのことではござらんか」

と、押し返した。

「いかにも……」

京都守護の役目に任ずる会津侯・御あずかりの〔新選組〕である。あまりにひどい風体をさせてもおけない。

「二百両は我藩から鴻池へ返しておこう」

と、解決を見た。

〔誠〕の隊旗もあつらえる。

松原通りの大丸呉服店へ、夏用の麻の衣服や小倉の袴（はかま）などもあつらえ、これを隊士一同へ支給することも出来た。

そして、新選組の局長には、芹沢鴨・近藤勇・新見錦の三人が就任。副長は土方歳三と山南敬助にきまる。

副長をたすける幹部隊士として、隊員一同の監督にあたるもの十四名が選抜された。

この中には結成当時の者がほとんどふくまれ、そのほか、新たに参加した浪士のうちから、斎藤一（はじめ）、尾形俊太郎、山崎丞（すすむ）、谷三十郎、松原忠司など、いずれも後の新選組の活躍に欠くことの出来ぬ人びとが入っている。

「ようやくに、かたちがついてきたな」

近藤勇が土方歳三にいうと、

「そうですかね……」

土方は妙に煮えきらぬ様子で、

「私はまだ、かたちがついたとは思わない」

「どうしてだね？」

「芹沢鴨が、ねえ……」

「芹沢さんが、どうしたというのだ？」

「鴨の肉は、煮方がむずかしいもんですよ」
「え……？」
「それよりもどうです。江戸の御新造から、おたよりがありますか」
「うむ……」
今度は勇が口をつぐんでしまう。
「どうしたんです。まさか間男をこしらえたんじゃありますまいね」
「ばか!!」
「味をおぼえましたからな、御新造は……」
「ばか、ばか。ちがうんだ、ばか」
「ばかの大安売りだね、こりゃ……」
「歳さん。おやじの躰の工合が、どうもよくないらしいのだよ」
「え……そりゃ、どうも。それはいかん、いかん」

京都動乱

一

江戸の小日向柳町、試衛館道場では……。
どこか、わびしげな竹刀の音がきこえることもあった。
近藤勇以下、試衛館一党がいたころの、野心まんまんたる闘志がこめられた稽古とはくらぶべくもないのは当然だが、それでも勇の門人で田安家につかえている大沢定吉や、森対馬守の家来たちもあらわれ、
「たまには、やろうではないか」
京都にいる勇たちを偲び竹刀を合せたりするのである。
「われわれが来て、竹刀の音をたてていると、御隠居の先生が実に楽しそうな顔を見せるなあ」
「御隠居をなぐさめるためにも、時折は、やって来ようではないか」
と、彼らはいい合っている。
勇が京都へ去って間もなく、近藤周斎老人は舟板横丁の閑居をひきはらい、柳町の道場へ帰って来た。
「もどったからには、まだまだ、わしも稽古の一手二手はつけてやるぞ」
などと強気だった周斎であったが、とてもいけない。
春が来て、ながく病んでいた風邪が癒ったとおもったら、
「どうもいかん。躰中がだるくて、だるくて……」
心身の虚脱を自分でも持てあまし、夜中ひんぱんに厠へ通うようになり、

「小便が出ると、すぐにそれだけ喉がかわいてたまらなくなる。で、水をのむと、すぐに下から出たくなる。せわしなくてせわしなくて……これじゃあ、ろくにねむれもせん」

と、こぼした。

それでいて食欲は旺盛になり、こちらへ来てから、三度の食事も今までの二倍も三倍もの量をとるし、そのくせ、目に見えて痩せてくるのが、勇の妻のつねにもはっきりとわかる。

「一度、京へ知らせたほうが……」

たまりかねて、つねがいい出すと、

「いかん、いかん。何度もいう通り、勇たちは、いまがいちばん大事のときじゃ。いささかも、そのはたらきに傷がついたときには、たちまち放り出されてしまうさ。ゆえに、いまは何もかも……可愛い瓊子のことも、それから、お前さんのことも忘れきって、命がけでつとめはたらかねばならん。ましてや、この老いぼれのことなど、歯牙にかけてもいかん」

「はい」

つねも、つらいところであった。

舅の周斎老人の病気にかこつけ、

（そのことをきいたなら……）

もしや夫の勇が、江戸へ一寸でも帰ってくれるやも知れぬ、という空しい期待が彼女の胸底にひそんでいる。

熟れきった女ざかりの、しかも、その女の肉体のよろこびを知ったばかりだというのに、勇との別離が来た。

夫が、国事に、徳川将軍のためにはたらいてくれることはうれしいつねなのだが、いまは只もう、

（京へ行きたい）

の一事につきる。

気丈な女だけに、口へも顔へも全くあらわさぬが、夜半、ひそかに熱いためいきをもらし、おのが手に、おのが乳房をつかんで身もだえすることもあった。削りたての木肌のような勇の体臭をしのぶとき、ねむりこけている瓊子を抱きしめ、つねは声もなく泣くことがある。

その年の夏の或日……。

小石川指ヶ谷二丁目に直心影流の道場をかまえる岸淵兵介が、試衛館を訪問して来た。

永倉新八が勇と共に駆けつけ、岸淵道場の危急を救ってからというもの、義理堅い岸淵は、たびたび、柳町へあらわれ、勇の留守宅を見舞ってくれているし、周斎老人とも、すでに顔なじみになっていた。

「まことに人物じゃな」
と、周斎も岸淵の人格を称讃してやまない。
永倉新八が、
「美い女ですなあ」
恍惚となったほどの岸淵のひとりむすめの文は、一か月ほど前に、新八とも剣友だった磯野養之助へ嫁入った。
養之助は、旗本磯野弥市郎の次男であるが兄の主馬が急死したため、急遽、家をつぐことになってしまい、岸淵兵介は高弟の彼をむすめ聟にして自分の道場をゆずるつもりであったのだが、
「ま、よいわ。好きな男の嫁になるのだ。行けい」
文を、あっさりとやってしまったものだ。
「ところが……」
と、苦笑しつつ、岸淵兵介は試衛館の隠居をたずねて、
「拙者も、口がきまりましてな」
「ほう……」
周斎老人が、
「仕官なされますか？」
「はい」

「なるほど。貴所ほどの立派なお人を、いまの世の中がほうり捨てておくわけはない」

「そのようにおっしゃられては恐れ入り申す」

近藤周斎が指摘した通り、その人柄を見こまれた岸淵は、淀藩十万二千石・稲葉美濃守に召し抱えられることになったのである。これは淀藩士数名が岸淵道場へ稽古に来ていて、彼らの口から岸淵の人材たることが稲葉家へきこえたのであろう。

「ま、一応は武芸指南ということで……」

「それは何より。しかし、いざ稲葉侯・御家来となったあかつきには、貴所のことゆえ、只の武芸指南ではすみますまい」

「え……？」

「もっと重く、もっと大切なる御役目にはたらくことに、きっとなりましょうよ」

この周斎老人のことばが、のちに事実となった。

ともあれ、どこの大名も、すぐれた人材をほしがっている。

日本の国の内外に切迫する危機感がそうさせるわけで、あの練兵館・熟頭をつとめていた渡辺昇も、

「急ぎ帰って、わしを手つだえ」

九州・大村藩の海防掛をつとめる兄の清左衛門が、しきりにせきたててくるし、昇もまた、のんびりと江戸で剣術をつかっている気持にもなれなくなってきて、ついに

帰国した。

これが半月ほど前のことで、

「近藤先生には、いろいろ、お世話になりまして」

これもきちんと酒の角樽をもって周斎老人へあいさつに来たものだ。

「とんでもない。せがれが、いつもあなたに助けていただいたそうで……御あいさつは、こちらから参らねばならぬ」

「いや、大先生……私も、これで、だらしのない男でしてな」

「ほ……？」

「深川の岡場所に、なじみの女がありまして……その女と会うための金を、ときたまに近藤先生から拝借しておりました。その借り金もお返しできぬまま……」

「いや、そりゃあ、せがれのしたことだ。お気づかいなく」

「申しわけもありませぬ」

その渡辺昇のことも、その日の周斎老人と岸淵兵介との会話にのぼった。

「とにかく、大変な世の中になってしまいましたな、岸淵さん」

「京へのぼられた将軍家も、ひどく御苦労なさっているようです」

徳川将軍が、朝廷に呼びつけられ、京都へおもむくなどということはおどろくべきことであった。

二百何十年もの間、天皇は、朝廷は幕府がよこす〔あてがいぶち〕を受けて暮しっ

づけ、日本の政治には全く介入させられなかった。

その幕府の威風の前に沈黙を余儀なくされていた朝廷が、勤王派志士とむすび、堂々と将軍を呼びつけ、幕府また、これに応ぜざるを得ぬ衰弱をしめしている。

そして、京へやって来た将軍・家茂は、孝明天皇の御供をし、賀茂神社において攘夷の祈願をされたそうな。

幕府は、日本の代表政権として諸外国との間に通商条約をむすんでいる。

それなのに、幕府を主宰する将軍が、勤王派のいうままになって、諸外国を追いはらうことに同意したわけであった。

徳川幕府と将軍の権威は、この一事だけで、もうまるつぶれになってしまったといってよい。

京都へ来た将軍は、もういじめられ通しである。

長州藩を主力とする勤王勢力は、過激な公卿たちをうごかし、熱火のような革命意識を煽りたて、なにごとにも「天皇」と「朝命」をかつぎ出して将軍をいためつける。

あまりに烈しく、常軌を外れた勤王派のうごきには、天皇さえも、

「もっと、何事もおだやかにできぬものか。なにかと申せば暗殺、暴動という仕様では困ったことじゃ」

眉をひそめておられる。

孝明天皇は、外国勢力が日本へ侵入することのみをきらっておられ、その他のこと

では、

「幕府とちからを合せ、国難を乗り切らねばならぬ」

と、主張なさる。

さらに……。

上洛（じょうらく）した将軍・家茂を一目ごらんになるや、

「良き将軍である」

たちまち好感をもたれてしまった。

かつては、わが妹の和宮を、この将軍夫人とするように幕府が圧力をかけてきたとき、しぶしぶとこれに応ぜられた天皇であったが、いまここに、義弟たる将軍を見て、その人柄を、

「たのもしき将軍」

と、見た。

家茂は、亡き井伊大老の政略によって紀州家から十四代将軍に迎えられたのだが、聡明温良な性格で、いやいやながら嫁いだ和宮も、

「なにともいたして、一時も早く、平穏な世を……」

と、必死にねがう少年のような純真さが匂いたつ家茂に、いまは、ふかく愛情をかたむけている。

いま、この若き将軍の後見役として、政局に乗り出して来たのは、かつて家茂と将

軍位をあらそった一橋慶喜であるが、慶喜も、

「天皇と将軍とのおこころが溶け合われたのは何よりのことだ。この一事を大きく生かさねばならぬ」

懸命に〔公武合体〕の基盤をかためようとしているし、京都に在る所司代や守護職などの幕府機関も全力をあげて勤王派の暴発と闘うことになった。

〔新選組〕は、その尖兵の一であった。

二

新選組の本拠となった壬生村・郷士、前川荘司邸は、現代も尚、旧態を濃厚にとどめて残存している。京都なればこそであろう。

この家は総敷地四百三十坪ほどで、いま紙商の持ちものとなっているけれども、この物干場へ上ると細い坊城通りをへだてた西側に、壬生寺や、はじめ近藤・芹沢らが宿舎としていた八木源之丞邸を指呼の間にのぞむことができる。

前川邸の南どなりに、清河八郎が演説をやった新徳寺がある。

百に近い隊士のほとんどは前川邸へ入ったが、

「おれは、こっちがいい」

例によって芹沢鴨は勝手をいい出し、依然として、平間、平山、野口などの取り巻きをひきつれ、八木源之丞屋敷へとどまっている。

「永倉君も来いよ」
と、芹沢はいう。
永倉新八は気がすすまず、
「芹沢さんのおもりも、いいかげんにやめさせて下さい」
近藤勇にたのんだ。
勇は、くびをふる。
「どうしてです？」
「君がついていてくれないと困る。なにをするか知れたものではない」
顔をしかめ、吐き捨てるようにいう勇の言葉も無理はないところであった。
実際、ちかごろの芹沢鴨は何をするか知れたものではないのだ。
芹沢は、近藤たちと同様に、京都市中の巡察をおこなうわけだが……。
「われらは、会津侯・御預りの新選組である！」
なにかというと、この切り札を突きつけ、祇園や島原の料亭へくりこみ、酒色のかぎりをつくした上、代金をふみ倒してしまうという乱暴をやりはじめた。
店の者から文句が出るや、
「何を無礼な！　天下のために命がけではたらくわれわれを何と思っているのだ」
鉄扇をふるい、自慢の大刀をぬきはなち、道具でも器物でもめったやたらに叩きこわしてあばれまわる。

思いきり酒をのみ、こうしたあばれ方をするときの芹沢鴨には、さすがの永倉新八も手が出ないほどのすさまじさがあった。

「永倉君、こいよ」

芹沢は外出のたびに前川邸の屯所にいる永倉新八をさそう。

「そうたびたびでは困りますよ。私もこれで副長助勤という役目があって、部下もいるのですからな」

「かまわん、来なさい。局長のおれが命令する。それとも何か、近藤君が何かいうのか？」

「別に……」

「それならいいではないか。さ、ついて来いよ」

だから、いやだ……と、永倉は勇にうったえるのである。

しかし、酒乱の芹沢がいうことをきくのは永倉だけといってもよい。

勇としては、どうしても永倉についていてもらいたいところだ。

「近ごろは、会津藩でも芹沢さんの所業に目をつけはじめているらしい。新選組は、どうせ寄せあつめの無頼浪人。こうなっては解散させてしまわなくては、会津のみか御公儀の恥ともなろうという、こんなはなしも出ているらしい。だから、君が……」

こういわれては永倉も無下にことわりきれない。

芹沢鴨は一種の異常性格者なのである。酒が入らぬときは、格別に常人と変ること

はないし、いつか八木家の子供が病死をしたときなど、芹沢が、
「近藤うじ、ふだん世話になっている八木家のことだ。貴公と二人で通夜の帳場をつとめようではないか」
と、いい出したものである。
つまり新選組の局長ふたりが、弔問客の受けつけをやろうというのだ。
義理がたい近藤勇は、むろん賛成であったが、
「芹沢さんにも、ああいうところがあるのかね。おどろいたよ」
通夜からもどって、土方歳三にいった。
その夜。芹沢鴨は玄関の受けつけに近藤勇と机をならべ、きちんと袴をつけて正坐をしたまま、来る客来る客に、いちいち鄭重なあいさつをし、応対も立派なもので、
「八木さんのところの人たちも眼をまるくしていた。まるで人が違ったようだったよ」
勇がいうと、土方は冷やかに、
「だからといって、酒をのんだときの芹沢をゆるすわけにはゆきませんよ」
じろりと勇を見た。
勇は、顔をそむけた。
土方のいわんとすること……彼の胸底にひそむものが、あまりにもはっきりとわかったからである。

なにかいいかける土方にかまわず、勇は廊下から庭へ出て行った。
永倉新八も、酔っていないときの芹沢鴨をつかまえ、ずけずけという。
「芹沢局長。あなたの酒は狂人酒ですよ」
すると芹沢は、さからおうともせず、
「その通りだ」
素直にうなずくのである。
もっとも永倉以外の者が、こんなことをいったら、酒が入っていなくても芹沢の大鉄扇であたまを打ち割られてしまったろう。
「やめて下さい、酒を……」
「ばかな……」
芹沢は苦々しげに、
「やめられるものなら、すでにやめとる」
「しかし……」
「悪いと知りつつのむ。のまなくては、生きてゆけんのだ。な、永倉よ。おれがこうなるには、なるだけのわけがあるのだよ。これ以上、もう、きいてくれるな」
妙に弱々しげな声音で、一度だけ、芹沢が、こういったことがある。
「永倉よ。おれはな、兄どもが二人いる。いるが二人とも腹ちがいよ。おれを生んだ母の腹から出たのは弟の由之助ひとりきりだ」

「ははあ……」

「可愛い弟でなあ。おりゃもう、そいつが我子のように大好きで可愛ゆくて……前にもいったように、君そっくりなのだ。しかし、ちがうところが一つある。躰が弱くてなあ……」

それ以外、芹沢鴨は自分の過去を洩らさなかったけれども、永倉新八は、自分だけにこうしたすがたを見せる芹沢を次第に憎めなくなってきたことは事実である。

芹沢の過去には、余人の知らぬ暗いものがひそみ隠れているにちがいなかった。

夏が来ると、新選組も多忙になり、芹沢の乱暴ぶりを気にしてもいられなくなってきた。

三

のちに……。

七十七歳の長寿をたもち、大正四年の北海道・小樽で病歿した永倉新八あらため杉村義衛翁が、長男の義太郎氏に当時のことをこう語っている。

そのころ、京都朝廷を牛耳っていたのは長州藩でな。天子おわす御所を警固しているのも長州藩士だし、国もとから続々と兵をあつめて、そりゃもう、たいへんな勢い

だったものさ。

ま、諸大名いずれも勤王ということについては一致している。わしたちだって、幕府だってそうだ。しかし、どちらにせよ、天子さまおひとりで国をおさめることは出来るもんじゃないことはわかっている。天子さまのおこころを体して天下の政事をおこなう……そのちからをもつだけの大きなかたまりが一つ出来なくては、どうにもなるもんじゃない。

その〔かたまり〕が出来るまでの、まあ、いざこざというものは、むかしの信長や秀吉の頃の戦国の世の中と少しも変りないのだ。そりゃ何だね、いまのこの文明開化のめざましい世の中を迎えるための陣痛というやつだから、かたちはちがうがね。しかし人間のやることには変りないのさ。

幕府にも勤王方（革命派）にも、まったく私利私慾からはなれて、なんとか新しい平穏な世の中にしたいとねがう者もいたけれども、そのねがいを達するまでは、何といってもちからとちからの押し合いさね。町人・百姓を中に入れず、いずれも刀をもったさむらい同士が争うことだから、こりゃもう血がながれずにはいないんだね。

薩摩藩なぞは、長州の勢力を押えつけてしまおうというんで、幕府と手をにぎり合っていろいろとその策動をするというやつ……。

その薩摩の大殿さま（島津久光）の行列が横浜の近くの生麦というところへ通りかかったときにね、イギリスの商人が四人ほど馬へ乗ってあらわれたもんだ。ま、遠乗

りというやつ。大名の行列がどんなものか、眼の青い毛唐人が知るわけもない。平気でその、行列の前を横切ろうとしたもんだ。薩摩のさむらいども怒ったのなんの……こいつめというんで、たちまち抜き打ちにやったもんだ。おどろいたのはイギリス人さ。なんで日本人を怒らせたんだか見当もつかない。

あわてて逃げようとしたが、もう間に合わないやね。そのうちの一人が、ついに落馬してとどめをさされてしまった。イギリスは怒ってね、薩摩へ慰謝料を出せとかけ合ったが、薩摩は知らん顔だよ。その、とばっちりが幕府へかかってくる。いやもう幕府も将軍もさんざんだ。

とにかく外国人を追いはらえ、というのは、そのころの流行でね。江戸のイギリス公使館も長州藩士に焼き打ちをかけられるし、外国の居留民の暗殺も、ひんぱんとなるというわけ……。

幕府は、外国列強を怒らせたら、日本などはめちゃくちゃに踏みつぶされてしまうということを知っているだけに、間へはさまって、どうにもならない。

京都へ来たお若い将軍家が、天子さまの御供で賀茂神社へ攘夷の祈願におもむかれたときなどは、見物の中の浪人どもから大声でからかわれる始末でね。

だが、幕府としては、さいわいに天子さまと将軍家がたいへんにうまくいった、仲よくなられたというんで、これ一つがたのみだったものだが、一方、長州をはじめとする勤王方は若い公卿どもをあおりたて、邪魔なものは片っぱしから殺してしまえと

いうやつ……そりゃもう京都で、ずいぶんと死んだよ。

向うがやればこっちもやる。暗殺の大流行さ。朝廷の国事参政とやらいう役目についていた姉小路少将が、御所の外で殺られたのもこのころでな、犯人は一応、薩摩の田中新兵衛ということになってしまったが……なに、だれがやったものか知れたものじゃあないのだ。

われわれも、諸国から京都へあつまって来て勤王方の手先になって血なまぐさいことをするやつどもを相手に大いにやったもんだが……。それにしても、芹沢鴨が、どうにも仕様がなくなっちまってねえ、これには、わしも、ずいぶん困ったものよ。

当時の新選組は、まだ発足したばかりで、

「壬生浪人」

などと、軽蔑をこめて呼ばれ、会津藩がよこす手当をもらい、細々とやっていたのだし、酒色にふける余裕など全くないといってよい。

しかるに芹沢鴨は、彼のすばらしい風貌と腕力の威圧をもって、酒も女も手当り次第なのだ。

屯所からも近い島原遊廓の角屋のもてなし方が「気にくわん」というので、例の鉄扇をふるい、角屋の珍器什宝を叩きこわしたあげく、

「七日の間、商売をしてはならん！」
などと命じたりする。
大坂へ出張すれば、新町の芸妓の小虎というのに眼をつけ、
「おれのものになれ」
申しこんだが、小虎は厭がって逃げた。
すると芹沢は、これをつかまえて、その髪の毛を切りとって坊主あたまにしてしまい、さらに暴力をもって犯したという。
「永倉君。いったい、どういうことなのだ？」
近藤勇が、ひそかに問うや、永倉新八はあたまを抱え、
「このごろは私のいうことなどききませんよ。つまりはそれほどに、夜も昼も酒っ気が絶えないということです」
そのうちに芹沢は、京の四条堀川にある太物問屋〔菱屋〕で夏の着物をたくさんにあつらえ、
「勘定は、おれがところへ取りに来い。だが内儀をよこせ。それでないとはらわんぞ！」
きめつけたものである。
つまり芹沢、菱屋主人の女房お梅へ眼をつけたのだ。
「行ってはいけない」

と、菱屋はとめたらしいが、お梅は気丈な女で、
「ほんまにひどい壬生浪や。きっと勘定は取って参じます」
或日の昼下りに、芹沢が泊っている八木邸へやって来た。
「来たか、よし」
芹沢が眼くばせをすると、平山、平間の二人が、お梅を玄関から入った正面の部屋へ連れこみ、
「いま、はらってやる。しばらく待て」
「は、はい」
二人は、そのまま部屋を出て、廊下で見張りをはじめた。
お梅も、何かおそろしくなって来て、
「あの今日は、これで……」
帰ろうとするが、平山、平間が帰さない。
そこへ芹沢鴨がぬっと入って来た。
酒気ふんぷんたる芹沢が、
「おい、こいよ」
いうなり、ぐいとお梅の腕をつかんで、そこへねじり倒したものである。
このとき、近藤勇は八木家の庭にある別棟の一室で、永倉新八と語り合っていたが、どうも母屋の気配が妙なので行って見ると、北側の中庭の向うで、八木家の人びとが、

実に何ともいえぬ顔色をして座敷のほうをうかがっている。

「どうしました？」

勇が声をかけると、八木家の内儀が顔をしかめ、吐気をこらえるような表情で、座敷のほうを指した。

近寄って見て、勇も愕然とした。

白昼、しかも障子を開け放したままで、縁側の向うの座敷に、芹沢鴨がお梅を犯している最中ではないか。

お梅は、半分、気をうしなっているようだ。

その女ざかりのお梅を丸裸にしてしまい、芹沢が見るもあさましい姿でのしかかっている。

それをだ。

向うの廊下で、平間重助と平山五郎が突立ったまま、にたにたと見物しているのである。

芹沢の唇から鞴のように烈しい呼吸がもれていた。

近藤勇、顔面蒼白。

そのうちに、じりじりと、勇の右手が刀の柄へかかった……そして、勇の視線がちらと向うにいる八木家の内儀の顔へ走った。

紙のように白い内儀の顔がひくひくとけいれんをおこしている。子供たちもいたし、

女中たちもいる。

勇は、それを見るや、がっくりとうなだれてしまった。

眼前、三間の向うに芹沢の毛むくじゃらな臀がけだもののようにうごいているのをにらみつけつつ、勇は唇をかんで断念せざるを得なかった。

ここで、芹沢を斬ることはできない。

また斬れるともかぎらない。

何しろ平間、平山という芹沢腹心の者が見張っている。

勇が斬りかかれば、すぐに彼らも応じ、芹沢もお梅からはなれて大刀を引き抜くであろう。

そうなったら……。

芹沢のおそるべき剣技の冴えと、平間、平山の二人とを敵にまわし、さすがの勇も不利をきわめることになる。

気がつくと永倉新八も傍にいた。

永倉は、何か物哀しげな表情で、芹沢とお梅を見つめている。

「ついに……ここまで来たか……」

うめくように、勇が永倉へもらした。

このとき、勇の決意は牢固たるものになったといわれている。

芹沢鴨を斬れと主張したのは土方歳三だということになっているけれども、実は近

藤勇自身の決断のほうが、はるかに強烈であった。

だが、このときは、

「屯所の者に、このことを内密にしておいていただきたい」

と、勇は八木家にたのみこんでいる。

どうしたものか……。

この日以来、菱屋のお梅が自分から、しばしば芹沢をたずねて八木家へあらわれるようになったのは、勇も意外であった。

「女という生きものは、おそろしいもんだ」

永倉新八もあきれ顔で、勇にささやく。

勇が、

(江戸へ駆けもどり、つねの肌身を思うさま抱きしめたい)

痛切におもったのは、このときである。

四

そのうちに、芹沢鴨どころではなくなってきた。

京都における長州勢力の革命運動は、いまや頂点に達しかけている。

長州の桂小五郎、周布政之助、久坂義助、品川弥二郎に加えて、土佐からも武市半平太、吉村寅太郎などが指導者となり、各地から京都へあつまって来る志士たちと共

に、

「一挙に、幕府を倒してしまえ」

猛然と起ちあがりかけていた。

会津藩主・松平肥後守が〔京都守護職〕なら、長州藩主・毛利大膳大夫（だいぜんだゆう）は〔禁裏守護職〕である。

京都御所をかこむ九つの門は、それぞれに土佐・肥後・長州・薩摩・仙台・水戸などの各藩が受けもち、警衛に当っているのだが〔守護職〕たる長州藩・毛利家は、この総指揮をとり、長州の許可なくては各藩ともみだりに御所内への参入は出来ぬ。

その羽振りというものは実に大したものであって、その長州藩の傘下に勤王派の志士たちが群れあつまっているわけだ。

一時は、勤王運動の一大勢力といわれた薩摩藩は〔寺田屋事件〕以来、勤王派の信頼をうしない、いまや凋落（ちょうらく）の気味であった。

加えて……。

あの生麦村のイギリス人殺傷事件がまだ尾を引いており、

「もう幕府にまかせてはおけない。われわれで徹底的にサツマを討とう！」

というので、イギリス東洋艦隊司令官・キューバア中将ひきいる七隻の軍艦を横浜へ集結させ、三か条の要求書を幕府と薩摩藩へ突きつけたが、

「外国人に、わが行列のまわりを通行させたのは幕府の手落ちである」

薩摩藩主・島津忠義の実父で、後見役として藩の実権をつかんでいる島津久光は取り合おうともしない。

そこでイギリス艦隊、ついに薩摩へ攻めのぼることになった。

この年の七月二日……。

鹿児島湾に入って来たイギリス艦隊は、折からの風雨をついて鹿児島城下へ砲撃を開始した。

薩摩藩も沿岸の砲台を総動員し、必死の応戦をはじめたが、このとき、城下の湾をへだてている桜島に大砲をかくしておき、イギリスの旗艦〔ユリアラス〕号へ集中砲火をあびせたのが効果的であった。

艦長も副艦長も戦死し、ユリアラス号はよろよろと湾外へ脱出をはかった……というとイギリスが負けたようであるが、そうではない。

薩摩側も砲台という砲台をイギリスの艦砲射撃によって全部破壊され、城下は火の海につつまれるし、

「なるほど、外国列強の武力というものは、このようにおそるべきものであったのか……」

薩摩のサムライどもも、はじめて認識をあらためざるを得なかったようだ。

「カゴシマを占領せよ！」

というので、勝ちほこったイギリスの陸戦隊が上陸しはじめる。

これこそ、サツマ武士が待ちかまえていたところのものである。
藩士たちは白刃をつらね、槍を振い、奮然と迎え撃った。
白兵戦となれば問題にならぬ。
陸戦隊の銃剣を一人で七つもうばい取った藩士がいたほどであるから、陸戦隊はさんざんに斬りたてられ、ほうほうの態で軍艦へ逃げ帰ってしまった。
結果、イギリスでも、
「サツマを……いや日本サムライをあなどってはならぬ」
認識を新たにし、これがのちに、薩摩とイギリスの握手に変って行き、両者の提携は〔明治維新〕の裏側で重要な〔役割〕をつとめることになる。
この〔鹿児島戦争〕を体験してからの薩摩藩は、急速に幕府側へ接近しはじめた。
幕府としても、いままではさんざんに煮え湯をのまされてきた薩摩藩だが、味方になってくれるというのなら、これほどたのもしい味方もないわけであった。
孝明天皇は、中川宮など親幕派の公卿と共に、
「一時も早く、国内の動乱をおさめるように……長州のやりかたは乱暴にすぎる」
はっきりと、いわれるようになっている。
加えて、天皇は将軍・家茂と守護職の松平肥後守をふかく御信頼なのであるから、
「いまこそ、長州の勢力を追いはらってしまおう！」
と、いうことになった。

長州側でも、
「事を急げ！」
「いざとなれば、天皇を無理矢理にも長州へおつれ申し、一気に倒幕の軍を起そう！」
血相が変ってきた。
「もはや、長州のやることを信ずることができぬ」
と、天皇は、いよいよ幕府をたのみになさる。
〔公武合体〕の気運、まさにこのときである。
かくて……。
勤王運動の主導権を長州にうばわれていた薩摩藩が幕府と共に、武力をもって長州藩を京都から追いはらったのが、あの文久三年のクーデターであった。
すべては秘密裡にはこばれた。
八月十八日の未明……。
会津と薩摩の両藩は、武装の兵をいっせいにくり出し、中川宮をまもって御所へ参入した。
中川宮は宮中において、前関白の近衛、右大臣の二条、内大臣の徳大寺などの公卿をあつめ、長州の密謀を披瀝すると共に、長州勢力の一掃をはかるべく諸藩の兵を出動させたむねを発表した。

さらに中川宮は、長州側とむすびついている過激派の朝臣たちの職席の異動変更を、この席上でおこない、

「これよりは、長州藩守護の堺町御門の警衛を薩摩藩に命ずる」

と、いった。

孝明天皇も、この席におられる。

それは天皇の命というわけだ。

そのうちに、かねての計画通り、因州・備前・米沢・阿波などの諸藩が、

「天皇の御召し」

というので、続々と部隊を御所へくり出して来る。

五

新選組も〔守護職〕たる会津藩から、

「ただちに出動せよ！」

の命をうけ、勇躍して壬生の屯所を出発した。

この浪人部隊としては、最初の、晴れの舞台といってもよいわけであったから、

「おれの後へつづけい！」

局長の芹沢鴨は、黒の革胴をつけた上へ、だんだら染の制服羽織を着、例の大鉄扇をつかんで先頭に立ち、堂々と蛤御門へさしかかる。

蛤御門を守っていたのは、会津の藩兵であったが、
「待て！」
いっせいに槍をつきつけ、
「おのれら、何者だ」
と、叫んだ。
近藤勇も、芹沢と肩をならべて先頭にいたのだが、こともあろうに会津藩兵から、このような〔あつかい〕をうけようとは思ってもみない。
会津の兵たちは、新選組が来るということを知らないわけではないのだが、
「なんだ、たかが浪人どもの徒党ではないか。天下の一大事に大きな顔をしてやって来るなど生意気千万！」
と、いうところでもあったのだろう。
勇が事の意外さにおどろいて、少したじろいでいるのへ、
「下れ、下れ！」
一人の藩士が、いきなり槍を突きつけて来た。
「だまれ！」
大喝したのは、芹沢鴨だ。
同時に、芹沢の鉄扇は相手の槍を叩き落していた。
「何をする！」

飛び下って抜刀する会津藩士と共に、藩兵が騒然となって槍をうごかしはじめた。
それへ、芹沢は臆するところいささかもなく、みずからつかつかと近寄り、
「われわれを何と見るか。会津侯御預りの新選組である！」
すばらしい声で、
「公用方の命により、まかり通る！」
怒鳴りつけて、隊士たちへふり向き、
「一同、進めい」
天にもひびけという形容そのものの凛烈たる号令をかけたものだ。
会津藩兵、声もない。
その中を、新選組は胸を張って通りぬけ、御所へ参入して警備についた。
長州藩も、幕府側の、この〔奇襲〕におどろき、三千に近い兵をくり出して来たが、すでに遅い。
一夜のうちに、京都へつめている諸大名の兵のほとんどが敵となったのである。
担当の堺町御門も薩摩藩にとられてしまう。
双方にらみ合ったまま夜が明けて、昼がすぎて、夕暮れとなるころついに長州藩兵は御所から退出して行った。
さいわいに戦火をまじえることがなくすんだ。
このときの口惜しさ、無念さは、この後の長州藩の革命運動を、反動的に激烈なも

のとする。

堺町御門から引きあげて行く長州兵と共に、三条中納言をはじめとする七人の過激派の公卿も追いはらわれた。

これを〔七卿落ち〕とよぶ。

戦闘こそおこなわれなかったけれども、御所の警備についた新選組が百名足らずの人数をもって一糸みだれず、芹沢や近藤の指揮のもとに敏速適切にはたらいたのを見て、

「これなら、充分に御役にたつ」

会津藩も、また幕府も新選組を見直したかたちになったという。

「目をかけてやるように……」

と、会津侯もいわれて、このときの活動に対し、会津藩からかなりの〔手当金〕が、新選組へわたされた。

この金の一部で、

「ひとつ、懇親の宴をかねて、大いに英気をやしなおうではないか」

と、芹沢鴨がいい出したのは、長州藩が京都を追いはらわれ、一応、京の町にも平穏がおとずれた九月十日のことであった。

近藤勇は、

「この金をそのような遊興につかってよいものか、どうか……」

と、ためらったが、芹沢は、
「そんな因循なことでどうするのだ。だから近藤うじはいかん。われわれはな、明日をも知れぬわがいのちを抱え、はたらいているのだ。英気をやしなわんで、いのちがけのはたらきが出来るものか」
一蹴し、傍にいた土方歳三を凄い眼でにらみすえ、
「副長は反対するか？」
いきなり問いかけてきた。
江戸発足以来、芹沢と土方が互いに、はっきりと敵視し合っていることを隊士の中で知らぬ者はない。
「土方。おぬしも反対か？」
もう一度、芹沢がいったとき、
「いいでしょう、いいじゃありませんか」
意外に、土方は明るい声で、
「やりましょう。たまにはいい。では、早速に手配をしますが、どこでやります？」
愛想のよい笑顔まで向けて芹沢にいったものだから、芹沢が気ぬけしたかたちになり、
「む……うむ、うむ……そりゃあその、どうせやるなら、島原の角屋がいい」
「承知しました」

あくまでも土方は、さからわない。

芹沢、妙な顔つきで屯所を出て行き、八木家へ行ってしまった。

近藤勇の居室は、屯所の母屋の庭に面した一間で、小廊下をへだてた奥の立派な部屋は芹沢鴨の居室ということになっているが、芹沢は、めったにここへは来ない。

ほとんど八木家泊りであった。

芹沢が帰ったあと、勇と土方は向き合ったまま、ながい沈黙の中へとじこもった。

庭に、秋の午後の、あかるい陽ざしがみちている。

垣根をへだてて、通用門のある奥庭では、隊士たちが、剣術の稽古をやっていた。

「そのざまは何だ！」

とか、

「おいおい、その竹刀が真剣なら、とっくにお前さんの首は飛んじまっているのだぜ！」

とか、威勢のよい江戸弁で稽古の指導をしている永倉新八の声が竹刀の響きにまじり、はっきりときこえてくる。

「勇さん……」

何度めかの煙草を煙管につめながら、土方歳三が、ふっと眼をあげ、

「あの、永倉新八ですがね……」

なにか、いいかけるのへ押しかぶせるように、勇が、

「さっきは、めずらしく芹沢にさからわなかったな」
「まあね……」
「歳さん」
「え……？」
「お前の肚の底には、いったい何がひそんでいるのだね？」
凝と見まもる勇の視線と土方のそれが、空間で火花を散らすようにぶつかり合った。
「勇さん……」
「島原で散財させるつもりかね」
「そうです」
「それは……？」
「隊士一同、みんな、島原でのむ、さわぐ」
「うむ……」
「芹沢も大酒をくらう」
「む……」
「のんでのんで……やつは、八木さんのところへ帰る」
「それが……？」
「そこで……」
と、土方歳三はひとつ大きく息を吸いこむようにしてから、

「斬る！」
低い声だが、断乎としていったものだ。
このときはもう、勇もこれをとめようとはしなかった。
大きくうなずく勇へ、軽くうなずき返した土方が、立ち上って、
「手筈は、あとで……」
「よし」
土方は、副長みずから島原へ宴会の手筈を打ち合せに出かけて行った。
京に名高い島原の廓は、屯所から北へ十町ほどのところにある。
近藤勇は、土方が去った後も、居室の机の前からうごかぬ。
机上には、墨でまっ黒になった半紙がつみかさねられ、習字の手本も数帖置かれてあった。
新選組の局長の一人になってからは、多忙の中を、勇は懸命に習字をやったし、読書にもはげんだ。
それもこれも、一介の浪人部隊である新選組を、
（このままにはしてはおかぬ）
という野心に燃えていたし、
（おれも、このままではいないぞ）
その決意があったからであろう。

（それにしても……）

とりあげた筆を、また硯箱（すずりばこ）へ置き、勇は、庭からきこえてくる永倉新八の掛声に耳をすませた。

（土方は……永倉のことを、何かいいかけたようだったな。いったい、どういうつもりなのか……？）

芹沢鴨を斬るとなれば、彼の腹心である平間や平山なども粛清してしまわねばならぬし、局長の一人でもある水戸出身の新見錦も始末するつもりの勇だ。

これらの連中は、芹沢一党であるばかりでなく、芹沢をおだてあげ、そそのかし、そのために、

（芹沢の酒乱もつのったといえる）

むろん、近藤派とは反目しているわけだし、隊の統一をみだすこと言語に絶するものがある。

（土方は、永倉も芹沢一味だと考えているのだろうか……）

そう思い至ったとき、勇は胸がさわいだ。

（いかん……永倉を芹沢に近づけたのは、このおれだ。永倉だけは殺せぬ）

何か、居たたまれない気持になり小廊下から玄関へ……。

「局長。お出かけですか？」

あわてて、隊士二名が駆け寄って来るのへ、

「かまわんでいいのだ。ちょいと、そこまで……」
「はっ」
外には夕闇がただよっている。
屯所の前は、いちめんの畑と雑木林で、その向うに北山の山なみがくっきりと見えた。長屋門を出た近藤勇は、塀に沿って八木邸の方へまがりかけたが、何気なく、畑の向うへ眼をやって、
（あの乞食浪人……）
まさに、飯田金十郎なのである。
「ほほう……」
勇は眼を細め、なつかしげに、彼方の木立の前の畑道へぬっと突立っている金十郎をながめやった。
相変らずの坊主あたまでそれとわかったが、金十郎は羽織・袴をつけ、なかなかどうして立派な服装をしているではないか。
金十郎も勇が出て来たのを見て、一瞬、顔色を変えたようだが、そのうちに、
「えい、や！」
すばらしい気合を発し、腰をひねって電光のような居合いをつかって見せ、鍔音も高く、白刃を鞘へおさめるや、
「ふふん……」

鼻で笑い、うっそりと林の中へ消えてしまった。
彼の気合声におどろいて走り出て来た隊士たちが、
「あの声は何です？」
「局長、どうしました？」
口々にいうのへ、近藤勇は、
「なに、海坊主が、そこの畑に小便をしていたのだ」
めずらしく冗談をいった。

隊内粛清

一

いざ肚をきめたとなると、近藤勇の行動は迅速をきわめた。
芹沢鴨一派については、会津藩から内密で、
「斬れ」
との達しがあったともいうが、実は、近藤みずから会津藩へ、この大事をはかったのである。

会津藩としても、芹沢らの乱行にはたまりかねていたところであったし、勇のほうから、

「決行します」

と、いい出したのなら文句のあろう筈はなかった。

が、事はあくまでも秘密裡にはこばれた。

会津藩重役のうちでも、この事を知る人物は二、三にすぎず、永倉新八は後年、

「おそらく会津侯も御存知なかったろうよ」

と、いっている。

永倉も、まったく気づいてはいなかった。近藤勇、土方歳三のほかに、この暗殺計画を知らされたのは、井上源三郎、山南敬助、藤堂平助、沖田総司、原田佐之助のもと試衛館一党の五人である。

永倉が除外されたのは、

「このさいです。油断はならん。なにしろ永倉君はあれだけ芹沢に気に入られているのだし、どこまで深い間柄になっているか知れたものじゃない」

こう土方歳三がいい出し、その意見に勇は反対であったけれども、勇は勇で別のことを考えていて、その理由から永倉を芹沢暗殺の同志から外したのである。

「歳さん……」

勇は、実に厭な顔つきになって、

「おれは、芹沢と堂々斬り合ってみたい」
「しかし……」
「わかっている。ま、暗殺より仕方はあるまいなあ」
「そうですとも」
やるからには、絶対に失敗してならないのだ。正面から立ち向ったなら、芹沢鴨の剣はどのようにすさまじいはたらきをするか知れたものではない。もしも勇が斬られて芹沢が新選組の主導権を自分一人の手につかんでしまったら、万事休す、状態はさらに悪化し、新選組は、いたずらに京都町民をおびやかす暴力団体になってしまいかねない。さらに、正攻法でやれば芹沢派の新見錦をはじめ、平山、平間などの一党もそれぞれひとかどの剣客であるからには、だまって引込むわけはない。
こうなって隊の幹部が二つに割れ、刀と刀で闘い合うということになれば、隊内の動揺はむろんのこと、世間からも、
「やはり無頼浪人のあつまりにすぎぬではないか」
と、評判をされるだろうし、せっかく先頃の政変においてみとめられた新選組の実績も一度に下落してしまうこと明白である。
失敗はゆるされぬ。
完全に芹沢鴨をほうむってしまわねばならぬ。
となれば、もはや〔暗殺〕によって電撃のごとく芹沢の息の根をとめてしまうのが

もっともよい。

島原における新選組の宴会は、九月十八日にきまった。

勇は、土方のみに、

「芹沢暗殺は、十八日の夜にしたい」

「いいでしょう」

密談にふけるうち、沖田総司が勇の部屋へにじみ出すように、足音もなく入って来た。

これが九月八日の夕暮であった。

「なんだ、総司か……」

「近藤先生。新見局長が山の緒へ出かけて行きました」

「一人か？」

「いや、榊原と大島を連れています」

榊原と大島は、二か月ほど前に入隊した者で、新見に可愛いがられている。

「その二人だけだな？」

「そうです」

「よし、歳さん。やってしまおう」

「いいでしょう……おい、総司。原田と山南さん、それに藤堂とお前と、あとは近藤さんとおれでいい。だれにもさとられぬように、散り散りに出て行け。落ち合う場所

は先斗町の町会所がいいだろう。勇さん、それでよろしいか？」
「うん。いい」
「榊原と大島は、どうします？」
「そのままにしておけ。今夜のことは二人に見せておいたほうがいい」
「それもそうですな」
〔山の緒〕というのは、祇園の貸席であって、芹沢一派が、ここでよくあそんでいる。
「芹沢はどうしている？」
「島原へ昼すぎから出かけて行きましたよ」
「また永倉も一緒か」
いうや、土方はするどく舌うちを鳴らしたものだ。
どうも土方、このごろは永倉新八を疎む気配がある。あまりにも芹沢が永倉をそばへ引きつけておくものだから、どうしても疑心暗鬼となるし、永倉は永倉で、土方に睨まれていることを感じとり、
（勝手にしやがれ）
なかば反撥的に、芹沢と密着するようになってきている。
さて……。
夕闇の中を、分散して壬生の屯所を出た勇たちは、先斗町の町会所へあつまり、ここから一気に祇園の〔山の緒〕へ向った。

二

新見錦は、部下二人と気に入りの芸妓たちに取りかこまれ、上きげんに酒をのんでいたが、近藤・土方をはじめ六人の試衛館党が突如として〔山の緒〕へあらわれたのを知るや、

「急用を思い出した。屯所へ帰る」

立ちかけたが、すでに遅い。

勇以下六名、たちまちに新見の座敷へ入って来て芸妓たちを去らせ、

「では、私どもはこれで……」

事態の只事でないのを感じ、座を立ちかける榊原と大島へ、勇が、

「貴公らは、ここにいてよろしい」

押しとどめた。

「何か、急用なのかね、近藤局長」

「新見局長」

「何かな？」

「いさぎよく、自決していただきたい」

「何だと……」

新見も、榊原たちもさっと顔色が変った。

「貴所の罪状を申しあげる」
と、近藤勇は眉ひとつうごかさず、きっぱりといった。
土方たち五人は、新見錦のまわりをかこみ、新見は床の間へ置いてある自分の大刀へも手がとどきかねるかたちになってしまっている。
ここで新見錦は、おのれの悪事非行の一々を近藤勇に指摘された。
そのうち、もっとも重い罪状は、新見が局長の職権をもって隊の公金を持ち出し、これを遊興費に当てていたこと。
もう一つは、大和屋焼打ち事件についてであった。
この事件は一か月ほど前に、葭屋町一条通りにある商家・大和屋庄兵衛方へ、芹沢鴨と新見錦が隊士数名をしたがえて乗りこみ、
「天下のため、わが新選組のために、なにぶんの御寄附をねがいたい」
例のごとく強談をやったものだ。
これは、天忠組などの勤王志士たちが、大和屋を「奸商の首を斬れ」などとねらいはじめたので、主人の庄兵衛はびっくりしてしまい、朝廷へ一万両の大金を献じたばかりか、天忠組へも少なからぬ金を差し出した。
これが芹沢の耳へ入ったので、
「けしからん!!　大和屋からこっちにも出させろ」
と、乗りこんで行った。

しかし、大和屋では主人の庄兵衛が名古屋へ出かけていて留守のことでもあり、この芹沢の申しこみを番頭がきっぱりとことわってしまった。

「おのれ!!」

あまりにも見事にはねつけられたものだから、芹沢も新見も激怒し、すぐさま壬生の屯所から大砲を引き出し、これを大和屋の正面へすえつけるや、どしどし撃ちかけたものである。

あたり一帯が、火の海となった。

火消が駆けつけると、芹沢たちは剣をふるい、鉄砲をかまえ、

「水をかけたりすれば、おのれらの命はないぞ!!」

と、威嚇する。

大和屋は、もう店から土蔵からめちゃめちゃに打ちこわされてしまい、京都守護職たる会津藩も世上の指弾をあびて非常に困ったが、それから五日後に政変がおこって、一時は京都市中が戦火に包まれかねぬ非常事態となり、大和屋一件どころではなくなってしまったのである。

このほかにも、新見錦が芹沢一派と共に犯した非道は数えきれたものではない。

だから新見は、

「芹沢うじ同席の上で、あらためて処置をうけたい」

必死にいい張ったが、近藤勇は、

「すべての証拠はそろっているのだから、その必要はござらん」
「では、芹沢うじの……」
「芹沢局長のことを、いま申しているのではありません。貴所について申しあげておる」
「む……」
「さ、いさぎよく腹を切っていただきたい」
「ば、ばかな……」
「何がばかでござる。貴所は、罪状の一々をみとめられぬというか」
「それは……」
新見は、うなだれてしまった。やったことはやったことだ。公金横領についても、勇と土方は隊の勘定方の帳簿や、担当の隊士からの〔きき書〕へ、彼らの署名血判までとってきており、これを新見へ突きつけたのである。
新選組の〔局中法度書（はっとがき）〕に、こうある。
一、士道にそむくまじきこと
一、局を脱するをゆるさず
一、勝手に金策をいたすべからず
一、勝手に訴訟取りあつかうべからず
一、私の闘争をゆるさず

右にそむく者は切腹を申しつける、というものだ。
新見が〔法度〕の条々を犯していることは明白であり、しかも彼は局中を統率すべき局長なのである。
「切腹は、屯所において、やりたい」
ついに、新見はこういい出した。
屯所へ行けば、芹沢鴨が何とかしてくれよう。くれぬ筈はない、新見が腹を切るのなら芹沢自身も切腹しなくてはならないからである。
このとき、土方が、
「この場において切腹していただきたい。局長が、どうしても厭だと申されるなら、不肖、土方歳三が副長の責任において処刑します」
と、やったものだ。
もう逃げきれない。
新見錦は、うなだれたまま、かすかに肩をふるわせていたが、彼もひとかどの剣客であったし、これ以上の悪あがきをしたくはなかったのであろう。
「よろしい」
押しころしたような声でいい、冷えた酒を杯洗へなみなみとつぎ、これを一気にのみほすや、土方が差し出した自分の脇差をぬきはらい、
「このことを芹沢うじがきいたら、何と申すかなあ……」

ひきつるような、哀しげで、しかも不気味なうす笑いをうかべたという。

たった一人で、近藤一派にかこまれてしまった油断を悔いているようでもあり、このことをきいたなら、芹沢鴨もきっとだまってはいないだろう、という意味もふくめての笑いであった。

ここで、新見錦はついに詰腹を切らされてしまい、三人の局長のうち、のこるは芹沢と近藤のみになったのである。

榊原、大島という平隊士も立合わせた上での切腹だから、このことは、たちまちに屯所内へ知れわたった。

「近藤め、やりおったな!!」

芹沢鴨は歯がみをして口惜しがったが、どうにもならぬ。

なぜといえば……。

新見錦は、みずからの手によって腹を切ってしまったからだ。つまり、われとわが罪状をみとめて、いさぎよく隊の掟にしたがい、自決したことになるのである。

もしも新見が近藤たちの申しわたしを、断然、承知せず、斬り合ったあげく殺されたというのなら、芹沢もだまってはいなかったろうが、近藤勇が八木家の芹沢の部屋へやって来て、

「これこれで、新見局長は局中法度にそむいたことを男らしくみとめ、切腹いたされましたよ」

と、告げられたときには、二の句が出なかった。

このとき勇は、榊原と大島を連れて来て、

「くわしくは、新見うじと同行の、この二人からおききとり下さい」

こういって、さっさと屯所へ引きあげてしまった。

以来、近藤も土方も、芹沢鴨に対しては別だんの敵意もしめさず、芹沢も、

（新見錦に切腹させることによって、大和屋その他の事件を片づけたつもりなのだろう。それなら、それで仕方もあるまい）

と、思ってみたりした。

つまり、そこまで芹沢は弱気になっていたといえる。

新見錦の切腹は、隊士一同に異常な緊張をあたえた。

いままで芹沢派の乱暴な、派手やかな気勢にのまれていたかに見えた近藤派の恐るべき底力が、隊士たちに看取されてきたのであろう。

こうなると、今まで芹沢に尾をふっていた隊士もぴたりと鳴りをしずめて素行をつつしむようになったし、近藤勇をはじめ、土方、沖田、山南、井上などの近藤派幹部の隊士統御もスムーズにはこばれてゆくようになる。

芹沢鴨は、もう気が気ではない心境であったのである。

八月十八日の政変以来、新選組の存在価値も、幕府側がこれをはっきりとみとめたことになり、入隊を希望する浪人たちが後を絶たぬ。

彼らの履歴と文武両道を選りわけ、入隊を許可するわけだが、この主任は土方歳三と山南敬助の二人がつとめた。

気も荒く腕も強い連中ばかりなのでこれをまとめてゆくことは、なかなかに骨が折れたものだが、入隊して来る浪士の中には、

（ちょいと臭いな）

と、土方が眼をつけている者もいる。たとえば、八月の政変以後に、新選組へ入隊して来た京都浪人の御倉伊勢武、荒木田左馬之介、越後三郎などを、

「どうも長州が入りこませた間者のような気がするんだが……」

と、土方は勇だけにもらした。

「そうかね……」

「私の勘で、そうおもえる」

「おそろしいからな、お前さんの勘ばたらきは……」

そこで、ひそかに、勇は副長助勤の一人・山崎丞をよび、彼らの動向を見張らせることにした。

山崎は大坂浪人というふれこみだが、もとは大坂の鍼医者あがりで、小肥りの黒眼のぱっちりとした愛嬌のある顔だちだし、口のききようも態度物腰も極くさばけてい

る。京坂の事情にくわしいところから、勇は山崎に、
「監察方をたのむ」
と、命じてあった。
この山崎丞（すすむ）だけには、九月十八日の朝になり、勇が、はじめて芹沢鴨暗殺の件を打ちあけたという。
「え……」
山崎、息をつめるように、
「いつです？」
「今夜」
「しかし、今夜は島原で……」
「だからいいのだ。だから今夜決行する」
「なるほど」
「手筈をきめはしたのだが、私ひとりで考えることだし、一歩あやまっても取り返しがつかぬことになる。君に相談したい」
「よく打ちあけて下さいましたな」
「もっと早く、君だけには……」
「いや、よろしいのです。それだけのことをなさるのですから当然のことです」
「そう思ってくれるか」

「むろんのことです」

秋の、冷めたい雨の朝であった。

例によって芹沢は八木家へ泊ったので、屯所の局長室には近藤勇ひとりきりである。

この雨は、昼ごろ一時やみ、うす陽も射しはじめたのだが、夕暮れ近くになると、まるで叩きつけるような本降りになり、この雨の中を隊士たちは三々五々に傘をさして島原遊廓へ向った。

留守居の隊士三名と小者たちのみを屯所に残し、ほとんど全員が島原へおもむき、角屋と輪違屋の、二つの揚屋へ別れて酒宴がはじまる。

島原の遊里は、寛永十七年に、それまでは六条にあった遊里を朱雀野の地へうつしたものだ。

江戸でいえば新吉原というわけで、格式の古くもあり高くもある遊里が京の島原であった。

壬生の屯所からは北へ約十町。

田畑や雑木林の道を行くわけだが、島原の遊里へ入れば全く別世界となるのは江戸の吉原と同様で、廓のまわりは土堤でかこまれ、東の大門をくぐれば忽然として、文字通りの不夜城があらわれる。

中之町・上之町・中堂寺町・太夫町・下之町・揚屋町の六町にわかれた遊里には、京格子、二階建ての揚屋が整然としてつらなり、それがまた、いかにも古びており雅

てもいるのは、さすが京の遊里で、揚屋に灯がともれば、絃歌おこって、

「三味線の音色も歌の節も、江戸とはまったくちがってきこえる」

この遊里へ、はじめて足をふみ入れたとき、武骨な近藤勇の耳にさえも、それが感得されたほど、京の遊里、色町の雰囲気は一種、特別のものであったといえよう。

揚屋の中でも〔角屋〕は、寛永年間の建築だといわれ、

「貫禄だな」

と、勇が見とれるばかりの、黒光りして堂々と二百年の歳月に耐えぬいた構築は、しかも瀟洒なおもむきをたたえ、扇の間、御簾の間、どんすの間など数寄をこらした座敷が、江戸では到底考えられぬ巧妙な設計のもとに組みたてられている。

「私はね、勇さん。角屋の青貝の間という座敷が好きですね」

と、土方歳三がいった。

その座敷は角屋の楼上にあり、壁や欄間に精妙をきわめた螺鈿細工がほどこされているのだそうな。

勇も土方も、芹沢一派の連中とちがい、つとめて緊張して隊務にはげんできていたし、島原へ来ることもめったにない。

局長以下、幹部は角屋へ、輪違屋へは井上源三郎が残る平隊士を引きつれ、

「こっちのほうが、気が張らんでええぞ」

と、入って行く。

角屋の、階下の広間へ入るや、
「おい、永倉君」
すぐさま近藤勇は永倉新八の腕をつかみ、
「私のとなりへ来いよ」
笑いかけた。
「はあ」
永倉が、勇のとなりにすわるのを見て、芹沢は苦虫を噛みつぶしたような顔になった。
奥庭に面した大座敷の正面に、芹沢・近藤の両局長。だから勇は芹沢鴨と永倉新八を両わきにして座をしめた、ということになる。
両側に幹部隊士、その他の平隊士が居ならび、芸妓たちがいっせいにくりこんで来た。
「今夜は無礼講だ。じゅうぶんにやってもらいたい」
平常は謹直な勇が、さも愉快げにいいはなったものだから、隊士たちは大よろこびで、たちまち底ぬけの大さわぎとなった。
剣舞がはじまる。
盃洗が飛ぶ。
酔いにまかせ一刀をぬきはらって、座敷の柱へ切りつける者もいる。

今夜の勇は、寛容であった。

隊士たちが、いささか眼にあまるような酔態をしめしても、苦笑をうかべるばかりで何もいわず、そのうちに、

「おい、永倉君、こっちへ来ないか」

酒宴がわきたち、人びとの座がみだれはじめると、永倉新八の袖をひき、開け放った縁側へ出て、そこにたむろして飲みまくっている平隊士たちの間へ割りこんでいった。

芹沢鴨は、床の間を背に、この様子をにらみつけている。

自分のまわりには芸妓もいるし、平間や平山、野口健司などの配下もひかえているのだが、

（近藤め、どうも、おもしろくない）

気に入りの永倉を、

（おれのそばから引きはなそうとしている）

と、見たからである。

事実、その通りであった。

勇は、酒宴のうちに永倉を一人じめにしてしまいたかったのである。

いつものように、

「永倉君。一緒に来い」

などと芹沢鴨がいい出し、永倉を連れて八木家へもどるようなことになったら大変だ。こうなれば、

「泊って行け」

強引に芹沢がすすめ、ことわりきれぬ永倉新八が八木家へ泊りこむこともめずらしくないのだ。

だが今夜だけは、こうした事態になることを、勇は喰いとめねばならない。

「やあ、局長。おながれを頂戴」

「永倉先生、おながれを……」

平隊士たちは、気やすげに割りこんで来てくれた近藤と永倉を迎え、しきりに杯をさす。

「うむ、うむ……」

勇は、これを受け、ぐいぐいと酒をのんだ。

「局長は酒に弱い」

と、隊士たちも見ているし、試衛館時代からの同志たちですら、近藤勇を酒のみだとは考えていないが、強いことは無類に強いのである。

はじめのうちは、顔も躰も真赤になってしまうが、決して酔わぬ。そのうち、その赤さが醒めてきて平常の顔色にもどると、いくらでものめる。

「だが、いくらのんでも、おれは酔えないのだ」

まだ若いころだが、勇は、土方歳三へ、こんなことをいったことがある。

「酔えぬし、のんでうまいとも思わんしね。だからのんでもつまらん」

そういう勇の酒であった。

しかし、この夜の勇は愉快そうに、いくらでものむ。これに引きこまれ、永倉新八も大いにのんだ。酒がなくては一日もすごせぬ永倉なのだが、いつもは三合がよいところで、それ以上になると、あたりかまわず眠りこけてしまう。

それでも永倉は、ときどき芹沢鴨のほうを見ては、さびしげに、しかも荒々しく大杯をあおっている芹沢を見やり、

(このところ、どうもやけくそ気味だな。局長としての人気もなくなってきたし……可哀想に、な)

と、そこは情にもろい江戸育ちの永倉だけに、腰をあげて芹沢のそばへ行ってやろうとすると、すぐさま近藤勇が腕をつかんで引きとめ、

「ま、ひとついこう」

とか、

「江戸の御両親から便りはあるかね?」

とか、愛想よくはなしかけながら酒をすすめる。ちょいと妙な気持もしたが、そのうちに永倉は適量をこえてしまい、何が何だかわからなくなってきてしまった。

酒宴は、まさに、たけなわである。

勇は、すばやく角屋の仲居を呼び、永倉新八を別室へうつしてしまった。
中村金吾という平隊士が、永倉に目をかけられているのを知っていた勇は、
「中村。二階の人目にふれぬ場所へ連れて行き、寝かしておいてやれ」
小声で命じた。
中村金吾は、仲居に手つだい、永倉を抱えて大座敷から消えた。
戸外の大雨の音も消されるほどの乱痴気さわぎである。
芹沢一党も、永倉が去ったことに気がつかぬらしい。
と……。
さも、おもしろくないといった顔つきで、いきなり芹沢鴨が立ちあがり、平間と平山へ何かいうと、よろめくように大座敷から出て行ってしまった。
平間、平山がつづいて立ち、後を追う。
三人とも相当に酔っている……と、勇は見た。
「もっとやれ。もっとのめ」
勇は、床の間の前へもどり、大声にいった。

三

芹沢鴨が暗殺されたのは、この夜ふけである。
例のごとく、芹沢は平間重助と平山五郎をしたがえ、八木源之丞邸へもどったが、

離れへ行けぬほどに酔っていい、仕方なく、平山と平間が世話をして、玄関を入った右手の部屋に芹沢を寝かせた。

八木家には、あの〔菱屋〕の女房のお梅が来ていて、芹沢の帰りを待っていたものである。

このごろのお梅は芹沢との関係がわかってしまい、菱屋から出され、三人の子供を置いたまま、五条橋・東詰にある実家へもどっているらしい。だから三日にあげず八木家へあらわれては、芹沢の部屋へ泊りこむ。

「あれ……ここでは八木さんにめいわくどす」

お梅は、しきりにいいたて、芹沢を離れへ連れて行こうとしたが、芹沢は平山五郎がのべた床へ倒れこむと、たちまち雷のごときいびきをたてはじめた。

で、やむなく、お梅も同じ床に入った。

そのころ、平山と平間のなじみの妓(おんな)が連れ立って八木家へあらわれた。あらかじめ声をかけておいたのであろう。

平山と平間も、それぞれ女を抱いて寝床へ入る。

どれほど経ったろう……。

一同が、ぐっすりと寝込んだのを見すましたように、五名の刺客が黒覆面に顔をかくし、山崎烝に誘導され、八木家に潜入して来た。

土方、沖田、原田など近藤派の猛者(もさ)である。

物もいわず、芹沢鴨のかぶっている夜具の上から、刺客たちがめったやたらに白刃を突きこんだ。

「ぎゃあ……」

芹沢、悲鳴をあげて狂人のようにはね起き、闇の中に大刀をさぐったが、どうなるものではなかった。

閃々たる刺客たちの斬撃をあび、ずたずたに斬られ、呆気なく芹沢鴨は、即死してしまった。

お梅も、このとき斬殺されている。

平間重助も平山五郎も斬撃をうけ、平山は眼もさめぬまま首をはねられ、平間は重傷を負いつつも、妓と共に辛うじて逃れたという。

平山の相手の妓、これも逃げた。

八木家では大さわぎとなったが、刺客たちは一瞬の間の斬殺をすまして、素早く戸外の闇へ消える。

雨はやまなかった。

朝になって、この事件は新選組隊士一同に強烈な衝撃をあたえた。

犯人は、だれとだれだ、と指摘することも出来ないが、だれにも見当はつく。

近藤勇は、八木家と目と鼻の先の屯所へ、いつの間にか帰って来ていて、

「局長・芹沢鴨、ならびに平山五郎儀、賊徒のため横死を遂げ候」

という届書を、京都守護職たる会津侯へ差し出したものである。
会津藩も、持てあましぬいた芹沢鴨の死をきいて、胸をなでおろしたことであろう。
すぐさま、芹沢たちの葬儀の準備がはじまる。
土方歳三が何くわぬ顔で、庭先から局長室へあらわれ、
「平間は、うまく逃げましたよ」
ささやいた。
「ま、いいさ」
「昨夜、永倉はいませんでしたな」
「もしいたら、殺ったか？」
「むろんです。あの菱屋の女房でさえ始末したのだから……」
冷然と、土方歳三はいった。
その永倉新八が、二日酔いの青い顔で屯所へもどって来たのは、このときである。
土方は、にやりと笑い、どこかへ行ってしまった。
「局長……」
と、永倉は突きつめた声で、
「芹沢さんが……」
いいかけるのへ、勇が、
「もう、いうな!!」

永倉は、突立ったまま、ぶるぶると両拳をふるわせている。
昨夜の近藤勇が自分をそばへ引きつけ、芹沢と共に帰るのをふせいだ事が、どんな意味をもつものか……。
永倉には、いま、はっきりとわかっている。
（芹沢さんと一緒に帰ったら、おれも殺られていた……）
なのである。
これが口惜しい。
江戸以来の同志ではないか。
芹沢を斬るなら斬ると、なぜ、近藤さんはおれに打ちあけてくれなかったのだ……
と、永倉のつぶらな双眸がひたと勇を見すえ、うったえかけている。
芹沢暗殺については、永倉もあきらめている。当然こうなるとも考えていないではなかったが、それとは別に、自分を可愛いがってくれた芹沢鴨の別の一面も見ているだけに、どうも急には、胸の中が割り切れなかったのであろう。
「永倉君……」
勇は近づいて行き、永倉新八の肩を抱くようにして、
「ながい間よく辛抱してくれた。局長として礼をいいます」
こころから、いった。
これだけで、二人の胸には通じ合うものがある。

芹沢の〔おもり〕を永倉にたのんだのは他ならぬ近藤勇であった。結局、それがために永倉を除外して今度の事をはこばねばならなくなったことは、勇にしても心外の事というべきだが、あえて策をろうしたのだ。あくまでも、事前に芹沢一派がこちらのうごきをさとることをふせぐためにである。

「永倉君……」

「わ、わかっていますよ」

「そうか……」

「大丈夫です」

うなずき合って、二人は手をにぎり合った。

芹沢鴨と平山五郎の葬儀は、翌日の九月二十日、前川屋敷の屯所においておこなわれた。

所司代や奉行所、むろん会津藩からも多勢の武士、役人たちが葬儀に参列をし、盛大なものであった。

近藤勇は、仕立ておろしの黒羽二重の紋つきに仙台平の袴をつけ、威儀堂々として参列者を前に弔詞を読んだ。

新選組局長は、いまや勇一人となった。

その責任の重さに立ち向かって行こうという気魄が、この日の勇の言動に威厳をあたえ、

（これからは、絶対にうしろゆびを指されるような新選組にはせぬ!!）

断固たる決意が、一種、沈静の貫禄となって見え、

「まるで、一夜にして人がちがってしまったようだな」

暴れ者の原田佐之助も、眼を白黒させていたし、勇自身も、

（おれも、いままでのおれでいてはならぬ。これから精魂をかたむけて隊をひきいてゆかねば……）

と、考えていた。

葬儀に列席した幕府側の人びとも、この日の勇を評して、

「三千石の旗本には、充分に見え申す」

などと、ささやきかわしている。

二つの棺が前川屋敷を出るのを、隊士一同、両側に整列してこれを見送る。

永倉新八は、眼前を通りすぎて行く芹沢鴨の棺を見送りつつ、

（ああ……芹沢さん、あんたもこれで、楽になりましたねえ）

おもわず合掌してしまった。

おのれの過去について、芹沢はくわしく語らなかったけれども、永倉へ洩らした言葉の端々から推してみれば、常人には考えおよばぬ陰惨な前半生を芹沢は乗りこえてきたものらしい。

その過去が、彼を異常な酒乱にしてしまったのだ。

余人は知らず永倉新八のみは、芹沢鴨という人物の半生につきまとってはなれなかった暗い哀しい影を感じとっていたのである。

葬儀が済んで間もなく、あの長州の間者らしいとにらまれていた御倉と荒木田、越後、松井の四名が、ひそかに公卿衆・大原三位重徳と連絡をつけていることが突きとめられた。監察方・山崎丞の探偵によるものである。

「よし、斬れ!!」

勇は、すぐさま命じた。

九月二十五日の昼下り。御倉と荒木田が、出入りの髪結いに月代を剃らせていると、斎藤一と永倉新八がすーっと入って来て、髪結いに、

「あっちへ行け」

と、目顔でいう。

髪結い二人、わけがわからぬ顔つきで台所の土間へ出て行くか行かないかに、

「えっ!!」

いきなり、斎藤と永倉が抜き打ちをかけた。

御倉と荒木田も、妙な気配を感じて身がまえたが、腰の小刀を抜きかけるのが関の山で、二人とも血飛沫をあげて転倒した。即死である。

同時に、長屋門わきの小部屋にいた越後と松井が、沖田総司と藤堂平助に襲われたが、この二人は早くも気づき、刀もとらぬまま、道路に面した窓を破って必死に逃げ

た。

屯所内が、騒然となる。

このさわぎで、顔色が変った隊士が、もう二人いた。

楠小十郎、松永主計がそれで、この二人も、かねてから土方に「どうも匂うな」と目をつけられていたのだが、同志四人が突如として襲われたので動顛してしまい、大刀をつかむや台所口から表門へ、まっすぐに逃げた。

「こいつら!!」

原田佐之助が折しも玄関口を見張っていたものだから、躍りかかって楠小十郎へ、

「くたばれ!!」

猛然と、白刃を叩きつける。

「あっ……」

振り向いた楠が抜刀し、原田と二、三合するうち、松永のほうは門を飛び出し、一散に逃げてしまった。

楠は、蛇に睨まれた蛙のようなもので、飛び違いざまの原田が横なぐりの一刀をうけて殪れた。

これらの人びとは、ほとんど京都浪人と申し出て入隊したものだが、いずれも長州の勤王志士で、新選組の動向をさぐると共に幹部暗殺を計画していたらしい。

こうして、一時に隊内の粛清がおこなわれた新選組に対し、これを預る会津藩から

は、特別に恩賞の沙汰があり、局長・近藤勇は〔大御番頭取〕のあつかいということで毎月の手当が五十両。副長は四十両、副長助勤が十五両の月手当を正式に支給されることになった。

京都守護職たる会津侯・松平肥後守が、いかに新選組の実際的な活動をたのみにしていたかが知れる。

そこへゆくと、京都にいる幕臣たちは、いざともなったとき、いのちがけで勤王派の暴力へ立ち向うだけの気力もなければ実力もないのだ。

なにしろ、二両もあれば、かなりの贅沢をして五人の家族が暮せたという時代に、副長助勤の永倉新八でさえ、月十五両の手当がもらえることになったのである。

まして、局長・近藤勇の五十両というのは、現代でいうと月給二百万円にも相当しようか。

新選組が、これだけの待遇をうけるようになれた、ということは、近藤勇にも強い自信を植えつけたといってよい。

江戸からも、多摩の生家からも、

「近藤周斎先生の病状がよろしくない。一度、帰っては来られないか？」

たびたび、手紙が来る。

養父・周斎の身も気がかりであったが、いまは私情をさしはさむ余地がないほど、勇の心身は緊張していた。

（これからは寸毫の失敗もゆるされない。いや、おれがゆるさぬ）

おもいつめていたし、このためには隊士百余名を、あくまでも局中法度に忠実ならしめることが肝要であった。

寄せあつめの隊士だけに、

「こっちが、ちょいと気をゆるめると、すぐにつけあがってくる」

これが土方歳三の口癖であったが事実その通りであった。

彼らを統率せんがためには、幹部一同、みずから峻烈に身を持し〔手本〕をしめさねばならぬ。

土方も以前のように、

「勇さん」

などと親しげな呼び方をつつしみ、どこまでも、

「局長」

として勇に相対するようになったし、勇もまた「歳さん」の呼名をあらため、

「副長」とか「土方君」とか、あらたまった呼び方をするようになった。

将軍・徳川家茂が江戸へ帰ったのち、守護職の会津藩と新選組によって、京都の治安が実際的にととのえられたかたちで、追いはらわれた長州勢力の侵入は、容易でない。

それでも尚、きびしい探索の眼をくぐり、勤王革命派の蠢動はやまなかった。

四

この年（文久三年）も暮れようとするころの或日のことであったが……。

沖田総司を〔長〕とする巡察隊六名が、京都市中の夜を見廻ったとき、沖田が、五名の隊士に、

「ここで休んでいろ。おれが戻るまで、出てはいかんぞ」

いいおいて、一人、用足しに出た。

沖田は、このごろどうも体調がおもわしくない。

夕暮れ近くなると、微熱が発して全身に疲れが浮いてきて、気力が萎える。

妙な咳も出るし、痰もひどい。

勇もこれに気づいて、

「総司。無理はいかんぞ」

いうと、総司は、

「夏の風邪をこじらせたのです。なあに別条ありませんよ」

事もなげにこたえたが、一度、朝の洗面のとき、急に胸がむかむかしたかと思うと、がっと吐いたことがある。

血を吐いたのだ。

血の量は少なかったが、

（これで、おれの一生は決まったな）

沖田は平然として、おのが〔死病〕をさとった。

大坂へ出張したとき、彼は身分を隠し、ひそかに長堀・玉造橋際の町医者の診断をうけたところ、

「なんといわれても平気ですから、かけ値なしのところをいって下さい」

との沖田のことばに、その医者が、

「労咳……それもひどい」

と、こたえた。

労咳……すなわち肺結核の漢方名で、当時これにかかれば死ぬよりほかに道はない。

「何年保ちましょう？」

「このままでは、二年……」

「そんなに保ってくれますか？」

沖田が、うれしげにいったものだから医者のほうがびっくりして、

「あなたはまあ、なんというお人だ」

この医者のすすめで、以来沖田は、京都の烏丸三条上ルところの〔松山青龍軒〕という薬種問屋を紹介され、ここの〔蘇命湯〕という薬を調合してもらっている。

隊内のだれにも、このことを知らさぬ沖田総司であったが、なにしろ煎じ薬なので、只ひとり、屯所の下男をつとめている老爺の亀五郎という者のみへは、

「わけもない病気なんだが、みんなに知らせて心配をかけたくないからな。お前が持病の薬ということにして煎じておいてくれろ。おりゃ、そっとのみに来る」

小づかいをあたえ、たのみこんであった。

この夜……。

沖田総司が部下を休息させ、用足しに出かけたのは〔松山青龍軒〕へ薬を取りに行ったのである。

隊士五名が休息している先斗町の会所は一種の町会事務所のようなもので、いまの〔歌舞練場〕のあたりに、この会所があった。

沖田は、ここを出て細い道をぬけ、河原町の通りを突切り高倉通りへ向った。

会所から約八町ほどだし、沖田の早足なら往復半刻（一時間）もかからぬ。

まだ宵の口といってもよい時刻だったし、師走の、京都らしい底冷えの強い夜であったが、まだ人通りもある。

先斗町には茶屋、料亭が京格子を接して細道の両側へびっしりと建ちならび、絃歌も冬の路上へながれてきている。

「う、うう……冷えるな」

「いっぱい、やりたいよ」

会所の中から、隊士の山口亥太郎、大和田進が、なまめいた絃歌にさそわれるように路上へ出て冗談をいい合いながら、会所の路地へ入った。ここで小用を足すつもり

であったのだろう。

路地の両側は板羽目で、突当りに〔地蔵さま〕のお堂が一つ。そのうしろは茂みになっていて、その下は、鴨川となる。

会所に便所がないではなし、山口と大和田もわざわざ外へ出て用を足すこともなかったのだろうが、そこはそれ、戸外での用足しは男にとって快適きわまるものだというから……。

「京の冬は、たまらんなあ」

いいつつ、左側の板羽目へ向かって山口亥太郎が袴をまくった瞬間であった。

地蔵堂の蔭から黒い影が一つ、ふわふわと浮き出したかと思ったら、

「きゃあっ……」

山口が物凄い悲鳴をあげて倒れた。

「だ、だれだ!!」

あわてて大和田進、飛び退るや大刀を引きぬき迎え撃つ体勢となったのはよいが、黒い大きな影が、これにおおいかぶさるようにして迫ると、

「わあ……」

大和田の手から刀がはね飛ばされ、これも路地の板羽目へすがりつくようなかたちになって、

「く、くせもの……」

それでも精一杯の叫び声をあげた。
それへ、もう一度、黒い影が白刃をふるった。
会所に休んでいた三人が、路地へ駆けこんで来ると、すでに黒い影は消えてい、山口は即死。大和田はまだ呼吸が通っていて、
「しっかりしろ」
「相手は？」
抱きおこされると、半眼をひらき、
「ぼ、坊主あたまの……」
と、これだけを声にして、あとはもぐもぐと何かいっていたが、すぐに、がくりとくびをたれて息絶えた。
沖田総司がもどって来たのは、このときであった。
「ばか!!」
沖田は三人を怒鳴りつけた。
「だから出るなといったではないか」
「われわれ、知らぬうちに……」
「いいわけ無用。おれもお前さんたちも切腹もんだぞ」
三人、まっ青になった。
つい先頃、近藤局長から、

「浪士どもの襲撃を受けぬよう、五人以下の夜の外出は禁ずる」
という指令が出ていたからでもある。
とにかく、どんな命令にせよ、これにそむけば切腹といってもよいほどのきびしさが、いまの屯所にはみなぎっているのだ。
沖田は、この夜、逃げた黒い影を追わず、すぐに屯所へ引きあげ、近藤と土方に報告をした。
土方歳三は苦りきった顔つきで、
「総司。お前、勤務中にどこへ行っていたんだ？」
「いえません」
「なに!!」
「あそびに行ったのではない。これだけはたしかです」
「当り前だ。いえ。それならいえる筈じゃないか」
「いえません」
「なんだと……」
「私は男ですから、いいたくありません。処罰はあまんじて受けます」
「よし!!」
土方も決然として立ちかけたが、勇はこれを制した。
「しかし局長。いかに総司とはいえ、悪例を残してはいけません」

「まあ、待て」
勇は、二人を見まわし、
「その曲者、坊主あたまのさむらいらしい」
このとたんに、土方と沖田は、はっとしたように顔を見合せ、ほとんど同時に、
「あの……飯田金十郎……」
叫ぶようにいった。
勇はうなずき、
「長州にでも雇われたのだろうよ……、ま、いい。今夜の沖田は十日の禁足ということにしよう」
と断を下した。

池田屋襲撃

一

京の女のからだには、骨がないようにおもえる。
たくましい近藤勇の筋骨の下で、女の白い、細いからだが粉々になってしまいそう

に見えた。

女は、この島原の廓内の揚屋〈木津屋〉の抱えで錦太夫という遊女であった。

中庭に面した障子に、初夏の夕暮れのいろがただよいはじめている。

錦太夫は二十になるそうだが、これまでに勇が、江戸や故郷の多摩でなじんできた女たちとは、まるでちがう。

もとより勇は女遊びは得手ではなかったし、多摩周辺の町の娼婦や、江戸では深川の岡場所の女たちを相手にして、独身のころでも、

「月に一度ほど」

であったと、土方歳三が語りのこしている。

まして、つね女を妻に迎えてからは、ほとんど遊里に足を向けなかったといってよい。

つねの、あさぐろい肌身のたっぷりとした量感にくらべると、錦太夫の、しなやかでいて小さな肉体は玩具をもてあそぶような気さえするのだ。

乳房もうすく、腰のふくらみも、

（手ごたえがなさすぎる）

と、はじめはおもった。

これは錦太夫のみでなく、京の女たちを抱いていると、

「何かしら、こころ細い気持になってきますなあ」

などと、当初は永倉新八も苦笑していたものである。

それでいて、京女の肌になじむと、謹直な近藤勇にしてからが、無理矢理にも多忙な日程の中から寸暇をつくり、通いつめるようになってしまう。

去年の秋から、局長の勇は月に五十両という高給とりになっていたし、今年の春ごろになると、勇の遊興が急にはげしくなった。もっとも隊務をおろそかにしているわけではなく、勇は島原の遊里へあらわれるとき、顔を頭巾でかくし、木津屋の前まで辻駕籠を乗りつけて、あくまでもひそかに遊ぶ。局長としての体面を考えてのことであったろうが、このころの勇は決して夜遊びをしていない。血なまぐさい事件が起るのは夜にきまっているからである。

午後おそくから夕暮れまでの一刻（二時間）ほどの間に、勇は錦太夫を抱くのであった。

酒が好きでない勇だけに、内外の激務と、隊の全責任を負っての日常は、

「呼吸づまるがごとき日々に御座候」

と、江戸の養父・近藤周斎へ書き送っている。

このような緊張は、何らかの方法によって解きほぐされねばならぬ。それでなければ、人間、たまったものではないのだ。

酒に酔うことができぬ勇だけに、こうなると女の肌身におぼれこみ、一時の解放感に我を忘れるのがもっともよいことはいうをまたぬ。

この三、四か月の間に、勇も京都市中へ出て〔勤王浪人〕たちと何度も斬り合っているし、そうなると浪士たちのうごきも予断をゆるさぬ殺伐さを加え、さらにこれを叩くと、相手の暴力行動もまた反動的に激烈となる。

今年に入ってから新選組でも平隊士が五名も暗殺されていた。

日常の張りつめきった勇の心身は、女を抱くと、かつてないほどの荒々しさになり、

「かんにん……かんにんどすえ」

錦太夫は勇の両腕の中で、息も絶えんばかりにささやく。それでいて彼女の双腕は勇のふといくびを巻きしめ、切なげなあえぎをたかめてゆくのだ。

みだれる女の呼吸が香っている。情事の最中の女の息はいやなにおいがするものだが、京の遊女からもれるそれは何かの花の香りがする。

「あれは何ですな、きっと口中に何かふくんでいるにちがいない。さすがに京の遊女のたしなみだなあ」

と、永倉新八が感心して勇にもらしたことがある。勇が、このことをきいても遊女は微笑するのみでこたえなかったけれど、まさに新八のことばの通りであった。

当時・衣棚・竹屋町上ルところに〔西本信好〕という薬種屋があり、ここで〔金盞丸〕という丸薬のようなものを調製している。〔金盞〕すなわち水仙の別名だが、この丸薬を口中にふくむと芳香を発し、口臭がまったく消える。

別に京の遊女たちを目当てにして売り出したわけでもあるまいが、島原の廓で太夫

とよばれるほどの格の高い遊女なら、この金盞丸を片ときも手ばなすことはない。

これほどのたしなみをする遊女たちであるから、おのが肌身のすみずみにまで丹念な手入れをおこない、抱きしめてみると、折れくだけそうな細い肌身のなめらかさ、やわらかさに勇などは、

（こんな女の肌もあったのか……）

瞠目（どうもく）したものである。

深川あたりの女たちの中には〔からだ化粧〕といって、乳房に白粉をぬったり、乳首に紅をさしたり、これ見よがしの毒々しいまねをするのもいたが……、まるで、それとはちがう。歳月をかけてみがきぬいた肌なのだ。

「そろそろ……もどらねば、な」

全身にうす汗をにじませた近藤勇が、錦太夫からはなれた。

錦太夫の白い手が夕闇のたちこめる部屋の中で、しずかにうごく。水でしぼった手ぬぐいがいくつもおかれ、これを一つ一つ取っては、錦太夫が勇の躰（からだ）をくまなくふき清めてくれるのであった。

この日。

勇が、木津屋の表口へ呼んだ駕籠（かご）へ乗ったのは六ツ（午後六時）をまわっていたろう。わざと廓の大門（おおもん）を避け、西門から出て、まっすぐに北へ……。

そのとき畑の道を騎馬で駆けつけて来た隊士中村金吾をみとめ、顔なじみの駕籠か

きが、
「中村さま、中村さま……」
と、声をかけた。
「お……近藤局長の御駕籠か？」
「へい」
勇の声が「とめろ」と、かかった。
「局長!!」
「どうしたのだ？」
駕籠のたれをはねあげて顔を見せた勇へ、
「すぐにお帰り下さい」
「おう。いま帰るところだ」
「土方副長が急いでおられます」
「よし。では、お前の馬をかせ」
「はっ」
中村は、馬上の勇につきそって走った。
「いったい、何事か？」
「川端重太郎が斬られました」
「何……」

おもわず、勇は手綱を引きしぼって馬足をとめた。
川端重太郎は若年の平隊士だが、会津侯・松平容保（かたもり）の側近である山川重栄（しげひで）から、去年の十一月に、
「ゆえあって会津浪人なれど、しばらくおあずかりねがいたい」
と、特別にたのまれた若者であった。
川端はよく気もつくし、剣術も一刀流をまなんで相当な腕前だ……と、これは勇ばかりではなく旧試衛館の剣士たちがいずれもみとめるところだ。童顔、愛嬌（あいきょう）のある性格で、だれからも親しまれたし、勇もまた川端を愛し、このごろは自分の〔秘書〕のような役目をさせ、大いに重宝していたのである。
「どこでだ……、だ、だれに斬られた？」
血相を変えて叫ぶ勇に、中村金吾が口惜しげに唇を噛（か）み、
「屯所の表門前で、斬られました」
と、いうではないか。
「な、何……屯所前でだと……？」
「はい」

二

そのとき……。

川端重太郎は、八木源之丞邸内に新設された道場から屯所へもどるところだったという。

隊士も増え、前川邸の屯所では武術の稽古もやりにくくなり、仕方なく通り向うの八木邸へたのみこみ、母屋と離れ屋との間の地所へ〔道場〕を建てさせてもらったのは、去年の芹沢鴨暗殺事件があって間もなくのことであった。

この日、川端は午後おそくから道場へ出ていたが、中村金吾と稽古しているうち、二人とも興がのってたっぷりと汗をながし、気がついたときには夕闇が濃かった。

「局長が間もなく帰られようから……」

といい、川端重太郎は中村金吾より一足先に道場を出て、坊城通りに面した塀の出入口から通りを横切り、屯所の表門へ入ろうとした……これを屯所前の畑道を歩いていた屯所の老下男・亀五郎が見かけた。

亀五郎は山南敬助の使いでどこかへ行った帰りであったが、

「こう、汗をふきながら川端さんが門へお入りになろうとしたときでござりました。通りかかった立派なお武家のような、へい、編笠をかぶっておりましたが……」

その編笠の武士が、一言、二言、なにか川端へはなしかけつつ、すっと近寄ったかと思うと、いきなり抜き打ちをかけたものだ。

「あっ……」

さすがに川端、この初太刀をかわしたが何しろ稽古のままの姿で身に寸鉄もおびて

いない。

川端が初太刀をかわすことを計算に入れていたかのように、編笠の刺客の二の太刀は適確そのもので、

「わあっ……」

斬られた川端が、それでも相手に組みつくのを、どーんとちからまかせに刺客が突き飛ばした。

突き飛ばされながら川端重太郎が刺客の編笠のへりをつかみ、これをむしり取るようにして転倒した。

「た、大変だあ！」

畑道で、このありさまを目撃した亀五郎が大声で叫ぶと、刺客はじろりとこちらをにらみ、畑道へ駆けこんで来たものだから、亀五郎は畑の中へ飛びこみ、無我夢中で逃げた。

このとき、亀五郎は刺客の顔を見た。

「よくはおぼえておりませぬが……坊主あたまのさむらいで、躰の大きな……」

と、亀五郎が駆けつけた近藤勇に告げた。

勇も、土方、沖田、永倉たちも、その坊主あたまの刺客が、飯田金十郎であろうことは、いまやうたがうべくもないとおもった。

川端重太郎は、むしり取った敵の編笠をつかんだまま即死。左のくびのつけ根から

胸へかけて物凄い刀痕がきざまれてい、

「これじゃあ、ひとたまりもねえな」

原田佐之助が、うめくようにいったものだ。

あっという間の出来事であり、亀五郎と川端の叫びをきいた隊士たちがすぐに走り出て、畑道の向うの竹藪へ駆けこんだ刺客の後を追ったが、ついに取り逃してしまった。

「何ということだ。屯所前で、このような不祥事をおこし、しかも曲者に逃げられたというのは、まことにけしからん、けしからん！」

と、土方歳三は追跡した隊士たちを呼びつけ、今にも「腹を切れ」とでもいい出しそうな、すさまじい剣幕で叱りつけたものである。

近藤勇は、自分がしかと見おぼえている飯田金十郎の人相を、わざわざ絵師をよんで描かせ、沖田や永倉にも検討させて手直しをおこない、同じ人相書を数枚つくり、これを屯所のみか、京都守護職、所司代、町奉行にまでくばり、探索に万全を期した。

ところが、なかなかに手がかりがつかめぬ。

去年の夏、いったん江戸へ帰った将軍・徳川家茂は今年になると早々に、また上洛して来ていた。

せっかく、いま天皇と将軍の手がむすばれ、公武合体の実現に八分まで近づいたところだから、幕府も、天皇と朝廷が強く主張する〔攘夷〕の意に少しでもそいたいと

いう気持から、

「ひとつ、横浜の港だけはつかわぬようにしていただけないだろうか……」

と、アメリカやオランダにたのみこんでいる。

だから将軍も、

「いま、一所懸命にやっているところであります」

と、天皇へ報告に来たのだ。

幕府はもう、京都から一時も眼がはなせない。

なにごとにも将軍みずから京へのぼってきて奏上しなくてはならぬ。昔日の威光は、もはや見るべくもないのだ。

将軍・家茂は正月から五月まで滞在し、五月十六日に大坂から海路を江戸へ帰って行った。

「この機会に将軍を殺せ!!」

大坂から京都にかけて潜伏する革命志士たちの蠢動(しゅんどう)ただならぬものがあったようだ。

しかし、なにごともなく将軍は江戸へ帰ったが、

「おれも、すっかり痩(や)せてしまったよ」

と、めったにはこぼさぬ土方歳三が洩(も)らした。

それほどに、将軍滞京中における新選組の市中警戒への苦労は夜も昼もなくつづけられ、

「よくやってくれる」

松平容保は、わざわざ近藤勇と土方歳三を黒谷の宿営にまねき、

「京都警衛の役目は、守護職、町奉行なれど、近いうち、新選組をも正式に任命するよう取りはかろうておく」

と、いった。

今年の二月、容保は守護職をやめ、軍事総裁に任ぜられ、朝廷から参議に迎えられた。

孝明天皇の容保に対する信頼はいよいよふかまるばかりであったが、幕府閣僚のうちでこれをねたむものも少くない。

だが、二か月もすると、

「やはり京都守護職は会津にやってもらわねばならぬ」

ということになり、松平容保はまたも復職せざるを得なかったのである。

「江戸城にいて、のんきにかまえている幕府のお偉方は、もう公武合体が成ったつもりで、すっかり安心しているらしい」

「だからこそ、将軍家を江戸へ引きもどしてしまったのだ」

「いまが、もっとも肝要なときではないですか、局長」

「その通りだよ、副長。だからな、会津侯は、このたびの将軍家御東帰のことを大へんに残念がっておられるという」

と、これは勇と土方の会話だ。

さて……。

将軍が帰ってから数日後のことだが、

「み、見つけました、見つけました」

屯所の老僕・亀五郎が汗みずくになって、外から駆けこんで来た。

三

この日、亀五郎は沖田総司にたのまれ、烏丸・三条上ルの薬種問屋〔松山青龍軒〕へ、例の〔蘇命湯〕を買いに出かけた。

沖田もこのごろは多忙をきわめているので、

「いつもお前に煎じてもらっている持病の薬なんだが……他人にはいうなよ」

小づかいをあたえ、薬買いの役をたのんでいたのだ。

薬を買った亀五郎が、六角堂わきの道を歩いていて、何気なく彼方を見やり、

「あ……」

顔色が変った。

まぎれもなく、川端重太郎を一刀のもとに斬殺した坊主あたまのさむらいが、ふらりと六角堂・境内から道へ出て来たのである。亀五郎は横っ飛びに傍の茶店へ駆けこみ、相手が肩をそびやかして東へ去るのを見とどけ、

「あとを……後をつけました」
と、報告をした。
「亀五郎、よくやった」
近藤勇が顔面を真赤にして、
「どこへ行った、そやつ……」
「三条小橋の池田屋という宿屋の一つ手前の小路へ入りましたのを見て、すぐに飛んで行きましたなれど、何せ細かい家がごじゃごじゃ並んでいて、どこへ入ったものか……もう影もかたちも……」
「よし」
勇が、土方に、
「副長。すぐに……おれが行く!!」
と命じた。
土方歳三は屯所へ残ったが、勇は、永倉、沖田、原田のほかに平隊士十三名をひきつれ、
「馬ひけい!!」
すぐさま出動をした。
鬱陶(うっとう)しい曇り空の下を、一同汗みどろになって三条小橋へ駆けつけた。
(どうも臭い、池田屋は……)

と、勇は馬を駆けさせながら、

（池田屋は、永年、長州藩の常宿になっている。長州の勢力が追いはらわれてのち、客の出入りも少いときいているが……）

その池田屋の裏手へ、坊主あたまの刺客が消えたというのもおかしい。

勇は、先斗町の会所へ馬をあずけ、

「永倉君は三名つれて池田屋を見張れ。だが気づかれるな、通り向うからでよい」

「承知」

「あとは、私につづけ」

亀五郎が知らせた小路へ、勇たちは踏みこんで行った。

陽ざしもとどかぬような、うす暗い小路の両側に京格子の小さな家が、びっしりとたちならんでいる。

俗にいう〔しもうたや〕ばかりで、小路の突当りは高瀬川のながれが食いこむかたちになっている。

「仕方がない。片端から家さがしをしろ」

原田佐之助がわめいた。

勇と沖田が小路の両端に立って見張り、あとの十名が原田の指揮で、軒なみに〔家さがし〕をはじめた。

あばれ者の原田が、

「かまわねえから、しらみつぶしにしろ！」
まっ先に土足で駆けこんだものだから、隊士たちも、
「御用あらためだ!!」
いっせいに白刃をぬきはらって家々へ飛びこむ。
女子供の悲鳴があがる。
市中の血なまぐさい事件のうわさが絶えぬ今日此頃であるだけに、新選組が抜刀して飛びこんで来るのを見ては、人びともふるえ上ってしまったようだ。
天井を突きあげる音、押入の戸を蹴破る音など……隊士たちも〔坊主あたま〕が、どこからあらわれるかも知れたものではないので、形相もすさまじい。
勇は舌うちをした。
（どうも……逃げたらしいですな）
と、沖田総司の眼が、小路の彼方から勇へいいかけてきた。
まだ陽は高い。
「あれえ……」
すぐ近くの家で、絶え入るような女の声がしたので、勇はふっとその家へ入って見た。
刃を突きつけ、何かわめいている隊士三名にかこまれ、若い女が死人のような顔つきで震えている。

「局長。こいつ、あやしいのです」
と、隊士の一人がいう。
「ふむ」
「男の囲いものだといいますが、その男がおりません」
おもわず、勇は吹き出していた。
旦那が日中の妾宅に居ないからといって別にふしぎなことはない。
勇が笑ったので、別の一人も笑い出した。
勇は女を見た。
(なるほど、もとは芸妓か……?)
洗髪の女は、島原の錦太夫より一つ二つ年上であろうか。
この女を見たとき、勇の脳裡にうかんだのは、五条・堺町の菓子舗〔藤屋伊兵衛〕で売っている白兎という菓子であった。
〔白兎〕は小豆餡を包んだ卵形の餅で、これを、いつか八木邸で出されてから、勇の大好物となっている。
白い、ふっくらとした歯ざわりの、この菓子のうまさは、只一言、
「飽きぬ菓子だな」
の、勇のことばにつきていた。
単純で、素朴なかたちの中にこめられた菓子つくりの丹念と洗練が、勇のような武骨な男の舌にもはっきりと感じられるのであった。

「ここはいい」
勇が女を見すえたまま隊士たちにいった。
女も、勇の物やわらかな態度を見て落ちつきを取りもどしたらしく、
「私は、あの、油小路の出水を上っての筆問屋、平野屋新蔵というお方の……」
いいかけるのへ、
「もうよい」
勇はうなずき、隊士をうながして外へ出た。
このときの勇、のちに、この〔白兎〕とふかい間柄になろうとは思ってもみなかったろう。
とにかく〔坊主あたま〕を発見することは出来なかった。
「池田屋を、このさい思いきって洗ってみましょうか」
と、沖田総司が勇にささやいた。
そのことを考えぬではなかったが、これまでに何度も、監察方の山崎丞がさぐりを入れて、
「別に、いまのところ、どうということもないようですな」
と、報告が入っているし、坊主あたまが飯田金十郎なら、池田屋でまごまごしている筈もない。
先斗町の会所へ引き上げ、永倉新八に「池田屋はどうだったね」と、勇が問うや、

永倉は無言でかぶりをふった。
「亀五郎め、気のきかねえ爺だ。壬生へ駆けもどる前に、この会所へでも見張りをたのんでおけばよかったのに……」
原田佐之助、しきりにわめきたてる。
「ま、仕方がない。茶でももらおうか」
と、沖田が会所の者に茶を命じたときであった。
会所の前の道から、編笠の武士がひとり、しきりに中をのぞきこんでいるのを永倉新八が見つけた。
永倉は、沖田に目くばせをしておいて、刀の鯉口をきると同時に、ぱっと表へ飛び出し、
「貴公は何者……」
いいかけるのへ、
「久しゅうござる、永倉うじ」
笠をあげて顔を見せた武士は、なんと岸淵兵介ではないか。
「や……岸淵先生」
永倉も、江戸にいるとばかり思っていた岸淵だけに、びっくりした。
と……。
岸淵兵介が、

「叱っ……」
永倉の次のことばを制し、笠をかぶったままで、
「そっと、ここへ、近藤うじのみをお連れ下さい」
低く、いうのである。

四

それから間もなく、近藤勇、永倉新八、岸淵兵介の三人を松原橋たもとの〔いけ亀〕という料亭の一室に見出すことができる。
〔いけ亀〕は、永倉が行きつけの店で、三人は先斗町会所の前から、それぞれ別の道を通って〔いけ亀〕へ入った。
勇も永倉も、岸淵兵介が指ヶ谷の道場をたたみ、淀藩十万二千石・稲葉美濃守の家来となったことを、江戸からの手紙で知ってはいたが、まさか京都に来ていようとは思わなかった。
あれから岸淵、稲葉家の江戸藩邸につめていたがつい先頃、京都屋敷勤務を命ぜられ、
「はじめて京の地をふみました」
という。
淀藩の本国は、京都とは目と鼻の先にある上に〔殿さま〕の稲葉美濃守は、以前、

京都所司代をつとめたこともあって、顔がひろい。

岸淵は新参者ながら老巧の人柄を買われ、稲葉侯にも気に入られているらしい。

「こちらへまいったなれば、すぐさま御挨拶に参上せねばならぬところ、なにぶん京は無案内の上に、御用繁多にて……」

と、岸淵は、江戸で勇たちにうけた恩誼を忘れず、きっちりと両手をつくものだから、勇も永倉も当惑してしまい、

「まず、お手をおあげ下さい。私こそ……江戸の留守宅へ度々御見舞をいただき、老父も妻もいろいろと御世話を……」

勇が恐縮していうと、岸淵は、何か意を決した面もちで、

「申しあげたいことがござる」

「はあ……」

「実は……」

岸淵兵介が語るには……。

つい一昨日のことだが、岸淵は同僚の笹川忠右衛門から、こういうことを耳にした。

笹川は、殿さまが所司代をつとめているころからの京都詰めだし、交際もひろい。

その笹川が四条河原町あたりの小路を歩いていると、長州の吉田稔麿がすぐ目の前を急ぎ足で行くのを見た。

彼は、あの吉田松陰門下の四天王とよばれた俊才で、足軽の子に生まれたが、動乱

の時代に見る見る台頭し、いまは勤王革命の指導者の一人として長州藩に重きをなしている。

去年、長州勢力が京都から一掃されるまでは、吉田稔麿も肩で風を切って市中を闊歩していたものだ。

吉田や桂小五郎などは、長州の志士たちの中でも、

「もっとも危険な人物である」

と、目されてい、いまどき彼が京都市中を歩きまわっているのを幕吏に見つけられたら、たちまちに捕縛されてしまうところだ。なるほど、長州藩も三条河原町に藩邸はあるが、ここにも幕府側からゆるされただけの人員のみを置くのが精一杯だし、現に幕府は、長州処罰のことを朝廷に奏上し、諸大名の藩兵をもって長州征討の軍をおこそうとしている。

一時松平容保が軍事総裁に任命されたのも、このためであった。

で……。

笹川忠右衛門が見ていると、吉田稔麿は笠もかぶらず、堂々として小路を右へ折れ、古道具屋の桝屋という店へ入って行った。

「わしも、吉田には以前、一、二度会ったことがあるし、見まちがう筈はない。それでな、吉田が入って行くと、急に、その古道具屋の小女が出て来て、ばたばたと戸をおろしてしもうた。どうもくさいな。あの古道具屋は勤王浪人の密会所にでもなって

いるのだろうよ」

と、笹川は岸淵兵介に語り、

「どうも物騒な世の中になった。なれど、このことを他言なされまいぞ」

念を入れてきたという。

なるほど淀藩の立場は、会津藩のように、はっきりした立場をもっていない。主人の稲葉侯は、最近、幕府老中に任じられたけれども、いまは各藩それぞれのうごきが微妙をきわめ、政局は、いつどのような波瀾をよぶか知れたものではないので、諸大名は何事につけても傍観の態度でいようという気持がつよい。

淀藩だとて、その例にもれぬのである。

岸淵兵介が淀藩の士でありながら思いきって、このことを近藤勇に打ちあけたのは、江戸のころの義理をふかく感じていたからであろう。

「ただ、それだけのことでござるが、先刻、貴所方が先斗町会所へ入って行かれるのを見かけ、ひそかに……」

「かたじけない」

と、今度は勇が両手をついた。

律気な岸淵の心情に、こころをうたれたのだ。

岸淵兵介は再会を約し、早々に〔いけ亀〕を引きあげて行ったが、勇と永倉はあとに残り、

「ま、鮎でも食おうか」
勇は妙に落ちついていて、永倉のために酒もはこばせた。
「いいのですか、局長。のん気に酒をのんでいて……」
「あわててもはじまらぬさ」
だが、勇の双眸には強い光りが加わってきはじめた。
吉田稔麿が消えた古道具屋の〔桝屋〕へは、去年の秋ごろから、幕吏が眼をつけていた、ということを勇も耳にはさんだことがある。桝屋の主人・喜右衛門という人物はどう見ても町人ではないというし、これをさぐりはじめると、喜右衛門は桝屋からぬけ出し、諸方を転々と隠れ歩いたが……。
「そのうちに、粟津右馬之介という……これは有栖川宮の家来だが、これへ逃げこんだ。ま、宮家の臣の家では、こちらもうっかり手はつけられぬ。それでな、見張りをつづけているうち、いつともなく、桝屋喜右衛門の姿が粟津家から消えてしまったそうだ」
「では局長。その間、桝屋の店に人気はなかったのですか」
「うむ、そうらしい」
「すると……？」
「喜右衛門はまた、桝屋へもどっているらしいな」
「そこへ、長州の吉田が入ったということは……」

「捨ててはおけぬな」

どうも、三条から四条にかけて、鴨川をはさむ両岸の人家密集地帯には革命派志士たちが多数ひそみかくれているらしい。

宿屋や寺院、料亭など、町の人びとも幕吏に追われる志士たちへ同情を寄せ、ことに女たちが眼の色を変えて彼らをかくまったり、かばったりする。

それもこれも、政情が安定をしていないからであって、

（このままでは、いまに、どうにもならなくなってしまうだろう）

勇も、実に歯がゆいおもいなのである。

公武合体の気運たかまる……といっても、それは現天皇と将軍の人間的なむすびつきがもたらしたもので、朝廷側も幕府側もすべてが合致して新時代をつくり出そうという情熱もなければ、協力もない……ように勇は感じている。

事実上の政局の本舞台となった京都と、徳川幕府の本拠たる江戸とは事々に分離しているし、病軀を押して奮闘する守護職の松平容保などは会津二十八万石の身代をかたむけつくして天下のため、幕府のためにはたらいているのだが、むずかしいことや金がいることは、みんな会津へ押しつけてしまえばよい、というのが諸大名の心底であって、

（これでは会津侯のなさることが茶番になってしまう）

勇も、じりじりしていたのだ。

この夜。

永倉と共に屯所へもどった近藤勇は、土方歳三と、折よく顔を見せていた山崎丞をよび、

「桝屋をさぐれ」

と、命じた。

五

この夜から、山崎丞の指揮によって、十名から成る新選組の探索方がうごきだした。

彼らは旅僧に化けたり、乞食だの行商人だの、さまざまな変装をし、桝屋喜右衛門方へ近づいて行った。勇もそうであったが、土方は、

「どうも胸さわぎがしてならない」

と、いう。

現在の京都は、会津と薩摩という両雄藩の握手によって幕府勢力が維持され、一応、治安がととのっているかのように見えるが……。

地下へもぐった革命運動は、それだけに却って激しさを増し、暗殺事件も頻発している。

会津藩の士が浪人たちの襲撃によって何人も死んでいるし、新選組でも川端重太郎事件がしめすような危急を見ている。

つい先頃には、水戸藩が分裂して〔天狗党〕と称する一派が筑波山へたてこもり〔尊王攘夷〕の旗をかかげ、このため関東も大さわぎとなっているらしい。

幕府は関東の諸藩に命じ、天狗党を鎮圧しようとかかり、双方の間に小競合がおこなわれているというが、事態はそれだけではすまないのだ。

天狗党の旗上げは、京都の革命志士たちにも非常な刺激をあたえているし、

「どうあっても、ふたたび京都をわれわれの手に!!」

本国へ追いはらわれた長州藩も必死であった。

京都からしりぞけられ、勤王運動の主導権をうしなった長州藩は、その少し前に、下関の海峡を通行中の米、仏、蘭の外国船を砲撃したため、すぐさまアメリカとフランスの軍艦の報復をうけ、長州の艦船はほとんど沈没し、下関の砲台は全滅に瀕した。

まさに「ふんだり蹴ったり」である。

それにもかかわらず、長州の過激な革命運動はおとろえを見せない。

いっそ、もうここまで追いつめられると、却って死物狂いになってくるだけに、

「それが、こわい」

のである。

「やはり、怪しいですな」

間もなく、山崎丞の報告が入った。

「桝屋喜右衛門は、たしかにもどってきておりますよ。色白の細い躰つきの男ですが

只者（ただもの）ではない。雇人は小女が一人と若い番頭のようなのが一人。これだけですがね、その番頭というのがやはりくさい、肩の肉のもりあがったところなど、どう見ても武士です。それに、ときどき、旅商人や巡礼のような姿をしましてね、妙なやつどもが出入りをしています。今日、私が乞食になって桝屋の近くにすわっておりますと……通りがかりの町人体の男が、すっとこう、何気なく、店先に出ていた番頭に小さな紙きれのようなものをわたし、さっさと行ってしまったもんです」

「ふむ……」

「するとね、間もなく、喜右衛門が出て来ましてね、急ぎ足でどこかへ行く。すぐに後をつけましたが……」

「どこへ行った」

「四国屋へ入りました」

四国屋は縄手（なわて）にある宿屋だ。桝屋喜右衛門は半刻ほど四国屋にいて、夕闇が落ちてから自宅へもどると、すぐに表戸を閉じてしまった……と、山崎は告げた。

「よし」

近藤勇は決意のうなずきを見せ、ただちに沖田、永倉、原田の三名をまねき、

「桝屋へ打ちこみ、喜右衛門を捕えろ」

「承知」

「明朝、それもまだ暗いうちがよい。山崎君は尚（なお）も見張りをたのむ」

「心得ました」

これが、元治元年六月四日の夜ふけであった。

桝屋喜右衛門という人物、実は近江・坂田郡の郷士の家に生まれ、のちに山科の毘沙門堂門跡につかえ、倒幕運動に参加した男だと、勇はきいている。

えらばれた隊士二十名を、沖田たち三人が三組にわけてひきつれ、六月五日の八ツ（午前二時）すぎに屯所を出発した。

一組ずつ、別の道をとって、四条大橋の両たもとへ集結するや、待ちかまえていた乞食姿の山崎丞が部下二名と共にあらわれ、

「よく、ねむっているようだ」

と、先に立った。

夏の空が白みはじめてきている。

一同、音もなく桝屋へ近より、

「それ！」

永倉新八の合図で、いっせいに戸を叩き破って突入をした。

その寸前に、桝屋喜右衛門も我家へ迫る異常な気配に目ざめ、すばやく番頭と小女を逃がし、何か秘密書類のようなものを焼き捨てはじめたところへ、新選組がなだれこんできたのである。一説に、女中が喜右衛門の息子（八歳）を背負って逃げたともいう。

「桝屋喜右衛門はおぬしか」
永倉が問うや、喜右衛門さわがず、
「主人は他行中でござります」
「うそをつくな」
と、そこへ乞食姿の山崎丞がぬっと顔を出したものだから、喜右衛門も隠し切れない。この乞食が近辺で物乞いをしているのを何度も彼は見かけている。
（しまった……）
という表情が、ありありと喜右衛門の面に浮いて出た。
桝屋の土蔵や、押入の底、縁の下などから、秘密書類や武器弾薬まで発見されたのは間もなくのことである。
壬生の屯所へ引きたてられた桝屋喜右衛門は、近藤勇の訊問をうけるや、
「いかにも自分は古高俊太郎正順である」
胸を張って悪びれずにこたえ、
「そのほかのことについては、何もこたえることはない」
あとは瞑目の体で、頑として口をひらかなくなった。
一応、古高を屯所内・南側の蔵の中へ押しこめておき、桝屋から没収した物件をしらべて見て、勇は愕然となった。

六

没収物件の中に、古高が焼き捨てかけた書状がある。そのうちの一通の焼け残りの箇処に、

「……一時も早く決行いたすべく、云々（うんぬん）」

の文字が見えた。

（決行……なにを決行しようというのだ）

勇は不安になってきて、

「仕方がない。古高を拷問にかけても吐かせろ」

土方歳三にいうと、土方はにやりとして、

「いま、原田君が責めていますよ」

「どうも只事でないな」

三条小橋の例の宿屋〔池田屋〕にも、勇は油断なく眼を向けてい、山崎丞は三日前から大坂の薬商人に変装し、池田屋へ泊りこんでいたのだ。山崎も池田屋へ泊りながら乞食（こじき）に化けたり、また薬やになって宿屋へもどったり、実にそれは忙がしい。

もともと鍼（はり）医者の出だから薬のことにはくわしい山崎だし、なじみの大坂の船宿から池田屋への紹介状をもらって来たので、

「それではまあ……」

池田屋主人の惣兵衛は、泊り客にはうるさいのだが、愛嬌たっぷりの薬商人になりきっている山崎丞を見ては、まさかこれが新選組の密偵とはおもっても見なかったようだ。

「下の座敷で、せまくてもよろしかったら……」

と、いうことになったのである。

「ちょいと池田屋へ顔を出して来ましょう。あやしまれるといけない」

と、山崎が屯所を出て行ったあと、蔵の中での古高俊太郎の拷問は、さらに烈しさを加えた。

原田佐之助や永倉新八が汗だらけになり、木刀をふるって撲りつけるのだが、古高はびくともせず、

「早く殺せ」

の一言を発するのみであった。

そのうちに……。

蔵へあらわれた土方歳三が、

「なまぬるいよ。おれが責めてみよう」

といい出したものだ。

「だれか、百目蠟燭と五寸釘をもってこい」

そして、古高を梁へつるしあげ、いきなり五寸釘を彼の足の甲へぶちこんだのであ

る。

「う、うう……」

さすがの古高も苦痛にうめいた。

「ふん……」

土方は、鼻で笑い、

「いいたくなけりゃいうな!!」

怒鳴りつけるや、百目蠟燭に火をつけ、たらたらと落ちる熱い蠟を、古高の足の甲へ突き立った五寸釘にそって傷口へたらしこみはじめた。

「うわ……あっ、あっ、ああ……」

いままでは、うなり声も出さなかった古高俊太郎がすさまじい声をあげたのには、一同、顔を見合わせるばかりだ。

原田が永倉の耳もとで、ささやいた。

「土方さんは、すげえことを知っている……」

「あっ、あっ……ぎゃあっ……」

「痛いか、痛いだろうな」

と、土方。

かまわずに蠟をたらしこむ。

「あ……う、うう……」

土方が手をとめて、

「どうだ、少し、しゃべって見ぬか」

午後になると、この生殺しの拷問にかけられた古高は、半ば茫然自失の態となり、たくみな土方歳三の誘導訊問に引っかかり、自白をはじめた。

それによると……。

来る六月二十日前後の風の強い夜をえらび、志士たちは天皇おわす御所へ火をかけようと計画しているらしい。

こうなれば京都市中は大混乱におちいる。

孝明天皇の信頼あつい中川宮尊融親王や、守護職の会津侯も御所へ駆けつけるであろう。そこを待ちかまえて襲撃し、この親幕派の二大巨頭を血祭りにあげ、長州藩を敵と見る諸大名の屋敷へも放火し、天皇を御所から引きさらって、これを長州（山口県）の本国へ遷しまいらせようというのである。

これには近藤勇も、びっくりした。

口では勤王をとなえながら、やることは、こうした狂暴きわまることをする。それが革命動乱というものの本体であって、興奮に押しあげられた行動力の激烈さがあればこそ、革命が成功するのである。

およそ二刻（四時間）も、ねばりにねばって、土方歳三は古高の口を割らせた。

三条から四条へかけての旅宿に諸方の藩名をかたり、変名を名乗って泊りこんでい

る武士たちの多くが、この襲撃計画のために潜入して来たらしい。
間もなく、池田屋の山崎丞の密書が部下によってとどけられた。
どうも、池田屋がくさいというのだ。
「今朝から池田屋では、何やら講中のあつまりがあるから新しい客はことわってしまえ、と、主人が番頭に命じています。どうもくさい。狼どもがあつまるらしい」
と、山崎は告げてきている。
桝屋の近くにある小さな宿屋で三河屋というのへ泊っていた土佐の志士・石川潤次郎が池田屋へ訪ねて来て、主人の惣兵衛と密談をかわして出て行ったのも山崎は見た。
「よし、尚もさぐれ。連絡をたやすなよ」
と、土方がいえば、勇も、
「隊士全員の外出を禁止せよ」
命令を発した。
市中に張りこむ新選組の密偵は、この日、大活躍をした。
「今夜、志士たちの会合がおこなわれる模様です」
「場所は池田屋と、縄手の四国屋の二つに別れておこなわれるらしい」
次々に報告が入る。
「よし!!」
近藤勇は、

「今夜、やつらを襲撃するぞ。手おくれになってはならぬ。総員出動用意」

といったが、折から前日の夕食に食べた魚か何かがいけなくて二十名近い隊士たちが、ひどい下痢をおこして寝込んでいるし、大坂へ出隊中のものもかなりいる。

「下痢が何だ、叩きおこせ」

土方はいったが、勇は、

「病人まで駆り出すことはないよ」

「なるほどねえ」

隊士たちは、何気ない様子で、ぶらりぶらりと、二人三人ずつ、まるで島原へでも遊びに出かけるようなかたちで屯所を出て行った。

武器や武装は木箱にかくして荷車につみ、これを下男三名（そのうち一名は隊士の変装）が曳いて、ゆっくりと先斗町の会所へはこんで行く。

すでに夕暮れも近い。

報告は次々に入る。

手筈はととのった。

池田屋へは、あやしげな変装をした者が、三々五々とあつまってきているらしい。

勇も、日が暮れるまでには先斗町会所へ入った。

このころの六月五日は現代の七月八日にあたる。

折から、京の町は祇園祭の宵宮で、すでに初夏のころから祭ばやしの稽古がはじま

っているし、致斎の式から吉符入りの鉾山車を通りへ出しての囃子初めなど……世に名高い京の祭りの景気は、いまや頂点に達し、昼も夜も練物の行列やら迎え提灯やらで、市中はわきたっていた。

戌の刻（午後八時）を襲撃の時刻ときめ、近藤勇は、このむねを守護職へも所司代へもひそかに知らせ、

「打ちこむは、新選組のみでよろしゅうござるが、逃走する浪士どもを捕えるため、なにぶんの応援をねがいたい」

と、申し入れてある。

日が暮れるや、会所の奥の部屋三つをぶっこぬきにして、隊士たちは武装に身をかためはじめた。

勇は淡黄のかたびらに黒の革胴をつけ、この上から隊の制服ともいうべき水浅黄に山形を白く染めぬいた麻の夏羽織を着た。土方が鎖襦袢を着込み、鉢金をかぶるという物々しい武装なので、

「歳さん」

めずらしく、勇は試衛館時代の口調で、

「こわいねえ」

からかった。土方歳三、にやりともせず、

「そのかわり、あんたの倍は斬る」

と、こたえた。
時はうつる。
しかし、なかなか守護職と所司代が出動してくれない。
彼らが池田屋と四国屋のまわりを包囲してくれなくては、こっちも斬りこむことが出来ぬ。新選組は全員三十名だし、これを二手にわけて襲撃しても、逃走する志士たちまでは手がまわりかねる。
山崎の報告によれば、池田屋だけでもこちらと同じほどの人数があつまっているらしい。
打ち合わせがしてある戌の刻がすぎても、まだ会津藩は繰り出して来ない。所司代の人数もあらわれない。
勇は、苛らだってきた。ぐずぐずしていると、志士たちが散会してしまうおそれがある。
暗い、蒸し暑い京の夏の夜空に、宵宮の祇園囃子が、まだきこえていた。
「よし」
うめくように、近藤勇がいい、
「かまわぬ。われわれだけでやろう」
と、立ち上った。

戦火

一

原田佐之助が、このとき吐き捨てるようにいった。

「ばかめらが……大名の家来なんぞというのは、いざというときにはくその役にもたたねえ。何だかんだと手つづきばかり面倒で、ぱっぱと手足がうごかねえように出来ていやがる。こんなことだから浪士どもになめられるんだ」

伊予・松山で若党づとめをしていたころには〔無頼漢〕の佐之助と異名をとっただけあって、興奮してくると、顔をそむけたくなるほどの口汚い言葉になる。

近藤勇が、土方歳三に、

「副長。君は二十名をひきいて縄手の四国屋を襲え」

と命じたのは、四国屋での志士の集合は人数が多いらしいという情報が入っていたからである。

そして勇は、残る九名の隊士をひきい、みずから池田屋を襲撃しようというのだ。

永倉新八、藤堂平助、沖田総司、原田佐之助、谷三十郎、ほかに隊士三名。

それに、勇は養子の近藤周平をえらんだ。

ここで、近藤周平についてのべておきたい。

周平は、隊士・谷万太郎・三十郎兄弟が、

「われらの末弟でござる」

といって、共に入隊をして来たものである。

前髪をおろしたばかりで、まだ少年の初々しいおもかげをとどめている十七歳の若者だ。一説には谷三十郎の息子というふれこみであったともいわれている。

勇が、この周平を養子にしたのは、この春のことであった。

谷三十郎は、以前、備中・松山五万石・板倉周防守につかえていたことがあるそうで、

「あの周平君は、谷三十郎の子ではないらしい」

「板倉侯の落胤だそうだ」

「なるほど……だから板倉家からたのまれて、局長が周平さんを引きうけたという……」

「その通り」

「もしそうだとすると、五万石の大名の落胤を養子にした局長も、大したものだ」

それは、とりも直さず、このころの〔新選組〕の威風を見るべきだということになる。

近藤勇は、これら隊士たちの風評に対して一言も洩らさぬが、時折、板倉家から立

派な風采をした家臣が屯所をおとずれて来て、局長室ではなしこんでいる事実を知らぬものはない。

新選組の前身たる〔浪士隊〕が組織されたとき、浪士隊の掛りとなったのが、老中・板倉周防守であった。

周平は、谷三十郎と共に暮していただけに、三十郎ゆずりの宝蔵院流の槍をよくつかうし、勇と養子縁組がととのってからも、これを鼻にかけることなく、隊務に精励している。

四国屋にくらべて、三条小橋へあつまった浪士たちの数は少いとおもわれるが、わずか十名で襲撃するというからには、決死の覚悟が要る。永倉、沖田など試衛館以来の腕利きを勇がえらんだのも当然というべきであろうが、この中の一人に養子・周平を加えたのも、

（僅少の身びいきがあっても、隊士全員をひきいてゆくわけにはゆかぬ）

それが勇の信念でもあった。

だが永倉新八は、周平の、いかにも少年じみた姿を見て、いたいたしくおもったらしく、つと勇へ寄りそい、

「局長。周平さんは……」

見張りにのこしておいたらどうでしょう……と、いいかけたのだが、それへ押しかぶせるように、勇が、

「永倉君。うちは、これだけでいいな」
するどい声でいった。
「はあ……」
勇の細い両眼が張り裂けんばかりに見ひらかれ、物凄い光りをたたえていた。
永倉は圧倒され、沈黙した。
「では、副長。先へ……」
勇が屹と土方を見て、命を下す。
「は」
土方歳三が二十名の隊士をひきい、会所の裏口から、そっと鴨川沿いの細道へ出て行った。
もう、町は暗くなっている。
祭囃子の音も絶え、ぞめきの人びとの足音も消えたようだ。
「では……」
勇は、残る九名にうなずいて見せ、しずかに通りへ出た。
周平が槍をつかみ、緊張のため顔面蒼白となって養父のあとへつづこうとするのへ、永倉新八が走り寄り、
「周平さん。大丈夫ですよ。はじめての斬り合いのときは、みんなそうですよ。私なんざ、もう歯の根が合いませんでしたが……なに、いざとなりゃあ結構いけるもんで

す」

はげましてやると、

「はあ……」

周平、白い歯を出して笑顔をつくって見せたが、眼のいろは硬直している。

沖田や藤堂、原田などが、にやにやと周平を見やり、通りへ出て行った。

日中のほてりを、まだ残している夜の闇がおもく十人の躰を抱きすくめてきた。

先斗町を、勇たちは西へつきぬけ、高瀬川沿いの木屋町通りを北へ……。

すぐに三条小橋で、その西たもとに旅宿・池田屋がある。

軒へつるした祭提灯にあかりがともっている家々もあったし、その軒下の縁台へ出て涼をとっている町家の人びともいて、目の前を行く武装の勇たちを見るや、あわてて家の中へ駆けこみ、戸をおろしはじめた。

二

この夜。

池田屋に集合していた志士たちは、長州の吉田稔麿、杉山松助。土佐の野老山吾吉郎、北添佶麿。肥後の宮部鼎蔵、松田重助など三十余名であった。

意外の大人数なのである。

薬商人に化けて池田屋内へ泊りこんでいる新選組の密偵・山崎丞は気が気ではない。

池田屋では、表戸口に面した帳場へ主人の惣兵衛がすわりこみ、出入りの者へきびしい注意をはらっているし、夜に入ってからは山崎もうかつにぬけ出すことができぬ。

池田屋前の道には乞食に変装をした味方の密偵が待機している筈なのだが、これと連絡をとる隙もない。

（おそいな。いったい局長は何をしておられるのか……池田屋に、これだけの人数があつまろうとは、おれも思わなかった。ここのあつまりは、せいぜい十余名とふんでいたんだが……なんとかして人数だけでも知らせたいが……）

しかし、池田屋惣兵衛の眼をかすめ、いったん閉めた表の潜戸の掛金を素早く外すのが精いっぱいのところであった。

山崎が、じりじりしながら、帳場の裏側にある小さな部屋で爪を噛んでいると……。

突如、表戸を強く叩く音がする。

（来た……）

山崎は、小廊下へ飛び出した。

惣兵衛が帳場で腰を浮かせた。

と……。

掛金の外れている潜戸に気づいたらしく、この潜戸が外からぐいと押しひらかれた。

「あ……」

惣兵衛が、おもわず声を発したときには、近藤勇の大きな躰が潜戸から土間へ……。

「亭主。御用あらためであるぞ！」
切りつけるように、勇が叫んだ。
山崎丞は横っ飛びに小廊下の向うの部屋へ入った。この部屋には、二階の浪士たちの大刀があずけてある。宿屋や料亭などへ武士があがるとき、大刀を〔刀部屋〕へあずけることは当時の定めであった。
刀掛けに掛けならんでいる大刀を、山崎は外してひとまとめにし、板戸の押入れの中へほうりこみはじめた。
池田屋惣兵衛は、勇たちが押し入って来たのを見て驚愕しつつも、正面の階段へ一足二足のぼりかけ、
「みなさま方、御用あらためでござります！」
二階の浪士たちへ、声をかけた。
土足で上って来た勇が惣兵衛の肩をつかみ、突き退けた。
惣兵衛、腰をぬかしたかたちで奥へ引込みながらも、
「ご、御用……御用あらためでござります」
もう一度、叫んだ。町人にしては見上げた度胸である。
二階の座敷で、ざわめきがおこった。
それを、階段下に立って見上げたままの姿勢で、近藤勇は隊服の麻羽織をぬぎ捨て、
「周平。土間にいて逃れ出る者を突けい」

振り向きもせずにいった。
「はっ！」
と、周平。
沖田、永倉、藤堂、いずれも上って来て大刀をぬきはらった。
原田佐之助、谷三十郎ら四名は、池田屋の表口に待ちかまえ、脱出する志士たちにそなえている。
「なんだ、なんだ？」
このとき、階下の異常の何ものとも知らず、北添佶麿は、未到着の桂小五郎がやって来たのだとおもい、
「桂さんか……」
いいつつ二階の廊下から階段口を何気なく降りかけ、ぎょっとなった。
階段下へ立ちはだかっている近藤勇に気づいたからである。
転瞬……。
勇が大刀をぬきざま、猛然として階段を一気に駆けあがり、
「む！」
北添の腹を、すくいあげるように斬りはらった。
「わあっ……」
北添佶麿、もんどり打って階段をころげ落ちる。その北添の躰を蹴落すようにして

永倉新八と沖田総司が階段を駆けのぼった。

勇は、この二人に道をあけておき、ななめ右の座敷から顔を出した志士の一人を横なぐりに斬って倒した。

「な、なんだ！」

「いかん」

「新選組だぞ！」

二階の座敷三間を一つにした志士たちの集合所が、たちまちにいろめきわたる。

永倉と沖田は、刃をふるって座敷へ躍り入った。

勇は、ちらと階下に待ちかまえている藤堂と周平を見やって大きくうなずき、階段口に両足をふまえ、駆け出て来る志士・浪士たちを待ちかまえた。

一人、二人……。

大刀を下へあずけてあるため、いずれも脇差、小刀をぬきはなって飛び出して来るのへ、

「えい！」

腰をおとした勇が、愛刀・長曾禰虎徹を叩きつけた。

池田屋の屋内は、たちまちに絶叫と血飛沫と……刃金と刃金が撃ち合うすさまじい音響の坩堝と化した。

間口三間半。奥行十五間にすぎぬ池田屋であった。

ひろい野外で闘うのとちがい、このようにせまい屋内での斬合いなのだから、五対三十の不利も、むしろ有利になったといえよう。

まるで芋を洗うような混戦なのである。

階段口の勇の刃をのがれた志士たちが階下へ逃げると、待ちかまえていた藤堂、周平、原田たちが迎え撃った。

三

「そりゃもう、はじめのうちは、まさに悪戦苦闘というやつだ」

と、後年に永倉新八が語りのこしている。

「わしも、あんなに夢中になったことはなかった。どこで、どんな敵と斬り合ったものか、まったくおぼえていない。ただもう必死で……ま、なんだね、それまでのわしの剣術というものが知らず知らずに出ていたのだろうよ。ただ、おぼえているのは、わしが着込んでいた鎖襦袢（くさりじゅばん）へ、チカチカと敵の刀の切先が触れてくる……そのうす気味わるいことといったらない。何しろ押し合い圧（へ）し合うような乱戦だし、もう眼がくらみそうになってね。すると近藤さんの気合いが……」

近藤勇の甲高い気合声が屋内へひびきわたるのをきき、永倉は再び気力が充実してくるのをおぼえたという。

「そりゃもう、こっちの腸（はらわた）がぴりぴりするような気合声でね。わしらも立合っていて、

がっくりきそうなときには、自分で気合を発して、しゃんとしたものだが……他人の気合の声にはげまされたのははじめてであったよ」

この乱闘の最中に、勇は、二階廊下の壁ぎわで、敵と戦いつつ、烈しく咳こんでいる沖田総司を見た。その様子が只事でない。

「総司……」

脇差をふるい、二人の志士が勇へ立ち向っていた。

「総司……沖田！」

叫びつつ、猛虎のように突進した勇が廊下から座敷へ踏みこみ、二人の敵を圧倒しておいて、いきなり身を返し、ふたたび廊下へもどるや、

「えい、おおっ」

沖田へ、のしかかるように切りつけている敵の側面へまわり、虎徹の一刀を送りこんだ。

「あっ……」

左腕を深く切られた敵が、悲鳴をあげて階段口へ逃れる。

それにかまわず、

「おい」

がっくりとひざを折った沖田を、左手で抱えおこしたときであった。

顔をあげて何かいいかけた沖田総司が顔をゆがめて、がっと血を吐き出した。

「あっ……」
勇、愕然とした。
「そ、総司……」
志士たちは廊下から階下へさらに二階の窓や物干場から中庭や戸外へ……それぞれに脱出をはじめている。
「だ、大丈夫」
沖田は、勇の腕をはらい、よろりと立った。
「総司、お前……」
「いいんですよ、局長」
「病気だったのか……」
「局長、そんなことをいってる場合じゃありません」
それはそうだ。
沖田、勇が一瞬、茫然とした隙に階段を駆け下って行った。
四国屋へ向った土方歳三の一隊が、池田屋へ駆けつけて来たのは、このときであった。
多勢集合と見きわめをつけていた縄手の四国屋には、だれもいなかったので、土方がすぐさま引返して来たのである。
「局長！」

土方歳三が土間へあらわれ、二階の階段口へ出て来た勇へ、
「会津の兵が出張りましたぞ」
と、叫んだ。
「そうか……」
ようやくに守護職、所司代に桑名の藩兵を合せて二千余（七百ともいわれる）の兵が武装で出動し、池田屋のまわりをびっしりとかためてしまったのだ。
長州藩の京都屋敷（現京都ホテル）は、すぐ近くなので、ここへ逃げこみ、援兵をもとめた志士もあったが、なんといってもいまの長州藩には京都における兵力はほとんど無い。
助けてやりたくても、どうにもならぬのが実状であった。
勇が、養父近藤周斎ほかに送った手紙に、
「……かねて徒党の多勢を相手に、火花を散らして一刻（二時間）余の間、戦闘におよび候ところ、永倉新八の刀は折れ沖田総司刀の帽子折れ、藤堂平助刀切出さ、さらのごとく、倅周平は槍を斬り折られ、下拙刀は虎徹ゆえにや、無事に御座候」
とある。
志士のうちでも、長州の桂小五郎とならんで尊攘革命派の大物と称された宮部鼎蔵（肥後・熊本藩士）は脱出不能と知り勇の眼前で刀を腹へ突きたて、
「大丈夫は、おのれらに辱しめをうけぬぞ！」

壮烈な自決をとげた。

吉田稔麿は沖田総司に討たれ、同じ長州の杉山松助は永倉新八に腕を断ち切られて出血多量のため息絶えた。

沖田はさらに、肥後の松田重助も討ちとっていた、あの、おびただしい喀血の中で、

「よくも、それだけにはたらけたものだ」

めったに感心をせぬ土方歳三もあきれ顔で、

「総司。少し、どこかしずかなところで養生したらどうだ？」

とすすめると、

「おなじことですよ」

沖田は事もなげにこたえ、まったく取り合わなかった。

この夜の襲撃で即死した志士たちは七名というが、重軽傷を負って逃れ、のちに捕えられたり、死んだりした者が合せて二十三名。

これらの志士たちは動乱の第一線に立って活躍をしていた人びとだけに、尊攘派の打撃は非常なものであったといえよう。

で……。

新選組の死亡者は、安藤早太郎。奥沢栄助、他一名。

藤堂平助は重傷。永倉新八は左手の親指を切断された。

戦闘中、階下の刀部屋へ大刀を取りに駆けこんだ志士もかなりいたが、早くも山崎

丞がこれを隠してしまったので、どうにもならなかった。

長州の桂小五郎は、偶然に、この夜の襲撃をうけずにすんだ。

小五郎も池田屋へ来たのだが、時刻が早すぎて参会者がまだそろっていなかったので、

「後刻に来る」

と、池田屋惣兵衛へいいおき、他所（よそ）へまわった後に新選組が斬込んだので、危急をのがれたことになっている。

夏の夜が明けた。

新選組は、重軽傷者を先斗町の会所へうつし、ここで、かねて用意の手当をおこない、武州・石田から取りよせた〔石田散薬〕という〔のみ薬〕をあたえたりした。

この石田散薬は、土方歳三の実家が〔家伝〕として売り出している切傷・火傷（やけど）の薬で、土方は若いころ、これを諸方の荒物屋などへおろして歩く仕事をしていたものだ。

現・土方家の当主・康氏（やすし）が筆者に語られるには、

「……歳三は、この薬の荷をですな、近所の酒屋のじいさんに担がせ、自分は剣術の道具をかついで、甲州の方まで売りに行ったそうですよ。ま、とにかく売れてね。土地土地で歳三がおろしに来るのを待ちかねていたそうですが……え、薬は薬草を粉末にしたもので、傷薬をのむというのも妙なもんだが、こいつを燗酒（かんざけ）でもって飲用させるのですよ。まあその、酒と一緒にのむものだから、つい気分がよくなって、何だか

癒ったような気になるんですな」

とにかく効くというので、新選組の屯所には〔石田散薬〕が常備してあったようだ。

二列縦隊の先頭に近藤勇、土方歳三が立ち、隊士一同、沿道の見物のおどろきの声をあびながら、壬生の屯所へ引きあげて行った。

沖田総司は、昨夜の吐血も忘れたような顔つきで、右手に折れまがった大刀をさげ、釣台に寝てはこばれて行く重傷の藤堂平助の血みどろの顔へ、

「藤堂さん。大丈夫、死にゃあしませんよ」

などと、はげましていた。

四

「……池田屋の事件があるまでは、新選組も何かこう、会津藩の雇われ浪人のあつまりのように世間から思われていたし、われわれもまた、どことなくそんな気分でいたもんだが……しかし池田屋以後は何事につけ、がらりと様子が変ってきたものだ」

と、永倉新八が述べているように、池田屋襲撃における新選組の活躍は、会津藩のみか幕府当局の認識をも一変させたようである。

幕府は、前に〔新選組費用〕として会津藩へあずけておいた金のうちから、「褒賞金をあたえるように」と、いってきた。

そこで、近藤勇には計三十両。土方歳三へ二十三両。永倉・沖田ら六名へ二十両。

原田佐之助ら十一名へ十七両。中村金吾ら十余名へ十五両の褒賞金がわたされた。

これを、もっともよろこんでくれたのは会津侯・松平容保で、

「新選組の命をかけてのはたらきが、ようやくむくいられた」

京都守護職としての会津侯は、感状と共に金五百両を隊士一同へおくり、負傷者たちへは医薬と共に見舞金をあたえ、

「躬も健康を害して、何事にも思うように手がつけられぬ。この上とも、京都守護のため、わが藩をたすけて活動してもらいたい」

重役を通じ、近藤勇へいってよこした。

当夜。会津藩の出兵が遅れたのも松平容保の病状が重く、重臣たちが直接に容保の決裁を仰ぐことに手間どったためだが、

「市中警衛の名目をもって出動し、池田屋へは打ち入らぬこと」

それならかまうまいということになり、ようやく出兵のことがきまった。

さらに……。

朝廷からも、

「慰労のおぼしめし」

によって金百両が新選組へ下付されるし、新選組の声望は一時にあがり、

「いやもう、隊士たちの顔つきまでも変ってきた」

またも永倉新八の語りのこしになるが、

「近藤さんなぞも、顔つきから態度から、急に、がらっと変ってきたものだ。どっしりとこの土地へ根が生えたような貫禄というか……威厳というかね。ちょいと若い隊士なぞは近寄りがたい感じになってね。ま、それだけ重い責任を背負いこんだわけなのだろうが、江戸の試衛館のころから近藤さんを知っているわれわれにしてみると、ちょいとこのね、さびしい気がしたものだ。それまでは結構、島原の女あそびのはなしなぞも気軽にしていた近藤さんが、ぷっつりと……そりゃもう笑うのが損だというような顔つきになっちまってね。もうその、うっかり近藤さんなぞと呼べない感じになってしまい、そこへまた土方なぞも顰っ面で何事にも勿体をつけ、局長局長とたてまつるし……」

なにかのとき、永倉が、つい以前の調子で、

「ねえ、土方さん……」

呼びかけて、気やすげにぽんと土方の肩をたたいたら、

「まるで橋下の乞食にでもさわられたような面つきになって……」

土方歳三が永倉へ、

「君。副長と呼びたまえ。平隊士たちの手前もある。ちと言動をつつしまれたい」

切口上で、こういったという。

ま、隊の規律をととのえるためには仕方もないことなのだろうが、永倉や原田、藤堂などにしてみれば、土方や沖田とはちがって近藤勇の門下ではない。気が合い、こ

ころをゆるし合った同じ剣術仲間の交誼によって試衛館へ出入りもしたのだし、共に浪士隊の一員として京都へのぼって来たのでもある。

近藤・土方は、永倉たちにとって上司というよりも〔同志〕なのだ。

池田屋事件後、原田佐之助が、

「どうです局長。隊士たちの慰労をかねて、ひとつ、ぱあっと島原へくりこんでは……」

と、近藤勇へいったことがある。

すると勇は、まるで苦虫でも噛みつぶしたような表情で原田を見やり、

「ばかなことを……そのように安楽な考えかたをしてもらっては困る」

ぴしりときめつけたものだ。

原田は、満面に朱をそそいで永倉のところへやって来て、

「そのときの近藤さんの口ぶりというものはな、どこかの大名の御家老さまが足軽を怒鳴りつけでもするようなんだ。けっ、けっ……ばかにしていやあがる。むかしは試衛館で垢だらけの着物をきて沢庵ばかり喰っていやがったくせに……」

と、大いにぼやいた。

「ふうむ……江戸にいる近藤さんの御内儀が、いまの近藤さんを見たら何というかなあ」

「そうよ、そのことよ。おらあもう、何だか江戸へ帰りたくなって来た」

隊規も俄然、きびしくなった。

新しく〔軍中法度〕というものが定められた。

その中に、

「……敵味方の強弱を一切、批評してはならない。食物など一切、美味を口にすることを禁ずる」

さらに、

「私のうらみごとで喧嘩口論をせぬこと。組頭が討死したときは、その組の隊士は、その場において戦死すべし。もしも臆病なふるまいをして逃げたりする者あらば容赦なくこれを罰する」

などとある。罰するというのは切腹か打首なのだから、たまったものではない。

永倉や原田の感懐はさておき、せっかくの名声を地に落すことなく、尚も心身をひきしめて事にあたろうとする勇の決意が、よく看取されようというものだ。

事実、池田屋以後の新選組は、志士たちの残党を探索検挙するため、多忙をきわめていたのである。

当夜、池田屋では……。

捕えられた古高俊太郎を奪い返そうとして、新選組・屯所の急襲計画も練られていたようだ。

桂小五郎は、当夜をかえりみて、次のように記している。

「孝允等も、この夜、池田屋へ会する約束あり。五ッ（午後八時）此屋に至る。同志いまだ来らず。よって去って又来らむと慾し、対州の別邸に至る。（中略）余、当時、京都邸内の諸士を総管す。（小五郎は、長州藩・京都屋敷の留守居役をつとめていた）よって、余、曾て古高と同盟の者三人をえらび……」

この三人を新選組急襲の一隊へ参加せしめようとしたものだ。

新選組にしても、当夜、桂小五郎が網の目にかからなかったことを残念がり、

「近藤氏は、桂を殪せば徒党の勢力は半減する、とまでいいきっていたものだ」

と、永倉新八が述懐している。

池田屋は、七か月の営業停止の上、主人・惣兵衛は町奉行所へ引きたてられ、ただちに入牢、獄中で病死をとげた。

池田屋事件についての知らせは、六月十二日に長州の本国へ入った。

長州をはじめ諸方の尊攘志士たちの憤激は、その極に達したといってよい。

かねてから長州藩では、藩主・毛利敬親父子をはじめ、本国にかくまっている三条実美ら六人の公卿の冤罪を、朝廷にうったえてきている。

「勤王革命の先頭に立つ我藩を京都から追い退け、幕府の飼犬のような会津や薩摩のいうままにあやつられておられるのはあまりにもなさけないことです。我藩は日本の政権を天皇へお返しすべく、流血をものともせずにはたらいてきたのであります。このことがおわかりになりませぬか」

と、こういうわけだ。

だが、すべてしりぞけられている。

いまの朝廷は、親幕派の公卿の勢力が圧倒的につよいし、何よりも孝明天皇御自身が、京都守護職・松平容保をふかく信頼され、

「会津あるかぎり、京の治安はみだれずにすむ」

とまで、いわれている。

幕府と朝廷をむすびつけるための〔京都守護職〕を、天皇がこのようにおたのみになっておられるのでは、長州藩がいかに手をつくしてもはじまらぬ。

そこへ〔池田屋事件〕であった。

土壇場へ追いつめられていただけに、革命運動のメッカと自他ともにゆるしている長州藩の過激派は、

「いまこそ起つべきである！」

「京へ乗りこむのだ！」

さわぎはじめた。

藩主や一部の重臣は、去年の政変で幕府側に敗北していることだし、なんとか無事におさめたい気持なのだが、下からもり上って来る革命の気運には抗し切れない。

かたちはちがうが、幕府側といい勤王側といい、旧勢力のおとろえ方は同じもので、日本は好むと好まざるとにかかわらず〔新時代〕をめざして大きくうごきはじめてい

たのである。

だからもう〔殿さま〕の考えなぞは問題にしない。

六月十六日。

筑後久留米の神官・真木和泉守や長州・急進派の指導者の一人であった久坂義助が長州軍の先発部隊三百余人をひきいて、周防（山口県）三田尻の港を出帆した。

いま、長州には諸国の志士たちが続々と集結をしている。

かつては勤王革命のメッカであった薩摩藩が幕府側についてしまったので、志士たちがいま、たのみとするところは長州藩のみといってよい。

先発部隊につづいて……。

福原越後（長州藩家老）が、第二軍をひきいて大坂へ向う。

すぐに来島又兵衛・国司信濃を隊長とする第三軍が長州を発したかとおもうと、これも長州藩の家老・益田右衛門介が第四軍をしたがえて大坂へ進発した。

京都も来るべき戦火を予想して異常な緊迫につつまれた。

五

東上した長州軍の編制は……。

一、福原隊（五百余）

一、国司隊（五百）

一、来島隊（四百）
一、益田隊（六百）

これに、京都市中へ潜伏していた志士・浪士たちが三百人ほど、嵯峨の天龍寺へ集結をしたから、合計二千三百余の兵力ということになる。

大坂へ集まった長州軍は、六月の下旬から七月はじめにかけて、京都へ向けて進出しはじめ、伏見から嵯峨の線をむすんで陣形をととのえた。

こういうかたちで京都へせまりながらも、長州軍は先にのべた嘆願を朝廷へ何度も差し出している。

嘆願というよりも、それは詰問に近い激烈なものであるし、しかも砲隊・銃隊をひきい、武装に身をかためた二千数百の兵が乗りこんで来て、京都の南方の要所要所を素早く押えてしまったのだ。

三方を山にかこまれ、南方のみが大坂平野へ向ってひらけている京都だけに、これはどう見ても戦闘をいどむかたちなのであった。

それはさておき、である。

どうも幕府側のだらしのないことは、おびただしいものがあった。

大坂には、幕府の城もあるし奉行所もある。

淀川から、伏見方面へは、紀州藩はじめ幕府側の諸大名の兵が警備しているし、幕府の役人もつめているではないか……。

ところが、どれもこれも、決死の形相も物凄く押し出して来る長州軍の前に手も足も出ない。

「どこへ参られるか？」

と、一応は立ちふさがっても、

「われらは長州藩兵でござる。外敵襲来にそなえ、近ごろは武装をくずさぬことにしております」

隊長・福原越後の一喝をくらうや、

「な、なるほど……」

幕府の役人は、へどもどしてしまうし、長州の鉄砲隊が前面へ隊列を組み、堂々と行進して来て、

「藩命によって関東へまかり下る！」

などと怒鳴りつけられると、もうこれだけで諸藩の警備隊は青くなってしまい、通過をゆるしてしまう。

「なんということだ……」

これをきいて、近藤勇は激怒するよりも呆れかえった。

これでは、日本の政権を担当する幕府の威力は、まったく消滅してしまったも同然であろう。

「これでは、いくら、われわれがはたらいたところで、どうにもなるものではない」

と、勇は断じ、

「こうなれば、将軍家に一日も早く御上洛をねがい、京におとどまり願うよりほかに道はない」

天皇・将軍・守護職の協力を、かたちの上で、はっきりと天下にしめすことであった。

京都の夏は、たけなわである。

じりじりと照りつける日中も、蒸し暑い夜も、宮中では連日の会議がつづけられていた。

公卿たちは二派に別れている。

もともと長州に好意を抱いている飛鳥井中納言や三条実愛など三十余名の公卿は、

「長州藩も思えば気の毒である。先ごろより何度も嘆願書を差し出していることだし……ともあれ、藩主父子のみは入京をさしゆるし、天皇の御勘気をといてやってはいかがじゃ」

と、主張し、連署をおこなって強い結束をしめしはじめた。

ことに、薩摩藩が沈黙をまもってい、表立って幕府側の味方をせぬのを知るや、いっせいに守護職・松平容保を攻撃しはじめた。

「会津などが、朝議に口をさしはさむことはゆるさぬ」

と、いうのである。

松平容保は病熱をおして、朝議に参列をしていたけれども、ほとんど孤立して、進言するのをあたまからたたきつぶされてしまう。

こうなると、口先ばかり達者で、何事にもつけ〔朝命〕と〔朝議〕をふりまわし、天皇の家来だからとのぼせあがる公卿たちは、旗色のよい方へのみ〔ながし目〕を送って身の安全をはかろうとする。

こうした朝臣の生態は何百年にもわたってつちかわれたものであるから、うっかりすると彼らの巧妙な陰謀は、どのように怪奇複雑な謀計をめぐらすことか、知れたものではないのだ。

公卿たちは、

（奮激した長州の大軍が京へ入ったら、会津も薩摩も追いはらわれてしまいかねない）

と、おもいはじめている。

ここに至って……。

将軍・後見役として京都につめていた一橋慶喜が、

「よし、躬が参内する！」

決然として起った。

慶喜は、前の水戸藩主・徳川斉昭の子で、現将軍・家茂と将軍位をあらそったこともある。

慶喜は、なかなかの政治家だし、めったに怒りをあらわさぬ人物であったけれども、このときばかりは御所へ参入するや、居ならぶ公卿たちを前に、

「長州の嘆願なぞをおとりあげになるとは、もってのほかのことでござる」

滔々として弁じはじめた。

「口に嘆願をとなえつつも、砲、銃、刀槍をつらねて京へせまる長州藩のふるまいは、まさに臣子の分をわきまえぬものではありませぬか。かくのごとき長州をゆるして京へ入れなば、天皇の威風は地に落ち、長州の不遜はいよいよきわまるのみ。もしも長州がゆるしをこわんとなれば、すみやかに武装をとき、藩主・毛利大膳大夫父子は身ひとつとなってあらわれるべきでありましょう、いかが……」

正論である。

公卿ども、慶喜の弁舌に圧されて一言もない。

さらに一橋慶喜、声をはげまし、

「長州が兵をとかぬかぎり、なまぬるき応じ方は無用にござる。堂上方において、もしも慶喜の申すことをおきき入れなくば、すぐさま松平容保ともども職を辞し、われらは関東へ引きあげまする。あとは長州をひき入れらるるなり、どうとなり、御勝手になさるがよろしい！」

と、きめつけた。

公卿どもは、こそこそとささやき合いはじめた。

彼らは、また不安になったらしい。
（長州をひき入れ、また後で幕府に睨まれては……？）
なのである。
ここまで来れば傍観の態度をしめしていた薩摩藩も意見をもとめられるのが当然であった。
薩藩の代表として参内した西郷吉之助（隆盛）にしても、意見をのべるとなれば、一橋慶喜の正論を支持するよりほかはない。莫迦か狂人でないかぎり当然のことだからである。
西郷は、こういった。
「長州みずから兵をとき、恭順のかたちをしめさぬとあらば、朝廷より各藩へ追討の勅命を下しおかるべきかと存じます」
これで、すべてはきまった。
元治元年七月十七日。
長州追討の勅命が諸大名へ下った。
じりじりしながら待機していた新選組へも、守護職から、
「伏見方面へ出動せよ！」
の命が下った。
局長・近藤勇は、総員百余名をひきいて出動をした。

馬上ゆたかに、屯所前へあらわれた勇を見るや、原田佐之助がぷっと吹き出すのを永倉新八があわてて制した。

「だって、新八さんよ。あの局長の大そうな恰好を見ろよ……」

原田、笑いをこらえかねる表情だ。

永倉も、何か躰中がこそばゆくなってきたものである。

この日の近藤勇、ものものしく鎧に身をかため、金ぴかの陣羽織に烏帽子をつけるという、たしかに物々しい武装であったが、勇としては、いまや天下に声望とどろく新選組の局長として当然のいでたちと考えたものであろうし、平隊士たちも勇の威容に瞠目し感激している様子であった。

だが、永倉や原田にして見ると、

（なんだえ、二年前までは百姓あがりの剣術つかいで、おれたちと一緒に冷酒で沢庵をかじっていたくせに……どこのお大名になったつもりでいるのだ）

おかしくて仕様がない。

「ぷっ……成り上り者を絵にかいたようだ」

またも原田佐之助、毒舌をふるう。

永倉もにやりと、

「まるで、楠正成出陣の図だね」

ささやきかえした。

六

幕府側では……。

伏見方面の長州軍に対して、大垣・彦根・会津（新選組をふくむ）・桑名・小倉・丸岡の六藩が攻撃。

嵯峨・天龍寺の長州軍へは、薩摩・膳所・福井・小田原などの諸藩を向け、本陣は京都市中の東寺へおき、ここへ会津藩兵と幕府旗本の部隊がつめることになった。

しかし、薩摩藩は強硬に、

「我藩は御所と天皇を守護したてまつる」

と、いい張って、主張を通してしまった。

これは、

（今度の戦争に負けても、長州の底力は決しておとろえるものではないし、いずれ、われわれが新時代の中心勢力となるためには、長州と協力せねばならぬときがやってくるであろう）

早くも薩摩藩の深謀は、ここにまでおよんでいたのだ。

七月十八日。

九条河原の銭取橋へ布陣していた新選組は、幹部会議をおこない、席上、近藤勇が、

「今夜、伏見に滞陣している長州軍へ、われわれだけで夜討ちをかけよう」

と、いい出したものである。
さすがの土方歳三も、くびをかしげ、
「会津藩には、だまってですか？」
「かまわん」
勇は烈しくかぶりを振り、
「こういうことを、いちいちうかがいをたてたりしていたら、また池田屋の二の舞いで手おくれになるにきまっているのだ。何だ彼だと手つづきばかり面倒で戦さにも何にもなりはしない」
つばでも吐き捨てるように、
「こちらだけでやってしまおう」
と決断を下した。
「さすがだね、え……」
こんどは原田も永倉も、勇のやりくちが気に入って、
「いざとなると、近藤さんのやることはすかさねえよ」
すぐさま出動の用意にかかった。
急襲は、十九日の未明にきまった。しかし、一足ちがいで、長州軍のほうから京都を目ざして進撃を開始して来た。
会津藩では、百五十名からなる一隊を新選組に合流させ、

「伏見稲荷の関門を守れ」
と、指令して来た。
すでに出動の用意を終えたところであるから、新選組は急遽、伏見稲荷へ駆けつけて行った。
このとき……。
伏見の関門を守っていたのは、彦根と大垣の二藩である。
伏見を発した長州軍は、天王山の方角へ進むと見せておいて、
「それっ！」
いきなり軍列をひるがえし、伏見の関門へ殺到して来た。
長州軍・銃隊の一斉射撃がくり返され、
「う、わあ……」
喚声をあげて肉迫する長州軍を見て、
「これは、いかぬ」
関門を守る彦根藩は、戦おうともせずにあわてふためき逃走してしまった。
のちに、このことを知った近藤勇が、
「開いた口がふさがらぬとは、このことだ。彦根がここまでに下落たか……」
と、つぶやいたそうな。
かつて徳川家康・譜代の臣として、その精強をほこり、大老・井伊直弼を生んで徳

川幕府の支柱ともいうべき筈の彦根藩・井伊家がこのありさまでは、勇ならずとも、徳川政権の衰弱のひどさをまざまざと見せつけられたおもいがしたろう。

この福原越後ひきいる長州軍は、伏見から比叡山へたてこもり、京都への食道ともいうべき近江からの米の移入を押えて、京の敵軍を兵糧攻めにしようという作戦であったともいわれている。

とにかく……。

伏見関門を守る敵軍が逃げてしまったので、

「見ろ、幕軍の腰ぬけぶりを……」

長州軍が嘲笑しつつ伏見関門を通過しようとしたとき、会津と新選組の合同部隊が駆けつけて来た。

夜明け前のうす闇がただようなかに、両軍はひたひたと迫り合って、長州の銃隊が位置をしめようとする横合いから、

「叩きつぶせ！」

新選組が刀槍をつらねて突撃した。

山すそに沿った細い道と、畑地の中に、ところどころ民家がかたまっている地形なのだが、長州軍は、関門の敵が逃走したので気をよくし、斥候も出さず、油断をしていたらしい。

そこへ、ひそかに接近しつつあった新選組が斬りこんだのである。

永倉、沖田、原田、藤堂など一騎当千の剣客が、真先に飛びこんで斬りまくったし、会津の藩兵も、幕府がほこるもっとも精強な兵であるから、たちまちに長州軍は斬りくずされた。

あわてて、長州の銃隊が発砲しはじめたが……。

これがなんと、味方の隊長・福原越後の顎へ一弾が命中してしまい、

「引け、引けい……」

長州軍は狼狽して退却してしまった。

新選組と会津兵は、ひとまず伏見稲荷の境内へ入って点呼をおこなう。

このとき、京都の方向で、いんいんたる砲声がとどろきはじめた。

これこそ、嵐山の天龍寺にいた長州軍が一気に京都市中へ攻めこんだものであった。

江戸に帰る

一

近藤勇にしても、新選組の隊士たちにしても、幕府側の諸藩兵があれだけに防備をかためていた筈の京都市中へ、こうもやすやすと長州軍が突入して来ようとは考えて

も見なかった。

長州軍は、その実力を伏見方面に集結し、京都の南方から攻めこむと見せておき、ひそかに嵯峨方面の部隊を増強せしめ、この朝、突如として嵯峨部隊を攻撃の主力と変じて行動をおこしたのである。

この長州軍の作戦は功を奏し、山崎方面の久坂部隊と呼応して疾風のように西方から市中へ侵入して来た。

嵯峨から京都御所までは約三里。

このような近間に対峙していながら、幕軍は、ほとんど敵の動静に通じてはいない。

近藤勇にいわせると、

「戦国の時代の武士たちが、この間のぬけた戦さぶりを見たら、なんと思うことだろう」

なのである。

膳所、福井、小田原などの諸藩部隊を魔神のような突撃で散乱させた長州軍は、たちまちに御所の西側へ肉迫して来た。千名前後の兵力であったろう。諸藩部隊は、ろくに戦闘も交えず長州軍の通過をゆるしてしまったといってもよいほどの呆気なさであった。

長州軍主力をひきいる国司信濃は来島又兵衛部隊を下立売・蛤の両御門から攻撃させ、みずからは中立売御門へ押しつめた。

勤王攘夷運動の主軸たる長州軍が、天皇おわす御所を攻撃しはじめたのである。

「ばかなことを……」

御所を守る薩摩部隊を指揮する西郷吉之助も、こうなっては長州軍と戦わざるを得ない。

幕軍の強兵である新選組と会津藩主力は伏見の長州軍と交戦中であるから、京都御所では勢いのおもむくところ、薩長両軍激突のかたちとなった。

戦闘は、現代の午前四時すぎから八時ごろまでつづいたといわれる。

はじめは虚を突かれた諸藩部隊も、ようやく立ち直って長州軍を包囲したので、こうなると兵力の差はいかんともしがたい。

御所の塀、門、屋敷などがたてこむ地形の中で、激烈な戦闘の渦が展開し、長州軍は次第に押し返され、追い退けられはじめた。

この戦闘で、長州は多くの人材をうしなっている。

久坂義助、入江九市、来島又兵衛など、明治の世まで生きていたなら大臣級の大物が戦死し、真木和泉守は山崎の天王山へ逃げた。

二十一日になって、

「天王山を攻めよ！」

と、新選組に指令が下った。新選組が山上へのぼりついたとき、真木和泉守以下十七名、いずれも割腹し、火中に身を投じていたという。

この戦闘は全く馬鹿げきったものであった。

両軍ともに何ら得るところはなく、しかも京都市街の大半が戦火に焼きはらわれてしまったのだ。

焼失家屋二万七千四百戸。

ほかに公卿や武家の屋敷が合せて六十余戸、神社六十四、仏閣百十五、土蔵二百余、橋四十、芝居小屋三……という焼失記録が今も残っている。

狂人になったような一部の長州兵が市中の諸方へ放火してまわったため、火炎は層倍のものとなってひろがったらしい。

六年前の安政の大獄以来、保守派と革新派は相互の力関係の反復の度を急激にたかめつつ、ついにここへ至ったのである。

幕府といい勤王革命派といい、よいことも悪いことも〔無謀〕と〔暴力〕を常識と化すことによって解決しようというかたちになってきている。

それにしても、口に勤王をとなえながら皇居を攻撃した長州藩の行動は無謀をきわめていた。

それだけにまた、ここまで追いつめられ圧しつぶされかけていた長州軍の苦悩もすさまじいものだったといえよう。

そして、また今度も長州は敗北した。

まさに踏んだり蹴ったりである。

幕府側も、燃えさかる戦火に昂奮し、市中・六角の獄舎に監禁してあった勤王志士三十余を引き出し、

「破獄を企てたるによって……」

と、名目をつけ、首を斬ってしまったものである。

六角の牢獄へも戦火が燃えうつろうとしたので、町奉行所ではいつ長州軍が志士たちをうばい返しに来るやも知れぬと考え、うばい返されてしまっては、おのれが〔落度〕となることを恐れて断首した。

のちに守護職の松平容保がこれをきき、

「裁決なき者を、どうして断首できるのじゃ！」

奉行・滝川播磨守を呼びつけ、きびしく叱りつけたが、すでにおそい。

池田屋騒動の折、新選組に捕えられた、あの古高俊太郎もこの六角の獄舎に入れられてい、同志と共に断首されている。

結局、六角牢舎は焼失をまぬがれた。

奉行所の失態は、これによってさらに大きいものとなったのはいうをまたない。

筑前の志士で純粋派の巨頭・平野国臣の死刑も、この六角獄中においておこなわれた。

ところで……。

新選組は戦死したり脱走したりで隊士の員数が半減してしまった。

総員六十余名。

「これでは、どうにもならん」

勇も土方も、じりじりしている。

勤王志士・浪士たちが焼土の市中に潜伏している気配濃厚であった。

この最中に、江戸にいる妻女のつねから、

「……どうも父上さまの御病状がよろしくございません。なんとかいたして、一度、江戸へお帰りねがえないものでございましょうか……。私も、このごろは旦那さまのお身の上が気にかかり、食もすすまぬ上、夜もねむれず、すっかりやつれてしまいました……」

などと、つねらしくもなくめんめんとしたためた手紙がとどいたけれども、勇はそれどころではなかった。

守護職・松平容保の病状もよくないし、いまの新選組は会津藩と共に京都市中の治安をととのえるべき主動力である。

勇は、ほとんど黒谷の会津藩本部に詰めてい、壬生の屯所へも帰らず、多忙をきわめていた。

「残敵を探索するため……」

大坂へも、勇みずから隊士をひきいて出張したりした。

避難をしていた市民も続々ともどって来たが、今度の戦火は、いうまでもなく長州

軍の誘発であるにもかかわらず、それは結局、政権担当者たる徳川幕府の〔責任〕へ帰せられてしまう。

一藩兵の皇居攻撃をゆるし、皇都また灰燼に帰したとあっては、幕府の面目まるつぶれというわけだ。

いまは、一時も早く長州藩へ痛打をあたえなくてはならぬ。

公卿の中で、長州側と連絡をもっていたとおもわれる鷹司前関白、有栖川宮、中山前大納言など数名が謹慎を命ぜられると同時に、長州藩主・毛利大膳大夫父子の軍令状その他の機密書類も入手したので、朝廷はただちに〔長州追討〕の勅令を発し、毛利父子の官位をうばった。

「こうなれば、江戸におわす将軍おんみずから先頭に立たれ征長の軍をひきいていただかねばなるまい」

と、近藤勇が土方歳三にいった。

この際、幕府と将軍の威風を天下にしめしておくことが、何よりも大切なことだからであるし、それほどの熱意なくて諸藩が何で幕府にしたがってこよう。

「むろん、会津侯も、そのおこころづもりで、先頃、江戸へ建議なされたそうではないですか」

「当然だよ、副長」

その、守護職・松平容保が、江戸の幕府閣老へ送った建議書の中で、こういってい

る。

「……先頃から何度も申しあげているように、いまこのとき身命を惜しまずはたらいてくれる人材がなくては、なんとも危急を打破できかねます。力量ある者なれば前例にこだわることなく、破格に擢用していただきたいし、前に御役御免となったものの中にも人材あれば、それぞれに長ずるところをもって御役につけ、これらのものたちを上様（将軍）がお召しつれになられ、すぐさま京都へ来ていただき、万端の指揮をおとりあそばされ、中興の御功業を成しとげていただきたい。

長州を攻めるにしても、諸藩の軍を監督すべき人材が幕府になくては、将軍の御威光もふるわぬこととなりましょう。ここのところをよくよくお考え下されたい」

さらにまた、別啓として、くどいほどに、

「再三申しあげましたが、すぐれた人材がなくては、なんともいたしかたなく、大和守、周防守等をはじめ、杉浦兵庫頭、大久保豊後守、岩田半太郎など、大小監察、御使番など、復職おおせつけられたく、時節がら、たがいに私意を去り、公儀のために種々御とりはからい下されたい。それでなくてはどうにもなりませぬ」

と、念を入れている。

とにかく、京都の状態がどのようなものか、江戸城にいる幕府閣僚にはのみこめないらしい。

一事を解決するに、おどろくべき月日をかけなくては承知をしないのだ。

近藤勇も、こうした幕府の腐れきった官僚主義を腹にすえかねてか、戦火が熄んでのち、幕府が、

「近藤を正式の幕臣に採りたててやろう」

と内意をもらし〔両番頭次席〕という役職も用意したのを、

「当分は、いまのままが勝手でございます」

松平容保を通じ、辞退してしまった。

二

当時、勇は佐藤彦五郎（土方歳三の義兄）にあてた手紙の中で、

「……留守中、道場のことでいろいろと御めんどうをかけ、申しわけなく思っています。老父の病気はいかがでありましょうか……私も、来年春ごろには、なんとか暇を見つけ、一度帰りたいと考えているのですが、なにぶん国家大義のためはたらきおることとて思うようにもなりません」

と、書き送っている。

激務の間をぬって隊士の補充もおこなわねばならない。

「とにかく五百の隊員が欲しい」

と勇は事あるごとにいったそうだ。

ところで……。

この忙急の最中に、ちょっとした事件が起った。

永倉新八や原田佐之助が主体となり、斎藤一、尾関政二郎、桂山武八郎など六名が、局長の勇や副長の土方には無断で、会津藩本営へ出かけて行き、公用方の小森久太郎へ、

「どうも、近頃の局中（新選組）には感心せぬことが多くなり、われわれも実に、はたらきにくい」

と、訴え出たのである。

「それは、どのようなことであろう？」

小森久太郎が問うや、原田と永倉が五か条から成る建白書を出し、

「この五か条のうち、たとえ一か条でも近藤氏が申しひらき相たつなら、われわれ六名は切腹いたします」

と、血相を変えている。

つまり、近藤勇へ対する不満が爆発したわけであった。

このときの建白書の内容が、どのようなものであったか、不明である。

しかし、永倉や原田たちの不満が那辺にあったかは容易に想像がつこうというものだ。

新選組の存在が大きなものとなり、隊員も増え、組織も複雑になってくれば、必然、隊内もいくつかの派に別れて反目することにもなるが……。

それにしても、

「ふん、おもしろくねえ」

と、原田たちが憤激するのは、ほかでもない近藤勇の急激な変貌なのである。

正式の幕臣となることを辞退した勇であるが、いまは〔大御番頭取扱〕という身分にのし上り、会津侯はじめ、幕府側の大名たちにもすぐに目通りをゆるされるほどの威勢となった。

勇も、こうした地位にのぼって新選組をひきいている〔責任〕と〔誇り〕を肩に重く感じており、なればこそ、養父・周斎の重病を気にかけつつ、江戸へ帰省することも押え、日夜、懸命に精勤をつづけている。

だが、その一方では、知らず知らずに、（いまの自分は、すでにむかしの自分ではない）

と、意識しはじめてきていた。

いまや、新選組の近藤勇といえば、天下動乱の大舞台にのぼった〔名士〕であって、外出のときなどは、仙台平のぱりぱりするような袴に黒羽二重の紋付・羽織を身につけ、馬上ゆたかに、小者二名、隊士四名ほどをしたがえ、風采も堂々たるものであった。

永倉や原田たちは、つい二年前の試衛館時代の勇のつもりで、朝、屯所の廊下で勇に出会ったりすると、

「や、局長。お早ようさん」
気軽に頭を下げてあいさつをすると、勇は、じろりとこれをにらみ、
「むむ……」
かるくうなずきはするが、答礼するどころか反対に、ぐっと胸も頭も反り返ってしまい、
（気やすげな声をかけるな）
とでもいいたげな、まことに傲然（ごうぜん）たる態度に……原田や永倉たちには見えるのである。だから、
「武州の百姓上りが、まるで大名にでもなった気でいやがる」
と、原田の毒舌が飛ぶのだ。
とにかく、おもしろくない。
永倉や原田、山南などにしてみれば、あくまでも近藤勇は〔同志〕なのである。
人物がすぐれていると思うから〔局長〕になってもらったわけだが、だからといって勇が、
「おれたち江戸以来の同志を、まるで、てめえの家来か何かのように思いこまれたのじゃあ、とてもかなわねえ」
のである。
京都へ来てから入隊した隊士が大半をしめる新選組だけに、初期の、

「たがいにちからを合せ、命をかけて勤王浪士の暴動を鎮圧する」
という目的が、
「近藤先生の気に入られて、われわれもうまく立身出世を……」
こういう隊士たちの期待に変ってゆくことを、永倉新八などはもっともおそれた。
実際に、そうした空気が濃厚になってきつつある。
この動乱の時代に、わが刀にかけて世に浮かび上り立身をとげようという期待と熱情は彼らのみではなく、勤王浪人たちにもある。
それだけに、
「どうも、おもしろくねえ」
ことが起きてくるのだ。
たとえば……隊士の一人で五番隊・組長をつとめている武田観柳斎（かんりゅうさい）という者がいる。
武田は、出雲・松江の出身とかで、医学をおさめた上、長沼流の兵法に長じ、書もうまいし、文章もたくみだ。さらに弁説さわやかにして上長にとり入るための愛嬌（あいきょう）もたっぷりという……まことに才気ばしった男なのだが、この武田観柳斎を、近藤勇がしきりにほめたり、用いたりする。
「いや、武田君の学識というものは実に大したものだ。こういう人物が入隊してくれたことはまことに結構なことだ」
勇は、もう手ばなしで、武田の才能を珍重し、公文書の作成などは勿論（もちろん）のこと、何

かにつけて、
「武田君を呼べ」
となる。
勇は、剣術一筋に打ち込んで生きて来ただけにいまや〔天上の名士〕になって見ると、学問に対する劣等感が絶えずつきまとい、
（おれも、これだけの身分になったのだから……）
なんとか教養を充実させ、一流の名士とつき合っても〔ひけ目〕を感ぜぬようになりたいという焦りが、いつも胸中に潜在しているのである。
そこをねらって、武田がまた巧妙に勇の弱味へとり入る。
このごろは勇、何事につけても武田の意見を尊重し、土方歳三さえも無視する場合がある。
土方はにやにやしているだけで、別に武田をどうのということはないが、原田や永倉たちにいわせると、その武田観柳斎は、
「虎の威を借る狐」
ということで、武田にとり入っておけば局長にも気に入られるとおもいこんでいる隊士たちもかなりいる。
なにかにつけ、隊務がうまくゆかなくなるのもそれなので、
「こんな工合では、いざというときの御役にたつものではない！」

そこで、ついに会津藩へ訴え出たのであった。

小森久太郎は、

（これは自分の手で解決すべきでない）

と断じ、病気中の松平容保へ事態をつたえたところ、会津侯、重病にもかかわらず、永倉や原田たちに目通りをゆるし事情をききとった上、すぐさま、近藤勇を呼びつけたものだ。

勇、黒谷の本営へ駆けつけて見ると、原田たち六名が緊迫の表情で迎えたものだから、

「なんのことだ、貴公たち……」

さすがに、びっくりしたらしい。

会津侯が重病の床から起き出て、苦痛をこらえながら、

「京都守護職として、躬は、新選組をたのみにおもうことすこぶる大きい。ようきいてもらいたい。新選組は、もともとおことらが申し合わせによって成ったものではないか……それが、いまここに、このような仲間割れがあって、もしも解散いたすようなことになっては、新選組をあずかる躬が不明ともなろうし、さらにまた不逞浪人どもにつけこむ隙をあたえることにもなるではないか」

じゅんじゅんと説いた。

勇も二の句がつげない。

永倉新八は、ここぞと、
「近ごろ、武田観柳斎などが局長に対し、新選組は局長ひとりのものである。われわれは臣下として局長につかえるべし……なぞと、しきりに諂うため、当初の目的がうしなわれつつあるようにおもいます。よくよく、お考えいただきたい」
はっきりといった。
勇、顔をしかめている。
「どうじゃ、近藤。永倉たちの申すことも一理あるようにおもわれるが……」
「は……御病中をおさわがせいたし、まことにもって……」
「わかってくれたか」
「ははっ……」
勇も、ばかではない。
いささか、冷たい汗が腋の下あたりへ浮いたようであった。
「よし。さっそくにわかってくれて躬もうれしい。これ、たれぞある。酒肴をもて。かまわぬ、ここへはこべ。躬が仲人じゃ。仲直りの杯をとらす」
守護職にとっては何物にも変えがたい新選組であるから、会津の殿さまも病気どころではない、一所懸命なのである。
根が生一本の勇だけに、この松平容保の態度にはすっかり感動してしまい、原田や永倉たちにも、

「みなのこころは、よくわかった」
こだわりを捨てた。
一同、屯所へ引きあげて来るや、勇はさすがに苦い顔で居間へ引きこもってしまったが、土方歳三が副長室からあらわれ、永倉新八を呼びとめ、
「おい、永倉君。やったな」
「いけませんか」
「だれもいかんとはいってない。おれも武田は大きらいだよ」
いつもは永倉と肌が合わぬ土方なのだが、めずらしくにこにこして見せ、
「よく、やってくれた」
こちらの手をつかんで強く打ち振ったときには、永倉も啞然とした。
さあ、こうなると事態は一変した。
隊士たちも武田のそばへは寄りつかなくなるし、武田観柳斎もまた、にたにたと愛想笑いをうかべて、永倉、原田、斎藤などのそばへ来ては、しきりに世辞をつかいはじめる。
「原田さんが先頭に立って隊内の粛清をやるらしい」
などと〔うわさ〕も飛ぶし、武田はもう生きた心地もしなかったらしい。
この事件あって間もなく、近藤勇は自分でも思いがけず、急に江戸へ向うことになった。

三

それというのも、幕府の煮えきらぬ態度にたまりかねてきたからである。

長州征討の勅令が下ったというのに、肝心の幕府の腰が上らない。

いや、幕府が命令を下しても大名たちが受けないのだ。

征討軍・総督として、徳川の親藩（御三家）の一である尾張名古屋六十一万九千石・徳川慶勝が任命されたけれども、慶勝は名古屋城に在ってぐずぐずと日を送るのみであった。

朝廷でも、

「せっかくに長州を討てと勅令を下しても、幕府にはその気がないのか」

と、いうことになる。

守護職としては、京に居たたまれぬ気持であった。

松平容保は侍臣・小森久太郎を名古屋へつかわし、

「すみやかに上洛なされたい」

と、うながした。

そこで、ようやくに徳川慶勝が京都へあらわれたけれども依然、知恩院の宿舎へこもったきりで、征討軍の編成にとりかかるわけでもない。

約十日後になって、征討軍先鋒を命ぜられている肥後・薩摩・安芸・彦根・土佐な

どの諸藩重役を宿舎にまねき、なんとなく宴会などをもよおしたりしている。

会津藩もたまりかねて、肥後・久留米・安芸などの諸藩重臣をまねき、ここへ尾張藩重役を呼びよせ、

「いったい、尾張侯は征長総督の大任を受けられながら、どういうおつもりなのか。このようにだらけきったる御取扱いにては諸藩も惰気を生じ、御公儀の威権もたちまちに失墜することになりましょう」

と、なじった。

すると尾張藩代表が、

「いや、兵をおこすことは国家の大事でござるゆえ、百事の完備を待って出発いたすつもりである」

見えすいた逃げ口上なのである。

松平容保は、前々から将軍上洛を急がせるべく何度も江戸へ使者を送っているが、幕府閣僚はまた、

「尾張侯が征長総督として進発されるを待って、将軍家も上洛あそばされよう」

などと、のんきな返事をよこし、これは、かの関ヶ原合戦における東照公（徳川家康）の故事をまなんだというのだが、

「なにをばか気たことを……」

このことを洩れきいて、近藤勇、たまりかねたのである。

たまりかね、会津侯へ目通りをねがい出て、
「不肖ながら、私めが江戸へまいり、殿の御名代ともなり、老中諸侯へ将軍家御上洛のことをねがい出て見たく存じます。近藤といたしましても、この眼をもって江戸の様子を見とどけてまいりたいのでございます」
熱意をこめていうや、松平容保も、
「やれるだけのことをしたい。かまわぬ。躬が老中方へ添書するゆえ、すぐさま江戸へ出発せよ」
すぐに、ゆるしてくれた。
勇は、このこと以外に、もう一つ江戸行の目的がある。
それは、江戸にある有為の人材をあつめ、これを新選組に迎え入れようということであった。
で……守護職の許可が下りるや、勇は藤堂平助を呼び、
「貴公は江戸に顔がひろい。これぞとおもう人びとをあつめておいてもらいたい」
その日のうちに藤堂を先発せしめた。
次に、永倉新八を自室へまねき、
「江戸へ同行してくれぬか」
「はあ、まいりますよ」
「今度は、どうしても君のちからが要る。よろしくたのむ」

勇は、ねんごろであった。

これは、永倉の旧主・松前伊豆守が先頃、幕府老中に任じたので、永倉の口ききで、松前侯へ目通りをねがい、将軍上洛についてちからをそえてもらう計画なのだ。

永倉はいま、松前家を脱藩というかたちになっているが、実父の永倉勘次は取次役をつとめ、いまも松前藩江戸屋敷内にいる。

「承知しました」

「ありがたい。たのむ」

三日後。勇は永倉のほかに尾形俊太郎と、例の武田観柳斎をつれて京都を発し、江戸へ急行した。

あの事件以来、勇は依然として武田を愛用していたらしい。

一行は肩がわりの早駕籠をつらねて一気に桑名まで飛ばし、ここから船で熱田へわたり、六日後の夜ふけに昼夜兼行で江戸へ到着した。

足かけ二年ぶりの江戸である。

なつかしい小日向・柳町の試衛館道場へ入ると、すでに藤堂平助がついていたことだし、妻のつねが、

「今日か明日かとおもい、気もそぞろでございました」

三歳になった瓊子の手をひき、飛びたつように玄関へ出迎えた。

「むむ……」

大きくうなずいた勇が、にっこりとして瓊子を抱きあげるとその姿をまじまじと見つめ、つねは、むしろ茫然とした表情になった。

つねにしてみれば、この二年間、一度も顔を見なかった夫の勇にそなわった貫禄に圧倒された……と、いってよい。

「つね。留守中、苦労であったな」

勇もまた、悠然として声音までもちがうのだ。

そばで、これを見ていた永倉新八が困ったような苦笑を洩らした。

四

その夜……。

二年ぶりで、近藤勇は妻を抱いた。

つねは、火照りきった豊満な躰を夢中で押しつけてきて、充分に燃えた。

勇も、むろん、これにこたえたわけだが……。

「ああ、もう……どのように旦那さまが恋しかったことか……お察し……お察し下さいませ」

ともに裸身を抱き合ってみれば、つねも勇の貫禄などに気をとられたりはしない。

「京の女ごを、このお手でお抱きになりましたのでしょう」

「なにを申す」

「いいえ、うそ」
「うそも何もないではないか」
「いや、いや……ええ、もっと強く抱いて下さいませ」
つねのみだれ方も烈しい。
だが、どうも勇、ちょっと興ざめのかたちなのである。
（ああ、京の女とくらべたら、まるでその、いわゆる月と鼈というやつだ……）
勇は、京の島原の遊女・錦太夫とも依然なじみをかさねている一方、このごろは、三本木の芸妓・駒野とも深い間柄となっているし、祇園石段下の〔山絹〕という茶屋へ出かけ、このほうは相手かまわずであって、
「いやどうも、局長があんなに助平先生だとは考えてもみなかったよ」
女好きでは人後に落ちぬ原田佐之助が、あきれ顔で永倉新八にいったことがある。
「それあねえ、佐之助さん。局長は酒がたのしめない。のめるけれども味がわからねえ。ま、あれだけにひどい気骨を折って、夜も昼もなく駆けまわっているんだから、どこかでその気ばらしをしなくては保たねえわさ」
永倉のことばの通りである。
けれどもまた、女にかけてはすこぶる晩生の勇だけに、たくさんな俸給をもらって威勢も得、京の女の肌へ接するたびに、
（女とは、このような生きものだったのか……）

ひとりひとり、鴨川の水にみがきぬかれたねり絹のような肌身の、それぞれにまた得もいわれぬ媚態をしめすさまを、目をみはるおもいでながめ、耽溺していったのである。

媚態といっても京女のそれは、関東の女たちの、ただもう鼻息をあらげて夢中にふるまうのとはちがい、そのことをおこなう前後の演出が艶やかに仕くまれ、それが女の演技というよりも、男をもてなすための自然な所作としてあらわれる。

錦太夫のような遊女にしろ、勇のように武骨な関東男にはまるでどこかの大名の姫君でも抱いているように幽艶なおもむきを感じさせるのであった。

しかも閨房の技術が複雑をきわめ、それがまたやわらかい京ことばと、上品な身のこなしをないまぜて遺憾なく発揮されるのだ。

ただやたらに熱い肌身をもだえさせてしがみついてくるつねの躰へ、

（ちがえばちがうものだ……）

勇、もてあまし気味である。

だが、妻への愛情がさめたわけでは無いから、

「旦那さま。もっと強く、強く……」

と、うめき声をあげるつねには、なんとか懸命にこたえたつもりである。

けれども翌朝になると、つねはどことなくさびしげであった。女の直感で、勇の愛撫のかたちが違ってきていることをさとったらしい。

それにひきかえ、病床にある近藤周斎老人は、立派になった勇を見て大よろこびである。

道場は、土方歳三の義兄・佐藤彦五郎が一手に運営してくれてい、むしろ門人も増えたようだ。

彦五郎も勇の帰宅を知ってすぐに駆けつけて来、

「今後、江戸へもどるときは、もう立派な御旗本ゆえ、道場は要りますまい。もっと大きな屋敷へ住まわれることになろうから……」

などといった。

勇は毎日、朝から夜おそくまで外出し、諸方へ駆けまわっている。

永倉新八の口ききによって、首尾よく松前伊豆守へも目通りすることができた。

伊豆守も会津侯からの手紙を読み、熱心に幕府閣僚を説きもし、近藤勇を紹介して、直かに勇の口から京都の情勢を説明させるよう取りはからってくれた。

勇も必死である。

将軍の上洛が一日おくれれば、それだけ〔公武合体〕の結実がおくれる。おくれるばかりか、せっかくにここまでもってきた幕府側の苦心がすべて水泡に帰してしまいかねない。

だが、どうも江戸の幕府首脳の反応はこころもとない。その一方では、

「実のところ、わたしもおどろいた」

と、勇が藤堂平助や永倉新八に洩らした。

幕府の金庫は、いまや火の車なのである。

長州征伐の費用は、出兵する諸大名に押しつけるとしても肝心の将軍が京へのぼるための費用が無いというのだ。長年の慣例によって、将軍の行列や旅程、その他の仕きたりをくずすことはできぬ。そのためには莫大な費用を必要とする。

「いや、たとえていえば将軍家御一人にても御上洛あそばさねばなりますまい。総大将の英姿を眼前にのぞまねば長州征討のこともはかどりませぬ。いまや天下にとっても御公儀にとっても、のるかそるかの大事でござります」

勇は老中たちへ説いてまわったが、

「ばかを申すな。そのように簡略な御上洛をなされては、お上の御威光にかかわろう。かえって天下の物笑いになるではないか」

どうしても取り合ってもらえない。

勇は、毎夜、苦虫をかみつぶしたような顔つきをして試衛館へ帰って来た。

そのかわり、人材をもとめて、これを新選組へ迎えるという別の目的はうまく進んだ。

藤堂平助が毎日のように出歩き、いろいろと工作をしていたようだが、

「局長。伊東甲子太郎氏が、お目にかかるそうです」

京都へもどる五日ほど前になって、ようやく、この知らせをもってきた。

伊東甲子太郎は常陸の浪人で、深川・佐賀町に剣術の道場をひらいている剣客だが、学問も深いし、当時、相当に知られた人物である。

藤堂とは同じ北辰一刀流だし、かねてから面識もあり、勇も藤堂も京都を出て来るときから伊東甲子太郎へ目をつけていたわけで、

「そうか、それは何よりだ」

勇は大よろこびであった。

「いやおどろきました。二年ぶりに伊東氏の道場へまいったのですが、門人も七十名をこえておりまして、御府内での評判も大へんによろしいようです」

かねて藤堂から報告を受けていただけに、伊東一人のみでなく、うまくゆけば伊東門下の俊英たちも新選組へ迎えることができようというものである。

江戸を発つ三日前に、勇は藤堂、永倉らをともない、薬研堀の料亭〔草加屋〕の二階座敷で、伊東甲子太郎と、その弟の三樹三郎に会見をした。

その夜。勇は上機嫌で帰り、

「つね。酒の仕度を」

と、命じた。

「いや、実に大した人物だ」

勇は一同と杯をあげながら、

「ともあれ、眼の青い毛唐人に、わが国の地を踏みにじられてはならん、というので

な、大いに共鳴をした。そのためには何よりも天子おわす京都に平安をもたらさねばならぬ。この一事をもって、伊東氏は新選組に協力することを惜しまぬといってくれた。剣士、というよりも学者だな。いうことがすべて大きい。弁説もさわやかなもので、実にどうもおどろいたよ。ああいう人物が、新選組の幹部としてはたらいてくれるのを、わしは、かねてからのぞんでいたのだ。うむ、かねてからな……」

などと、べたぼめであった。

伊東甲子太郎は、長身白皙の美男子で、藤堂にいわせると四十をすぎていましょうというのだが、見たところ三十五、六の、颯爽たる風貌のもちぬしである。若いころに水戸へおもむき文武をまなび、その水戸仕込みの激烈な尊王攘夷思想を身につけ、一時は水戸の天狗党に加わり、筑波山へたてこもろうとまでしたほどである。

ちなみにいうと、この天狗党は水戸藩の軽格武士を中心とした急進過激派で、保守派と対立、〔尊王攘夷〕の旗をかかげて挙兵し、これを鎮圧せんとする水戸藩や幕府と戦闘を反復。ついに追われて、現将軍後見役の一橋慶喜に、

「われらのこころをうったえよう」

と、隊列を組み京都へのぼる途中、金沢藩兵にさえぎられて降伏し、主謀者武田耕雲斎、藤田小四郎らは斬罪に処せられた。ときに、この年（元治元年）の十二月というから、勇たちが京都へもどってから間もなくのことであった。

五

京都へもどった近藤勇は、二つの報告をうけた。

一は、隊士・酒井求馬ほか一名が暗殺された事件であった。

これは、勇たちが江戸へ向けて京を発した三日後のことであるという。

その日……酒井求馬は久しぶりの非番で、井関・杉山の両隊士と共に午後から屯所を出て寺まいりなどをしたのち、勇はじめ新選組がなじみにしている石段下の〔山絹〕へくりこみ、大いに痛飲をした。

「ですが、茶屋を出たときは三人とも、酔いもさめていましたし、しっかりしたものでした」

と、同行の井関忠平が語っている。

三人が縄手通りの、建仁寺の塀に沿って五条の方面へ歩んでいると……。

その塀に貼りついていた人影が、すっと三人の前へ立ちふさがった。夜の闇の中で、この人影が酒井求馬の手にしていた提灯のあかりに浮いて見えたとき、酒井は悲鳴をあげ、のめりこむように地へ倒れていたという。

のこる井関と杉山も抜き合せたのが精一杯のところで、その曲者の振う刃の下に、一も二もなく斬り伏せられ、酒井と共に杉山は即死。ひとり井関忠平が間もなく息をふき返し、六波羅観音わきの町家の戸を叩き救いをもとめた。井関もかなりの重傷で

あったが、
「不覚ではないか！」
叱りつける土方歳三へ、
「まったく面目もありませぬが……まるで魔物のような、すさまじいばかりの打ちこみでして……」
「面体は？」
「それが……」
井関は、かすかに唇をふるわせ、
「たしかに、ぼ、坊主あたまの大男で……」
といったものだ。
土方も思わず、
（また、あの飯田金十郎か……）
凝然となった。
これで、金十郎に暗殺された隊士は、山口亥太郎・大和田進・川端重太郎と合せて五名におよんだわけである。
「このままには、しておけぬな」
土方から、この報告を受けた近藤勇は旅装も解かぬままに、
「副長、まだ手がかりはつかめんのか」

「わからん……わからん……」
土方も、めずらしく顔に血をのぼらせ、
「もしも、その飯田金十郎だとすると……他の浪士どもとは別にうごいているらしい。いままでに、われわれや見廻組の手で捕えたり斬ったりした連中からは、なんとしても手がかりがつかめないのですからな」
「実に、困ったことだ」
「まったく……」
「副長。なんとかせにゃならん。そうだろう」
「ええ」
「おれの前へは、少しも出て来やがらぬ」
と、勇は試衛館のころの荒っぽい口調にもどり、
「出たらおのれ、叩っ斬ってやる!!」
ところで……。
別の一は、これも土方歳三からのもので、
「実は局長。練兵館の渡辺昇を見かけましたよ」
「え……京でか?」
「きまってるじゃありませんか。私は、ずっと留守番をしていたのだから……」
「うむ……で?」

「先日、伏見奉行所へ所用あって出かけた帰りに、東福寺門前へ来かかると、ほれ、三ノ橋の茶店がありましょう」
「うむ」
「その茶店の腰かけにすわりこんで、渡辺昇先生、だんごを喰っていたのですよ」
「ほほう……」
「私は馬だったもので、向うも、ひょいとこっちを見上げてね……」
そのとき旅姿の渡辺昇は、にやっと土方へ笑いかけ、
「や、土方さん。しばらくです。だんごでもどうですか？」
大声でいいかけたそうな。
土方歳三は江戸にいたころから、折々、試衛館へあらわれる道場やぶりの応援に駆けつけて来てくれる渡辺昇をこころよくおもっていなかったし、
「めずらしいところでお目にかかる。あなたも、いま流行の尊王運動ですかね」
白眼でじろりと見下し、皮肉たっぷりにいうと、渡辺は、
「兄が、京の藩邸におりますのでね。そこへ国もとから公用でまいったのですよ。近藤先生は御元気でしょうな」
「いま、江戸に行っています」
「一度、お目にかかりたいものだ」
「いつでも壬生の新選組屯所へおいでなさい」

切りつけるような土方の声を受けて、
「そうしますかなあ」
渡辺昇、平然としてこたえた。
「それっきり、私はさっさと来てしまいましたがね、以来、渡辺のことは気をつけています。そもそも、あの男の師匠の斎藤弥九郎は札つきの長州びいきですからな。渡辺だって何をしに京くんだりまで九州からはるばるやって来たのだか、知れたものじゃない」
勇は沈黙した。
すると土方は、
「局長。私は渡辺昇だとて容赦はしませんよ」
きめつけるようにいって、座を立ったものである。
京の町が、冬の気配につつまれはじめた。
十余日の江戸滞在が、夢のようにおもわれる勇であった。
永倉新八などは、原田や山南をつかまえて、
「やはり、江戸だねえ。もう、こっちへ帰るのが厭になっちまったよ」
なぞと、しきりに江戸をなつかしがっている。
勇は、また別の意味で何かさびしかった。
江戸にいたころは、

（おれには、すぎた女房だ）

と思いこんでいたつねも、今度、二年ぶりに会って見ると妙におどおどと自分の顔色ばかりうかがうようなところが見える。それがつまりは勇自身から発散する一種の威容への反射であることに、勇は気づいていない。

威張っているつもりはないのだが、自然と、そうしたおもおもしい言動が身についてしまったのだ。三流の町道場の主が、いまは何十万石の大名と談合をしたり、百数十名の隊士から畏敬の眼をもって仰ぎ見られている。そしてまた、それにふさわしい服装、体裁に勇はつつみこまれ、生活しているのであった。

それが、朝のあいさつを受ける場合にもあらわれる。多勢の隊士がいる前で、永倉や原田などが「お早うございます」というのへ、江戸にいたころと同じように「や、今朝は冷えるね」などと受けるわけにもゆかぬ……そういう神経が、いまの勇には無意識のうちにはたらいているのである。

むすめの瓊子にしてもだ。見ちがえるばかりに成長したことに瞠目し、よろこび、勇も手を差しのべはしたが……。

どうも瓊子のほうで馴つかない。

胸を張り反りかえっている父親の威容に、三歳のむすめは馴じめない。

そうしたことの一つ一つが、いま京都へもどって来た勇の胸へ、にじみこんで来るようなさびしさとなっておもいおこされるのだ。

（つねを、もっと抱いてやればよかった。あれもさびしいおもいをしていただろうに……）

そのことも悔まれた。

そして……。

その年が暮れ、元治二年の正月となった。

この年は四月に改元のことあって、慶応元年となる。

旧臘中に、江戸から伊東甲子太郎が京都へ到着をした。

伊東は、実弟の三樹三郎を筆頭に、加納道之助、服部武雄、佐野七五三之助、篠原泰之進、中西登、内海二郎の一党七名をしたがえ、壬生の屯所へ入ったが、つづいて、これも伊東を慕って新井忠雄、毛内有之助など十余名も参加し、その上年内のうちに四十名ほど諸国脱藩の武士や浪士たちが入隊をした。

こうして、新選組は相当の充実ぶりをしめすことになり、年が明けた正月五日に、近藤勇は隊の組織について、新編制をおこない、これを発表した。

およそ、次のごとくである。

総長　近藤　勇

副長　土方歳三

参謀　伊東甲子太郎

組長　一番隊　沖田総司
二番隊　永倉新八
三番隊　斎藤　一
四番隊　松原忠司
五番隊　武田観柳斎
六番隊　井上源三郎
七番隊　谷三十郎
八番隊　藤堂平助
九番隊　鈴木三樹三郎
十番隊　原田佐之助

そのほか〔伍長（ごちょう）〕とか〔取調役並監察〕とか、いろいろな職制が定められた。
伊東甲子太郎が、重要な地位をしめ、その温厚な人柄は、たちまちに隊士たちの信望をあつめた。
正月十五日。
近藤勇は、伊東甲子太郎一派の歓迎の宴（うたげ）を、島原の角屋においてひらいたが、その夜、勇は思いもかけぬ女と再会をすることになる。

急流の淵

一

この夜の島原遊廓における伊東甲子太郎一派歓迎の宴は、ほとんど角屋を買いきりのかたちで、遊女たちも他楼からまねくことになった。

例の、近藤勇愛寵の錦太夫は旧臘、丹波の資産家に身受けをされたとかで、もう島原にはいない。

そのかわりにというわけで、錦太夫を抱えていた木津屋から〔深雪太夫〕が、勇の相手として宴席へあらわれた。

戸外の冬の夜の寒さも消し飛ぶばかりのさんらんたる燈下に、各部屋満員の角屋から、三味線、太鼓、笛の音がわきたつ。

奥庭に面した大広間の正面に、伊東甲子太郎とならんで座をしめた近藤勇の傍へ、しとやかに一礼してすわった深雪太夫を見て、

「お……？」

勇が思わず、意外の声をあげると、深雪太夫も、

「あ……」

忘れてはいなかったようである。

去年の夏。あの池田屋騒動があった少し前に、飯田金十郎らしい浪人を見かけたというので、勇みずから隊士をひきい、池田屋の裏手一帯をしらみつぶしに探しまわったとき、囲いものらしい洗髪の女が隊士たちにかこまれ、困惑のところをたすけてやったことがある。

五条の藤屋という菓子舗で売っていて、勇が大好物の〔白兎〕を思いおこさせるようなあの洗髪の女……それがいま、島原の遊女・深雪太夫となって勇の眼前へあらわれたのだ。

「あのときの？」

それでも尚（なお）、勇が半信半疑で問うや、

「あい。あのときの女でござります」

「やはり、な……」

あのとき洗髪の、化粧の香もない素肌の、ふっくらと白い美しさに瞠目した勇であったが、

「ふうむ……」

となりの伊東甲子太郎が、自分の相方の夕顔太夫はそっちのけにして深雪太夫へ見とれたほど、島田まげへ鼈甲（べっこう）の笄（こうがい）を定めの八本さしこみ、夏化粧を凝らした今夜の彼女というものは、

「座敷へ入って来た一瞬、私もちょいと、息をのんだものだ」

めったに物に動じない土方歳三さえ、後になって洩らしている。

勇は、この夜から深雪太夫へ熱中した。

深雪太夫は実名をおわかという。

おわかは金沢に生まれたが、

「私が十になったころには、もう父親も母親も亡くなっておりました」

とのことだ。

京の親類へあずけられたが、十四歳の春になると三本木の茶屋奉公へ出され、十八の正月、島原の木津屋から若太夫の名で遊女に出た。

その翌年……というと文久三年の夏のことだが、油小路・出水上ルところの筆問屋・平野屋新蔵によって身受けをされ、三条小橋・池田屋裏の小さな家へ囲われたのである。

当時、新選組は発足したばかりの苦労時代で、芹沢鴨一派はともあれ、勇も土方も、まだ島原などへは足をふみ入れる余裕はなかったといってよい。

で……。

去年、おわかが初めて勇に出会ったころから、旦那の平野屋新蔵の風向きがよろしくなくなった。遊び好きの新蔵は商売も忘れて借金だらけとなり、年が押しつまると平野屋倒産ということになった。

「こうなれば、私もだまっているわけには……」

その借金を返すというよりも、平野屋新蔵を更生させるための資金を得るため、おわかは〔旦那〕にも内密で、もと自分が出ていた木津屋へ、ふたたび、身を沈めることにした。この身売りの金で、平野屋はいま伏見で小さな商売をはじめている。

それというのも、おわかとしては平野屋新蔵になみなみでない世話を受けていたらしいし、おわかをわがものとしてからの新蔵はぴたりと遊びをやめ、倒産に直面した家業のたて直しに奔命したが、ついにおよばなかったらしい。

「なるほど……」

深雪太夫のおわかから、このはなしをきくにおよんで近藤勇、もうたまらなくなってきて、

「どうだろう、土方君」

土方歳三を屯所の居間へまねき、相談をもちかけたものだ。

深雪太夫を身受けしたい、というのである。それにはどうも金が不足であった。

いまの勇は、月に七十両もの手当を受けているけれども、江戸へ送金のほか、諸方との交際費もほとんど自分の給料でまかなっているし、残金は気ばらしの茶屋遊びの費用へ惜しみなくつかい果してしまうから、

「おれひとりでは、どうにもならん。たのむよ、歳さん」

江戸時代のくだけた口調で、

「なんとかしてくれ」
「総長。私にだって、そんな金はない」
「お前さんに出せといっているのじゃあないぜ」
土方は、にやにやしながら、
「では、どうしろというんです？」
わかりきっているくせに白ばくれて、勇を焦らすのである。
「たのむ、たのむ」
「江戸の奥方へいいつけますよ」
「ばか」
結局、土方歳三が〔会計係〕の川合耆三郎へもちかけ、隊の費用から身受けの金を捻出することになった。
この金、三百二十余両という。
「いや、すまなかった。そのかわり、半年のうちには必ず返すから……」
勇がよろこんで、顔を笑みくずしながらいうと、土方はにこりともせず、
「当り前ですよ」
「おい歳さん。そうお前、あしらうなよ」
「深雪太夫を、どこへ囲います？」
「さて……」

「それも私へ押しつけるつもりですか？」
「外聞もあるし、な……」
「全く、ばかばかしい……」
「そうお前、あたまごなしにいわずともいいではないか」
ぶつぶついいながらも、土方歳三が手をまわし、すべてをやってくれた。
七条通り醒ヶ井・木津屋橋下ルところに興正寺という寺の別邸がある。ここを借り受け、身受けしたおわかを住まわせることにした。
近藤勇は、それから半年の間に、土方への約定通り、隊からの借金をきちんと返済している。
相変らず、多忙をきわめる毎日であったが、おわかを囲ってからの勇は祇園の〔山絹〕へも行かず、三本木の芸妓・駒野とも手切れのかたちとなり、ひたすら、おわかの肌身へ溺れつくしているらしい。
「もう、いつまでも隠しておくこともありますまい。組長連中だって大っぴらに休息所（妾宅）をかまえているのだ。いざというとき何かと不便ですよ」
と、土方がいうものだから、隊への返金がすんだ後に、醒ヶ井のおわかの住居は、総長・近藤勇の〔休息所〕ということになり、こうなると、
「今夜は醒ヶ井へ泊る」
勇も堂々といいおいて、おわかのもとへ行く。

何か異変でもあれば、すぐに屯所から知らせて来るし、勇も、
「なるほど。便利だ」
何か、京都へ来て、はじめて〔家庭〕をもったようなこころもちになれた。
醒ヶ井の妾宅は、現在の京都駅の西側のあたりにあり、すぐ近くの鎌屋町には二番隊・組長の永倉新八の〔休息所〕があった。
永倉はここへ、島原廓内・亀屋の芸妓で小常という美女を囲っている。
或朝のことだが、非番の永倉は小常のところで一夜をすごし、屯所へ出勤するため、西本願寺前の通りへ出ると、向うから、これも醒ヶ井帰りの近藤勇が胸を張り、馬上悠々としてやって来るのへばったり出会ったものだ。
（なんだ、まあ総長のすました顔つきは……）
昨夜は、おわかとしたたかにたわむれたくせに……と、永倉は同じ〔休息所〕帰りの親しさをこめて、いきなり駆け寄り、
「総長。昨夜はおたのしみですな」
無邪気に笑いかけた。
すると近藤勇、まるで苦虫を噛みつぶしたような顔つきで永倉を見下し、
「天下の往来において乱りがましきことを、軽々しく口に出すな！」
叱りつけておいて、馬に鞭をくれ、まっしぐらに駆け去った。
「何をいやあがる」

永倉新八、おもしろくない。

「乱りがましきことを……と来たのには、あきれ返って物もいえなかったよ」

屯所へ来て仲よしの原田佐之助をつかまえ、憤慨すると、原田は腹を抱えて笑い出した。

「何が可笑しい。あれが三年前の近藤さんかと思うと、なさけなくて涙も出ねえ」

「照れているのさ」

「照れるなら素直に照れるがいい。何だ、馬上にふんぞり返りやあがって、天下の往来において、と来やがった。軽々しく、と来やがった」

「怒るな、怒るな」

そこへ、近藤から永倉へ呼び出しがかかった。

「今度つまらねえ威張り方をしたら、おりゃもう思いきりいってやる」

永倉新八、憤然と総長室へ入って行くと、勇はちらと見たが、すぐにむっつりと机上の書類へ眼を落とした。

「総長。何の御用です？」

「うむ……」

にこりともせずに、勇が傍にあった反物の包みを永倉の前へ押して寄こし、照れくさそうにこういった。

「他からもらったものだ。薩摩絣の良い品だそうだ。貴公、小常さんに縫ってもらっ

て着たらよい」

二

伊東甲子太郎一派が参加してからの新選組は、隊員の人数も二倍、三倍となったし、したがって活動ぶりも大がかりなものとなり、

「今日は、どこどこで誰を斬った」

とか、

「明日は、どこの浪士たちを斬る」

とか、京都市中に潜伏する革命派の浪人狩りがおこなわれぬ日はないといってよい。そのかわり、隊士たちも斬られる。

ふくれあがった隊士を収容しきれぬ壬生の屯所内は、いつも血のにおいが立ちこめているようで、騒然とした興奮状態にあり、

「どうも、せまくなって来たな」

近藤勇も、

「どこかへ、新しい本営をもうけぬといかん」

と、いい出した。

「私にまかせてくれませんか」

土方歳三には、かねてから腹案があったと見える。

こうしたことには万事にぬかりのない土方であったから、
「よし。だが副長、守護職のほうへも本営移転のことは通じておけよ」
「むろんのことです」
それから土方は毎日のように諸方へ出かけて、適当な場所をさがしているようであった。新築する余裕もないし、どこかの屋敷を借り受けるより仕方がないのだが、
「一時は、借りるとしても……」
と、土方は勇に奇妙な微笑をうかべて見せ、
「しかし、かならず新築して見せますよ」
「金もないのに、何をいう」
「あるところにはある」
「おい、歳さん」
「え……？」
「無茶はいかぬぞ。死んだ芹沢鴨の二の舞いをおぬしがする筈もないが……」
「ま、見ていて下さい」
土方歳三が眼をつけたのは西本願寺である。
寺内の〔集会所〕を、
「借り受けたい」
と、西本願寺へ申しこんだ。

集会所は、同宗の僧侶が京都へあつまったときに宿泊するところで、大説教や大会議のときも使用される。なにしろ五百畳敷の大広間であるから、これをいくつにも仕切り、隊士を収容しようというのだ。

西本願寺では狼狽した。

新選組などに入られては、どんな事態が起きるか知れたものではない。

諸方から群れあつまった浪人あがりの隊士の殺伐な言動を何よりも恐れたし、勤王方の志士たちの新選組襲撃ということもあり得る。そのようなことが起きれば必ず放火されるだろうし、

「とても、御希望にはそえませぬ」

と、西本願寺から返事をよこした。

だが、それ位のことで引き下るような土方歳三ではない。

「守護職からもゆるしを得ていることであるし、何よりも天下国家のためでござる。ぜひともちからを貸していただかねばならぬ」

何度ことわられても承知せず、

「集会所は、何時あけわたして下さるのか？」

勝手にきめこんでは、西本願寺の確答をせまるのである。

「もういいかげんにしたらどうだ」

たまりかねて、山南敬助が土方にいった。

山南はいうまでもなく、江戸の試衛館時代からの近藤勇一党で、新選組生えぬきの幹部だ。

芹沢鴨の横死以来、新選組は近藤勇を頭に、土方と山南がこれをたすけて運営されて来たといってもよろしい。

けれども池田屋騒動があったころから、どうも山南敬助と近藤・土方の間が円滑にはこばなくなってきていた。

山南は仙台脱藩の士であるが、剣術もすぐれ、しかも学識ゆたかで温厚無類の人物。でっぷりとした躰つき、色白で眼もとのすずやかな、見るからにたのもしい風貌のもちぬしで、隊士たちも、

「山南先生、山南先生……」

と慕い、何かにつけて相談をもちかけたりする。

山南もまた、隊士たちのめんどうを骨身を惜しまずにしてやったという。

隊規を乱した者は容赦なく切腹というので、土方歳三は、たとえ自分が眼をかけていた隊士でも、

「隊のさだめというものは死を賭して守りぬくものだ」

とあって、眉毛ひとつうごかさずに、

「腹を切れ」

処刑を断行する。

しかし、山南敬助なら、切腹に相当する失敗を見ても情状を酌量してくれ、
「これからは気をつけるのだぞ」
内密に、隊士の失敗を見のがしてくれることもあって、山南のおかげで腹を切らずに済んだ者もかなりいる。
土方歳三にして見れば、こうした山南の仕様が、どうも気に入らない。
「寄せあつめの浪人たちを立派な隊士とするためには、山南さんのような温情が邪魔になる。片手落ちの習慣がつけば、隊規などあって無きがごとしではないか」
面と向い、山南へ喰ってかかったことも何度かある。
そして、伊東甲子太郎一派の入隊と共に発表された新編成の役付から、山南敬助の名をのぞいてしまった。これは土方の主張を総長・近藤勇が容れたからだということになる。
それまでは〔副長〕に準ずる仕事をしていた山南だが、いまは閑職。いえば新選組の隠居のようなかたちで、重要会議への列席もゆるされない。
山南としても、孤独で、おもしろくない日々を送りつづけていたのだ。
西本願寺の件にしても、山南が土方へ、
「厭がるのを無理押しにしてはいかぬと思う。新本営をもうけるなら、別に道もあるだろう」
こういうと、土方は冷笑を露骨にし、一言もこたえず、さっさと座を外してしまっ

た。それで山南、今度は近藤勇へ、

「坊主どもを相手にしてぐずぐずいわれては、新選組の恥ともなりましょう」

と、進言をした。

それもこれも、此頃の新選組は勢力頂天に達し、近藤勇にしても世間への気がねとか評判とかを全く気にとめなくなり、

「われわれは天下のために、いのちを捨ててはたらいている。これほどのことはやってのけてもかまわぬ」

と、何事にも強引な仕方が多くなって来ている。内省的な山南敬助だけに、新選組全体が以前とまるで変ってしまったように思えてならない。

「すべて、土方君に一任してあるのだから……」

このときも近藤勇は、山南の進言を採りあげようとしなかった。

そして、ついに悲劇が来た。

山南敬助、突如として屯所を脱走したのである。

無断脱走は、隊規の中で〔切腹〕ときまっている。

ときに慶応元年二月二十一日であった。

山南はうまく脱走したが、土方歳三は、かねてから注意ぶかく山南の行動を監視していたと見え、日が暮れぬうちに脱走と気づいて、

「沖田君。すぐに追え！」

沖田総司を起し、厳命を下した。

沖田は試衛館のころから山南には可愛いがられていたし、どうも厭な役目であったが、多勢の隊士の手前もある。すぐさま馬に飛び乗って山南を追った。

三

山南敬助は、近江・大津の宿へ泊っていたところを沖田総司に発見された。

追手は沖田一人なのだが、

「君が来たのか……」

これを見るや、山南は、

「君が相手では、とても逃げられないね」

さびしく笑い、すべてをあきらめた様子であった。

「なぜ、脱走なぞをなすったのです？」

「わからない。逃げ終せるとも考えていなかったよ」

「では、なぜ……？」

「屯所にいるのが厭で厭でたまらなくなった……自分でもわからぬうちに、ふらりと、出て来てしまった……」

「山南先生……」

「もういうな。抵抗はしないよ。さ、一緒にもどろう」

かくて、屯所へ連れもどされた山南の取調べには、
「おれがやる」
と、土方歳三が買って出て、脱走の理由を問い糺したが、山南は石のように黙りこくったまま、一言もこたえようとはせぬ。
「あなたがこたえぬというのなら、もう何もいいますまいよ。では、無断脱走ということになりますが、よろしいのですな」
と……山南は軽侮の笑いを土方へ投げつけ、
「御勝手に」
はじめて口をひらいた。
土方と山南とは、江戸にいたころはともかく、新選組が生まれてからは、どうも気が合わない。
土方は理論よりも先に直截な行動力をもってすべてを押し切ろうとする。
「このような天下動乱の際には理屈など通るものではない」
と、いうのだ。この彼の信念は、去年の長州軍の皇居攻撃がおこなわれたときから一層に強固なものとなってきている。
口に〔勤王〕をとなえながら、皇居へ砲火をあびせ、厭がる天皇をうばい取って長州へ移し、新政権を強引に打ちたててしまおうという彼らの〔勤王革命〕は、
「無謀きわまる。あのように狂犬のような奴どもを相手にして闘うのだ。こちらもよ

ほどの覚悟をしてかからねばならん」

だから、西本願寺へ屯所を移すことなど、当然きわまることだと思っている。

農民出身の土方だけに、こうなると本願寺の高僧などは歯牙にもかけない。

それにくらべると山南敬助は武家育ちのインテリだし、粗野な土方の行動力にはどうしてもついてゆけない。

山南は、急に片ひざを立て、顔面蒼白となり、

「土方君。私は、この重大な時局にあって、めったやたらに斬り合い、人の血をながすことが厭になっただけだ」

烈しく叫んだ。

「そうですか。それではもう仕方がありませんな」

と、冷然たる土方。

「貴公のような男には、いくら語ってみてもわかるまい」

「わかりませんね」

土方は、ぱっと立ち、まるで抜き打ちでもかけるような鋭い口調で、

「脱走は切腹という隊の掟です。これは御承知ですな」

いい捨てるや、さっさと自室へ入ってしまった。

そして、永倉新八を呼びつけ、

「君が介錯をしてくれ給え」

と、命じたものだ。
永倉は、すっかり滅入ってしまい、
「おい困ったよ。実にこれは、ひどいもんだ、ひどいもんだ。とてもおれには山南さんの首を打ち落とすことは出来ねえ。どうだ原田。お前さんが代っておくれよ」
原田佐之助へ持ちかけたが、原田も江戸以来の同志であり、いろいろ面倒も見てもらった山南敬助の介錯をする気にはとてもなれない。二人とも遊びの金につまって何度も山南から金を借りたことがある。
原田が逃げてしまったので、永倉新八は他の隊士たちをつかまえては、
「たのむ、代ってくれ」
必死の面もちでたのみこむのだが、だれ一人、応ずるものはいない。
すると沖田総司が永倉を自室へまねき入れ、
「永倉さん。私が代りましょうよ」
しずかにいった。
「沖田。君はしかし、山南さんにはずいぶんと世話に……」
「私が介錯をすれば、きっと山南先生もよろこんでくれましょう。どうせ、だれかがやらねばならないのだから……」
「君は、君は……」
と、永倉は感に耐えぬ顔つきで、

「君は若いのに、気が強いのだなあ」
あらためて、この肺を病んでいる白面の青年剣士をまじまじと見つめた。
やがて、山南の切腹の時が来た。
伊東甲子太郎は入隊以来、何かと山南の相談相手になり、彼の苦悩に同情を寄せていたようだが、切腹の時がせまるぎりぎりまで、総長室で近藤勇とひざづめのかたちとなり、
「なんとか切腹だけは、おゆるしをねがいたい」
ねばりにねばったが、これぱかりは勇も、
「ゆるしましょう」
とはいえない。
これまでに脱走して切腹させられた隊士は約二十名におよぶ。
それを、山南だけを特別あつかいにするわけにはゆかぬ。もしも彼を助命すれば、
「脱走しても、切腹にはならぬ」
という、その特例をはっきりとかたちの上でしめすことになってしまう。となれば、土方副長のいうように「隊規が隊規でなくなってしまう」のである。
勇も敬愛する伊東甲子太郎の言だが、
「これだけは……」
と、突っぱねた。

勇としては、山南に何らふくむところはない。
むしろ、
（どうしても隊をやめたいというのなら、なぜ、おれにだけ打ち明けてはくれなかったのか……そうなれば何とかうまく、公用にかこつけて江戸へでも逃がしてやったのに……それを事もあろうに土方に見つけられては、どうにもなるものではない）
勇も、厭なことは全部引き受け、悪評を一身に背負ってはたらきぬいている土方歳三の強靭な精神力には、
（とてもかなわぬ）
舌をまいているし、またそれだけに、土方へは感謝しているのだ。
伊東のいうことをきいて、土方を裏切るわけにはゆかない。
ついに、伊東甲子太郎もあきらめざるを得なかった。
二十三日の七ッ刻（午後四時）になると、切腹の用意がととのえられた。
近藤、土方以下、隊士たちの見守る中で、山南敬助は切腹の座につく。
沖田総司が背後へまわり、襷をかけているのを見やって、山南が、
「沖田君。君が介錯をしてくれるのか」
「はい」
「世話をかける。すまないねえ」
「いえ……」

さすがの沖田も、うつ向いたままだ。
このとき、土方歳三が、
「沖田。用意はいいな」
と、声をかけたものである。
山南は活と眼をむき出して、土方をにらみつけ、
「山猿めが……人の血のあたたかさを知れ」
叫ぶや、短刀をつかみ腹へ突きたて、
「う、む、むむ……」
ぎりぎりと引きまわした。

四

この山南敬助の処刑は、相当の動揺を隊士たちにあたえた。口には出さぬが、
(山南さんほどの人物が、新選組に不満を抱いて脱走された。これはどういうことなのか?)
なのである。
温厚で学問にも深い山南が、自分自身の死によって新選組を批判したことになるわけであった。
一方では、

「土方副長の血は凍っているのか」
「なんとか、いのちだけは助けてもよかったのではないか」
「隊規を変えればよいのだ」
ひそかに、非難の声も高まりはじめる。
だが土方は平然たるもので、或夜、総長室へ入ってゆくと、近藤勇が黙念と机に向ってうなだれているのを見て、
「まだ、山南さんのことを考えているのですか」
と、いう。
「江戸以来の同志だったものな」
「総長」
「む……？」
「私は、あんたが脱走しても腹を切っていただくつもりですよ」
勇が、実に厭な顔つきで横を向くと、土方はみずからをはげますような強い声を張って、
「私のような者がおらなんだら、これだけの人間を束ねてはゆけません。憎みたければ、いくら私を憎んでくれても結構だ」
畳を蹴るようにして、部屋を出て行った。
翌日から、土方歳三みずから西本願寺へ出張し、どしどし職人を入れ、集会所の改

築に取りかかった。守護職の会津侯からも許可を得ているので、西本願寺も眼をつぶるより仕方がない。

青竹の矢来を集会所のまわりへ立てめぐらして、本堂との区別をつけたのはよいが、牢屋から首斬りの刑場までこしらえてしまった。寺の内で首斬りをしようというのだから、西本願寺の僧侶たちも仰天したろう。

勇も、

「やりすぎではないのか」

たまりかねて土方にいうと、

「なに、寺の坊主どもは大変なあぶく銭をもうけているのだ」

「それとこれとは、はなしが別だ」

「別じゃあない、別じゃあないのですよ」

「しかし副長」

「ふ、ふふ……ま、見ていて下さい」

土方は、会津侯から下付された二門の大砲を西本願寺へ運びこみ、日中からどかんどかんと射撃練習をはじめた。

西本願寺もびっくりしたが、会津侯も、

「大砲はいかぬ」

寺僧に泣きつかれ、すぐに新選組へ使者をよこして無謀をたしなめた。

勇は、すぐに馬を飛ばして会津侯松平容保へ謝罪をおこなったが、土方はびくともしない。

それやこれやで、

「これはもう、新しい本営をこちらで建てて引き移ってもらうよりほかに道はない」

西本願寺が相当の大金を出し、本営を新築することになった。

場所は、堀川通りの東、不動堂村にきまり、一町四方の地所へ立派な新本営が建築されることになり、

「ほれ、坊主どものあぶく銭を天下のために引き出しましたよ」

土方が勇にいった。

建築がはじまると、土方は厭がらせなまねをぴたりとやめ、

「総長は、しばらくここにいて下さい」

勇を従来通り壬生の屯所へ残し、自分が西本願寺内の本営へつめきりとなり、規律を更にきびしくし、びしびしと隊士たちを取締りはじめた。

いささかでも卑怯なふるまいのあった場合は勿論のことだが、市中の婦女子といかがわしい関係をむすんだ者なども、ただちに切腹を命じ、寸分の容赦もしない。

「鬼だね、土方は……」

永倉も原田も、あきれ返っている。

こうなると、参謀・伊東甲子太郎の、故山南敬助が生き返ってでも来たような温和

さで、しかもどっしりと頼母しげな人柄が隊士たちの信望をあつめるようになった。
伊東もまた、自分が連れて来た同志たちと分けへだてなく、隊士たちのめんどうをよく見てやる。
息苦しいまでの、土方の取締りには、若い隊士などはおびえきってしまう。
永倉新八も伊東びいきとなり、
「ま、つき合って下さい」
伊東にさそわれ、よく島原へ遊びに出かけた。
一度、遊びすぎて帰隊の時刻がすぎてしまったことがある。
「大変だ」
永倉が腰を浮かすと、伊東甲子太郎は悠然として、
「かまいませんよ、永倉君。泊ってしまいましょう」
「とんでもない、切腹ですよ」
「よろしい。腹を切ろうじゃありませんか」
このとき、伊東と共に島原へ来ていたのは、永倉のほかに、藤堂平助・加納道之助など七名である。
永倉も、やけくそとなり、ついに島原の〔角屋〕へ沈没してしまった。
翌朝。伊東を先頭に本営へ帰って行くと、土方よりも近藤勇が激怒しており、
「伊東さん。先に立って、このようなことをなすっては困りますな」

苦虫を噛みつぶしたようにいうと、
「どのように処分されようと、かまいませぬ」
伊東甲子太郎は堂々たるものであった。
一応、伊東以下八名は別室に閉じこめられたが、
「二度と山南先生のときのようなことを、くり返してはならぬ」
隊士たちが騒然となった。
不穏である。
この気配を、土方歳三は敏感に感じとったらしい。
「総長。今度は見のがすことにしましょう」
「しかし……」
「しかし、見のがしましょう」
「土方。山南処刑のときのことを忘れたのか」
「あのときといまと、隊内の様子がちがっています。伊東に切腹させれば隊士たちが黙ってはいますまい。下手に騒動を起せば新選組の恥になる」
「む……」
勇は土方をにらんだ。
どうも、土方のように図々しく、臨機応変なこころのうごき方が勇には出来かねるところがある。

ついに、伊東以下八名は釈放ということになった。これによって伊東甲子太郎の人望は更に大きくふくれあがっていった。

古参隊士で、三番隊・組長をつとめている斎藤一が伊東甲子太郎へ近づきはじめたのは、この事件があった直後だといわれている。

斎藤は、藤堂平助や永倉新八をつかまえて、こういった。

「いや、どうもおどろいた。伊東先生が、あれほどに肚のすわった大物だとは思わなかった。近藤、土方両先生に向って、いかなる御処分を受けようともかまいませぬ……こういって、にっこりと笑われたのを見たときには、おれはもう、すっかり参ってしまってなあ。とにかく大した人物だ。惚れた惚れた。いやもう、まいったよ」

五

この年の初夏……。

将軍・家茂は、みずから上洛して、長州征討の士気を鼓舞した。会津侯や近藤勇が待ちに待った将軍上洛である。

去年の〔禁門の変〕以来、故国へ逃げもどった長州藩を討つべく、幕府は征討軍総督に名古屋の大守・徳川慶勝を任命したが、諸藩の足なみがそろわず、総督自身もぐずぐずと気が乗らない。

そこへもってきて、幕府が最大のたのみとする薩摩藩の態度が、土方歳三などにい

その二日前の四月十三日。

風邪気味の清河は発熱をおして、麻布一ノ橋にある出羽・上ノ山藩邸内にいる友人の金子与三郎をたずねた。

用談を終え、清河が麻布の赤羽橋へかかると、前方から近づいて来た二人の武士が、

「これは、清河先生ではありませぬか」

と、声をかけ、かぶっていた陣笠をとり、ていねいに頭を下げてあいさつをした。

見ると、浪士隊に出役を命じられ、京都から共に江戸へもどった幕臣の佐々木只三郎と速見又四郎なのである。

この二人は、京都市中の警戒にあたる幕府・見廻組の士で、清河が一行を連れて江戸へもどるとき、にわかに出役して道中に加わった。それもこれも、

（おれの首をねらっているらしい）

と、清河八郎は充分に気をつけ、道中いささかも油断をしなかったものだ。

だが、いかにも親しげに、いかにも丁重に二人が笠をとってまで、ふかぶかと頭を下げたものだから、

「これは、御両所……」

清河も思わず、かぶっていた陣笠をぬいで答礼しようとした。

その、清河が笠をとった一瞬……。

いつの間にか背後へ、音もなく近寄って来た別の武士が、物もいわずに、清河の後

ている。

この準備に千両あまりの金が入用だというので、清河一党の中には「天下国家のためにすることであるから、あくどい儲けをむさぼる商人どもを脅やかして、うばい取ろうではないか。横浜あたりの外国人を相手に甘い汁を吸っている商人どもの金などは、うばい取ってもよろしい」

などといい出す者もいたが、池田徳太郎が、「これはよしたほうがいい。尽忠報国のためにはたらくわれわれが盗名を着ることになる。これはいかん」

と、反対をとなえ、ついに取りやめとなった。

徳川政権の実情も、老朽化した政治組織が危急動乱の世に対して敏活にうごかぬありさまとなったが、勤王革命に奔走する人びとも、世界の事情をほとんどわきまえぬし、いったん条約をむすんだ外国の居留民や役人を相手に暴動、暴乱をもって革命の発火点にしようという……。

日本国の代表政権たる幕府としては、これを見すごしているわけにはゆかぬ。

清河一党は、盗みをはたらくことはやめたが、江戸の富商をねらっては、ちからずくで金を献納させたものだ。

横浜一帯をくわしく調査した清河八郎が、

「四月十五日をもって、焼き打ちを断行する」

と、発表をした。

わせると、
「どうも怪しい」
のである。
とにかく、長州征討軍の本営を広島へもうけ、将軍上洛を期にして一挙に長州へ攻めこむつもりでいたところ、薩摩藩では、
「長州が、いさぎよく罪に服するなら、なにも無益な血をながしてまで戦さをすることはござるまい」
と、いい出した。
薩摩藩の代表者は、かの西郷吉之助（隆盛）であって、彼は征討軍の総参謀に任命されているのだが、
「ま、私におまかせ下さい」
幕府の意向などにはかまうことなく、みずから長州側と談判をはじめた様子である。
長州藩も強いことはいえない。
京都から追いはらわれて帰国すると、すぐに英米仏蘭の四国連合艦隊の砲撃を受けた。
これは先年、欧米諸国を蛇蝎（だかつ）のように忌み嫌う長州軍が下関（しものせき）海峡を通行中のフランス、オランダの艦船へ砲撃を加えて以来、
「日本が国をひらき、諸外国と交際をしようとするのを狂人のごとく邪魔をする大名

がいる。それは長州の毛利である」

イギリスが先頭に立ち、現在は長州藩が手中におさめている下関から瀬戸内海への海路を、

「こうなっては武力をもって長州からうばい返さねばならん。徳川幕府にそのちからが無いというのなら、われわれだけでやろうではないか」

というので、フランス、オランダ、アメリカの艦隊をさそい、下関の海から攻撃をかけてきた。

この外国連合艦隊の砲撃によって、長州軍は徹底的に敗北をこうむっている。

下関の砲台は、ほとんど破壊されてしまうし、外国の陸戦隊が上陸して来て、各砲台を占領、大砲六十五門をうばいとられ、たちまちに白旗をかかげることになった。

イギリスは、すぐさま、

「幕府のかわりに長州砲台を攻め落としてあげたのだ。前々から、われわれは攘夷派の乱暴によって莫大な損害を受けている。これ以上は我慢ができない。すみやかに下関港を開放し、償金三百万ドルを支払ってもらいたい」

幕府へねじこんで来た。

「そのような金がある筈はないではないか」

幕府はあたまを抱えてしまった。

勝手にあばれまわっては幕府へ尻ぬぐいをさせる長州には、幕府も手をやきつくし

ているのだ。こうなれば一時も早く長州へ攻めこみ、長州藩というものをばらばらに解体してしまわねばならぬ。

ところが……。

薩摩藩が仲へ入り、次のような条件を長州藩へ出した。

一、藩主・毛利父子の謝罪
一、藩中の恭順
一、禁門戦争へ参加した三家老と参謀の処刑

この条件をのむのなら、

「我藩が幕府を説きつけ、長州進軍を中止させよう」

と、もちかけたのである。

薩摩藩に口をきかれるなど、考えてみただけでも口惜しいが、いまの長州としては、この条件を実行にうつすよりほか生きのびる道はない。

西郷吉之助は、長州側の承諾を取りつけるや、今度は広島の本営へ総督・徳川慶勝を訪問し、

「長州進撃を中止なさいますように」

たちまちに説きふせてしまった。

長州藩では三家老に腹を切らせ、恭順の意をあらわしたので、幕府も薩摩の仲介をしぶしぶながらのむより仕方がない。そもそも征討軍というものは幕府の命令を受けた諸大名が藩兵を差し向けて編成されたものだが、どこの藩でもきょろきょろとあたりを見まわし、

「戦争などはしたくない。損をしたくない。時勢の変化に遅れて取り残されてはならない。幕府の味方をして、将来よいものか、どうか……？」

とても進撃の足なみがそろうものではないのだ。

男を上げたのは薩摩藩である。

西郷は幕府の意向なぞ頭から問題にせず、どしどしと事を運んでしまった。

こうして幕府側が足ぶみをしている間に……。

長州藩では、

「もう上の者に藩をまかせてはおけぬ！」

下層藩士を中心にした藩内革命がおこった。

長州藩の志士・高杉晋作（たかすぎしんさく）がひきいる〔奇兵隊〕が下関や三田尻の役所を襲い、さらに山口の城下をも手中におさめてしまった。

（なまぬるい年よりどもに、長州をまかせてはおけぬ！）

と、いうのだ。

高杉がひきいる〔奇兵隊〕は、下級武士や農民の集合部隊である。勤王革命の先頭

を走りつづけて来ている長州藩だけに、藩内勢力の新陳代謝の烈しさには、殿さまの毛利侯も馴れきっているところがある。

だから下から盛り上って来るちからも伸びやすくなってきているし、

（石にかじりついても、老衰した徳川政権を打ち倒さねばならぬ！）

この執念は最高潮に達した。

いまの長州藩には金もない、味方もない。

こうなれば却って死物狂いの闘志が燃えさかるばかりとなる。

すさまじいエネルギイであった。

やられてもやられても起ち上って来る。

（なるほど、これは……）

薩摩藩も、長州の底力を見せつけられ、

（われわれが日本の代表者となるためには、やはり長州の協力が必要である）

これまでは満を持し、なるべく犠牲を少く、とこころがけていた薩摩藩なのだが、今年に入ると、蔭へまわり、何かと長州藩へちからを貸すようになってきている。

しかも、

「これは総長だけにいうのですがね」

と、土方歳三が近藤勇にいうのだ。

「そっと、勝を斬らにゃいけませんな」

勝とは……幕臣・勝麟太郎（海舟）のことであった。

勝は極く軽い身分の御家人から、幕府の海軍奉行まで出世をした男である。

むかしの徳川幕府の人事には思いもかけなかったほどの抜擢で、勝の才能がすぐれていたことはもちろんだが、幕府としても人材を登用してはたらかせざるを得ないほどの人手不足であった。しかし、おとろえきった政治機構ではせっかくに登用した人材もつかいこなせぬ。

勝麟太郎は近頃、西郷吉之助と面会した折に、

「もう幕府は老朽してしまって駄目ですよ。国内で日本人同士が争っているときではありません。あなた方にしっかりとやっていただかなくては、ね」

幕府の海軍大臣が、平気でこういうのである。

「何事にも古くさい習慣をありがたがって、将軍さまをたてまつり、形だけはたてまつりながら言うこともきかず、いざともなれば手も足もうごかぬ幕府要人を叩きつぶし、一日も早く国政をととのえなくては、いまに日本は外国の食いものになってしまいますよ」

西郷ほどの男も、このときは瞠目してしまい、勝の印象を、

「……実におどろき入り候人物にて、とんと頭を下げ申し候」

と、手紙に書いたりしている。

土方歳三が、勝麟太郎暗殺のことを近藤勇へはかったのも、うなずけようというも

のだ。
　勇はこれをきいたとき、顔色を変え、
「副長。このことは忘れよう」
「なぜです？」
「君の考えは、万事に飛びはなれすぎる」
「私ひとりで殺ってもよろしい。江戸へでもどこへでも出かけて行きましょう、どうです？」
「いかん！」
　このときは、勇が珍しく土方を叱りつけた。
　そして、その後で、
「私は、なんだか歳さんがおそろしくなってきたよ」
　うめくようにいうと、土方はにやりとして、
「勇さんのようなことじゃあ、とても長州の奴らにかないませんぜ」
　ずけずけといい放ち、今度は妙にうるんだやさしい口調で、
「しっかりして下さいよ」
　耳もとでささやき、軽く勇の肩を叩き、部屋から出て行った。そこは醒ヶ井の妾宅であったが、土方が帰るや、勇はおわかを呼びつけ、酒の用意をさせ、
「今夜は何があっても他人を中へ入れるな」

乱暴に酒をあおりつづけ、酔いつぶれてしまった。

見えぬところで、時代は大きく変ろうとしている。その気配を厭でも勇は感じないわけにはゆかなかった。

ところで長州藩では、藩内革命を成功させた若い新勢力が、

「これからはもう何ひとつ幕府へ遠慮することはない。わが藩は総力をあげて幕府を倒さねばならん！」

藩論を統一してしまった。

むろん、下関開港についても、幕府のいうことなどに耳もかさぬし、依然、態度を強固にし、相変らず京都へも革命志士たちを送りこみ、蠢動は激烈化するばかりであった。

「やはり、長州をこのままにしてはおけぬ。どうしても討たねばならぬ」

ふたたび、征長軍編制を幕府は考えはじめる。

「なにをしていやがるのだ。あきれて物もいえねえ」

原田佐之助なぞは、ばかばかしくて口もきけないといった表情で、

「これでは、いくらおれたちがはたらいて見ても駄目だよ。上に立つ幕府の足もとが、これほどにひょろひょろしているとは思わなかった……」

と、永倉新八にこぼした。将軍・家茂も江戸へ帰れない。政局は、まさに京都を中心にしてうごきはじめ、幕府の本拠たる江戸は、その政治機能をほとんど失ってしま

っている。

外国列強は、

「兵庫の港をひらきなさい。下関はどうなりましたか」

と、幕府を責めつづける。

莫大な償金も支払わねばならない。

幕府も将軍も、八方手ふさがりのかたちで〔ためいき〕をつくばかりなのである。

近藤勇も、

（いつの間に、こうなってしまったのか……）

去年の池田屋騒動あって以来、新選組の声望は一時に上がり隊士も増えたし、立派な新本営も完成が間近いというのに、

（どうも、いかぬようだ。おれたちが精魂こめてはたらきぬいている、その効果がさっぱり上がらないのはどうしたわけか……）

なのである。

あれほどに熱望した将軍上洛が実現しても、幕府側の気勢が上がるどころかむしろおとろえてしまったような気さえする。はっきりと時勢の動きがつかみきれぬもどかしさなのだ。

勇は何か得体の知れぬ激流の淵を、自分が心細げに歩いているような気がするときもあった。

革命分子たちの隠家を探り、これを襲って斬殺してゆくだけで、
（新選組はいいのか……？）
であった。
むしろ、長州征討軍が再度編制されるなら、新選組もそれへ参加し、
（思いきり、長州の奴どもと戦って見たい）
つくづくと、そう思う。
あれやこれやで面白くない毎日がつづいた。
勇が醒ヶ井の妾宅で、おわかの妹のお孝に手をつけてしまったのもこのころだ。
お孝は子供のころから大坂の親類にあずけられていたのを、おわかが勇のゆるしを得て引きとったもので、この年、十七歳。
姉とちがって、細っそりとした小さな躰つきで、あまり口もきかず、黙々として女中がわりの仕事もやってのけ、
「あのようにはたらかせなくとも、よいではないか」
勇が、おわかにいってやったこともあるほどであった。
それは初夏の或日のことで、勇は公用で伏見奉行所へ出かけた帰途、ふと思いたって従者を本営へ帰し、只ひとり、騎乗で醒ヶ井の妾宅へ立ち寄った。
おわかは、富小路・四条下ルところの知り合いをたずねたとかで、間もなく帰って来るだろうという。そこで、勇はお孝へ酒の仕度をたのんだ。

別に一人いる女中も、おわかの供をして行ったとかで、家には、お孝と老僕の平治郎というのがいるだけであった。

どうしてそうなったのか、勇にはわからない。

庭に面した奥座敷にいて、馴れない手つきで酌をするお孝を相手に、うまくもない酒をちびちび飲んでいるうち、勇の袴へお孝が酒をこぼした。

「あれ……」

おどろくお孝を、

「よい、よい」

制して、勇が手ぬぐいを出してふきとりながら、ひょいとお孝を見やると、どうしたものかこのとき、お孝が得もいわれぬ愛嬌をたたえてにっこりと笑いかけてきたのである。

ふだんは無口な少女だけに、こんなこともめずらしかったが、お孝としては何かにつけて自分をいたわってくれる勇に、胸の底では馴ついたのかも知れない。

勇は、このお孝の笑顔を見たとたんに、このところむしゃくしゃしていた種々の鬱憤が一度にほとばしり、

「おい……」

いきなり、お孝を抱きすくめてしまった。

か細い少女の躰は、勇に組みしかれたまま、いささかの抵抗もしめさない。

お孝から身をはなしたとき、勇は、男の情欲のあさましさに我ながらあきれ果てて、
「おわかにはいうな。おれに、まかせて……な、まかせておけ。あ、安心をしているのだぞ、よいか、よいな……」
しどろもどろにいいおき、あわてふためいて妾宅を出るや馬へ飛び乗り、一散に西本願寺の本営へ駆け去った。

天皇と将軍の死

一

飯田金十郎にとって、その男の顔を見るのは半年ぶりのことであった。
それはつまり、金十郎が京都を去って、久しぶりに江戸へもどってから半年を経たということだ。
三年前の文久三年の春。
その男は、はじめて金十郎の前へあらわれたのだが、
「大倉守（おおくらもる）、と、おぼえておいていただきたい」
と、名乗った。

そのとき金十郎は、浪士隊へ参加した近藤勇の後をつけ、これも京の土をふんだばかりで、それこそ〔乞食坊主〕そのままの、垢とあぶらにまみれた紺木綿の筒袖の尻をからげて大刀一本を腰に、むさくるしい坊主あたまをさらし、京の町をうろついていたのだ。

彼が近藤勇の後をつけて、ついにここまで来てしまったのは、何としても文久二年の春、目黒の畑道で、勇のすさまじい斬撃にわが左耳を切り落された敗北を忘れかねたからである。

金十郎にとって、これほど無様な負け方をしたのは、かつてないことだといってよい。

（なんとしても、近藤に勝ちをとらねばならん!!）

ひたむきに、この一事だけへ〔剣士〕としての情熱をかけて、後を追ったのである。

飯田金十郎は、下総・千葉郡・中田村に生まれた。父の文右衛門は同村の名主で、金十郎のほかに三人の男子がいる。この三人はいずれも正妻がもうけた子だが、金十郎は文右衛門の妾・とくの腹から生まれた。とくは同じ中田村の小百姓の寡婦で、文右衛門が手をつけ、金十郎が生まれると間もなく病死をしている。このため幼児の金十郎は文右衛門の四男として飯田家へ引き取られたわけだが、

「そりゃあもう、まともな人間に育つ筈がないので……」

と、後年の彼自身が語っているように、正妻と腹ちがいの兄たちが寄ってたかって

金十郎を虐待する。実父の文右衛門も金十郎には冷たかったようだ。

こうした場合、青ざめてひ弱い〔意気地なし〕になるか、又は虐待へ反抗し、思いきったあばれ者になるか、そのどちらかであろう。金十郎は後者をえらんだ。

それもこれも、頑健そのものの肉体に生まれついたからで、少年のころから下男同様の労働を強いられ、その労働がまた彼の肉体を更にきたえるということになる。

十二、三歳になると、兄たちの手にもおえなくなった。

こうした金十郎の境遇をあわれにおもい、

「いつでも、あそびにおいで」

といってくれたのが同じ中田村に住む鈴木由松（よしまつ）であった。

由松は、このあたりでもきこえた豪農だが、北辰一刀流の〔つかい手〕でもあり、関東の剣客中、いささか名を知られた人物だ。

当時、日本は内外ともに異常な危機感におおわれてい、武士ならずとも武術をまなぶ者が急激に増加し、このあたりでも剣術はさかんなものだ。

鈴木由松も敷地内に道場をかまえ、村人たちを教えている。こういうところは、近藤勇の実家・宮川家と同様である。

ひまがあると鈴木の道場へあそびに出かける金十郎が木刀をつかまぬわけはない。

「どれ、わしがひとつ教えてやろうか」

鈴木由松が手をとって教えて見て、

「うむ。こりゃどうも……手すじのよいのにおどろいた」
めきめきと上達をしめした金十郎は十八のころになるや、
「もう、わしには教えられぬ」
鈴木先生、お手あげのかたちになったという。
ちょうど、そのころであった。
金十郎が、腹ちがいの長兄・久太郎を村外れの〔樋門ケ原〕というところへ連れ出し、木刀をふるってめった打ちにしたことがある。飯田家でも〔もてあまし〕のあばれ者になっていた金十郎だし、数年前に父の文右衛門が病死し、久太郎が家をついでからは、
「なんとかして、金めを追い出してしまわねばならぬ」
と、久太郎兄弟は種々の陰謀をめぐらし、金十郎を追放してしまおうとする。
それやこれやが昂じてのことだったろうが、何しろ久太郎は手足の骨を叩き折られ、これがため早死をしたといわれるほどの重傷を受けたものだから、否応なしに金十郎は中田村に居られなくなった。
師の鈴木由松も、
「逃げろ。お前の腕ならみがき方ひとつで物になれよう。なんとか剣ひとすじに身を立てるつもりになれ」
金五両をくれて、出奔をすすめた。

「それからの自分は、二十余年にわたって諸国を放浪いたしたのであります。その間、別に他の師匠についたわけでもなく、ただもう自力ひとつをたよりに、山野を駆けめぐり、心身をきたえ……」

などと、明治の世になってから金十郎がえらそうに語り残しているけれども、

「もっぱらその諸方の道場をまわって、わが腕をためし、きたえる。それにつまり、実戦にのぞんでは肚をつくるというわけで……」

という、その〔実戦〕の意味を考えて見ると、だいぶ金十郎、人も斬ったらしい。

ここで、はなしをもどそう。

さて……。京都へ着いて間もなく、飯田金十郎は北野天満宮の境内で大喧嘩をやった。

相手は、どこかの藩士らしい五人連れであったが、乞食坊主の風体に大刀一本を帯びている金十郎を見るや、

「坊主。その刀は玩具か」

と、からかったものである。

腹も空いていたし、ふところには一文の銭も無くなっていただけに、金十郎はかっとなり、

「ぺっ……」

いきなり、つばを飛ばした。そのつばが物のみごとに冷笑した武士の鼻のあたまへ

命中したものだから、
「こいつ、無礼な」
五人がいっせいに抜きはなった。その白刃の輪の中へ、金十郎がむぞうさに飛びこんだかとおもうと、どこをどうされたものか、絶叫をあげて二人の武士が転倒している。さらにもう一人が金十郎の肩車に乗せられ、宙を泳ぐように両手を差しのべつつ投げ飛ばされた。
「ばか!!」
金十郎の怒鳴り声を背に、五人とも一散に逃げた。
日中のことだし、参詣の人びとも少なくない。その人波を掻きわけるようにして天満宮の境内を出た金十郎へ、
「もし……」
声をかけたのが〔その男〕……大倉守だったのである。

二

大倉守は三十がらみの美男子で、
「はじめのうちは女が男装をしているのかと思うほどでありましたよ」
と、金十郎が語り残しているように、声音からしてやさしい甘いもので、大小を差している腰のあたりが「何となく、たよりなげな……」であったそうな。

「われらは天下のため、国家のため、天皇のおんためにはたらくものでござる」

と、大倉はいった。勤王の志士であるというわけだ。

いつも折目正しい黒紋付の羽織。仙台平の袴をきちんとつけて、飯田金十郎の前へあらわれた。つまり金十郎は天下国家のためにならぬ徳川幕府の狗どもを一人一人斬殺するため、大倉守に雇われたのである。

大倉は、決して身分を明かさなかった。

（大倉の背後についているのは、やはり長州なのだろうな……!?）

およそ、金十郎は察しをつけていたし、別れるときに思いついて、彼の後をつけたことも何度かあったけれども、いつも上手に大倉は姿をくらましてしまうのであった。

二人の連絡所は、南禅寺門前にある〔丹後屋〕という茶店で、ここは湯どうふを売りものにしていて、奥には風雅な庭に面した小座敷もいくつかある。ここへ一日置きの定められた時刻に飯田金十郎は出かける。

用があるときは必ず、大倉守が待っていて、

「今夜、どこどこから出て来るこういう顔つきのこういう風体をした者を斬ってもらいたい」

と、指令をつたえる。

武士のときもあれば、町人風の男のときもあった。首尾よく仕とめると、次の連絡日に金十両をくれる。現代の四十万円にも相当しようか……。

そのうちに、
「新選組であれば何者でもかまわぬ。一人十五両を出そう」
と、大倉がいった。
先斗町の町会所裏で、新選組隊士・大和田進、山口亥太郎。さらに大胆にも壬生の屯所前で、近藤勇がかわいがっていた川端重太郎を斬殺したのを皮切りに、これまで飯田金十郎が手にかけた隊士は九名にもおよぶ。
「近藤勇を斬ったら、いくらよこすね!?」
こころみに金十郎が訊いたら、大倉守は言下に、
「金百両」
と、こたえたものだ。
むろん、新選組以外にも金十郎は指令のままに十余名を斬殺しており、
「おれも、これだけはたらいてきたのだ。だから、そちらの身もとを明かしてもらいたい」
そういうたびに、
「礼金は、きちんと支払っているではないか!?」
というのが大倉守のこたえなのである。
大倉の身もとをつかめば、
（おれも只の殺し屋ではすまなくなるぞ）

という気持が金十郎にはある。

もしも勤王革命が成功して、徳川幕府が倒れることにでもなれば、金十郎もそのために一命をかけてはたらいたことになるわけであった。大倉の背後にある〔勢力〕の正体がわかれば、金十郎も勤王派の立派な武士として取りたてられて不思議はないのである。

だが大倉は、

「ま、いずれ考えておこう」

と、こたえるのみであったし、

「金がほしくないのなら、いつ、やめてもらってもけっこうなのだ」

とさえいう。

そうなると金十郎、ちょっと弱い。

何しろ、いままで手にしたこともない大金が入って来て、高価な衣服を着、女と酒にひたりつくし、諸方の茶屋を泊り歩き、ろくに居を定めてもいなかったほどである。大倉から紹介された三条小橋の池田屋へはよく泊りに行ったが、ここも幕吏に眼をつけられはじめると、

「貴公は新選組に顔を知られている。だから池田屋へはもう泊らぬようにしてもらいたい」

大倉がそういったが、かまわずに池田屋の裏口から入って泊った。そのうち、近藤

勇みずから隊士をひきいて乗りこんで来たので、金十郎はあわてて池田屋の地下通路から鴨川の河原へ逃げた。

あのとき、新選組は池田屋裏の町家をしらみつぶしにあらため、池田屋も調べたが、まさか地下通路が仕組まれていたとは気づかなかった。

この秘密通路が発見されたのは、池田屋襲撃が終ってからのことである。

去年の秋となって……。

大倉守が、

「金どの。江戸へ行ってもらいたい」

と、いう。

「ばかな……いますこしで、近藤勇を叩き斬ってくれようというのに……」

「近藤はなかなか死なぬよ。おぬしが、また、京へもどって来るまで待っていてくれようさ」

「ふむ。で、江戸へ何をしに行く!?」

「殺ってもらいたい者が二人……三人ほどいる」

「だれだ!?」

「ま、それは後から指図する。一時も早く京を発ち、江戸へ先着してくれ」

そのとき大倉守が指示した場所に、いま、金十郎は独りで住み暮しているのであった。

そこは、俗にいう〔入谷田圃〕で、上野車坂の通りから北へ、折れ曲った道をたどり、松平出雲守下屋敷の北側の田圃の一角にある雑木林の中の小さな農家なのだ。去年、金十郎がここへあらわれたとき、この家には伊七と名乗る老爺が留守居番をしていた。伊七は金十郎を見るとすぐに家を明けわたし、荷物ひとつ持たずにふらりと何処かへ去った。

以来、月に二度ほど伊七があらわれ、二両とか三両とかの金をわたしてくれる。京都にいたころのぜいたくは出来ぬが、金十郎の酒食に不足はなかった。

「大倉さんは、いつ江戸へ来るのだ!?」

と、伊七に訊いてみたが、

「間もなくのことでござんしょうよ」

うっそりとこたえるのみで、この老爺は実に無口で取りつく島もない。

そのうちに慶応元年も暮れ、いまは慶応二年の春になっている。

そして、金十郎が待ちかねた大倉守が入谷田圃の家へあらわれたのである。

大倉は、どこかで旅仕度を解いてきたものと見え、黄八丈の着流しに黒の羽織。深編笠という服装であった。

「おそかったなあ、大倉さん」

「待ちくたびれたかね」

「当り前だ」

「すまなかった。だが金どの、もう一度、すまぬついでに京へもどっていただきたい」
「え……江戸での仕事はどうなるのだ!?」
「せんでもよいことになってな」
「ばかにしなさるな」
大倉の端麗な面に苦笑が浮いて、
「世の中の変り目が激しいので、なかなかにむずかしいのだ」
「ふうん……」
「京へもどってくれ」
「そりゃあ、こうしているよりは……」
「金にもなろうし……」
「それをいいなさるな」
「今度は一つ、新選組へ的をしぼっていただこう」
「そうか、そうか」
「ことに近藤勇、土方歳三の両人を何としても……」
「土方を斬ったら、いくら下さるね？」
「近藤と同様に……」
「百両か？」

「うむ」
「よし!!」
こうなると、飯田金十郎の血はわきたってくる。
「新選組も、不動堂村へ新しく本営をもうけてな。まことに堂々たる建築で、まるで大名屋敷だ。長屋門に高塀をめぐらし、近藤などは馬上に十数名の隊士を引きつれて外出をする。ちょと斬りにくくなったのう」
「なあに、今度こそ殺る」
「たのむぞ」
「で、いつ発つ」
「今から」
春の午後の陽光が庭をへだてた竹藪から洩れ、何の鳥か、しきりにさえずっている。
「よし!!」
金十郎は立ち上った。
その足もとへ小判の入った〔ふくさ包み〕を置き、
「路用だ、金どの」
「大倉さんは一緒じゃないのか?」
「すぐに後から行く。京へ着いたら三条縄手の近江屋という旅籠へ泊っていてくれ。拙者の名をいえばわかるようになっているゆえ」

「わかった」
「新選組も大きくふくれ上っているし、いまも申した通り、近藤、土方を討ち取ることはなかなかにむずかしい。そこでな……」
「何の、平気だ。殺って見せる」
「ま、聞けよ金どの。近藤、土方のみならず、いまここで新選組を打ちくずしてしまわぬと大変なことになる。時代は大きく変ろうとしているし、徳川の世の終りが近づいていることもたしかだが……」
　にやりと、大倉は笑って見せたが、すぐに表情を引きしめ、
「それだけに、新選組のあばれ方が邪魔になる。何しろ、彼らの刃にかかって死ぬ味方が後を絶たぬ。毎日毎夜のごとくやられる。鴨川の河原の石の下にまで眼をくばり、執拗に探索の網を張りめぐらし、片端から襲ってくる。たまったものではない」
「そんなに、か……？」
「どうしても、おぬしに京へもどってもらわねばならぬと申すのも、そこのところだ」
「なるほど」
「そのかわり、今度はおぬしの身の上についても、われらがよく考える」
「どういうことかね？」
「いずれ、われらの天下が来る。われらの手によって、この日本国がおさめられるよ

うになる。そうなれば金どの、おぬしも只ではおかぬ」
「どう只ではおかぬのだ？」
「われらが引きうけ、新しい世に身を立て得るよう、はからいましょう」
「われらわれらとおっしゃるが、一体あんたは長州の、どんなお人なのか？」
「長州だなどと、拙者は申したおぼえない」
「だが勤王の……」
「勤王と申しても、いろいろある」
「へへえ……？」
「金どの。いずれわかることじゃ。ま、安心をして、ちからのかぎり国事につくしてもらいたい」
例のごとく煙に巻かれてしまった。
「新選組の中へも、われらは手を伸ばしておる。今度は、おぬしがはたらきやすいようにしてさしあげられると思う」
「ふむ……？」
「外からは金どのたちに白刃をもって闘っていただき、内からは謀略をもって新選組を崩壊へみちびく、それがわれらの大きなねらいなのだ」
「その、内からの謀略というのは？」
「新選組の内部にも、われらの味方が出来たということだ。しかも、そのちからは日

に日に大きくふくらみつつある」

「へへえ……」

早くも草鞋をはき、庭へ下り立った飯田金十郎へ、大倉守は縁側へすわったままで、するどい声を投げかけた。

「では、たのみましたぞ」

金十郎が庭を横切り、雑木林へ入りかけて振り向くと、いつの間に入って来たのか老爺の伊七が大倉守のそばにすわりこみ、凝とこちらを見つめていた。

三

去年以来。

将軍・徳川家茂は京都へふみとどまったきり、江戸城へはもどれなくなった。

将軍を中心に、京都での幕府勢力を統合し、強固にして、この際、一挙に革命運動の息の根をとめてしまおうというのだが、実のところ、なかなか足なみがそろわぬのだ。

一度は、薩摩藩の仲介によって、征討を延期させたかたちの長州藩へは、

「領地の十万石を取り上げ、藩主・毛利大膳大夫父子を蟄居させるべし」

と、指示をした。

むろん勅許を得てのことであったけれども、

「勝手に、いいたい放題のことをいったらよい」

長州側は、びくともせぬ。

たまりかねた幕府は、今年の正月になってから、将軍の名代として老中・小笠原壱岐守（肥前・唐津六万石の領主）を広島へ出張させ、長州征討のための本営へ、

「長州藩の三家老・三末家の出頭を命ず」

といってやったが、幕府のこの命令を受けた長州藩は、

「いずれも病気中でありますから、まかり出ることは出来ません」

ぬけぬけといい張って平然たるものだ。

たまりかねて、

「来る三月三十日までに出頭なきときは、断固、毛利家を誅伐する」

かさねて申しわたしたが今度はろくな返事もよこさない。

「攻めて来るなら攻めて来い」

とばかり、長州軍は国境をかためて軍備を急ぎ、すさまじい闘志を露骨に見せ、むしろ向うから幕府に挑戦のかまえを取りはじめているかたちなのだ。

これを見て、

「ああ、もう徳川の世も終りだ」

直接、政権争奪には関係のない国民たちも、そうおもわざるを得ない。

ふみ出して帰るもならず行くこともならで難波（大坂）に何をして居る
いつまでも長門（長州）の国の御評定難波ともあれ、寄手めいわく

と、これは当時、将軍本営がもうけられた大坂城下や京の町にひろまった落首である。このようなことを民衆がうたいはじめたことによっても、いかに徳川幕府の威信が地に落ちていたかがわかろうというものだ。

薩摩藩などは、堂々と幕府へ向けて建白書を差し出し、

「……この天下騒乱のときに、同じ日本人同士が戦火を交えるなどということはおだやかでありません。もともと征伐の儀は天下の重典、国家の一大事でありますゆえ、よくよく大義名分が立たねばなりません。このたびの長州征伐にはそれだけの意義も理由もないと存じます。ですから、たとえ出兵の命令を下されましょうとも、やむを得ずおことわり申しあげます」

ぴしゃりと、はねつけてきた。

これを見た諸藩も、

「薩摩が、あのように強いことをいうからには、われわれもこれに順じたがよかろう」

というので、幕府のいうことをなかなかに聞かなくなってくる。

すでにこのころ、長州の桂小五郎と薩摩の西郷吉之助によって、薩長両藩は、

「幕府を倒すため」

の盟約を、ひそかにむすんでいた。

これではもう、将軍名代として小笠原壱岐守が広島へ出向き、長州藩を相手にわたり合おうとしても、幕府側の圧力の底の浅さを相手に見すかされてしまい、手も足も出ない。

「こんなことでは、いかに将軍家御上洛が実現したとて、どうにもならぬ」

近藤勇もたまりかねて、去年は、幕府の長州訊問使・永井主水正一行に加わり、広島まで出張したほどである。

勇は、伊東甲子太郎ほか二名をつれ、変名でもって長州本国へ潜入し、実状を探りとろうとしたが、ついに入りこめなかった。

このとき、勇は、京都守護職・松平容保へ、次のように報告をしている。

「長州の君臣は表向きは謹慎、恭順のかたちをとっておりますが、裏へまわれば戦闘の準備を急ぎに急いでおります。これに対し、広島出張の幕府軍は勇気沮喪はなはだしく、これをもって長州軍と戦わせたところで、とても勝つ見こみはございませぬ」

さすがの勇も、現地の様子を見て、がっかりしてしまったのであろう。

「もう、いかぬよ」

いつか、勇が土方歳三に洩らしたことがある。

「なにが、いかんのです？」

「これでは歳さん。いかに、われわれがはたらいて見たところで追いつくものじゃあない」

　すると土方は鼻先で笑った。

「何が、おかしい？」

　勇が、むっとして土方をにらむと、

「だってそうじゃありませんか、総長」

　土方は、むしろ烈々たる闘志を顔面にみなぎらせ、

「よろしいか、総長。そもそも新選組というは何ゆえに出来上ったのですか。将軍家のちからだけでは大名や浪人どもを押さえきれなくなったからでしょうが……」

「むむ……」

「それでなくては、われわれのようにろくな身分も家柄もない剣術つかいに、大金をあたえてはたらかせよう筈はない。そうでしょうが」

「うむ……」

「つまり、新選組はだ。もともと分のわるくなった御公儀のちからを盛り返すために生まれたもんだ。なにもいまさら、あわてることはないでしょうよ、はじめから分がわるいんだ」

　いいすてるや、さっさと総長室を出て行ってしまった。

　勇はもう真青になって、

「馬をひけい!!」

これも土方の後から憤然として本営を出ると、醒ヶ井の妾宅へ出かけて行ったが、ちかごろは妹と勇の関係に気づいたおわかが烈しく嫉妬して、ことごとに勇へ当り散らす。

ここもおもしろくないというので、勇はまたも祇園石段下の茶屋〔山絹〕へ出かけ、うまくもない酒を、浴びるようにのみ出すのである。

四

そして、年が明けて慶応二年の正月。

それはまだ飯田金十郎が江戸にいるころだが、小笠原壱岐守が幕府全権として広島へ出張するにあたり、近藤勇は再度この一行に加わって長州探索をおこなうことにした。

(なんとかして、この眼で時勢のうごきをつかみ取りたい)

という勇の熱望である。

今度は勇以下、いずれも本名で、表向きの名目は〔全権の警衛〕であった。

勇は、伊東甲子太郎、篠原泰之進、尾形俊太郎の三名をしたがえ、全権一行に先立ち正月十八日に京を発した。

この篠原泰之進が、広島滞在中にしたためた〔手記〕のようなものがある。

篠原は、江戸以来の伊東甲子太郎一党だ。伊東が新選組へ入って参謀に任じ、声望大いにあがるにつれ、諸士取扱役となった伊東派の隊士も重用され、篠原も近藤勇の信頼を受け、特に広島出張の随行を命ぜられた、と見てよかろう。

その篠原の〔手記〕の一節に……

「……伊東および自分は広島に滞留五十余日。しきりに徳川の悪政を討論す」

と、ある。

これは、どうもおだやかでない。新選組は徳川の下にある団体なのだ。

そしてまた、

「……人間が罪におちいることは和漢古今の常態であるが、罪といっても、それは種々多様のものであって、あるいは悪もあり、あるいは善でありながら罪におとし入れられてしまうこともある」

というのは、あきらかに長州藩の立場を指したもので、

「これらの罪を裁くのは徳川政府のつとめであるにもかかわらず、その措置がまことによろしくない。およそ天下に罪民が生ずるというのは、かならず政府が大局をあやまるところがあるからである。天下の万民に罪はない」

と、幕府をきめつけ、

「早く賢明の士を下して悪政を救解せずんば、孜々として報国の志を抱く者かえって罪科におちいらんとす、と、しきりに嘆息弁論し……」

と、ある。

伊東と篠原は、全権・小笠原壱岐守の前へも出て、しきりに勤王論をぶつし、長州側から入れかわり立ちかわり広島の本営へやって来る若い藩士たちとも親密にまじわり、談論風発のありさまで大いに共鳴し、「われらも長州のために、一肌も二肌もぬぐつもりでいる」

というので、幕府側の要人をつかまえては、

「長州藩への御処置をなるべくは寛大にしていただきたい」

と、熱弁をふるう。

まるで近藤勇の立場なぞは無視したやり方だし、勇も大いにおもしろくない。

「総長。どうも妙ではありませんか」

尾形俊太郎も、伊東と篠原のふるまいを見て気が気でないらしい。

「伊東は新選組の参謀だというが、いったい、あのような男を何故に近藤が同道してまいったのか」

小笠原壱岐守も、あきれ果てていると、尾形は勇に知らせた。

勇も、こうなっては黙っていられない。或夜、伊東甲子太郎を宿舎の自室へまねいて、

「長州藩士などと親しげにまじわり、調停の役目をつとめたいなどと申されているようだが、どういう気持なのか？」

問うや、伊東は事もなげに、
「それがもっともよろしいことだからでござる」
「だが、それは老中の唐津侯が全権として、この本営へまいられておる。私たちが口をさしはさむところではないとおもうが」
「いや、それはちがいましょう」
「どこが？」
「このようなときに新選組が乗り出さなくてどうなります。御公儀の肚がきまらず、喧々囂々と口先ばかり達者なくせに、いざとなると一寸も腰が上らぬ大名諸侯には総長もよくよく愛想をつかされていた筈ではありませんか」
その通りである。勇は沈黙した。
「総長は万事ひかえ目にすぎるように思われます。むしろこのさい、公儀と長州の間に立たれ、存分に活躍をされたい。いまの新選組はそれだけのちからもそなえ、他もこれをみとめぬ筈はない」
「そして、長州の罪をゆるすようにはからえといわれるのか」
「その通りです」
と、伊東は、いまの時点において長州を征討するなぞということが、いかに時代おくれで莫迦げたことであるかをとうとうとのべたて、
「それは取りも直さず、国のため、天子のおんためでござる。そもそも、拙者が近藤

先生と行を共にするようになったのも、先生の勤王精神の烈々たるに感動いたし、この御仁なれば、わが一命をあずけても悔なしとおもいきわめたからでござる」

伊東甲子太郎の弁口は火を吐くようになってくる。

なるほど、近藤勇にしろ土方歳三にしろ、天皇のおんためにはたらき、国事に奔命することに変りはない。いやそれだからこそ、長州藩をこのままにしてはおけぬという〔立場〕なのである。

伊東らの〔立場〕は、天皇のためにはたらくといいながら、

「長州を討て」

と、おおせられた天皇の命にそむこうというのだ。

そこのところが、どうも勇には不快であった。

伊東は、学問にふかいところを遺憾なく発揮し、やたらにむずかしい言語をろうして勇を煙に巻いてしまう。こうなると、とても勇には太刀打ちができない。

苦虫をかみつぶしたような顔になり、勇は伊東甲子太郎のよくうごく唇を見つめながら、ふっと、或る男のことをおもいうかべた。

あの、清河八郎のことをである。

伊東と同じような美男の清河が色白の面を紅潮させ、京都へ到着したばかりの浪士隊の人びとの前で、

「諸君。いま、朝廷の命によって、われらはただちに江戸へもどり、攘夷のため活動

をおこなう!!」

と叫んだ、あのときのことをである。

清河八郎は幕府を利用して浪士隊を結成させ、この黒幕となり、ついには浪士隊を我物として革命運動へ引きこもうとした。

（伊東甲子太郎は、どのような目的を抱いて新選組へ参加したのか……？）

江戸で伊東に会ったときは、彼の知性と風貌に惚れこみ、彼の参加を大よろこびした近藤勇であったが……。

三月二十七日。

近藤勇は広島から京都へもどった。

土方歳三が、ぐったりと疲れた面持ちで総長室に旅装をといた勇へ、

「どうでした？」

「何が？」

「伊東が、ですよ」

土方は不気味なうす笑いを端正な顔に匂わせ、

「伊東は、正体をのぞかせましたな!?」

「知っていたのか？」

「尾形俊太郎の手紙で」

「そうか……」

「総長。これからは伊東一派のうごきに気をつけねばなりませんよ。なにしろ、局中では伊東の人気が大したもんだ」
「ふむ……」
「暗殺された清河八郎をおもい出しますねえ」
ずばり、土方はいったものだ。
飯田金十郎が京都へもどったのは、この翌々日の夕暮れであった。

五

不動堂村の新本営へ移ってからの新選組は、近藤・土方の主張によって、隊規をさらにきびしくし、これにさからうものは寸分の容赦もなく処罰した。
田内某は、休息所に妾を囲っていて、この妾が他の男と密通しているところを押えたのはよいが、却って姦夫に傷つけられ、
「なんというだらしのないやつだ。ただちに切腹」
と、このときは勇がめずらしく激怒して、田内を切腹させてしまったものだ。
これと反対に、ほかに町家の女房と密通していた隊士や、会計係の川合耆三郎が帳簿の不正事実をとがめられて、いずれも切腹。
中には、どこぞの未亡人と心中したりする隊士（松原忠司）なども出て来るし、脱走者も数人いて、これも片端から捕えられて処刑される。

あの武田観柳斎。近藤勇に取り入って一時は非常な羽ぶりをほこった武田も、局中での評判は悪くなる一方だし、次第に勇から遠去けられるにおよんで、

（これはもう、いつまでも新選組にいては自分の芽は出ない）

と思いきめたものか、どこからか手づるをつかみ、ひそかに伏見の薩摩藩邸へ出入りをして、新選組の機密をもらしたりするようになった。

この事実を探索係の山崎丞がすっかり調べ上げておいて、或日いきなり、

「武田君。ちょいと……」

土方歳三が呼びつけ、

「総長がおよびだ」

「は……？」

身におぼえある武田だけに、さっと顔色が変った。総長室へ入ると、幹部隊士がずらりとならんで、いずれもにやにやしながら武田観柳斎を迎えた。

「や、武田君か、多忙中を、わざわざ御苦労です」

と、近藤勇もにこにこと笑っている。

「は……」

武田は、

（別に何でもないのだ。何かの会議に、おれを列席させたいのだろう）

ほっとして、

「いやいや、別に……」

そこへすわったとたんに、勇がいった。

「貴公は、このごろ薩摩藩とえらく親密だそうな」

「は、いえ、あの……」

「いや、まことに結構。これよりは隊をはなれ、薩摩屋敷で暮されたがよろしかろう」

武田はもう、声もない。

「すぐに薩摩屋敷へお出かけなさい。しかし夜道は物騒でもあるから、斎藤君と篠原君に送らせましょう」

斎藤一と篠原泰之進が〔送り狼〕というわけであった。

篠原は武田と親しいし、別の理由もあって、武田を斬るのはどうもいやであったが、仕方なく席を立った。この別の理由というのは、いずれふれることになる。

いつ斬られるか、どこで斬られるか……と、生きた心地もない武田観柳斎が、ふらふらと斎藤・篠原に送られて本営を出て、やがて竹田街道の銭取橋へかかったとき、

「や！」

斎藤一が背後から抜き討ちの一刀。

局中でもそれと知られた剣客である斎藤が、充分に間合いをはかり気息をととのえた上での斬撃であったから、

「ぎゃっ……」

絶叫をあげ、武田が突き飛ばされたように土橋の上へ転倒したとき、早くも斎藤の白刃は鍔鳴りをたてて鞘へ吸いこまれている。

これが、オポチュニストを絵に描いたような武田観柳斎の最後であった。

京都潜伏中の革命志士たちとの斬り合いも次第に苛烈をきわめてくる。

若い隊士のうちには、朝から晩まで、緊張のあまり顔面蒼白となって、食もろくにすすまぬという……内外ともにきびしい明け暮れがつづく。

夏が来た。

その六月一日。

祇園祭を数日後にひかえ、血なまぐさい京都市中も祭ばやしの稽古やら、致斎の式、吉符入りなど、祇園祭の前奏曲ともいうべきさまざまな行事に浮き立っている。

近藤勇は、午後から騎乗で、供の隊士八名をしたがえ、黒谷の会津本営へ出向いた。公用もあったし、長らく健康を害している守護職・松平容保への見舞いもかねてである。

会津侯は、

「このところ、大分によい」

血色も悪くない。

久しぶりだというので、酒肴が出た。

会津本営を辞去したのが六ツ半（午後七時）ごろであったろうか。
鴨川を今出川口へわたり、寺町通りを真直ぐに南下して行く一行を見て、まだ明るい夏の町を行く人びとが、
「新選組や」
「近藤勇らし」
威風堂々たる馬上の勇を見上げてはささやきかわす。
むっつりと、大きな口を引きむすんで馬にゆられながら、実のところは悪い気持はしない勇であった。
仙洞御所の東側を一行が通ったとき、御所をかこむ土塀の蔭から、これを見送って路上へあらわれたのが、飯田金十郎であった。
偶然である。
（近藤め……）
八名も隊士を連れていることだし、あたりもまだ夜の闇に包まれきってはいない。いますぐ勇へ襲いかかるつもりはなかったが、闘志を秘めた金十郎は笠の下の両眼へ殺気をただよわせ、思わず一行の後をつけた。
寺町通りが二条通りと合する地点へ来たとき、通りの向側の妙満寺の門前で、近藤一行が突然、足なみをとめた。
（気づかれたか……）

ひやりとしたが、そうではないらしい。
馬から下りた近藤勇が、隊士たちに何かいい、塗笠を受け取って、これをかぶると、只一人、一行と別れて二条通りを東へ歩みはじめる。
一行は、近藤の馬をかこみ、そのまま寺町通りを南下して行く。
（ははあ……祇園へでも忍んで行くのだな）
ここに至って飯田金十郎は、勃然として、
（よし、斬ろう！）
決意をかためたのである。

六

会津本営を出たときの勇は、寄道をせずに帰るつもりであったが、どことなく浮き浮きとした祭り気分の町中へ近づくにつれ、気が変った。
（ひとつ、山絹へでも行こうか……）
であった。
ここ数日、別だんに変ったこともないようだし、一時の間すべてを忘れ、美妓にかこまれての下らぬ遊びごとにおぼれこみたい。醒ヶ井の妾宅へ行ってもよいのだが、勇を見ると、おわかが妹のお孝へ辛く当る。
それが、たまらなくいやなのだ。

（お孝のことも何とか考えてやらぬといかん。ひとつまた、歳三にでも相談して見るか……）

相変らず幕府の弱腰はしっかりときまってくれないし、心身をくつろがせるべき醒ケ井の妾宅には女の嫉妬がたちこめている。このごろでは、あの温和しいお孝が姉へ向って負けずにくちごたえをする。

勇とおわかが寝間へ入ると、部屋の前の廊下をわざと往復して〔いやがらせ〕をする。その足音にいらだち、おわかが飛び出して行ってお孝を叱る。やがて大声を上げて姉妹がののしり合う。

どうも、たまったものではないのだ。

（やはり、お孝を別にせぬといかん）

祇園石段下の山絹へ入って芸妓たちをあつめたが、やはり気がはれない。

「また来よう」

間もなく、勇は山絹を出た。

黄色の帷子に黒の夏羽織、袴。塗笠をかぶった近藤勇は縄手道へ出て、わざと町家の灯を避け、建仁寺の塀にそい、鴨川の東岸を南下して行く。遊びに出かけるときの勇は、いつも人眼をさける。以前からの癖なのであった。

建仁寺門前の茶屋も、すでに戸をおろしてい、道は暗く、前方の彼方に建仁寺町の町家の灯がひとかたまりになって見える。

建仁寺の三門の前へさしかかった。
そのときである。
三門の前にうずくまっていた人影が矢のように道へ飛び出し、ぎらりと抜刀したものだ。
飯田金十郎である。
「近藤勇!!」
金十郎が叫んだ。
叫ぶと同時に間合いをつめ、猛然として抜き撃った。
(斬った……)
金十郎はその一瞬、わが一撃の成功を信じた。彼にして見れば完全な撃ちこみであったのだろう。
だが、その自信たっぷりの金十郎の愛刀は激烈な衝撃を受けると同時に、にわかにちからをうしない、闇の中へ放り出されたような頼りなげなかたちで、
「あっ……」
つかんだ刀と共に、金十郎は大きくよろめいた。
金十郎の刀は二つに折れてしまっている。
無銘ではあるが備前物で、何人もの血を吸いつづけながらびくともしなかった愛刀が、折れた……。

むろん、抜き合わせた近藤勇の刀身に叩かれて折れたのである。
勇は、泳ぐ金十郎の背へ片手なぐりの一撃をあたえた。
「うっ……」
辛うじて脇差を抜きはらいつつ、金十郎は必死に逃げた。
「待てい!!」
すばらしい大声である。
(いかん……ああもう、いかん……)
もう必死であった。
(刃が立たん、立たん)
背中の傷の痛みも感じない。闇の中へ飯田金十郎はしゃにむに駆けこんで行った。
間もなく、本営へもどった近藤勇が、総長室へあらわれた土方歳三へ、
「あの乞食坊主な……」
「飯田金十郎……」
「うむ。出たよ」
「まだ京にいたのですか?」
「しばらく出なかったが、やはりいたのだ」
「片づけましたか」
「逃げた。おれの足は実におそい。駆け足はいかんなあ」

「そいつはいかん。これは気をつけぬと……」
「うむ……」
「ところで総長。さっき、大坂から知らせが入りましたがね。どうも将軍家の具合がよろしくないようです」
「え……」
　将軍・徳川家茂は、ときに二十一歳である。ずっと大坂城にいて、長州征討軍の総大将というかたちをとっているのだが、どうもこのところ健康がよくない、とは勇も耳にしていたことだ。
　家茂は、わずか十三歳のときに、実家の紀州家から迎えられて十四代将軍の座についた。いや、つかせられたといってよい。ときの大老・井伊直弼を主軸とする幕閣が、水戸や薩摩、越前などの雄藩が将軍位に押したてる一橋慶喜と対抗させるためにえらばれた家茂であった。
　いえば派閥と勢力の争いの傀儡（かいらい）として将軍になったわけである。
　けれども、家茂の純真な性格、聡明な素質はだれの目にもあきらかなことで、あの勝海舟ですら、
「おれは幕府を見限っても、家茂公だけは見捨てぬ」
と、いった。
　なりたくてなった将軍ではないが、

「天下がおだやかにおさまるのなら、このいのちは少しも惜しまぬ」

その一事のみに心をいため、胸中を苦しめ、芽吹きはじめた若木のような八年を送りつづけてきたのである。

このような家茂の人柄は、孝明天皇さえも魅了せずにはおかなかった。

幕府の強引な政治活動によって皇妹・和宮を家茂夫人としてもぎとられた天皇であるが、上洛した家茂を見るや、

「共に、ちからを合せて世の平穏を招来いたそう」

と、いわれた。

いやいやながら嫁いだ和宮さえも、いまは家茂へ〔愛〕をかたむけるようになった。

それだけに……。

天皇の信頼にこたえることが出来ぬほどにおとろえきった幕府を背負っている、この若い将軍の苦悩は、

「眼をそむけしむるほど……」

のものだと、松平容保が近藤勇へ洩らしたことがある。

祇園祭もすみ、本格的な夏が来ると、家茂は寝たきりになってしまった。

孝明天皇は、いたく心配をされ、毎日毎夜、内侍所へわたられ、家茂の全快を祈られたというが、

「高階を大坂へつかわせ」

と命ぜられ、典薬・高階安芸守を大坂城へ差し向け、家茂の看護に当らせられた。

いまも天皇は、狂暴な長州藩の印象を捨て去ろうとはなさらず、

「一時も早く無益なあらそいをやめ、幕府にちからを合せて、世の平和をはかるよう」

と、考えておられる。

こうなっては、幕府も孝明天皇がたのみの綱というところで、天皇と将軍の結合だけにすがりついている。すがりついているだけで、衰弱しつくした政治力が、この現実を生かしきれない。

七月も下旬となって、現・禁裏守衛総督をつとめる一橋慶喜が、かつては自分と将軍位をあらそった家茂を大坂城に見舞うと、

「この上は、一橋殿に、後をひき受けていただこう」

家茂が病床から慶喜の手をにぎりしめ、

「もはや、起てのうなった……」

「いや、そのようにはお見うけいたされませぬ。御元気の御様子にて……」

「気やすめを申されるな」

さびしげに笑って、

「あと十年……日本は、どうなりましょうか……」

もう、すべてをあきらめきったつぶやきをもらし、しずかに両眼をとじたという。

二日後の七月二十日。
徳川家茂は、大坂城内に病歿した。
この知らせが江戸城へとどくと、夫人・和宮は、
「世の中の憂てふ憂を身ひとつに、とりあつめたる心地こそすれ」
と、歌をよまれた。
皇妹であり、しかも将軍夫人であった和宮の、この一首には、将軍・家茂のすべてが、遺憾なく表現されている。
家茂の死は、内密にされた。
子のない家茂の後に、だれを将軍にするか、それが決まるまでは公表出来ぬ。
幕府は必死で事後工作に奔走した。
だが、将軍の死後二日目に、早くも薩摩藩は、この事実を探りとってしまった。
幕府は動揺しつつも、どうにか十五代将軍に一橋慶喜を迎えることが出来た。
近藤勇も、家茂の死を知ったときには、土方へ哀しげに、
「右腕を叩き斬られたようだ」
けれども、次の衝撃は、そのようになまやさしいものではなかった。
同じ年の十二月二十五日。
突如、孝明天皇が亡くなられたのである。
家茂の死の影響が、孝明天皇の死を更に深く重大なものにしたといってよい。

「おれも死にたい……」

勇は、やはり土方歳三だけに吐き捨てるような口調でいった。

迷　路

一

孝明天皇と将軍・徳川家茂の死は、謎につつまれている。

双方ともに〔毒殺説〕がある。

家茂のほうはさておき、孝明帝における場合、明確な証拠があるわけではないが、現代の史家の中にも、あえてこのことを否定しない人びとが多いし、実際、天皇崩御前後の記録をよむと、筆者なども妙な気もちがしてくるのだ。

孝明天皇は、死の十余日前から、疱瘡（天然痘）を病まれた。

しかし、間もなく病状は軽快に向かわれ、膿も出つくしたし、痘もかわき、食慾も出て、熱も下がった。これが五日後に死をまねく病状だとは到底考えられない。

典薬の福井主計助も、

「御順当にございます。もはや、何の心配もございませぬ」

侍座の公卿たちに、はっきりと報告をしている。

十二月二十五日。

天皇は、朝食として糒を湯で溶いたものを一椀めしあがられた。

烈しい苦痛をうったえられたのは、その直後であった。

そして、狼狽する典薬、女官、公卿たちの介抱を受けつつ、非常な苦しみのうちに息をひきとられた。

このことをきいたとき、

「畜生め、長州の手がまわっていやがったか……」

新選組の土方歳三は、たちまちに、そう直感したし、近藤勇も同様であった。

天皇は、崩御の二十日ほど前、それまでは将軍補佐の役目をつとめていた一橋慶喜を徳川十五代将軍の座につけることをおゆるしになられている。

慶喜は、この重大時局における将軍就任に自信がないといい、強固に辞退をしたが、いまはもう慶喜よりほかに将軍となるべき人物がいない幕府である。

天皇も、

「一時も早う、将軍位につかれ、天下の人心を安堵させるように」

と、幕府体制の再起をのぞまれておられた。

関白、二条斉敬や賀陽宮朝彦親王、山階宮などの廷臣たちも、天皇の意を体し、

「あくまでも、徳川幕府を政治の中核とし、この難局を乗りきらねばならぬ」

と〔公武合体〕を押しすすめているが、大原三位重徳、中御門経之など二十余人の公卿は、勤王革命派とむすび、一時は朝廷からしりぞけられていた岩倉具視の暗躍のもとに、天皇をかこむ〔公武合体〕派を破砕しようとしており、賀陽宮や二条関白も何度か暗殺をまぬがれている。

天皇も過激な公卿たちに手をやかれ、強い態度をもたれ、幕府の協力をもとめて、断固、彼らの活動を封じてしまわれた。

そして、天皇の崩御となるのだ。

天皇毒殺については、種々の説があるけれども、次にのべるものは、もっと恐るべきものだ。

数年前に亡くなられた歴史小説家の村雨退二郎氏の著書の中にある〔病死か暗殺か孝明天皇の死〕という一文に、こういうことが書かれている。

村雨氏の知人でシェパードの訓練士をしていた山本正英から、村雨氏が直接にきいたはなしだそうであるが……。

山本氏の祖父は山本正文といい、当時の御所の医師をつとめてい、山本氏は、この祖父から孝明天皇の最期について、次のようなことをきいた記憶がある、と、村雨氏に語った。

「……孝明天皇の毒殺説というのがあるが、毒殺じゃあないのだ。ほんとうはね、天皇が厠から出て来られ、お手を洗っておられるときに、下から手槍で突き上げた者が

あるのだ。天皇は、槍に突き倒され、それから縁側を這って御病間へ辛うじてもどられたのだよ。縁側は血だらけになっていた。

……自分が御所によばれ、駆けつけたとき、次の間に、二十五、六の女官らしい女が、フスマの蔭から苦しんでおられる天皇の御様子をうかがっていたが、自分を見ると、ニヤリと、それはそれは不気味な笑いをうかべたかとおもうと、すーッと、どこかへ消えてしまったよ」

これが、山本医師のことばだ。

このはなしを信ずべきものだというのではない。

つまりは、そのころの時代の暗黒面が、これほどにすさまじいものであったことをいいたいのである。

どこの国においても、革命前夜の様相の物凄さは同じである。

天皇毒殺説は、そのころの京都市民たちの間にもひろまり、祇園の芸妓たちの間にもうわさされたという。

薩摩藩では、西郷隆盛が藩士たちをあつめ、

「天皇崩御のことについては、吃と口にしてはなり申さぬ。薩摩のさむらいには、およそ、かかわり合いのないことでごわす」

と、いましめている。

そのころの御所は、革命派の公卿や女官たちの手引きによって、志士・浪士たちが、

ほとんど自由に出入りをしていたといわれている。

とにかく、孝明天皇が亡くなられたことによって、朝廷内は騒然となった。

天皇側近の朝臣たちの旗色が悪くなったのは当然だし、前に天皇のお怒りにふれて謹慎中の公卿たちは次々に赦免され、かの岩倉具視の幽閉も免ぜられた。

岩倉具視という公卿は、かつて、幕府の外国との通商条約に反対するかと思えば、次には幕府へ協力し、皇妹・和宮を将軍家茂に降嫁させるため暗躍をするというわけで、そのときどきの情勢次第、岩倉のすることは猫の目のように変化した。

「岩倉には、まったく気をゆるせぬ」

つねづね、孝明天皇も、岩倉を恐れ、ついに宮中からしりぞけ、洛北の岩倉村（岩倉の領地）へ押しこめてしまったものだ。

その岩倉が、またも宮中の実権をにぎろうとしている。

洛北に謹慎中も、革命派の中心となって、ひそかに指導的立場にあった岩倉だけに、

「天皇に毒をもったのは、岩倉にちがいない！」

土方歳三が、憤激のあまり口走ったほどであった。

孝明天皇の死は、だれよりも徳川幕府へ痛撃をあたえた。

この天皇が、いま数年、お元気でおられたなら〔明治維新〕の実態は、もっと別のかたちとして成ったろうとおもう。

京都守護職・松平容保は、

「かくなっては、自分のはたらき得る余地がない」
悲嘆のあまり、辞任のことを、しきりに考えはじめているようだ。
こうなってくると、新選組もおだやかではなくなってくる。
近藤勇は、毎日のように外出をし、会津本陣、二条城、所司代などをまわって緊急会議に多忙をきわめたが、
「どうも、わからぬ」
げっそりとして、土方へ、
「われわれのわからぬところで、世の中が移り変って行ってしまうらしい」
「どうしたのです、総長。そんな、元気のないことを……」
「いや、わからぬ。世の中が、天下がうごいている。そのうごきが、おれには、よくわからぬ」
土方は話題を転じた。
「それはさておいてだ。総長、新選組の内部にも火の手がかかりそうですよ」
「え……？」
「どうも、伊東甲子太郎一味のうごきが妙になってきました」
「そうか。やはり、な」
いまや、新選組における伊東一派の勢力は相当なものだ。
新しい若い隊士たちも、才気煥発（かんぱつ）の伊東甲子太郎の指導力にみちびかれつつあるし、

旧同志の藤堂平助、斎藤一、永倉新八なども伊東に接近している。

「斎藤はともかく、永倉だけはどうも、うたがいたくないな」

と、勇はいった。

土方は冷笑している。

土方が、どこからか耳に入れた情報によれば、伊東甲子太郎は、まさに、第二の清河八郎であって、新選組を自分の道具にし、伊東一派の勤王運動に利用しようと考えていることは明白だそうな。

「薩摩藩とはすっかり手をむすんでいるらしい。伊東は西郷吉之助にも会ったという」

「本当か」

このころになると、薩摩藩が幕府をはなれ、長州藩と手をにぎり合ったことはだれの目にもあきらかであった。ただ表沙汰にならぬだけのことである。

むしろ、土佐藩のほうが、殿さまの山内容堂（豊信）の積極的な藩政統一により、革命派が弾圧され、急激に幕府へ接近しつつあるようだ。

「とにかく……」

と、土方歳三は勇にいった。

「総長も、よほどの覚悟をしてもらわぬといかん」

「何……？」

「近いうちに、伊東一派を何とかしなくてはならんということです」
「うむ……」
あわただしく、年が暮れた。
翌、慶応三年正月九日。
宮中において、先帝の皇子・睦仁親王の践祚の儀式が小御所において取りおこなわれた。
ここに、新帝が生まれたのである。
すなわち、明治天皇で、ときに十六歳であった。

二

二月に入って間もなくのことだが、近藤勇は公用で会津藩本陣へ出かける前に、永倉新八を総長室へ呼んだ。
「およびで？」
めずらしいこともあるものだ、というような顔つきで永倉が、
「何か……？」
「ま、ここへ来てくれんか」
机の前にすわった勇が、やさしい声でいう。永倉は妙な顔をした。
多忙の故もあるが、このごろの勇は、ほとんど永倉や原田とことばをかわすことも

ない。

永倉が傍に来ると、勇が、すわったままの姿勢で、凝と、あたりの気配に耳をすましている感じであった。

「総長……」

「しずかに……」

「はあ……」

「これから、わしは守護職本陣へまいる」

永倉は、ほろ苦く笑った。

近頃、近藤勇は自分のことを「おれ」とか「拙者」とかいわずに「わし」という。まだ四十にもならぬのに、妙に老成ぶった感じで「わし、わし」というのが、江戸育ちの永倉新八には、何かもったいぶった、成り上り者の口調にきこえて、可笑しくてならない。

「で、な……」

「はあ」

「暮れ六ツまでには、祇園の山絹へ行っている」

「総長がですか？」

「いかにも。わし一人でだ」

「そこへ、私に来いといわれるのですね」

さすがに永倉、敏感だった。
「わかっていますよ」
「何が？」
「私が、このごろ伊東参謀と親しくしているのが、だいぶんに、土方さんの気にさわっているようだ。そのことですね？」
「それもある」
「まさか、色町の屋形で芸者をならべておいて、その前で腹を切れじゃあないでしょうな」
にこにこしながら率直にいってのける永倉の態度は、試衛館時代と少しも変っていない。
勇は、照れくさそうに鼻のあたまを指で撫でつつ、
「ま、折入って、久しぶりにいろいろとはなしたいこともあるし……それに、わしからたのみたいことも……」
いいかけたとき、土方歳三の足音が廊下にきこえた。
勇が永倉に目くばせした。
永倉は心得てうなずき「では……」といい、立ち上った。そのとき土方が総長室へ入って来、じろりと永倉を見たが、ことばもかけない。
永倉新八が、ためいきを洩らして廊下へ出て行った。

「総長。馬の用意が出来たそうですよ」
「よし」
「永倉、どうしたのです？」
「なに、いささか、な。さぐりを入れて見たのだ」
「ほう……で、如何（いかが）でした」
「よくはわからぬ」
いい捨てて、勇は急に不機嫌となり、土方を残し、部屋を出て行った。
笑いながら見送った土方歳三だが、一人きりになると、手文庫の傍にあった勇の刀の手入れ道具を持ち出し、提げていた自分の愛刀をぬきはらい、刀身へ打粉をかけはじめた。
土方の顔には、孤独な、さびしげな、それでいて、深い海の底のように深沈としたしずけさがただよっている。
打粉をかけ、刀身をぬぐいにかかったとき、
「おれがやらなけりゃあ、だれがやるんだ」
土方は、吐き捨てるようにつぶやいたものである。
その夜。
勇も永倉も約束通り、祇園の〔山絹〕へあらわれた。
例によって、勇は供の隊士たちを先に帰してしまってあるし、むろん、永倉も一人

でやって来た。

去年の秋から「幹部といえども、絶対に一人歩きはせぬこと」と、土方副長が厳命を下している。

「こんなところで、二人きりで会っているのを知ったら、土方さん、大さわぎですぜ」

「ばかな！」

勇は胸を張り、

「わしは総長である」

と、いった。

永倉は、うつ向いた。笑いをかみころしたのである。

江戸で、小さな剣術道場の主だったころの近藤勇には、こうした単純さが微笑をさそい、永倉も原田も大好きな人柄だとおもい、だからこそあくまでも勇と生死を共にする気になったのである。

その性格が、地位と名声を得たいまになると、これまた単純率直に「自分はこのように立身出世をしたのだ」と思いこんでしまう。まさに、永倉新八から見ると、

（近藤さんは、とうとう成り上り者になってしまった）

のであろう。

そのくせ、祇園の色町へ出かけて女あそびをするときなど、隊士たちへはひたかく

しにする。

これは以前、

（局長なる者が、あそび惚けていてはならぬ）

きびしい、自分へのいましめであった筈だが、いまは、

（こんなところを隊士たちに見られたら、総長の威厳にかかわる）

と、このように変ってきている。

その変り方に近藤勇自身が気づいていない。だから〔成り上り者〕だと、永倉はいうのである。

芸妓たちを遠去けてから、勇は、あまり伊東一派と親しくせぬほうがよい……と、おだやかにいった。永倉は「なぜです？」と反問をしなかった。

「さて……たのみというのはだ」

勇は、このとき例の照れくさそうな笑いをうかべ、永倉の杯へ酌をしてやった。永倉、きょとんとしている。

「実は、醒ヶ井にも弱っているのだ」

「おわかさんと、お孝さんのことですか」

「知っていたのか？」

「まあね……」

「隊士たちには知られていないだろうな」

「大丈夫ですよ」
「いや、どうも、実に弱った。女の、その嫉妬というものは、まことにひどいものだ」
「これが江戸におられる奥さまだったらどうなんでしょうかね」
「君は、わしをからかっているのか」
「そう、むきになってしまわれては、はなしも何もできやしない」
「うむ……」
「で、私にどうしろといわれるんです？」
「貴公の、休息所のほれ……」
「小常のことですか？」
「ひとつ、なんとかたのんでくれぬか、お孝のことを……」
「つまり醒ヶ井から他へ移したいと申されるのですね？」
「君は、のみこみが早い」
「よろしい、なんとかいたしましょうよ」
「そ、そうか」
勇は、こころから安堵の色を見せ、
「たのむ、たのむ」
と、たのむの大安売りなのである。

その夜、二人は別れ別れに〔山絹〕を出た。

先に永倉新八が出て、この日は非番であるから、屯所へはもどらず、まっすぐに鎌屋町の休息所へ行き、泊った。

湯どうふか何かで、小常とさし向いに一杯やりながら、永倉はげらげら笑いながら、勇の依頼を小常へ語った。

「いざとなると、まあ、おれをたよりにしてくれるのさ。池田屋の斬込みのときも、永倉君と一緒なら心強いとか何とか……うむ、それがさ、近藤さんだけに、おらあ、おせじだとは思わねえのだ。とにかく、小常、なんとかならねえかえ？」

小常は、しばらく考えた上で、

「ほなら、姉ちゃんにたのんでみまひょか」

と、いった。

姉ちゃんというのは、小常の実姉おせいのことで、小常同様に芸妓あがりの、いまは祇園の大和橋に屋形を持ち、妓を四人ほど抱えている。

「そうか。おれもその辺のところが、いちばんいいと考えていたのだ」

小常の世話で、お孝が大和橋へ引きとられたのは、それから間もなくのことであった。おわかが外出中に、永倉が出かけて、たくみにいいふくめ、大和橋へ移してしまったのである。

近藤勇は、もう大よろこびで、そっと永倉をまたも〔山絹〕へよびよせ、御馳走を

した上で、

「小づかいにしなさい」

二十両もくれた。現代の七、八十万円にもあたろうか。よほどに、勇は姉と妹の〔側妾（そくしょう）〕のあらそいになやまされていたものと見える。

だが、そうなればそうなるで、おわかは、勇が妹をどこかへ隠し、そっと会いに行くのだろう、などといい出し、しばらくはもめぬいたが、勇は永倉から教えられた通りに、

「お孝は、お前にいじめられて逃げてしまったのだ。それでもうよいではないか」

あくまでも、いいきって、おわかの気が静まるのを待った。

物のはずみであああなったお孝だが、姉のおわかとはくらべものにならぬ。

京大坂の色町でみがきぬいたおわかだけに、素人の小むすめでは太刀打ちのかなうわけがないし、勇もまた、おわかを手ばなす気にはとてもなれなかった。

「そのかわり総長。あなたが手をつけなすったのだ。お孝ちゃんの行末については、ちゃんと面倒を見ておやりにならぬといけませんぜ」

「いうまでもないことだ」

勇はまじめであった。こういうところは、むかしのままの〔誠実〕さがこもってい、永倉も悪い気はしなかった。以後は永倉が間に入り、勇は大和橋のお孝へもかなりの金（もの）を仕送りしていたようであるが、お孝とは会わなかったという。

三

十五代将軍となった一橋慶喜は、ここに徳川慶喜となる。

二百数十年存続して天下に号令をした徳川幕府の最後の将軍となったわけだが、その宿命を知るや知らずや、慶喜の奮闘ぶりは相当なもので、

「おい、今度の将軍は、なかなかやるねえ」

「薩摩のやつども、びっくりしているそうだぜ」

「こいつは、おもしろくなってきた」

永倉新八と原田佐之助がうれしげに語り合ったほどであった。

将軍、慶喜は、先ず京都をまもる幕府軍をはじめ、諸藩の部隊へフランスからまねいた軍事教官をさし向け、猛烈な新式訓練を開始した。

去年――。

第二次の長州征討軍は、近藤勇が広島から引きあげた後で、いよいよ長州へ進撃したけれども、長州軍の果敢な迎撃をどうしても突きくずすことが出来ず、いったんはうばい取った地点も次々に逆襲を受けて放棄するというありさま。

ついに、九州における幕軍の拠点、小倉城までも占領されてしまった。

前将軍・家茂が大坂城中に病歿したのは、この幕軍敗北の最中だったのである。

それだけに、今度、新将軍の下に、幕府軍がフランス式の教練・演習をやりはじめ

たことは、在京の諸藩を瞠目せしめたといってよい。

新将軍は、こうして幕府の武力をととのえると共に、前々から切迫している政治問題を一挙に解決しようとはかった。

諸外国の、

「神戸を開港せよ!!」

という強圧的な要求を、いまは残念ながら受けいれねばならぬ。このことを孝明天皇亡きのちの朝廷へ、どう持ちかけてゆるしを得るか、であった。

慶喜は、イギリス・オランダ・フランスの公使たちを大坂城へまねき、何度も協議をかさねた。

伊東甲子太郎が、いよいよ、その本体をあらわしたのも、そのころである。

伊東一派と薩摩藩のむすびつきは、いまや公然たるものになってきていた。

その薩摩藩は、表向きは〔知らぬ顔〕をしていて、ひそかに、イギリスへたのみ、外国の新鋭兵器や火薬を長州へ売らせたり、浪士隊を送りこみ、幕府軍と戦う長州軍を、しきりに援助してきている。

すでに勇も土方も、伊東派に対する覚悟をかためていた。

伊東甲子太郎は堂々と近藤勇に向い、

「おもうところあって、新選組としばらくは行動を別にいたしたい」

ついに申し出た。

「脱退でござるか」
勇も平然としていう。
脱退なら、きびしい処罰を受けること、いうまでもない。
「いやいや、脱退ではござらぬ」
伊東は、びくともせず、
「われらは薩長両藩とまじわりをむすび、ひそかに彼らの動静をうかがい、これを新選組へ知らせ、なんとか、この危急の場合の役目を果したいとおもう」
ぬけぬけと、こういう。
「なるほど」
「そのためには、いちおう、新選組とたもとを別つ。これでなくては、相手を安心させ得ますまい」
「なるほど」
うなずいた近藤勇が、
「結構でしょう」
あまりにも、あっさりと承知したので、伊東も気ぬけの態だったようである。
さて、伊東が新選組を去るとなると、これに従って行く者は意外に少なかった。それまでは伊東一派の弁口に引きまわされていた隊士たちも、いざとなると、やはり気おくれがしたし、近藤や土方が怒りもせずに淡々と伊東一派を送り出そうとしている

のも不気味だったらしい。

伊東甲子太郎と共に新選組を去った者は次の十五名だ。

鈴木三樹三郎（伊東甲子太郎実弟）
新井忠雄　毛内有之助
服部武雄　加納道之助
篠原泰之進　富山弥兵衛
阿部十郎　内海二郎
中西登　橋本皆助
清原清　佐原太郎

それに江戸以来の藤堂平助。
古参隊士の斎藤一である。

永倉新八は、藤堂平助からの執拗な〔さそい〕があったにもかかわらず、伊東一派へは参加しなかった。

「それ、わしのいった通りだ」

と、勇は土方に自慢し、

「永倉は大丈夫だよ。しかし、斎藤がついにおれを捨てるとはなあ」

結成して間もなく入隊。その後は隊の幹部として活躍し、その剣術は、天才・沖田総司をして、

「斎藤さんほどの腕前は、隊中に五人といませんよ」

と、感嘆せしめた斎藤一である。

どういうつもりか、この斎藤が去年の秋ごろから、しきりに伊東甲子太郎の言動に感服をし、取り入っていたのを苦々しくながめていた勇だが、

（まさか……）

と、思っていたことも事実であった。

「総長」

土方歳三は、伊東たちが去ったその夜あけ、総長室で勇と二人きりになるや、

「斎藤は、私がやつらのところへもぐらせたのですよ」

と、ささやいた。

「え……!?」

「これからは、伊東のすることなすこと、みんな斎藤の口から私の耳へ入ることになっているのです」

つまり、斎藤一は土方のスパイとして伊東一派へ参加している。

勇、茫然（ぼうぜん）となったが、

「わしの耳へも入れずに、きさま……」

と、怒った。

「こういうことは、二人きりで事をすすめたほうがよかったのです」

「むむ……」

「ですから今夜、総長だけに打ちあけたのですよ」

「う……」

土方歳三のすることは、ただ、ひたすらに新選組のためをおもってしていることだ。近藤勇をしりぞけて、自分が隊の実権をつかもうなどの野心は毛頭ないことが、勇にはっきりわかるだけに、そういわれて見れば怒るわけにもゆかない。だが、厭な役目をいつも自分に替って果してくれる、この弟のようなつながりも深い土方に、（おれのほうが、引きずりまわされている）ような気がすることもある。

それが、勇には苦痛であった。

四

伊東甲子太郎は、すでに手をまわしていい、薩摩藩の口ぞえにより、朝廷から、

「禁裡御陵衛士に任ずる」

と、ゆるしを得ていた。

つまり、朝廷の墓所をまもるという役目についたことになるのだが、それは名目に

すぎない。

伊東一党は、東山の高台寺内の月真院へ屯所をさだめ、

〔山陵衛士〕

と、自称した。

「ふふん……」

土方歳三は鼻で笑い、

「あいつらのやることは、たいてい、あんなようのものさ。いつまで、つづくかね」

と、いった。

伊東甲子太郎は、早急に同志をあつめなくてはならぬと考えた。

総勢十六名では、何の活動もできない。

そこで同志たちが諸方へ散り、新しい同志をあつめることになり、伊東はみずから新井忠雄をともない、九州・太宰府まで出かけていった。

この間に、幕府が新選組へ対し、

「……五か年間にわたって大公儀のため、天下非常の時に粉骨のはたらきをつづけたることは、徳川家恩顧の旗本にも匹敵すべきものである」

というので、新選組・幹部には幕臣同様の〔格式〕をあたえることになった。

近藤勇は〔見廻組・与頭格〕

土方歳三は〔同肝煎格〕

沖田、永倉、原田以下にも、それぞれ身分と格式とがあたえられた。

勇は大よろこびで、

「この五か年の苦労が、ついにむくわれた」

といい、

「尚(なお)いっそうの精進をのぞむ」

隊士たちをあつめて演説をやった。

このころ、新選組は総勢百五十名。

以前は昇格のことを辞退しつづけて来た勇も、このあたりで、新選組がはっきりとした〔格式〕を得て、さらに大きく広い立場で活躍したいと考えていたところだったから、一も二もなく、幕府当局のすすめに従ったのである。

ところで……。

この慶応三年という年は、幕府にとっても新選組にとっても、ぬきさしならぬ重大な年となるわけだが、先(ま)ず、伊東一党と新選組の件を書き終えてしまいたいとおもう。

新選組が伊東一党の始末をつけようと決意したのは、この年も終りに近くなった十一月中旬のことであった。

時勢は、いよいよ幕府に不利で、このため、人数は少くとも伊東たちの〔山陵衛士〕は意気さかんに活動をしはじめた。

土方歳三にいわせると、

「あいつらは、薩摩藩の手先き」
だそうだが、何気ない顔で伊東のところにいる斎藤一から土方の耳へ入った情報によると、
「伊東たちは、いま薩摩藩と密議をかさね、新選組掃討を計画している。先ずその手はじめに、近藤総長を斬るということで、私が乞食に化け、近藤先生が屯所から出て来るところを斬りつける。それを合図に、一同、屯所へ火をかけ、中へ斬りこむ。このとき薩摩藩が手なずけている浪人たちの一隊が応援することになっていて、鉄砲や短砲も、薩摩藩で用意することになっている」
と、いう計画だ。
斎藤が土方のスパイだとも知らず、伊東甲子太郎は、
「近藤を討ち果すことができるのは、貴公よりほかにないので、ぜひたのむ」
と、斎藤一の腕をつかんで、はげました。
斎藤も、よほどにうまく立ちまわり、これほどまでに伊東の信頼をうけていたというのは、土方が早くからこの事態を予感し、時間をたっぷりかけて斎藤を伊東に接近させたからであろう。
「よし」
この報告をきくや、勇は即座に、
（伊東を斬ろう）

と、断を下した。

これより先、新選組に不満を抱く隊士十名が、伊東をたよって脱走したことがある。彼らは、会津本陣へあらわれ、新選組と別れたいから正式に手つづきをしてもらいたい、と願い出た。

その交渉のため、佐野七五三之助・中村三弥など十名が数日にわたって会津本陣をおとずれたのを知った近藤勇、会津藩とはかり、

「主謀者の佐野、茨木、富田、中村の四名だけを斬れ。他の六名は追放にしてしまえ」

と、命じた。

土方は全員処罰を主張したが、

「おれのいう通りにしろ!!」

勇が大声で、土方を叱りつけたという。

そこで、またも黒谷の会津本陣へあらわれた佐野以下四名を他の六名とは別の部屋へ入れておき、ここへ新選組が襲いかかって斬殺した。

障子ごしに槍を突き出し、四人を串刺しにしたので、佐野らの応戦にも限度があった。

このとき、佐野七五三之助は、ふところに辞世をしのばせていた。

「二張の弓引かまじと武士の、ただ一筋に思い切るなり」

という彼の辞世には、ありありと、この時代に生きた武士の苦悩があらわれている。

五

十一月十八日。

高台寺の伊東甲子太郎へ、近藤勇の使者が来て、

「久しぶりで一献さしあげたい。いろいろと御意見もうかがいたいし、自分もまた、ゆっくりと御相談いたしたいことがござる。尚、このことは土方歳三に内密ゆえ、くれぐれも、おふくみ願いたい」

と、勇の意見をつたえた。

伊東は、しばらく考えた上、

「承知いたした」

と返事をし、使者を帰した。

危険なことにはちがいないが、別れたときも〔喧嘩別れ〕ではないのだし、一月ほど前に、伊東は路上で所司代屋敷から帰る勇一行と出会ったことがあり、

「やあ、伊東先生。御元気で何よりです」

馬上から、勇がなつかしげに声をかけてきた。

伊東も笑いながらあいさつをして別れたのだが、そのときの印象では、別に勇が、いまのところ自分を暗殺する決意をもっているとは考えられない。

それに、

「……このことは、土方歳三に内密のことだ」

という勇のことばが、伊東甲子太郎を安心させたようだ。

新選組にいたころ、伊東は、勇と土方との関係をよく見知っている。

（土方の強引な統制ぶりに、近藤も厭気がさしたものと見える。近藤も馬鹿ではないから、いろいろと時勢のうつりかわりを見て、悩むことも多いのだろう）

かつての、自分に対する勇の心酔ぶりを、伊東はこころよくおもい起した。

（とにかく、はなしをきいてやろう。いま、近藤が何を考えているか……それをさぐることもわるくはない）

そこで「行く」と返事をしたのだ。

「それはあぶない」

伊東の弟・鈴木三樹三郎がすぐに反対をしたし、近藤や土方のことをもっとも知悉している藤堂平助も、

「この際、おやめになったほうがよろしいでしょう」

もし、どうしても伊東が行くのなら、同志一同、そろって供をしましょう、という。

「そりゃ藤堂君、あまりにも大仰だ。近藤に笑われるよ」

すると、斎藤一が、

「私がお供をしましょう。大丈夫です」

きっぱりといった。

「そうか。そうしてくれますか」

伊東甲子太郎は、斎藤が来てくれるなら、もう安心といった表情だ。藤堂平助も「斎藤さんが行くのなら……」と、しきりにうなずく。

これほどまでに、斎藤一の剣は高く買われていたといってよい。

夕暮れになると、伊東甲子太郎は斎藤ひとりを供に、七条・醒ヶ井の近藤妾宅へ向った。

「やあ、伊東先生。ようこそ」

近藤勇が手を取らんばかりに出迎えてくれる。

「おなつかしい、久しぶりですなあ」

「伊東先生。今夜は無礼講なのです。新選組も山陵衛士もありません。人間と人間、ただ、こころうれしく、のもうではないですか」

などと、人ざわりのよい吉村貫一郎、山崎丞など四人ほどの隊士がいて、すぐに酒宴となった。おわかも女中を指揮して、まめまめしく立ちはたらく。

料理は、松原橋たもとの〔いけ亀〕という料亭から板前が出張して来て、大へんなもてなしであった。

もしも、近藤たちに危険なたくらみがあるとしたら、第一に妾のおわかが、このように無邪気にたのしげにふるまうことはとてもできない筈だ、と、伊東はおもった。

おわかの挙動には、いささかの緊張も見られなかった。もっとも、それは当然なの

で、勇はおわかに「伊東先生と酒をのむから……」とのみ、はなしてあるだけなのだから……。

客好きのおわかは、人びとがにぎやかに飲んだり食べたりしているのを見るのがたのしいらしい。

勇が彼女にこころひかれるのも、京の女にはめずらしい、こうしたおわかの性情があったからだ。

酔うにつれ、伊東甲子太郎は談論風発の態となった。時勢を説き、新選組の古い感覚を指摘し、

「近藤先生も、おもいきって新しき道へお進みになるつもりなら、今からでも決しておそくはない。伊東甲子太郎、身にかえても、御面倒を見させていただきましょう」

などと、いい出した。

それというのも、勇はじめ隊士たちが伊東の弁論を、

（なるほど、ごもっとも）

少しも反対せず、傾聴しているからであった。

亥の刻（午後十時）ごろ、伊東は帰途についた。

妾宅を出るとき気がつくと、いつの間にか斎藤一の姿が見えない。

「斎藤君は？」

伊東が問うと、吉村貫一郎が、

「一足先きに帰りました」
事もなげにいった。
このとき伊東が（おかしいな？）と感ずべきなのだろうが、恐るべきは酒の酔いである。かなり伊東は酔っていて、勇がしきりに駕籠で帰ることをすすめても、
「いや、酔いをさましがてらに、歩いてまいる」
ふらふらと出て行った。もう、斎藤が居ないことも忘れてしまったかのようだ。
皎々たる月夜であった。
伊東は、好きな謡曲の竹生島の一節を口ずさみつつ、木津屋橋を東へ、法華寺の土塀のあたりへさしかかった。
土塀の右手に、小さな草原があって、伊東はこれを横切りかけた。
草原の南側の板囲いの間から、電光のように槍が突き出され、伊東の肩をしたたかに突き刺した。
「あっ……」
伊東甲子太郎が、たまぎるような声をあげた。
北辰一刀流の剣術を教えていたほどの伊東だが、無事に帰れたという安心感と酒の酔いとに、すっかりゆだんをしてしまったわけである。
「うぬ!!」
身をひねりざま、伊東が大刀をぬきはらったとき、その肩から喉にかけて突き通し

た槍がぐいと引きぬかれた。
よろめく伊東へ、物蔭から飛び出して来た新選組の大石鍬次郎が、
「や!!」
いきなり、伊東の左肩をななめに斬りはらった。
つづいて、井上勝蔵。これはもと伊東の馬丁をしていた男だが、伊東が去って後、隊士に取り立てられた力自慢の若者で、
「野郎!!」
野卑なわめき声と共に斬りかかるのを、
「おのれ勝……」
さすがに伊東が真向から、井上を斬って倒した。
ここまでが精一杯のところで、新選組の刺客が殺到したときには、法華寺門前までよろめいて来た伊東甲子太郎、ぐったりと倒れ伏し、息が絶えていたのである。
新選組は、伊東の死体を七条の油小路へ運び、これを路上へ放り捨てた。
伊東一党の篠原泰之進の手記によると、
「……油小路の町役人が高台寺へ知らせに来たので、隊中大いにおどろき、怒った」
と、ある。
町役人は「いま巡邏の者が番をしているから、すぐに死体を引き取りに来ていただきたい」と、いいおき、帰って行った。

このとき山陵衛士屯所には七名しかいない。

他の同志は出張、または外出中であった。

とにかく、伊東の死体を引き取りに行かねばならぬが、敵は新選組と見てさしつかえない。うっかりと出ては行けぬ。こうなると伊東を出て行かせたことが悔まれるばかりの一同であったが、

「よし、甲冑を着込んで行こう」

というものもあれば、

「薩摩屋敷へ知らせては？」

と主張するものもある。

結局、

「もしも、大仰な武装なぞをして出て行き、路頭に討死をしたときは、後世、われわれが人に笑われるであろう」

との篠原の意見によって、七名は平服で、人足二人に垂れ駕籠を担がせ、小者一人をつれて油小路へ向った。

篠原の手記にいわく。

「……四方をかえりみるに、凄然として人なきがごとし、よって、ただちに伊東の死所に至り、その横死を見て、一同嘆息を発し、すみやかに血骸を駕籠にかき入れんとするに、賊兵三方より躍り出て、さんざんに切りかかりたり。その数およそ四十余人

なり」

ときに八ッ（午前二時）ごろであった。

身も凍る寒夜の月が頭上にある。

油小路の道の、蕎麦屋と湯屋の中にかくれていた新選組四十余名。いずれも鎖の着込みをつけた武装で、いっせいに躍り出し、伊東一党へ斬りかかった。

「それ!!」

猛然と駆け寄って七名を包囲するや、原田佐之助を先頭に突進する。

伊東一党も覚悟をきめてきているし、みな相当の剣客だ。

中でも、武州浪人の服部武雄は、

「おれがふせぐ。みな、逃げろ」

大小二刀をぬきはらい、飛びこんで来た原田の右肩を切りはらったものだ。

「服部があれほどにつかうとは考えても見なかった」

と、のちに原田佐之助がいっているように、七名の反撃は実に手強い。

幅三間ほどの道へ入りみだれ、飛び違って物凄い決闘がはじまった。

絶叫と気合がまざり合い、血しぶきが音をたてる。

藤堂、服部、毛内の三名が必死で新選組の切りこみをふせぎ、

「早く逃げろ」

「みんな死んでどうする!!」

と、叫ぶ。
その声にはげまされ、鈴木三樹三郎ほか三名が血路をひらいて逃走にかかった。十余名の隊士が、これを追った。
「藤堂さんも逃げろ」
毛内有之助が力戦しつつ、藤堂平助にいった。
服部武雄も二刀をふるって阿修羅のように闘いながら、
「早く、早く」
藤堂へ叫ぶ。
その服部へ、肩の傷を布でしばり出直して来た原田佐之助が、
「こいつめ！」
捨身の突きを入れた。かわしきれずに服部が、原田の剣に深々と腹を刺されて、倒れ伏した。
藤堂平助が逃走にかかったのは、このときである。
それに、七、八名の隊士が駆け迫るのを制して、永倉新八が、
「おれが斬る」
と、藤堂の側面から斬りかかり、刃と刃を合わせて鍔競りのかたちになった。
「藤堂……」
永倉は低くいった。

見かわす二人の眼と眼……。

江戸以来のつきあいだし、はじめは藤堂の性格になじめなかった永倉だったが、そのうちに親密な友人となって、こころをゆるし合っていただけに、

（逃げろ）

と、永倉は眼でいった。

「おお……」

藤堂もすぐにわかって、永倉の刃を引き外し、二合三合と打ち合うやさっと身を返して藤堂が逃げる。

「待て！」

永倉は藤堂を追いまくるかたちを見せ、たくみに彼を包囲の輪の外へ突き出してやった。

逃げにかかる藤堂平助へ追いすがって斬りつけた者がある。この男、三浦常次郎といい、前に藤堂が親身になってめんどうを見てやった隊士だ。それだけに藤堂は怒った。

「三浦か！」

怒鳴るや、藤堂が逃げるのをやめて、三浦を相手に闘いはじめたものである。このため、藤堂は逃げる機会を失った。

たちまちに隊士たちが藤堂をかこみ、押しつぶすようにして斬り殺してしまった。

永倉新八は、ためいきをついた。
毛内有之助も斬殺されている。
七条油小路に、月だけが光っていた。
その月光をあびて、藤堂平助が道の溝の中へ切りこまれ、死んでいる。
永倉新八は、後年になって、
「……いや、その藤堂の死顔を見ていますとね。こう、何と申しますか、実にさびしいこころもちになってしまいましてね。それまでに何度も斬合いをしてまいった私ですが、このときはもう、何も彼もが空しくて……いったい、おれたちは、こんなことをして何になるのだろうか、という……それだけつまり、時勢というものが変ってきてしまったのでしょうなあ。屯所へ帰って、すべてを報告すると、近藤さんもよろこぶどころか、実にもう厭な顔つきになって、さっさと自分の部屋へ引きこもってしまいましたよ。近藤さんは藤堂平助が好きだったのです。あとになって私に、あの男だけは、なんとか生かしておきたかったと、こういいましたよ。ですから、私が逃がそうとしたが、実はこれこれで、むざむざと殺られてしまったことを打ちあけますとね、近藤さんがあなた、いつものようにあたりを見まわし、声を低めて……永倉君。そのことをだれにもいうな。しかし、君がそこまで気をつかってくれたことはうれしい。礼をいう……と、こういいました。私もなんだかこう、なみだがじわじわと出て来ましてね。ふっと、近藤さんの顔を見ると、相手も泪ぐんでいるのですよ。いま（明治

末年）になると、近藤さんもいろいろといわれていますが、私から見ると、大へんに情のあつい人のようにおもわれてならないのです」

と、語りのこしている。

永倉の愛人・小常が島原で芸妓をしているとき、藤堂平助がしきりに小常へいいより、そのいざこざの末に永倉が恋の勝利者となったのがきっかけで、永倉と藤堂は親友の誓いをむすんだらしい。

近藤勇はこのとき永倉に向い、

「迷うよ。実に迷うなあ」

深刻な顔つきになって、つぶやいたという。

薩摩と長州の両藩へ、朝廷からひそかに、

「幕府を討て!!」

の密勅が下ったのは、この一か月ほど前である。

大政奉還

一

勇の養父・近藤周斎が七十六歳で病歿したのも、この年、慶応三年である。

それは、七条・油小路事件が起る少し前の十月二十八日の夜であったという。

その前に、土方歳三が江戸へ出張していた。

新しい隊士を募集するための出張であったが、このとき募集に応じた稗田利八が昭和四年、八十一歳で語りのこしているところによれば、

「……土方先生があらわれ、われわれに挨拶をなすったが、色の白い、実にすっきりとしたよい男で、黒紋付の上下に仙台平の袴をつけ、髪を総髪にたばねていましてね。そりゃもう一万石や二万石の大名のように立派な風采でした。仕度金として、その場で取りあえず金一両をもらいました」

と、ある。

このとき、土方がつれて帰った応募隊士は二十余名とも四十二名ともいわれているが、一行は十月の二十一日の早朝に江戸を発っている。だから、それから七日後に周斎老人が亡くなったわけであった。

土方一行が東海道を上って、京都へ到着したのが十一月三日である。

これを追いかけるようにして、翌四日に周斎の死を知らせる早飛脚が京都へ着いた。

養父の病気のことは、かねがね心配をしていた勇だが、昨日、江戸から帰って来た土方に「いまのところ別条はないようです」と、きいたばかりだけに、もう矢も楯もたまらなくなり、馬を駆って会津本陣へおもむき、

「江戸へもどり、父の葬儀をいとなみたく、なにとぞ御ゆるしをたまわりたい」
守護職・松平容保へ請うたが、
「たのむ」
反対に、会津侯があたまを下げ、
「孝をつくせぬことは、いかにもこころ残りであろうけれども、いまこのとき、おぬしが京を留守にすることは、まことに重大なことである。明日とはいわず、今日のうちにどのような異変が起ることか知れたものではない」
気も弱くなってきているだけに、この会津の殿さまは泪ぐみさえして、
「あえていう。公私を弁じてくれい」
「は……」
ここまでいわれては、勇もわがままはいえない。
屯所へ帰って来て、居間へこもり、養父の仮の位牌の前へうずくまったきり、夕飯もとろうとはしない勇であったが、
「総長室へは、だれも入るな」
と、土方歳三が命じた。
土方も、近藤周斎には我子同様の薫陶をうけてきているだけに、さすが沈痛な面もちで、めずらしく自室へ酒を取りよせ、おそくまでのみつづけていたようである。
勇の妻女つねから手紙がとどいたのは、それから間もなくのことで、

「……お父さまの葬儀は、万事、佐藤彦五郎（土方歳三の義兄）が取りしきって下され、こころおきなくいたしました。前夜までは何事もなくおやすみになりましたのに、朝、わたくしが気づきましたときには、まるで眠るがごとく息をひきとっておられましたのでございます」

と、ある。

江戸の剣客や門人が参列したばかりか、いまの勇の地位もあることだし、幕府要人たちからの使者も来て、相応の葬儀がいとなまれたらしい。

「……佐藤どのの申されるには、このさい、道場をしまい、別のところへ移転したがよかろうとのことにて、わたくしも、さようにおもいます。旦那さまが、いずれ江戸へお帰りになれば、いまの家では用も足りますまいし……」

今度、勇が帰府すれば、立派な幕臣であるから、当然、新邸をいとなまねばならぬ、というのだ。

いまの小日向の家にいてもよいのだが、これからはむすめの瓊子と二人、小ぢんまりと暮してゆきたい。ここにいて道場をかまえていれば、佐藤彦五郎も忙しい中をわざわざ武州・多摩から江戸へ来て、門人たちのめんどうを見なくてはならぬ。それがお気の毒でもあるし、

「……さいわい、牛込の二十騎町に手ごろな家が見つかり、小ぎれいでもありますし、旦那さまが江戸へ出ておいでになられても、御体面にかかわるような家ではございま

せぬゆえ……」

どんなものだろうか、と、つねは勇の返事を待っているとのことだ。

「お前のよいようにはからってくれ」

すぐに、勇は返書を出した。

勇は、夢見るおもいで、自分の将来を考えてみた。

いまの天下動乱がおさまる。

そして、徳川を中心にした諸大名の協力一致がもたらした〔新政権〕が生まれ、天皇を頭にいただき、新しい日本が誕生する。

勇も、この〔新政権〕下の一員として、江戸へもどり、つねや瓊子と共に生甲斐のある新生活をいとなむ。〔新選組〕は、日本の新しい陸軍の中へふくみこまれるであろう。

（ああ、そうなってくれたら……）

たまらぬほどのうれしさではないか。

（おれも土方も、永倉も沖田も、みんなで一所懸命にはたらく。そうなってくれねばならぬ。そうしたい。ぜひにもだ）

しかし、いったん現実へ引きもどされると、暗澹たる材料のみしかひろいあげることができないのであった。

なんとしても先帝（孝明天皇）が、いまのこの世に生きておわさぬことが、

（くやしくてならぬ）

のである。

新帝（明治天皇）は、わずか十六歳の若さなのである。

これでは、政治上の指導力などある筈がないし、またそれをのぞむことはむりにきまっている。

となれば、朝廷は朝臣たちによって運営されてゆく。

その朝臣たちの中で幕府に近しい人びとは、孝明天皇をうしなったことにより、ほとんど朝廷から遠去けられてしまい、長州・薩摩両藩を主軸とする革命派と手をむすぶ朝臣の勢力がにわかに大きくふくらみはじめた。

（わからぬ。おれは、おれと新選組の立場をどこへすえたらよいのか……）

むろん、薩長と手をむすぶことなどを勇は考えているわけではない。

あくまでも幕府と共に歩んでゆくわけだが、それにしても、勇はさすがに、

（どうも、たよりにならぬ）

と、思わざるを得ない。

幕府自体がである。

勇の、現将軍（徳川慶喜）個人への信頼は、守護職（松平容保）同様に深く大きい。

だが、将軍や守護職のみで、いまの幕府が成り立っているのではない。

幕府の政治機構は、諸国の大名によって構成されている。

むかしは、これら大名たちを譜代（徳川恩顧の大名）と外様（徳川勢力が威大となった後に臣従した大名）にわけてい、譜代の大名というものは徳川幕府にとって、絶対の忠節をつくし、外様大名たちを押えてくれねばならぬ筈であった。

ところがいまは……。

〔御三家〕とよばれ、家康以来、もっとも親しく徳川家の血すじを継承し、諸大名の首座にある紀州・尾張・水戸の三藩ですら、将軍と幕府を助けるだけのちからをうしなってしまっているではないか。

いま、近藤勇が、もっとも関心をよせているのは土佐藩の動向であった。

二

この年の初夏。

将軍慶喜は、いわゆる四侯会議を招集し、何よりも先ず、解決せねばならぬ二つの問題について協議をかさねた。

一は、例の〔長州藩処分〕のことである。

二は、諸外国の強要による〔兵庫開港〕の件であった。

ところが、なかなかに議事がまとまらぬ。

四侯というのは……。

島津久光（薩摩藩）

伊達宗城（宇和島藩）
松平春嶽（越前藩）
山内容堂（土佐藩）

であって、これらの〔殿さま〕たちに、いちいち将軍が相談をもちかけなければ、幕府の足なみがそろわぬ。そこまで威力をうしなった徳川政権なのだ。

ところで、四侯のうち島津久光は、すでに自藩が長州と協力して〔新政権〕を牛耳ろうという密約をむすんでいるから、長州処分については、

「ゆるしてやりましょう」

と、強調するばかりだ。

将軍も幕府も、先ず外国の圧力の前に返答をせまられている〔兵庫開港〕の件を解決しようとおもうが、四侯ともに取り合おうともしない。

会議は、実力者の島津によってかきまわされてしまい、何も彼も、

「幕府の責任である」

ことになってしまう。

それでも将軍・慶喜は勇気をふるいおこし、四侯をしりぞけ、単独で宮中へ参内し、二日一夜を御所につめきって朝臣たちを説きふせ、ようやくに、

「長州処分は、なるべく寛大にせよ。兵庫開港のことは時勢やむを得ぬというなら差しゆるす」

という勅諚を受けることが出来た。

すると、四侯がだまってはいない。

「そもそも幕府は、先に長州征討の軍をおこし、さんざんに敗北をこうむり、政権の威信をうしなったではないか。この責任をどうするのだ。いまは、長州藩をゆるし、藩主父子の官位も以前にもどしてやり、幕府自身が反省すべきである。そうしてのちに兵庫開港のことを天下にはかるべきではないか」

激烈に、幕府を弾劾しはじめる。

すると朝廷側はびっくりして「四侯の申すこと、もっともである」などといい出しはじめた。

「ばかなことを……」

このことをきいて、近藤勇もおどろいた。

四侯のいう通りにしたら、今度は幕府と将軍が、長州征討の〔罪名〕を負うことになるではないか。

このことを見てもわかるように、実力ある大名たちは、もう幕府も将軍も問題にしてはいないのである。

「なんとしても、近き将来に新しく生まれるであろう新政権に、自分の藩がもっとも有利な立場をつかみたい」

のであった。

近藤勇は、土方以下幹部をあつめ、

「われわれとしても、だまってはいられない」

と、いい、近藤の名をもって朝廷へ〔建白書〕を出すことにした。

「摂政府下へ言上たてまつり候」

にはじまる建白書の内容を近藤勇のことばとして次に記す。

「……数百年、われら国民は天下太平にめぐまれて暮しておりましたが、いま、眼前に皇国累卵の危機を迎え、まことにもって、われわれもたまりかね、はばかりながら、申しあげたいと存じます。

先頃、現今の時勢について四藩（四侯）より建白されましたところによれば、長州藩の処分につき、四藩の建白通りになさるとのことをききおよびました。

これは実におどろき入ったことであります。

もともと長州を討つべく、幕府がおゆるしを請いましたとき、これをおゆるしになられたのは、天皇と朝廷ではございませんでしたか？

しかも先将軍・家茂が進発のときには、節刀をたまわり、この刀に天皇の御心がこめられている。青天白日のごとし、との先帝のおことばをいただきました。いま、このことを忘れ、あのときの長州征討はまことに無謀のことであった、などと申されるのは、もったいなくも先帝・孝明天皇を軽蔑し、先将軍・家茂をふみつけになさることになるのではございませんか。私、近藤勇としましては、まことに承知いたしかね

ます。

いまここにおいて、四侯のいうことを承知なされ、長州藩と藩主父子を元通りの官位におもどしなさるとあれば、将軍のみならず、長州征討の軍にしたがいました諸大名は、いずれも逆賊、有罪に相成りましょう。

これから後も、どのような変事変乱がおこるか知れたものではない世の中でありまず。そのたびに、いちいち朝廷のなさることが猫の目のように変ってしまうのでは、おそれながら天皇や朝廷の御威光もうすれ、おとろえるばかりとなり、国民もこれに従うわけにはまいりますまい。もちろん、そうなれば幕府も共々に権威をうしなってしまいましょう」

と、きめつけ、さらに、

「向後、諸藩の内には外国と手をむすぶものも出てまいりましょうが、そうなっては皇国未曾有の御失体、万歳の遺憾であります」

と、のべているのは、勇の外国ぎらいを如実にしめすものだ。

いうまでもなく、諸外国が日本という小さな島国の利権を争い、たがいに爪を磨ぎ合っていたことは事実で、孝明天皇も、このことがあまりにも判然としていたため、あくまでも開港を承知なさらなかったのである。

その勇の〔攘夷論〕はさておき、朝廷の不甲斐ない態度をなじった建白書を長々と引用したのは、これを見ただけでも、当時の〔新選組〕と、近藤勇の一面が、はっき

りと読者にわかってもらえるとおもったからだ。

三

結局、もみにもんで、ようやくに〔兵庫開港〕が勅許された。

勇が、このことに不満であったのはいうまでもなかろう。

どちらにせよ、事件が起るたびに幕府と将軍の信望は消えてゆくのだ。

それと反対に、薩摩と長州と朝廷とは、日毎に深くむすびついてゆく。

「幕府はもうだめだ」

と見た土佐藩が、

「薩摩と長州に負けてはならぬ」

俄然、奮起をしたのは、このときである。

土佐藩では、藩外の実力者として勤王運動に活躍している坂本龍馬が、藩内の中岡慎太郎らと共に、薩長同盟を成功させ朝廷との連携をつけた。

この活躍により、彼らは土佐藩を政局の中心へ押し出し、薩長両藩とむすび合せ、三藩合同の実力をもって、

〔王政復古〕

の革命をなしとげようとはかったのである。

しかし、土佐藩の意向は、

〔無血革命〕

の成就であった。

これ以上、日本の国土で日本人同士が戦い合い、血をながし合ったところでどうなるものではない。ばかばかしいかぎりではないか。それよりもひろく世界の大勢を見て、すべてを平和のうちに解決しよう。この土佐のこころを代表するのが坂本龍馬であって、龍馬は、

「徳川家も一緒になってやってもらえばいい」

と、いうのだ。

そのためには、徳川将軍が政権をみずから天皇へお返しして、

「みなさんと一緒にやりましょう」

と、率直に、すべてを捨てて出てもらわねばなるまい。

二百数十年もの間、独裁政権によって天下をおさめてきた徳川将軍が、自分から政権を捨てようというのなら、薩摩も長州もいうところはない筈である。

まことにユニークな考えだが、むずかしいことは当然であった。

土佐藩の執政のひとり後藤象二郎によって、この案が〔殿さま〕の山内容堂へ進言された。

「よいだろう」

殿さまも、承知をした。

山内容堂は、このことが実現されるなら〔協力一致の内閣〕が生まれるし、将軍位を捨てた徳川家も、その内閣の一員に参加出来る筈だと考えた。当然である。天皇の下に、諸大名連立の内閣が生まれるのだ。

これなら戦争さわぎもおこらぬ。当然の筈である。

そこで土佐藩は、全力をあげて、このことを幕府と将軍に説くべく活動を開始した。もしもこれが成功をすれば、土佐藩は薩長両藩にさきがけて〔政局の中心〕となり得る。

執政・後藤象二郎の暗躍がはじまった。

後藤象二郎は、土佐藩士（百五十石）の家に生まれ、次第に頭角をあらわし、のちに老公の山内容堂から眼をかけられ、監察の役目につき、勤王革命派の藩士たちへ大弾圧を加えたこともある。

学問もあるし、英仏の大官とも交渉があって、西洋の事情にもくわしい。商才にも長けてい、肚もすこぶるふとい。

だが、後藤はあくまでも、いままでの身分制約秩序も重んじ、その一点で老公の山内容堂と共に、あくまでも幕府を助けようとした人物である。

ところが、いまや後藤の眼にも、幕府のおとろえ方は歴然たるものがある。

なんとかして、現状を打破し、血を見ずに、平和な日本へもどしたい。

そこに、幕府が、

〔大政を奉還する〕

ことによって成立する〔新国家〕の構想がうかんだといえよう。

後藤象二郎は、近藤勇と面談の機会をつくった。

勇はそのとき、あの四侯会議のことであたまがいっぱいであるから、土佐藩のすることは信用できない。

二人の会見の場所は、幕府の大目付をつとめる永井主水正（もんどのしょう）の屋敷にきめられた。

永井が二人の間に入っている。

勇は、後藤と対座し、無言で、するどくにらみつけた。

後藤は、にこやかに初対面のあいさつをのべたが、急に、人さしゆびをもって勇の顔を指し、

「それが……」

と、いった。

勇は侮辱を感じ、顔面に怒気をふくみ、片ひざを立てた。そのとき、後藤のゆびはゆるやかに下って、勇の左わきに置いてある大刀を指した。

（……？）

勇は気勢を殺（そ）がれた。

「それが……」

また、後藤がいった。

「その貴所の長い刀が、私は大きらいなのでござる」

いうや、後藤は両手をそろえ、ぶるぶると身ぶるいをして見せ、わざと臆病そうな声で、

「その刀をどけていただきたい。その上で、こころおきなく語り合いましょう。いかが？」

好人物の勇だけに、こういう態度に出られると、すこぶる弱い。

顔の筋肉がゆるんでくるのを、どうしようもなかった。

それを見て、後藤象二郎が間髪を入れず、いたずらっぽく片眼をつぶって見せたものである。

勇は、くすりと笑い出してしまった。

後藤もにこりとする。

勇が大声で笑いはじめた。

その笑い声よりも、もっと大きな、ひびきのよい闊達な笑い声を後藤があげはじめた。

こうして二人の会談がはじまり、終ったのだが、その翌々日。勇は後藤象二郎へ次のような手紙を送っている。

「一昨夜は思いがけなくお目にかかり、失礼をいたしました。

そのとき御約束をいたしましたが、明一日の昼頃、そちら（後藤の寓居）へ参上し

たいとおもいますが、いかがでしょうか」

こうして、後藤象二郎と近藤勇との交際は、にわかに親密の度をふかめてゆく。

土佐藩の代表者たる後藤の論意は、勇のこころをとらえ、持って行き場のない苦悩の重い壁が、たくましくも明るい後藤象二郎の弁説をきいていると、少しずつはぎ取られてゆくような気持になる。

伊東甲子太郎と初めて会ったときもそうだが、学識のある人物のさわやかな弁口には、勇すこぶる弱い。剣をとれば一歩も退かぬ自信はあっても、学問をしていない弱味が絶えず劣等感になってつきまとい、京都へ来てからは土方と共に、激務をぬって懸命に書道をはげんだりしたものであった。

これから土佐藩が押しすすめようとする政治改革案について、どこまで後藤が勇に語ったかは不明であるが、

「私は、いまさらながら後藤氏の境遇をうらやましくおもいますよ。身を立てて、天下のためにはたらこうと決意したとき、もしも私が土佐藩にでも籍をおいていたならば、今ごろは思うさま、はたらきぬくことが出来ましたろう」

と、勇がしみじみと洩らしたそうな。

また、

「後藤氏は将来、商業、実業の世界に雄飛なさるべきかと存ずる。大坂の豪商の中には私の知り合いも多いので、もしもお役にたつのなら、いつでも紹介の労は惜しみま

せんよ」

などと、まじめにいったりする。

後藤象二郎は、このように単純率直な勇をどうおもっていたろうか。

好意を抱いたかも知れぬ。

だが、その程度であったろう。

勇のもつ〔好人物〕の一点をたちまちに見ぬいてしまい、

「御しやすい男だ」

と、苦笑をうかべていたかも知れぬ。

勇と後藤との交際は、わずか半月ほどのものでしかなかった。

事態は、いよいよ最後の決定的な〔瞬間〕へ移りつつあったのである。

四

十月に入るや、土佐藩は老中・板倉伊賀守を通じ、〔大政奉還〕の建白書を将軍・徳川慶喜へ差し出した。

慶喜は、これを読むや、すぐさま京都に在る幕府要職の人びとをあつめて評議をひらいた。

十月十三日。

在京諸藩の重臣たちを二条城へまねき、将軍みずから諸大名の意向をきくことにな

った。

土佐藩の建白書を知った薩摩藩も、あわてて、

「何とぞ政権を返上し、勇退せられたし」

と、将軍に建白書を差し出している。

土佐の山内容堂の建白書に、

「……宇内の形勢、古今の得失を鑒し、誠惶誠恐、頓首再拝、ふしておもんみるに、皇国興復の基業をたてんと欲せば、国体を一定し、政度を一新し、王政復古、万世に恥じざるものをもって本旨とすべし」

と、ある。

早いうちに、政権を返上し、徳川家も他の大名と同じに、天皇の下に政務をとるということだ。

ここで、かの坂本龍馬が考えていた〔新政府〕の構想を記してみよう。

関白　三条実美

内大臣　徳川慶喜

議奏　島津久光、毛利敬親、松平春嶽、岩倉具視ほか。

参議　西郷吉之助、後藤象二郎、木戸準一郎（桂小五郎）、大久保市蔵ほか。

徳川家を加えた諸藩連立内閣である。
おそらく土佐藩も、この内閣案と同じような考えであったろう。
これなら、平和裡にすべてがおさまる。
徳川慶喜も、ついに、この土佐藩の建白を受けいれることを決意した。
慶応三年十月十四日。
ふたたび、三十余の諸藩を代表する重臣たちが二条城へあつめられた。
将軍・慶喜があらわれ、やがて老中・板倉伊賀守が、沈痛な表情ですすみ出た。
将軍の沙汰書を読みあげるためにであった。
一同、平伏した。
板倉老中が、将軍のことばを読みはじめた。
「……旧習をあらため、政権を朝廷に帰し、ひろく天下の公議をつくし、聖断を仰ぎ、皇国を保護せば、かならずや海外万国とならびたつべく、我国につくすところ、これにすぎず……」
ついに、将軍は、
「政権を皇室へお返ししたい」
と、天下に向って、みずから公表したわけであった。
このようなことは、西洋東洋の歴史を通じ、かつて無かったことである。
将軍・慶喜については、さまざまの批判もあるが、ともあれ、彼自身の決断によっ

て〔動乱の平和解決〕へ踏み出したことを、みとめなくてはなるまい。

松平容保のように、このおどろくべき決断を知って茫然なすところを知らぬ大名たちも多かった。

発表を終えた将軍は、別室へ、後藤象二郎（土佐）と小松帯刀（薩摩）の二代表をよび、

「すべては終った。両人は満足であろう」

といった。

土佐藩は大よろこびだ。

ここまで漕ぎつけた土佐の功績は、新政府樹立となれば、かならず高く評価されるであろう。

薩摩も長州も、大きく差をつけられてしまったといってよい。

ところで、新選組も近藤勇も、この大政奉還のことについては寝耳に水だったといえる。

勇は、おどろきもしたし、怒りもした。

だから後藤象二郎は、あまり、はっきりしたことを勇に打ちあけなかったものであろう。

こうなると、前に薩摩と長州が、朝廷をうごかし、ひそかに受けた〔幕府打倒〕の密勅の行き場所がなくなってしまった。

打倒も何もない。徳川幕府はみずから政権の座から下ったのである。

翌十一月十五日。

坂本龍馬・中岡慎太郎という土佐藩にとってかけがえのない二人の偉材が暗殺されたとき、

「それは、長州か薩摩の仕わざだ」

という流言が飛んだのも、土佐に主導権をうばわれた薩長両藩のあせりを裏づけるものだ。

だが、坂本たちを暗殺したのは、彼らではなかった。

いまのところ、見廻組（みまわりぐみ）の襲撃だったということになっている。

見廻組は、幕府の監察隊で、新選組同様に、京都守護職に付属している。

坂本たちを襲ったのは、見廻組の佐々木只三郎ほか六名。この中の刺客の一人、今井信郎（のぶお）が明治になってから真相を発表し、大問題となったけれども、これとて、天皇と将軍の毒殺説同様、どこまでが本当なのか、まだまだ疑問はのこされていよう。

見廻組の佐々木只三郎は、あの清河八郎を襲った剣客だし、そうなれば、守護職の指令といえるだろうが、

「坂本を殺せ」

と命じた張本人はだれか、ということになると、もう全く手がかりはつかめなくなっている。おそらく、松平容保ではあるまい。

こういうわけで、土佐藩では、
「新選組だ。近藤勇の仕わざにちがいない」
と、おもいこんでいた。
これも後年になってからだが、当時、新選組の一員だった結城無二三が、
「……坂本が暗殺された夜、自分たちは近藤さんの醒ヶ井の妾宅へあつまって酒をのんでいました。次の日、事件をきいて、これはなかなか腕のきいた男の仕わざにちがいない、と、みんなで語り合ったものです。明治になってから今井信郎が刺客の一人だったときいて、なるほどと思いました」
そのころ、今井信郎の小太刀は評判のもので、剣をかまえると躰が剣の中へかくれてしまうといわれていたそうだ。
「とっさに、あれだけのはたらきをするのは、やはり今井でなくては出来得まい」
と、結城はいう。
どちらにせよ、新選組でなかったことだけは、たしかであろう。

五

伊東甲子太郎一派を新選組が襲撃したのは、この坂本龍馬暗殺の三日後ということになる。
十二月に入っても、土佐藩は、

「坂本さんを暗殺した下手人をさがせ」
血眼になっていた。
「紀州の仕わざだ」
と、いうものがある。
これは、この年の初夏に、土佐藩の汽船と紀州藩の汽船が、備後・鞆の津の沖で濃霧のため衝突をしたことがある。
紀州の船は沈まなかったが、土佐の船は大破、沈没してしまった。
このとき、土佐藩では坂本龍馬をもって交渉せしめ、坂本は紀州藩から八万三千両の賠償金を出させることに成功をした。
紀州藩では、このとき坂本の水ぎわ立った交渉ぶりに負けて、大金を払ったことを、非常にうらみ、怒っていた。
「坂本を斬れ!!」
と叫ぶ紀州藩士もかなりいて、だから土佐藩でも、
「これは紀州の手がのびたのだろう」
と、おもいはじめたのであろう。
紀州藩の公用人をつとめる三浦久太郎という人物がいる。なかなかの切れ者で、京都における種々の暗躍ぶりも相当なものだ。
「どうも三浦がくさい」

と、坂本に可愛いがられていた土佐の者たちが、三浦をつけねらいはじめる。

三浦、おそろしくなり、守護職へ、

「なんとか一つ、新選組に護衛をしてもらえますまいか」

たのみこんだ。

三浦は、油小路・花屋町下ルところの〔天満屋惣兵衛〕方へ滞在していたので、新選組では腕ききの隊士を天満屋へ送りこみ、三浦を警固させることにした。

十二月七日、亥の刻（午後十時）。

突如、土佐藩士十六名が天満屋を襲撃して来た。この中に後の外務大臣・陸奥宗光も入っている。

当夜は、三浦をかこみ、新選組の斎藤一、大石鍬次郎、中条常八郎ら十名が酒をのみながら談笑していたが、

「来たぞ!!」

灯を消して、迎え撃った。

せまい屋内での、すさまじい乱闘である。

新選組一同は、かなり大酔していたけれども、そこは場馴れたもので、

「来い!!」

叫ぶや、先ず斎藤一が剣をふるって、たちまちのうちに三名を殪した、などといわれているが、土佐藩側では、

「敵十九名を殪し、八名を傷つけた」
という。これは少々大仰である。
わかっているところでは、土佐側の討死は中井庄五郎一名。あとの十五名はほとんど手傷を負い、結局は引き揚げて行った。
新選組では、近藤勇の実家・宮川家の親類にあたる宮川信吉が討死をした。勇の名声をしたい、武州から京都へ出て、入隊した人物だが剣術のさかんな故郷に生まれただけに、腕はたしかなものであったという。
他に重傷一名。あとの八名は無傷。
肝心の三浦久太郎は、かすり傷をうけたが、無事に屋根へ逃げて助かった。
この天満屋事件が、新選組にとって、京都における最後の剣闘になる。
五日後の十二月十二日。
徳川慶喜は、二条城を出て、大坂城へ移った。
大政奉還後の京都は、各藩それぞれの立場を主張し、その殺気立った雰囲気に、
「また戦争(いくさ)や」
「早よ逃げまひょ」
市民たちはおびえきり、荷車をひいて次々にどこかへ疎開して行く。
事実、このままに放置しておいたなら、きっと流血動乱がおこったろう。
慶喜は、

「自分が京にいては、事を大きくするばかりであろう」
と見て、にわかに大坂へ引き移ったのである。
幕府の京都における本拠だった二条城は、水戸藩がまもり、大目付・永井主水正が責任者として残ることになった。
京都守護職から、
「新選組は伏見の町の鎮撫を命ずる」
と、指令があった。
同時に、守護職は廃止され、所司代と町奉行所の機能も停止した。
堀川の新選組屯所も、いまは一応、これを捨てて、全隊員が伏見奉行所へ移ることになった。
勇は、全隊士をあつめ、
「天下の形勢については、いまさらに申すまでもあるまい。いつ、いかなる変乱が起るか知れたものではないから、諸君は、いまこそ、出陣の決心をもって伏見へ移ってもらいたい」
悲愴な面もちを青白く硬張らせ、甲高い声で訓示をあたえた。
「伏見から七条のあたりまで、長州の兵が押し出して来ているそうだ」
「薩摩でも戦さ仕度で押し出したというぞ」
隊士たちも緊張の極に達している。

それぞれの愛人たちが面会に来て、別れを惜しむ。
芋を洗うような混雑の中で、隊士たちが金や形見の品物を女たちにあたえている。
勇は、すでに寸暇をぬすみ、醒ヶ井の妾宅へ駆けつけ、おわかに別れを告げている。
「これから、どうなりますのやろ。私はいったい、どうしたら……」
神経のつよいおわかは、もう半狂乱になったが、
「今日のうちに、ここを出るのだ」
勇は、きびしくいった。
「永倉のところの小常さんに万事をたのんであるから、すぐに鎌屋町の、永倉の休息所へ移るように……いいか、いいな」
「へえ……」
「行先のことはわからぬが、また会えよう」
「きっと？」
「おれが生きているうちは、お前のことを忘れぬ」
連日の激務で躰は疲れきっている勇なのだが、こうなるとおわかの女体を抱くことにためらいはなかった。
奥の部屋で、勇はあわただしく、おわかを抱いた。
おわかは、泣きむせんでやまない。
いくら入っていたのか、おぼえてもいないが、重い胴巻をおわかへ渡し、勇は、彼

女が身づくろいをしている間に、声をかけず戸外へ飛び出し、馬へまたがった。
馬を走らせたとき、背後に、おわかの悲鳴のような泣声を、勇はきいた。

六

勇は、屯所を出ると隊士をひきい、伏見を通りすぎ、まっすぐに大坂へ向った。
土方歳三が馬を駆け寄せ、
「大坂へですか？」
「うむ。おれは将軍をおまもりしたい。そうさせてもらおう」
「なるほど」
ところが、大坂へ到着すると、
「いや、上様には自分がついている」
前守護職の松平容保が先着していて、
「かくなった上は、もはや京の地は敵軍の本陣と同様である。なればこそ、伏見の関門をきびしくかため、大坂をまもらねばなるまい。いま、陸軍奉行の手から三百名、それに伝習隊五百名をさしむけてあるが、これだけではこころもとない。ぜひにも新選組に行ってもらわねばならぬ」
と、いう。
「では……」

「承知してくれるか」
「はっ」
「新選組の兵力は、いま、どれほどであるか？」
勇は、こたえなかった。
京都出発のどさくさまぎれに、隊士の半数がどこかへ脱走してしまい、いまは総員・六十六名にすぎない。だからこそ、この少数の精鋭をもって、身近く徳川慶喜を護衛しようという決意であったのだ。
だまっている勇を見やって、松平容保は、もう何もいわなかった。
出て行こうとする勇へ、容保が、
「待て」
と、声をかけたが、ふっと口をつぐみ、それから、さびしげな微笑をうかべて、
「近藤。五年になるのう」
つぶやくようにいった。
浪士隊の一人として京都へのぼって来た勇と会ってから、五年の歳月がながれた…
…と、いったのである。
勇は一礼し、去った。
ことばが出なかった。
その会津侯の「五年になるのう」といった声に、勇は何か絶望的なものを感じた。

病体に鞭を打って京都守護のため、会津二十八万石をかたむけつくしたとまでいわれた松平容保の努力は、いまこうなって見ると何一つ実らなかったといえる。

新選組だとて同様であった。

すべては徳川幕府と将軍が消滅した瞬間に、空しく消え果てたのである。

けれども、これから以後の情況については、

（まったく、わからぬ）

のであった。

こうなる前よりも、もっとわからなくなってしまった。

徳川慶喜は、あくまでも恭順のかたちをとろうとしているが、先刻の松平容保のことばでもわかるように、会津・桑名などの藩は、

（このままではすまぬ。かならず薩長両藩と戦わねばなるまい）

と、決意をかためているらしい。

新選組は、大坂から伏見へもどり、伏見奉行所を本陣にさだめた。

すぐさま、会津藩兵が応援に駆けつけてくれ、合せて百六十余名。

一方……。

将軍（前将軍とよぶべきか……）去った京都へは、長州の藩兵が続々と入って来た。

これらの長州部隊は、大坂へ集結していい、薩摩藩との連絡によって、堂々と入京して来たものである。

朝廷での会議が連日のようにおこなわれた。

「徳川家は政権を返上しても領地は返しておらぬ」

「徳川の領土という領土は、すべて朝廷が取りあげるべきである」

と、いうことになった。

御所の会議は、年若な明治天皇を中心に、仁和寺・有栖川・山階の三宮に、中山、三条などの諸卿。大名たちは尾張大納言慶勝をはじめ、松平春嶽、山内、島津などで、これに西郷や大久保、後藤など、諸藩の重臣も参加している。

これからの新政府樹立についての相談なのだが、大坂にいる徳川慶喜は参列をゆるされない。

これでは、土佐藩の顔はまるつぶれである。

土佐藩の老公・山内容堂は、たまりかねて、

「徳川慶喜は、いやしくも前将軍でござる。二百七十年の天下泰平をたもちつづけた徳川幕府の功罪はさておき、前将軍みずからが政権の座を下り、諸公と共に新政府をいとなもうとされているに、この大切なる朝議へ、内大臣たる慶喜の参列をゆるさぬというは、いかがな次第でござろうか。しかとうけたまわりたい」

だれも、みなこたえない。

すると、岩倉具視がすすみ出て、容堂へ反発した。

むかしから、徳川代々の将軍が、天皇と朝廷に対して、どのようにひどいあつかい

方をしたか、と、まくしたてた。

それとこれとは、はなしが別ではないのか……。

政権を返した上に、領地のすべてを返してしまったら、徳川家と、それに依存するたくさんの人びとは明日から食べるに困ってしまう。

土佐藩が慶喜に〔大政奉還〕をすすめた真意は、双方の立場を重んじ、互いにゆずりあって、旧幕府側と勤王革命派が協力することであった筈だ。

こうなると土佐藩のいうことなどは、いつの間にかうやむやにされてしまう。

土佐藩に主導権をにぎらせ、徳川家とむすびつかれては、

（たまったものではない）

と、薩摩も長州も、勤王公卿たちも考えている。

こうなると二条城に残っていた旧幕府の部隊たちも、だまってはいられなくなる。

二条城にたてこもって薩長両軍とたたかい、ふたたび慶喜を京都へ迎えようという……。

薩摩も長州も、どしどし武器弾薬をはこびこみ、市中の諸方へ陣地を構築しはじめた。

「とにかく一度、二条城へ来てもらいたい。いろいろと打ち合せをしたいゆえ」

と、二条城をまもる永井主水正からのまねきをうけ、近藤勇が伏見の本陣を出て京都へ向ったのは、十二月十八日の朝であった。

伏見から京都まで、約三里。

勇は、馬のくつわを下男の久吉にとらせ、隊士二十名をしたがえて出かけた。

二条城で、永井と会談し、まだ昼前に帰途についた。

醒ヶ井の妾宅には、まだ、おわかが住んでいるときいたので、勇はここへ立ち寄り、かるく昼飯をしたためた。

隊士たちもいるし、おわかとも長々とはなしているわけにはゆかぬ。だが、おわかは大よろこびで、たとえ京都で戦さがはじまってもここからはうごかない、などと気負いこんで勇にいった。

勇も、なんとなく、これからも、二度や三度は会えるような気がして、

「また来よう」

馬へまたがり、おわかへ笑いかけたのである。

妾宅を出て伏見へもどる勇と新選組一行を、物蔭からひそかに見とどけた者があった。

これは、伊東甲子太郎の旧御陵衛士の一員、阿部十郎だ。

阿部は、この日、寺町の通りの武具店へ入って買物をしていると、前の道を勇の一行が通るのを、ひょいと見かけた。

（あっ……）

すばやく身をかくし、さらに阿部は、一行の後をつけ、これが醒ヶ井の妾宅へ入る

のを見とどけておき、同志・佐原太郎、内海二郎と共に、見張りつづけていたものである。

「それっ」

三人は、勇一行をひそかに追いぬいて、伏見へ駆けつけた。

伏見には、故伊東の弟・鈴木三樹三郎をはじめ、篠原、富山など、御陵衛士たち六、七名が薩摩屋敷へかくれ、

「ぜひにも近藤の首を討ち、伊東先生のおうらみをはらさねばならん」

機会をねらっていた。

彼らと連絡をとりながら、いまも新選組にいて、勇の身近くつかえている若者で小林啓之助というのが、絶えず、情報をながしている。

つまり、斎藤一が新選組から伊東一党へ入りこませたスパイなら、小林は伊東一党が新選組へ残しておいたスパイなのである。

「いま、近藤が京からもどって来ます」

三人の報告をうけて、

「よし。決行だ！」

旧御陵衛士九名が、太刀をつかんで立った。

このうち、篠原と富山は鉄砲を持った。

伏見の町を外れた墨染（すみぞめ）の竹田街道へ出た九名は、街道をはさんで両側の木立やら竹（たけ）

藪やらへ身をひそめる。
篠原と富山は、最寄りの空家へ入り、戸の隙間から鉄砲を撃ちかけることにした。
夕闇がただよいはじめていた。
近藤勇一行は、まったくこのことを知らぬ。
大きな肥った馬へまたがった勇を中にして、前後を二十名が固め、竹田街道を伏見に近づいて行く。
まがりくねった街道の向うに、尾州藩の伏見屋敷の大屋根がのぞまれた。
「久吉」
と、馬上の勇が、馬のくつわを取っている下僕へ、
「冷えるな。夕飯に湯どうふが食いたいものだ」
「へい。よろしゅうございます」
久吉がこう答えて、馬上の主人を見上げ、にっこりした、その瞬間であった。
だあん……。
あたりの空気が烈しくゆれうごいた。
「あっ……」
勇は、わが上半身へ大きな鉄の塊でも叩きつけられたような衝撃をうけ、鞍の上で、ぐらりとかたむいた。
（鉄砲で撃たれた!!）

それも、かなりの重傷だと直感した勇は、足もとをみだす馬の手綱を引きしぼり、辛うじて落馬をまぬがれた。

「うわあ……」

おめき声をあげつつ、旧御陵衛士九名。槍をかまえ、刀をふりかざして街道へあらわれ、猛烈果敢に新選組一行へ斬りこんで来た。

「曳!!」

篠原泰之進の槍先が、隊士一人を突き刺したのをちらと横眼に入れ、勇はちからをこめて馬腹を蹴った。

とどまっていても到底、刀をぬいて闘うことはできぬし、できぬ以上、応戦する隊士たちの邪魔になる。

伏見奉行所は間近い。

急を知らせ、一時も早く援兵をさしむけ、刺客たちを捕えねばならぬ。

一瞬の間に判断した勇は、馬上に身を伏せつつ、何度も馬腹を蹴った。

目もくらむほどの激痛をこらえた勇を背に、馬は狂奔して、激闘の渦の中を突破した。

敗軍の将

一

銃弾は、近藤勇の左肩と胸の間を貫通した。急所をはずれていたが肩の骨がくだかれてい、相当の重傷であった。

一気に……。

勇は、伏見奉行所内の新選組本部へ駆けこんだ。

馬上に伏せていた躰(からだ)をすっくと起こし、玄関口へ乗りつけた勇を、折しもそこへ出て来た隊士の池田七三郎（のちの稗田利八）が見て、

「ああっ……」

悲鳴に近い声をあげた。

肩から胸へかけて、いちめんに鮮血にまみれた勇を見て、二十そこそこの池田は度をうしない、がたがたとふるえ出した。

池田は勇づきの小姓なのだが、それには見向きもせず、勇が馬から飛び下り、

「だれかおらんか、だれかいないか!!」

大声に呼ばわり、ぐっと胸を張ったいつもの姿勢で、つかつかと玄関を上って行っ

た。

飛び出して来た隊士たちの叫び声を耳にしながら、勇は躰から血の粒を大廊下へ振りまきつつ、自室へ向ってしっかりとすすむ。

「あっ……」

土方歳三が駆けあらわれ、

「総長……」

「やられた。伊東一味だ。墨染のあたりで鉄砲を撃ちかけてきた」

勇が一気にいうと、永倉新八がそれをきいて、

「みんな、つづけ!!」

わめきながら、玄関の方へ走って行った。

永倉は、一番隊・二番隊をひきいて墨染へ駆けつけたらしい。

一刻ほど後に、永倉たちが帰って来たが、伊東一派は逃げてしまったという。

勇が敵の包囲を突破した後で、双方はげしく斬り合ったが、

「引けい」

近藤勇を取り逃したので、篠原泰之進が一味の者に命じて、いっせいに刃をひいて逃げた。新選組では、篠原の槍で突かれた石井清之進（これも勇の小姓）と馬丁の久吉が死んだ。

「二人とも、可哀相なことをした……」

手当をうけた後の激痛に堪えながら、勇は何度も舌うちをもらし、
「こ、こんなときに、躰が自由にならんとは……おれも、つくづく運のない男だ」
かなしげにつぶやいたものだ。
「いや、さすがだよ」
と、そのころ、別室で永倉新八が原田佐之助に、
「あれだけの重傷だというに、そりゃもう、しっかりしたもんだった。両腕を、こう振って、胸を張ってな。声なんかも平常と少しも変らん」
「ほほう」
原田は、その場に居合せなかっただけに、眼をかがやかせ「それから……それから?」と訊いた。
勇の傷は、ひどいらしい。
「ここでは手当がゆきとどかねえから、大坂城内へ移すことになるらしい」
「総長をか?」
「うむ。いま、大坂から慶喜公の御使者と医者が来ている。どうも、そうなるらしい」
「ふんだりけったりだ」
と、原田はいまいましげに、
「総長が大坂へ行っちまったんでは、新選組の士気にかかわる」

「だといって、あの躰ではどうにもなるまい」
「おまけに、沖田は病気で寝込んでいるし……」
「なに、総司は躰をやすめているのだ。いざとなりゃあ、血を吐きながら五人や六人は叩っ斬ろうという男さ。あいつの池田屋のときのはたらきは忘れられねえなあ」
「あれから……足かけ四年、か……」
「早いもんだ」
「早すぎる」
二人とも、妙に気がめ入ってしまい、酒を取り寄せ、燗もせずに、わびしく茶わんでのんだ。
翌々日の朝。
近藤勇は、大坂城内へ移ることになった。
特別仕立ての駕籠に細工をし、ふとんを入れて、重傷の勇を寄りかからせるようにしてある。
いまにも雪が落ちて来そうな、冷たい曇り日であった。
駕籠へ乗った勇も顔面蒼白なら、これを見送りに出た副長・土方歳三の顔も紙のように白い。
「歳さん……」
勇が親しげに、土方を呼んだ。

隊士一同が見守っている玄関口においてである。
「では、行って来る」
「総長……」
「あとは、たのむ」
「やれるかぎりは……」
見かわす眼と眼……。
その眼を、ふっとそむけた勇が、
「歳さん。おれは午年だよ」
「……？」
「午年の人間は、一度、没落すると、自力で再起することがむずかしいというね」
何をまたいい出すのだというような表情で、土方が、
「だが総長。あんたは、これだけひどい鉄砲傷を受けながら、落馬もせず、立派に帰って来た」
「あのとき、落馬をしちまったら、おれも、もうおしまいだ。天下の笑いものよ」
「ふ、ふふ……」
「は、はは、は……」
笑い合ったが、二人の眼はうるんでいる。
「では、行くよ」

「何も他に気をつかいなさるな」
「ああ、そうする」
大坂から、山田与兵衛指揮する会津藩兵が三十名。近藤勇を迎えに来ている。これにまもられて、勇の駕籠はしずかに伏見奉行所の表門を出て行った。

二

大坂城へ移された近藤勇は、城内・北ノ内濠際にある目付屋敷へはこばれ、ここで看護をうけることになった。
移って七日後。
伏見の本部から、隊士・野村利三郎が馬でやって来た。永倉新八の手紙と、油紙で厳重に包んだ物をとどけに来たのである。
野村利三郎は、若いが生一本な性質を勇に愛されていた男だ。
「総長。実は私、土方副長に内密で来たのです。すぐに帰らねばなりません」
「永倉の使いなのだろう!?」
「そうです」
「それなら何故、土方に内密にするのだ。けしからんではないか」
「内密です、内密です」
と、野村はにやにや笑っているではないか。

「ばか。何がおかしい」
「とにかく、早く永倉先生の手紙をお読みになって下さい」
「返事がいるのか？」
「いる、とおもいますが……」
野村は、まだ笑っている。
勇は永倉の手紙をひらいて見た。
「少しは手習いをしろよ」
などと、死んだ藤堂平助が、その悪筆に呆れて、よく永倉をからかったりしたものだが、いやもう大へんな金釘流で、
「総長。あなたも実にひどい人だ」
と、永倉は、まるで語りかけるように手紙の筆をはこんでいる。
醒ヶ井のおわかの使いで、伍作という者が伏見奉行所へ勇をたずねて来たのだという。
伍作は、屯所が壬生にあったころ新選組の下男をしていた者で、のちに、勇が醒ヶ井へおわかを囲うようになってから、ここへ呼んで使っていたのだ。
それだけに、勇からもおわかからも信用されていたのである。近藤勇重傷の報は、早くも京都市中へひろまっていい、それを耳にしたおわかは居ても立ってもいられなくなり、先ず伍作をよこして、勇の容態をたしかめたかったのであろうが、もう一つ別

に、おどろくべきことを知らせてよこした。

勇が大坂へ去ったときいて、伍作は、

「それでは永倉先生に」

と、永倉と二人きりで、おわかの伝言をつたえた。

こういうわけだ。

おわかの嫉妬をもてあまし、勇が永倉の愛人・小常の姉にたのんだお孝。なんと彼女が十日ほど前に女の子を生みおとし、この子が勇の子だというのだ。

そうなると、小常も、小常の姉もだまっているわけにもゆかず、いろいろ相談をしたあげく、お孝の実姉であるおわかへ、このことを知らせたのである。

何しろ、男たちがみな京都を引きはらってしまったので、どうにも仕様がなかったのであろう。

おわかも、そうなると実の妹の子ではあるし、さらには勇の子でもあるというのでは捨ててはおけない。

「くわしくおはなしをしたい。そちらへ私が出かけてもさしつかえございませんか!?」

と、伍作をもって、勇の都合を問い合せたのであった。

京も伏見も戦雲濃く、いつなんどき、あたりいちめんが戦場となるやも知れぬというので、おわかも必死らしい。

「総長は、あれからもお孝さんのところへ通っておられたのですか。私が仲へ入って事をまとめたのに、このような大事を知らずにいたのでは、女たちにも顔向けがなりません」

と、永倉新八、手紙で大いに怒っている。

（ふうむ……）

と、実は勇もおどろいた。

お孝が自分の子を身ごもっていたとは、まったく知らなかった。もしも、それが自分の子ならば、別れの前に名残りを惜しんだときに種を宿したにちがいない。

「どういたしましょう!?」

野村が、今度はすまして訊く。

くやしまぎれに永倉が野村へ、いっさい打ちあけてしまったものと見える。

「永倉にきいたのか？」

と、勇。

野村利三郎、こっくりとうなずく。

勇は、ためいきをついた。

ちなみにいっておくと、勇は京都へ来てから、すでに男の子を一人、もうけていたらしい。この子は三本木の芸妓・駒野との間に生まれたともいい、また例の〔山絹〕の養女でお芳という女に生ませたともいう。のちに東福寺へ入って僧になった、と、

つたえられるのがそれだ。

このとき勇は、手もとにあった金三十両を取り出し、

「野村。これを永倉へわたしてくれい」

「お手紙は？」

「いらん」

「ですが、それではあまり……」

「あまり、何だ？」

「そっけないように、おもいますが……」

すると勇は、わびしげな苦笑をちらとうかべて、

「そっけないほうがよいのだ」

「は……？」

「こんな世の中に、いちいちむきになって生きていたら、たまったものではない」

「総長……」

「もう帰れ。土方がうるさいぞ」

「はッ」

「おれも、うごけるようになったら、すぐに馬を飛ばして行くつもりだが……どうも、な。傷が膿んできてなあ」

憔悴しきっている勇の顔を見ていられなくなり、野村利三郎は、すぐに席を立った。

伏見にもどった野村から、近藤勇がよこした三十両をうけとり、永倉新八は、これを京都のお孝のもとへとどけてやった。

明治の世になってから、お孝は、勇との間に生まれた子を里子に出し、神戸の開港場へ稼ぎに出たといわれている。

おわかとお孝は相談し、この子の名を〔お勇〕とつけた。姉妹ともども、勇をしのぶよすがにしたものであろうか。

そのうちに、お孝は神戸から上海へわたり、行方不明となってしまうし、おわかは関口某の後妻に入った。

また数年を経て、おわかは、お勇が祇園から舞妓に出ているのを見出した。

おわかは、次のように語りのこしている。

「……お勇は、その後、祇園の女衒にだまされ、どこかへ売り飛ばされてしまったような……そのうちに、妹（お孝）が、神戸へ帰ってまいりました。なんでもホンコンだとか、シンガポールだとか、とんでもないような遠いところへわたって行って、荒稼ぎをしたらしゅうございます。それでも千円ほどの金をもって帰ってまいりましたのです」

そこで姉妹が懸命にお勇をさがしまわったところ、下関で芸者に出ていることがわかった。

かくて、お孝とお勇は二十年ぶりに母子の対面をしたそうな。

むろん、そのころは近藤勇、すでにこの世の人ではなかった。

三

野村利三郎が来た日から数えて五日目の午後のことだが……。
大坂東町奉行所の同心で、井上梅次郎という者が、許可を得て、勇の見舞いにやって来た。勇は井上に面識がない。
だから井上は、
「これは近藤先生。はじめてお目にかかります」
丁重にあいさつをして、
「遊撃隊の小森平吉殿と申される仁から、この品と手紙をことづかりましたので」
と、布できちんと包んだ小さな桐箱と、一通の書状を差し出した。
「小森、平吉……？」
「御存知ではございませんか？」
その男は、東町奉行所へ一人で入って来て、身分と名を告げ、
「どなたでもよいから、これを近藤先生に、おわたし願いたい」
応対に出た井上へ品物と手紙をわたし、
「急ぎ伏見へもどらねばなりませぬゆえ、よろしゅうたのみます」
いいおいて、去ったのだという。

遊撃隊は、先年、幕府が旗本の精鋭を撰りすぐって編制した部隊であるから、井上同心は一も二もなく、その武士のいうことばを信じ、そのまま勇へ取り次いだのだ。

「小森と、なあ……？」

不審げに、勇は、先ず手紙をひらいて見た。

「先般は、伏見において重傷をこうむられたよし、何より残念。こころから御見舞申しあげます。ことづけました品は、永妙散と申す薬にて、飲み薬なれども体力を復活させ、内より傷処の膿を去り、まことに奇妙なほど効く薬ゆえ、ぜひぜひ、おためし下されたい。これは、京の南禅寺の小さな製薬どころ〔鈴木十兵衛〕方の処方でござる」

文面はそれだけで、宛名は〔近勇先生。玉案下〕とあり、差出人として〔小森平吉・わ〕としてある。その〔わ〕がおかしい。

おかしいが、勇には、たちまちわかった。

そもそも、手紙の筆蹟に、はっきりと見おぼえがあったのである。

〔わ〕すなわち、渡辺昇のことだ。

「うむ」

にっこりとうなずき、勇は井上同心に、

「おもい出しました。まさに、小森平吉。江戸で拙者の道場へよくまいられた人でござった」

「さようで」

「大変に、ごめんどうをおかけしました。何よりもうれしく、御礼を申しあげる」

勇が、あまりていねいなので、井上はびっくりしたようであった。

井上は、勇の口ぞえで、厚くもてなされ、奉行所へ帰って行った。

（渡辺さんは、まだ故郷へ帰らなかったのか……）

実は勇、二か月ほど前に、渡辺昇の危急を、ひそかに救おうとしたことがある。

それは、徳川慶喜が〔大政奉還〕にふみ切る十日ほど前のことであった。

渡辺昇は、土方歳三が勇に指摘したように、肥前・大村藩の志士として桂小五郎・坂本龍馬・中岡慎太郎など、革命運動の指導者たちからも信頼をうけ、京都に潜入してからは烈しい暗躍をつづけていたものである。

それと知って土方歳三は躍起となった。

勇は（困ったものだ）と思ったが、新選組・総長としては、渡辺の捕縛、斬殺を押しとどめるわけにはゆかない。

情誼に厚く、義理がたい勇としては、以前、試衛館の危急を何度も助けてくれた練兵館時代の渡辺昇を忘れきることができない。

一度、おもいきって土方へ、

「渡辺ひとり、見のがしてやろう。どうだ」

ひそかに、ささやいたことがあった。

すると土方、

「むかしはむかしですよ!!」

むっとして、尚もことばをつづけかけたが思いとどまり、憤然として総長室を出て行ってしまった。

渡辺昇は、のちに明治新政府の顕官となってから、土方歳三を評して、

「……江戸にいたころは、いつも青白い顔をしていて、ひょろりとやせた、ちょいと美男であってね。口数が少くて、われわれがやがやと酒をのんでいても、遠くへはなれておって仲間へ入らん。只もう、にやにや、にやにやと笑っとるだけでね。どうも煮えたんだか煮えんのだか、わからん男であったよ」

と、いっている。

さて……。

ついに、土方が渡辺昇の隠れ家を見つけ出した。これは富小路・仏光寺の目明しで卯之助という者の探索によるものだ。

渡辺は、今出川・堀川西入ルところの小間物屋〔綿屋武助〕方の二階へ、同じ大村藩の和田祐馬と共に潜伏していた。

土方歳三は、すぐさま、これを守護職へ届け出て、さらに、

「肥前の渡辺昇なら斬ってよし」

という密命を取りつけてきた。

この命令は守護職から出たともいい、所司代から出たともいわれている。

そのとき、渡辺昇は、国もとから、

「帰国せよ」

の命令を受けていた。

これは、大村藩の京都屋敷を切りまわしている渡辺の兄・清左衛門が、地下にもぐった弟の暗躍が幕吏からにらまれ、危機がせまったことを知り、わざと帰国命令を発したのだ。

しかし、藩の命令とあれば、これをこばむわけにはゆかぬ。

「ま、一応は京を去るよ。兄上を安心させてやろう」

何も彼も承知の上で、渡辺は京をはなれることにした。

藩邸で、兄から申しわたしをうけた渡辺は、今出川の隠れ家へ帰って、和田祐馬にそういい、和田と二人で飯をたいて食べた。

新選組では、土方歳三みずから一隊をひきいて、渡辺の隠れ家を襲撃しようとしている。

勇は公用で、午後から会津本陣へ出かけていて留守であった。出て行くとき、勇は土方に、

「どうしても渡辺を斬るというなら、仕方がない。君が万事はからってくれ」

と、いいおいてある。

渡辺昇は夕飯をすませると、和田に、
「では発つよ」
「これからですか？」
「伏見へ泊る。小柳と別れを惜しむのさ」
伏見・中書島の遊廓内〔大文字〕の遊女・小柳は、渡辺なじみの妓であった。
「あとをたのむよ」
渡辺は、たちまち旅仕度をととのえ、鳥が立つように隠れ家を飛び出して行った。
それを見送った和田祐馬が、二階へもどって、またも夕飯の食べ直しをはじめたとき、階下の小間物屋の主人が来客を告げた。
「土佐の後藤象二郎様のお使いやそうで」
と、いう。
「一人か？」
「一人きりでございます」
「よし」
思いきって、和田が大刀の鯉口を切って階段から下をのぞいて見ると、店先に編笠をかぶった立派な武士が一人で立っている。
（笠をとらん。おかしい）
和田が尚も、注視していると、編笠の武士は早くもその気配を感じたらしく、階段

口を見て、
「渡辺さんは御在宅か？」
と、声をかけてきた。
「渡辺は、いま不在ですが……」
「まことか？」
「おりませぬ」
いいつつ、和田は刀の柄へ手をかけた。
「およしなさい。拙者はな、渡辺うじの古い友だちでござるよ」
編笠をとった武士の顔を見て、和田祐馬は愕然とした。武士は近藤勇であった。
和田は、二度ほど市中を行く勇を見かけている。
「渡辺さんがおらぬのならよいが……今夜は危ない。それで知らせに来た。貴公も、ここを出られたがよろしかろう」
勇はそういい、すぐに身を返して、あっという間に夜の闇の中へ消えた。
土方歳三ひきいる一隊が〔綿屋武助〕方を包囲したのは、それから半刻（一時間）のちのことで、渡辺も和田も姿を消してしまっていたからどうにもならない。
土方が、大いに口惜しがって本所へ帰って来て間もなく、近藤勇が酒の香をぷんぷんさせてやって来た。
総長室へ入って行く勇を土方が追いかけて来て、

「総長。どこへ行っておられた？」
「山絹さ。ときにどうした？……渡辺は斬ったか」
すると、土方歳三はつばでも吐きたそうな顔つきになり、しばらく勇をにらみつけていたが、
「ま、いいでしょう」
怒鳴りつけ、さっさと出て行った。
（あのとき、土方は、おれがしたことを、ちゃんと知っていたのだな）
二か月後のいま、大坂城内に重傷の身を横たえていて、近藤勇は、その夜のことをおもい、微苦笑をうかべている。
渡辺昇は、帰国して、またこちらへ戻って来たらしい。徳川将軍が政権を返上したのだから、大村藩も兵をくり出し、京都へ上って来たのかも知れない。そうなれば、
（渡辺も一方の将というわけか……）
勇の傷がうずいた。
それにしても、渡辺が勇の仕様に恩義を感じ、見舞いの薬を巧妙にとどけてよこしてくれたのは、勇にとっても、うれしいことであった。
〔永妙散〕という薬は煎じぐすりだが、非常によく効いた。

四

年が明けた。

すなわち慶応四年であるが、この年の秋には改元のことあって明治元年となるわけだ。

去年の暮から、事態はぬきさしのならぬ様相を呈してきはじめている。

薩摩・長州をはじめ、これに追従する諸藩は続々と京都へ入りこみ、いまや朝廷は、勤王革命の一色にぬりつぶされ、旧幕府にとって、いまは只ひとりの味方であった土佐藩も沈黙してしまった。

大坂城へ引きあげている徳川慶喜の胸中は、複雑であった。

土佐藩が〔大政奉還〕のことをすすめたとき、これを承知した慶喜は、むろん徳川家が〔新政府〕へ参加することをゆめにもうたがっていなかった。

なんといっても、徳川家は八百万石という領地を所有している。

これまでの〔政治機構〕も徳川将軍を中心にした幕府の制度が、こまかいところまでゆきとどいてい、その仕組みを、いますぐに全部解体するわけにはゆかない。第一そのようなことをしては、いままで幕府を相手に種々の交渉をつづけてきている諸外国との外交関係にも、かならずや破綻をおよぼす。

どちらにせよ、徳川家をのぞいた〔新政府〕の樹立は思いもよらない。

慶喜も、そう考えたからこそ、いさぎよく〔政権〕を天皇へ返上したのであった。
だが、事態は楽観をゆるさなくなった。
薩長も朝廷も、
「徳川の領国も地位も、持っているものは何も彼も返せ」
と、いう。
さらに、
「徳川慶喜ひとりで、京都へまいれ」
などという。
「ばかばかしいにも程がある」
前守護職・松平容保などは、この侮辱に堪え切れなかった。
そのような要求が、常識を外れたものであることはいうをまたない。
「おのれ。お年若な新帝をいいようにあやつり、薩長の走狗たる公卿どもめが、勝手ほうだいな難題を吹きかけてくる。もはや、ゆるせぬ!!」
であった。
先帝・孝明天皇の信任を一身にうけ、京都守護の役目に奔命しつづけてきた松平容保の激怒は、当然のものといえよう。
こうした情勢のうちに、幕府の海軍も、司令官・榎本武揚がひきいる四隻の軍艦を上方へさしむけ、西の宮の海上へ待機した。

そして、大坂から伏見にかけて集結した幕府軍は、幕府側の諸藩兵をふくめて、約二万四千。

これに対し、京都を中心に集結を終った勤王軍は四千とも五千ともいわれるが、どちらにせよ、幕府軍の何分ノ一かの劣勢であったことはたしかだ。

それと知ったとき、朝廷の公卿どもはまっ青になった。

「これは、とても勝てぬ」

「こりゃ困った」

「これではとても、徳川を倒すわけにはゆくまい」

それまで威張りかえっていた彼らが、

「とても薩長にたよるわけにはゆかぬ。きっと、こなたが負けてしまう」

「天皇を擁し、山陰へ逃げるがよい」

などと、いい出しはじめた。

さすがの岩倉具視も大いに不安となり、薩摩の西郷隆盛をよんでたしかめたところ、西郷は微動もせず、

「戦えばかならず、旧幕府軍を打ち負かして見せもす」

と、いいはなった。

年があけると、大坂城内に引きこもって無言の苦悩をつづけている徳川慶喜のこころも決まらぬうち、幕軍は、いよいよ戦闘体制をかためて、京都へ向い押し出して行

った。

「薩長両藩に申すことあり!!」

と、いうわけだ。

「ふたたび、われらを京都へ入れぬというのなら、ちからをもって入る」

という意気込みだ。

ときに一月三日であった。

戦闘は、その日の午後にはじまった。

鳥羽の大坂街道へ進出した幕軍・滝川播磨守（はりまのかみ）ひきいる歩兵隊と、薩摩軍の主力が戦端の火ぶたを切ったのである。

薩摩も長州も必死だ。

この戦争に負けたら元も子もなくなってしまう。

それに、火力においては勤王軍のほうが優勢なのだ。

イギリスわたりの新式ミニエー銃を七千挺（ちょう）ほど所有しているし、長州軍にも、四、五千挺をイギリスから買わせている。

イギリスでは、

「もう幕府を相手にするよりも、天皇を擁した薩摩と長州に味方しておいたほうが有益である」

との結論に達していた。

しかし、フランスは、きょろきょろと双方に色眼をつかいながらも「まだまだ幕府は倒れまい」という見通しに立ち、武器弾薬を幕軍に売っている。

だが、その数量と性能において、はるかに〔勤王軍〕がまさっていた。

それが、勝敗を決した。

のちに江戸へ逃げ帰った土方歳三がこういっている。

「いやどうもね。いくらこっちが刀や槍を振りまわして突き進んで行っても、大砲や鉄砲の前には、まるで赤子の手をひねられるようなもんでしてね」

さらに両軍の気魄がちがう。

幕府軍は、全部が会津藩や新選組のような闘志をもっていたわけではない。他の藩兵も「どっちが勝つか……？」と、ふらふら、腰も定まらぬし、歩兵隊の隊長・滝川播磨守などはれっきとした幕臣でありながら、乗馬が銃声におどろいて竿立ちになると、たちまち馬上からころげ落ち、ほうほうの態で逃げたというから、その戦闘ぶりも押して知るべしである。

全軍、死物狂いとなってぶつかって来る薩長軍には、気力においても劣っていたといえよう。

両軍の戦闘は、四日にわたってつづけられたが、この最中に、突如として勤王軍の陣営に〔錦の御旗〕が、かかげられたのである。

赤地に、金糸銀糸で太陽と月を刺繍してあるこの旗は、むかしから天皇の軍隊が賊

徒を討つための戦争に用いられたものであった。

これを、望見した幕軍は色をうしなった。

これは取りも直さず、勤王革命軍すなわち天皇の兵……つまり〔官軍〕ということだし、幕軍は〔賊軍〕だときめつけられたことになる。

去年の大政奉還のことがあってのち、薩摩と長州は、あくまでも旧将軍とその麾下の軍を戦争に引きずりこむつもりで、手まわしよく〔錦の御旗〕をあつらえ、ひそかに薩摩屋敷へかくしておいたものだ。

朝廷や天皇のゆるしを得て、この旗をこしらえたのではない。

戦争は、さんざんの敗北であった。

伏見奉行所につめていた新選組百五十名は、会津藩千五百名と合流し、奉行所の北方の坂道の上にある後香宮へ陣をかまえた薩摩軍へ、

「それ行け!!」

猛然と突撃して行った。

それへ向って坂の上の敵が、イギリスゆずりの新鋭火砲をもってどしどし砲撃を仕かける。

「刀や槍では、とてもこれからの戦さは出来ぬ」

と、剣鬼・土方歳三をして嘆ぜしめたのは、実にこのときだ。

永倉新八の遺談にも、

「……そりゃ、こっちから見ると、敵陣はすぐ近くなのです。それがいけない。どうしても近づけない。人数からいえばこっちの方が三倍も多かったんだが、大砲、鉄砲の数からいうと、こっちはまるで何もないのと同然でござんしてね。いやもう敵の砲撃をうけて、伏見の町は火の海のようになっちまいました。夜になってね、これではどう仕様もないから、土方に、私が斬りこみましょうといって、つまり決死隊というやつ。すると土方がめずらしく感動を顔へあらわしましてね。私の手をぎゅっとにぎりしめ、やってくれるか……と、こういいました。その土方の両眼がじんわりとうるんでいるのですよ。これにはおどろきましたね。私はそれまで、土方の泪なぞというものを見たことはなかった。一時は同志ながら血も泪もない男だと思っていたほどでして……ま、そうです。試衛館のころから、私と土方とは肌が合わないというやつ。互いに親しく口をきいたこともない間柄でしたが、このときは別でした。血と埃と泥で、まっ黒になっている顔に土方が泪をうかべているのを見たときには、こっちもたまらなくなって……」

と、ある。

永倉新八は、

「土方さん。一緒に死にましょう」

「うむ。後から行くぞ」

永倉は二番隊の十五名をつれ、奉行所の北東面の塀を越え、闇の道をじりじりとす

すみ、北面から押して来る薩軍の先鋒隊へ斬りこんだ。

「そりゃもう池田屋のときとは全くちがう。暗い、闇の中へ、何かこう盛り上って来るように敵兵が押し出して来て、刀や槍がきらきら光る。そこへ飛びこんで行ったんですが……自分でも、どうやって斬り合っていたのだか、いまもっておぼえてはいない。こっちの躰へね、ごつん、ごつんと何かぶつかるのです。敵の躰か刀か槍か、ね。芋を洗うような斬り合いで……どれ位やったものだか……ふっと気がつくと、敵は逃げ出していましたよ。二、三町は押し返したんでしょうなあ。よし、ついでに御香宮のサツマッポウの本陣へ斬りこんでやろうと息まいたんですが、もう斬りこむにも何にも、こっちは五、六人しか残っちゃあいない。あたりはもう火の海でしてね。民家も燃える、奉行所にも火がかかる。火とけむりが物凄くたちこめていて身うごきもならない。で、私どもも引き上げました。どんどん引いて行くと、どこからか土方歳三が飛び出して来て、いきなり、私の躰へ抱きつき、よかった、永倉君、生きていてくれてよかった、と、叫ぶのですよ。そのとき、私はハッとおもいましたね。ああ、前に土方が、あんなに冷酷に見えたのも、あの人が一所懸命に気をゆるめず、隊士一同に眼を光らせていたからこそ、新選組もあれだけのはたらきが出来たのだ。ほんとうの土方歳三という男は、熱い血も、あたたかい泪もある人だったかも知れない、と、そうおもったのですよ」

一月五日。

淀川堤の千両松付近の激戦を最後にして、幕府軍は総くずれとなった。
新選組は六十名ほどに減ってしまい、大坂へ退却する幕軍の殿(しんがり)をつとめるかたちになって、淀から男山(おとこやま)八幡付近の退却戦を切りぬけ、大坂へ入った。

五

そのころ。
前将軍・徳川慶喜は、ひそかに大坂城を脱出している。
鳥羽伏見の敗戦をきいて、慶喜は、
（これ以上、自分が大坂にいては却(かえ)ってどのように危険な事態になるか知れたものではない）
と、考えたからである。
イギリスも、公使のパークスが大坂城の慶喜へ使者をよこし、
「わがイギリス政府は、日本の正統である主権者を助ける。慶喜公は政権を返上せられたので、日本の政治の主権は朝廷にある。貴下が、これ以上、官軍と争うつもりなら、イギリス政府をも敵にまわすことになろう」
と、文書でいってきた。
いうまでもなく、イギリスが薩摩藩と打ち合せてのことであろうが、慶喜にとっては痛烈なショックであった。

慶喜は、これ以上に戦火がひろがることをおそれた。
自分が、ひそかに江戸へ帰ってしまえば、残存する幕府軍も江戸へ引きあげて来よう。
慶喜の胸中には、次第に、（朝廷と天皇に対して恭順しなくてはならぬ）
という決意が、かたまりつつあった。
慶喜は、ひそかに次の七人をわが寝所へまねいた。

松平容保（会津藩主）
酒井、板倉の両老中
松平越中守（桑名藩主）
山口駿河守（外国奉行）
榎本対馬守（目付）
戸塚文海（奥医師）

そして、この七人のみに江戸退去、前将軍恭順の決心を告げた。
松平容保は、
「後にのこりしものは、いかがに相成ります」
憤然とつめよったが、慶喜の決意はかたい。自分一人でも江戸へ帰るといい切った。

こうなっては会津侯も泪をのんで、うなずくより仕方がなかったという。

そして、前将軍は、松平容保以下五名をしたがえたのみで、ひそかに大坂城を脱け出し、天保山から小舟を出し、兵庫の沖へ碇泊していた幕府軍艦〔開陽丸〕に乗り移った。

将軍が帰ってしまったのでは、どうにもならぬ。幕軍も海路陸路をそれぞれに江戸へ退去して行った。新選組一同は、軍艦・富士山丸に収容され、江戸へ向った。

大坂城にいた近藤勇も、隊士たちと共に、富士山丸へ乗った。

大刀を杖にして、勇はどうやら歩行が出来るようになっていたのである。

江戸へむかう船中で、古参隊士の、山崎丞が死んだ。

鳥羽伏見の戦闘で受けた重傷が悪化し、息を引きとったのだ。

勇が、養子というめいもくで板倉家から引き取った近藤周平も、戦場から行方知れずになってしまっている。

山崎丞は、大坂の鍼医者の家に生まれ、そのほうもかなりやったが、剣術が大好きで、動乱の世に身を立てんと新選組に入った男だが、武術も相当なものだし、おまけに育ちが育ちだけに世間をよく知っていて、大坂では顔もひろく、大坂の豪商たちへ、新選組が金を寄付させるときなど、山崎が仲へ入って非常なはたらきをした。

池田屋事件のときもそうだが、この人物が新選組の〔探索方〕として暗躍したのも、近藤・土方の信頼が厚かったからで、

「やはり、いかぬか……」

臨終を告げられ、勇が甲板から船艙へ入って行くと、土方、永倉、原田をはじめ生き残りの隊員たちにかこまれ、山崎は喘いでいた。

「山崎……」

勇が、まくらもとへ近寄り、呼びかけると、山崎は苦しげに、

「総長……ついに……ついに、いけませんでしたなあ」

と、いう。

「ばかな……しっかりしろ」

「いえ、私のことじゃあない、新選組がですよ」

「む……」

「こうなるとは、おもわなかった……」

一同、声もない。

すると山崎は、元気だったときのように、愛嬌のある微笑をうかべ、

「山崎、本望です。おもいのこすことはない……」

「おい。まだ早いよ」

と、原田佐之助が、わざと大声ではげますや、山崎はいたずらっぽく片眼をつぶって見せ、

「人間死ぬに、早いもおそいもあるものやないわい」

大坂弁でこたえ、はっきりとした眼つきで、自分を取りかこんでいる同志たちを見まわし、最後に勇を凝と見て、

「長い間、お世話になりました」

いうや、眼をとじてしまった。

山崎が息を引きとったのは、それから間もなくのことであった。

山崎の遺体は、富士山丸に同乗していた軍艦頭並・榎本武揚の指揮により水葬礼をもって荒天の夜の海中にふかく沈められたのである。

六

「まだ負けたというわけじゃあねえ」

と、原田佐之助などは江戸へ着いてからも、まだ元気があった。

幕府の海軍は無傷の上に、外国わたりの堂々たる軍艦が十余隻もあって、これには勤王軍といえども、歯が立たぬ筈である。

この海軍を海にすすめ、箱根の険に敵を押え、江戸に集結した幕府軍が再起すれば、なるほど、むざむざと負けることはない。

富士山丸は一月十四日に、品川沖へ錨を下し、新選組一同は十五日の朝に上陸をした。

取りあえず、一同は品川の釜屋という旅宿へ入った。

近藤勇のみは、品川から駕籠で江戸へ入り、神田和泉橋にある幕府の医学所へ入院することになった。

まだ肩の傷が癒りきっていない。

医学所の典医・松本良順の治療をうけるように手筈がつけてあったのだ。

ここへ入って、三日目に土方歳三がやって来た。

「総長。どうです、ぐあいは？」

「はっきりせんのだがね。だが、寝込んでもいられまい。明日にでも起きるつもりだった」

「むりはいかんが……でも、むりをしてもらわねばなりませんな、このさいですから」

「わかっている」

「われわれは、大名小路の鳥居甲斐守様御屋敷内に宿舎を定められまして、今日、一同はそこへ入りました」

「それは、よかった」

「総勢四十四名です」

「大坂を発つとき、脱走したのは？」

「十六、七名でしょう」

「でも、ここまでついて来てくれた連中は大したものだね」

「そうですね」
「ふしぎなものだ。おれが最後まで残ってくれるとおもっていた者は、みんな残ってくれた」
「ふ、ふふ……」
「おかしいか？」
「いいえ」
土方は急に、まじめな顔つきになり、
「近いうちに、一度、帰られたらどうです？」
「女房子の顔を見に行けというのか」
「そうです」
「二十騎町へ引き移っているのだが……」
「私も一緒に行きますよ」
勇は、別に、はっきりした返事をあたえなかったけれども、数日後に、土方がやって来て、むりやりに勇を駕籠へ乗せてしまった。
牛込・二十騎町。市ヶ谷御門前の左内坂をのぼり、尾張家の屋敷を左手に見て中根坂を上りきって少し行ったところに、勇の留守宅があった。
このあたりは、前に〔二十騎組〕とよばれた旗本屋敷がならんでいるところで、その一角の、細い道を入った突当りの小さな家に、おつねと瓊子が住んでい、勇の実

兄・宮川音五郎の次男・勇五郎が、ほとんど、多摩の田舎から出て来て、なにかと世話をやいている。

勇五郎は、まだ十八歳であるが、剣術もやるし、何事にもよく気がついて、もう一人前であった。この勇五郎をつねが大そう気に入り、

「瓊子の聟に迎えたい」

と、前に京都の勇へ手紙で相談をしてきたことがある。

勇も、この甥の性質はよく知っているし、勇五郎を養子にすることはいやでない。だが、なにぶんにも瓊子は六つ七つの幼女であったから、

「急ぐにもおよぶまいが……」

と、いってあった。

勇が土方と共に二十騎町の家へあらわれたとき、勇五郎は故郷へ帰っていて、不在であった。

出迎えたつねは、勇を見るなり、

「あっ……」

叫んだなり、声もなく、くたくたとひざをついてしまった。

この前に帰東したときとはちがい、いまの勇は、いわば敗軍の将である。しかも鉄砲傷の痛みをこらえている身であった。

必然、妻子を見る眼も感情も変っている。

「しばらくだった……」

つねにかけることばもやさしく、瓊子を抱きあげて頬ずりをしたときには、さすがの勇も双瞼をうるませていた。

勇をおいて、土方はすぐに、

「明日、迎えに来ますよ。ゆっくりくつろいで下さい」

鳥居屋敷の宿舎へ帰って行った。

あとは親子三人、水いらずになる。

前の小日向の道場よりは手ぜまであったが、この家も静かで、つねが懸命にととのえてくれた夕餉の膳につくと、

「……あれから七年たったとはおもえないな」

しみじみと、勇がいった。

「はい。まるで夢のようでございます」

つねはもう、何からはなし、何から手につけてよいのか、ただわくわくとしているのみであったが、四年前に一度帰ってきたときの夫が威風堂々として妻も子も傍に寄せつけぬといったような……立派な、近よりがたい貫禄をそなえていたのにひきかえ、今度もどって来た勇はすっかり老けて見えたし、そのくせ態度物腰が、むかしの試衛館時代そのままに、やさしくあたたかくおもえた。

つねも、若いころは大奥づとめをした女だけに、いまの夫の胸のうちは、わかりす

ぎるほどわかっている。
考えれば考えるほど、これからの不安はつのるばかりなのだが、彼女は一言もそれを口にしない。
何も彼も忘れて、親子三人のだんらんにひたりこもうとしている。
「そうか……勇五郎が月のうち二十日も泊りに来てくれるのか」
勇は、実直な甥の奉仕をうれしくおもった。
「瓊子、どうだね」
と、七歳になるむすめのあたまをなでつつ、
「勇五郎と夫婦になるか」
やさしく、勇がいうと、
「はい」
瓊子は無邪気にこっくりをして、
「なるの」
と、いった。
「ほう、そうか、そうか……」
「ほんに、おませなことを……」
「つね。で、勇五郎のほうはどうなのだ」
「それとなく、はなしてございます」

「で……？」
「承知してくれました」
「む。それはよかった」
「宮川の兄上さまも、御異存はないとのことで」
「よし。私からも、あらためて兄へ申し入れよう」
「そうしていただきますれば……」
「よし、よし」
夜ふけて、瓊子を中にして夫婦は四年ぶりで一室にねむった。
つねは、なかなかに寝つけないようであった。
勇もそうだ。
七年前までの、あの試衛館のころが、しきりにおもい出されてならない。あれこれと思い出を手ぐるうち、
（あの……飯田金十郎という剣客。いま、どこに何をしているのか……？）
ふと、おもい出した。
そのころ……。
飯田金十郎は、勇同様……というよりも、もっとひどい重傷を身にうけて、その苦痛に歯をかみ鳴らしていたのである。

甲陽鎮撫隊

一

飯田金十郎が、全身に五か所も重傷を負うたのは、去年の十二月十三日夜であった。前日の十二日以後、前将軍・徳川慶喜が、京の二条城を出て、大坂城へ引き移っている。

薩摩藩をはじめ、勤王諸藩の士は、もう大威張りで市中を横行し、

「いよいよ倒幕の戦争だ！」

早くも戦備にとりかかり、間もなく到着する筈の長州部隊を迎え入れるべく、まさに意気天をつくといったあんばい。金十郎もわくわくしてきたものだ。

「いずれ、われらの天下が来る。われらの手によって、この日本国が治められるようになるのだ。そうなれば金どの、おぬしも只ではおかぬ……われらが引きうけ、新しい世に身を立て得るよう、はからいましょう」

と、約束をしてくれた大倉守のことばが、いまや実現しようというわけであった。

こうなれば、飯田金十郎も勤王軍の一員として活躍できる。

（おれは、勤王方のために、新選組をはじめ徳川の狗どもをあれだけ叩き斬ってきた

のだものな……大倉どのの口から、おれのはたらきは、じゅうぶんに薩摩や長州の幹部の耳へとどいている筈だ。ああ、こうも早く勤王の世が来るのだったら……どんなむりをしても、あの近藤勇だけは斬っておくのだった。そうすりゃあ、もっとおれも分のいい出世の仕方ができたろうに……大倉どのも、今度会えば、長州か薩摩か、真の身分をうちあけてくれるだろう。それにしても……それにしても大倉どのは、いったい、どうしたものか?……どこにいるのだろうかな!?)

金十郎が大倉守と面談したのは、十一月十三日であるから、勤王志士・坂本龍馬と中岡慎太郎が見廻組に暗殺をされた二日前ということになる。

その日の午後おそくなってから、二人は、例の南禅寺門前にある茶店〔丹後屋〕で会った。

その前々日の十一日に……。

飯田金十郎は、大倉のいいつけで、見廻組の佐藤梅蔵という猛者を暗殺している。

「佐藤は、あの坂本龍馬氏のいのちをつけねらっているそうな。腕はすごいし、われわれの同志の中で、佐藤梅蔵に殺られたものは十人をこえる。だから金どの、くれぐれも油断なく……」

と、大倉はいった。

次の夜……。

大倉から密使が来て、

「いま、三本木の増花に、佐藤梅蔵が一人で来ている」
との知らせが入り、金十郎はすぐに三本木へ出向いた。
佐藤梅蔵はそのころ、三本木の芸妓で小妻というのとねんごろで、当夜も茶屋の〔増花〕で、夕暮から小妻と二人きりで二刻（四時間）ほどをすごし、
「御用繁多ゆえ、これからはめったに逢えまいよ」
名残りを惜しみ、夜ふけて増花を出た。
佐藤は、千本通り竹屋町下ルところの見廻組の組屋敷へもどるつもりであった。わざと御所の周辺を避け、土手町の細い通りを二条へ向って行く。右がわの町家は戸を下しているし、左手は公卿屋敷がつらなり、夜の闇がふかい。
佐藤梅蔵が〔増花〕から借りた提灯を左手に持ち、いささかも油断せず歩をはこんで、突当りの屋敷の土塀沿いに左へ曲った瞬間であった。
前方の闇をするどく切り裂き、手槍が飛んで来て、これがぐさりと佐藤の左の胸下へ突き刺さったものである。
「あっ……」
提灯を捨て、大刀を引きぬいたが、
「う、うう……」
激痛にうめいて足もとがみだれるところへ、闇の中から猛然と殺到した飯田金十郎が、

「やあ!!」

必殺の一刀を、たたきつけた。

「おのれ……」

辛うじて、この一刀を払いのけたが、何しろ相手は飯田金十郎である。飛びぬけざまに佐藤の腰をすくい斬りにしておいて、すぐに振り向くや、今度は完全に、

「それ!」

佐藤梅蔵のくびすじから喉へかけて切り割った。佐藤は板戸を倒したようにころがったまま、即死である。

彼の提灯のあかりをねらって投げつけた手槍の効果に（ふふふ……うまくやったわい）と、金十郎はほくそ笑みつつ、さっさと闇に消えた。

その翌日が十一月十三日で、丹後屋へあらわれた大倉守が、

「昨夜はあざやか、あざやか」

と、金十郎をほめ、金二十両をくれた。

「いずれ近いうちに……それまでは、いつものごとく、一日置きに、この丹後屋へ、今日と同じ時刻にまいっていてくれ、用あらば、すぐに使いをさしむけるゆえな」

「わかり申した」

そして別れた。

十四日、徳川慶喜が諸藩代表を二条城にまねき、大政奉還の沙汰をくだし、将軍の

座を下りた。

これをきっかけに、ぴたり、大倉守からの連絡は絶えたのである。

約一か月の間、飯田金十郎は一日置きに丹後屋へ行き、大倉の指令を待った。一日置きが毎日になる。金十郎はじりじりしていた。

徳川政権はつぶれ、前将軍は大坂へ去った。

が……このままではすむまい。

前将軍はさておき、会津・桑名など幕府方の諸藩や、新選組、見廻組、それに幕府直属の軍隊は、大坂を本陣として、ふたたび、京都をうばい返そうという気配濃厚らしい。

（さあ、いよいよおれも勤王軍の一員……いや、一隊の長として身を立てることが出来る。それからはおれのちから次第、どのようにも出世ができようというものだ）

などと、金十郎はわくわくしているのだが、いっこうに大倉守からの使いが、丹後屋へあらわれぬ。

むろん、金十郎は大倉の居どころを知らぬし、どこの藩の人物なのか、それも聞いてはいないのである。

（こうと知ったら、どんなことをしてでも大倉どのの居どころを突きとめておくのだった……いや、大倉どのも多忙をきわめているにちがいない。決して、おれのことを忘れてはいまい）

こうなったら、

（おもいきって薩摩屋敷へでも出かけて行き、大倉どののことを問うてみようか……）

十二月十三日に、例のごとく失望のまま丹後屋を出た金十郎は、白川沿いに祇園町へ出るつもりで、むしゃくしゃしながら歩いた。

（もしや……もしや？）

に引かされて、夜に入るまで丹後屋で酒をのみながら待っていたものだから、あたりは暗い。

いつ町中が戦争になるか知れぬというので、京の町民たちは、車に荷物を積んで市外へ逃げたものが多いし、残っているものも、夕暮れになると大戸をおろし、灯を消し、屋内に息をころしている。

したがって、町すじも暗いのである。

金十郎の髪の毛も、かなり伸びそろいはじめた。

これは、

「もはや坊主あたまはやめになされ。間もなくおぬし、勤王方の立派な同志となるお人ゆえ、な」

と、大倉守にいわれたからだ。近藤勇に切り落された左の耳の傷痕を、いまの金十郎は伸びた髪の毛でうまくかくしている。

いま少しで白川橋へかかろうという……加賀藩邸の宏大な屋敷がまえを右に見ながら、白川のながれの北がわを金十郎は歩いていたわけだが、突然、

……だあん……。

白川の向う岸の木立の手から銃声がきこえ、金十郎は提灯を落し、もんどりうって倒れた。

弾丸が左股を射ぬいていた。

「畜生……」

すばやく抜刀し、川辺りの道を懸命に、金十郎が這うようにして悲田院手前の杜の中へ逃げこむと、これを待ちかまえてでもいたかのように、

「えい！」

杜の闇の中から数箇の人影が躍り出して、金十郎へ斬りかかったものである。

「逃がすな！」

「斬れ、斬れい！」

わめき声をあげて押し包むように斬りこんで来る敵が、いったいどこのものなのか見当もつかぬ。金十郎、夢中で闘った。

敵の一人の斬りこみをかわし、その利腕を左腕でつかんだ金十郎に、その敵が、

「うぬ、はなせ！」

と、叫んだ。

その声に、ききおぼえがあった。
「きさま……い、伊七か」
「うるさい。はなせ」
「い、伊七……」
江戸の入谷田圃の百姓家で暮していた金十郎へ、金をとどけたり、大倉守との連絡係をつとめていた老爺の伊七なのである。
その伊七が、いま、武士の姿で大刀をぬき、老爺ともおもえぬ太刀さばきで金十郎へ襲いかかっているのだ。
「死ねい！」
わめきざま、太刀を持った右腕を金十郎につかまれたまま、伊七は左手で短刀を引きぬき、金十郎の腕のあたりへ突きこんで来た。
「あっ……」
あわてて飛び退いたが、痛みが疾った。
「畜生……」
あとはわからぬ。伊七のほかに何人の刺客がいたのか……そのうちの何人を自分が斬ったのか、それもおぼえてはいない。
あの重囲の中を切りやぶって逃げることを得たのは、まさに奇蹟だったといってよかろう。

二

そのときから、約四十日が経過している。

飯田金十郎は、いま、栗栖野の一角にある小さな百姓家に、かくまわれていた。

西の山なみの向う側が、京都市中である。

栗栖野の原野は、山科盆地の中央にあって、往古は皇室の狩猟地であったそうな。

あれから……。

金十郎は必死に刺客の追撃をのがれ、知恩院の裏山へかくれた。

夜のふかい闇が、彼の逃走を助けてくれた。

刺客たちは、最初の銃弾によって、金十郎の反撃が、ほとんどちからを失った、と見たらしく、自信まんまんのかたちで斬りかかった。

ところが、金十郎の抵抗は意外に烈しく、気力もさかんに闘って逃げた。用意の龕燈も投げ捨て「しめた!!」とばかり斬りかかった刺客どもへ、金十郎は本能的な、動物的な直感で応戦し、闇と木立と物蔭とを利用した。

山科盆地まで来て、ついに気をうしなった飯田金十郎を助け、わが家へはこびこんだのが栗栖野に住み、百姓とも木樵ともつかぬ暮しをしている太次郎という中年男である。

太次郎には女房も子もない。まったくの独り暮しなのが好都合であった。

彼の手当をうけ、蘇生したとき、金十郎は気前よく、ふところの金をすべて、太次郎へあずけてしまった。

「無頼どもに襲われて、この始末だ」

こういうと、太次郎は一も二もなく、

「ぶっそうな世の中になったものや」

うたがいもせず、かえって同情をしてくれた。

ちょうど二十両余も金をもっていたので、薬代に事は欠かぬ。医者は呼ばず、

「なあに、わしが癒してみせる」

太次郎が、はじめのうちは付きっきりで世話をしてくれたのである。

新しい年が来た。

金十郎は苦痛にうめきつつ、太次郎の口から〔鳥羽伏見の戦い〕のうわさをきいた。

(畜生、大倉め……)

であった。

あの夜の刺客どもの中に〔伊七〕がいたことは、彼らの襲撃が大倉守の指図によること、もはや明白といってよい。

(まんまと、この飯田金十郎を騙しやあがった……あいつらは、おれにいのちがけのはたらきをさせた。金でつり、出世への欲でつり、手前たちが邪魔にする連中を、手前たちの手を血で汚さず、おれのような剣術つかいを手なずけて殺させたのだ)

である。

（そして……いざ、手前たち勤王方が天下を取れそうだ、と、こうなったとき、今度は、おれが邪魔になってきやがったにちがいねえ。なぜというなら……おれは、やつらの秘密を知っている。やつらがおれをつかって、だれとだれを殺させたか……そいつは、殺したおれが、いちばんよく知っている、それが、大倉守たちには厭なのだ。おれは、名もねえ一介の剣術つかいだ。下総の小さな村の名主の妾腹に生まれたあばれ者だ。そんなおれに、日の目を見せたくねえのだ。ごたごた騒ぎの最中には、どこのだれとも知れねえおれのような者を手なずけて血みどろに闘かわせておいて、いざとなれば、手柄は薩摩や長州、土佐なんどの志士どもがさらって行ってしまうのだ。やつらは、ひきょうな殺しをさんざやって来て、そいつに口をぬぐい、知らん顔をしながら、これからの新しい世の中へ出て、立身出世をするつもりなんだ。畜生……畜生！」

金十郎は、傷の痛みと精神の痛みで、五体を瘧のようにふるわせた。

その通りであった。

革命前期の暴力時代には、飯田金十郎のような男が何人も必要なのだ。

しかし、革命が成功し、革命派の権力が生まれたとき、彼らは塵芥のように抹殺される。

明治維新の前夜には、金十郎のような男たちがいくらも消されていったのである。

そして、生きのこった指導者たちが、栄光の座につき、他人の、またみずからの過去を振り返ろうともせぬようになる。

金十郎の傷はおもかった。

だが、少しずつ、回復していった。

現在……。

旧幕府の勢力は、すべて江戸へあつまり、京都も大坂も、完全に勤王方の手中に帰している。

朝廷は、新政府を組閣した。

閣僚には、公卿や勤王大名たちをもって任命し、神祇・内国・外国・陸海軍・制度・刑法・会計の七科から成る〔太政官〕が、それである。

こうなると、京都から西の諸地を領している大名たちは、いずれも新政府に帰順してしまい、いよいよ、江戸の徳川家を討つべく〔征討軍〕が編制されることになった。

編制は次のようなものである。

総　督　有栖川宮熾仁親王

参謀長　西郷吉之助

東海道先鋒総督　橋本実梁

参　謀　木梨精一郎・海江田武次

東山道総督　岩倉具定（ともさだ）
参謀　伊知地正治（いじちまさはる）・乾退助（いぬいたいすけ）
北陸道総督　高倉永祜（たかくらながさち）
参謀　黒田了介・品川弥二郎

薩摩・長州・備前・土佐・肥後などの諸藩を動員した兵力は、総勢五万余という。これが、いわゆる〔官軍〕というわけだ。

江戸にいる徳川方は〔賊軍〕の汚名をこうむることになる。

その江戸では……。

江戸城へ帰った徳川慶喜を迎えた旧幕府側が、急迫の会議をつづけていた。

「戦うべし！」

「戦うべからず」

の二派に別れての激論が、夜も日もなく、くり返される。

鳥羽伏見の戦争には敗北したけれども、幕府の兵力、ことに海軍は〔官軍〕といえども歯が立たぬだけの戦力をそなえてい、ほとんど無傷であった。

陸軍は箱根に敵を迎え撃ち、海軍は海上から砲撃を加え、今後は、こちらから〔官軍〕を圧倒しようというのが主戦派の幕臣たちで、新選組も、むろん、これに属する。

しかし、陸軍総裁・勝安房守（海舟）はこれ以上、日本の国土を戦火にさらすこと

の無為を説き、天皇を奉じての勤王方が〔官軍〕の栄光を背負っているからには、旧幕府側が、尚も〔賊軍〕の汚名を着て戦うことの無意味さを強調してやまぬ。

さらに……。

外国勢力も、この日本の内乱に無関心ではない。

すでにのべたように、イギリスは、勤王革命派の〔官軍〕をバック・アップしてい、フランスは旧幕府と前将軍を後援し、

「戦いなさい」

と、そそのかしている。

どちらにとっても、うっかりとはできない。

主戦派の巨頭・小栗忠順が北海道を担保にして、フランスから戦費を引き出そうとした、などといわれたのは、このときであった。

前将軍・慶喜は苦悩した。

自分が政権を返上したのは、いうまでもなく徳川家が新政権に参加することを前提にしたからである。

新政権に参加することは、徳川家の存続を意味する。

これが、すべて叩きこわされてしまった。

もちろん、口惜しい。

口惜しいが、徳川慶喜は、勝安房守の主張を、またも苦しい決断によって採用する

ことにした。

官軍に刃向い、勝てることが決まっているなら、慶喜も戦意を燃やしたやも知れぬ。

だが〔戦争〕の結果が、戦う前に出る筈はない。

もし、敗けたらどうなる……？

旧幕府がわの勢力は、今度こそ、みじんに打ちくだかれ、消滅してしまうのだ。

そして外国勢力の介入……これを慶喜は恐れた。

二月二十二日になって……。

徳川慶喜は、平岡丹波守など、わずかな侍臣をしたがえて江戸城を出た。上野山内の大慈院へ入り、ここへこもって朝廷へ恭順のこころをあらわそうというのだ。

「なんということだ……」

近藤勇は憤激するよりも、あまりのなさけなさに、

「これではもう、どうにもならん」

と、土方歳三へいった。

「将軍が恭順なされても、こっちはしない。それでいいじゃありませんか」

「むむ……」

「まだまだ、いくらでも、薩長の奴らと戦おうという者はいますよ」

「だが、こうなれば、おれたちで将軍をまもりたい。あんな、上野の山の寺へお入りあそばされて、ろくな警護もつかぬというのでは……」

「そのことなら、私も賛成ですよ」

三

新選組の〔大慈院・警衛〕のことは、ゆるされなかった。

慶喜は、旧幕派の暴発をおそれ、あくまでもひそやかに江戸城を出て、上野へ向った。

近藤勇は、隊士たちをひきい、慶喜の行列がすすむ沿道を、見えがくれに警戒しつつ、上野山下へ至った。

大慈院へ入った慶喜の身は、幕臣・山岡鉄太郎指揮する精鋭隊および見廻組（みまわりぐみ）などを合せて百二十名ほどが警護することになったのである。

このように、前将軍みずから、

「決して官軍には刃向いませぬ」

と、恭順のかたちをしめしたが、旧幕府がわの勢力は、諸方に分散しながらも、

「このまま、むざむざと江戸を開けわたしてなるものか」

と、結集しつつあったし、前・京都守護職・松平容保は、居城がある会津の若松へ帰り、東北の諸藩をあつめて、

「ともあれ、われらがむざむざと賊徒の汚名を着せられてしまうことを、ふせがねばならぬ」

との主張を、つらぬこうとしている。
これまでのいきさつをもってすれば、会津藩の忿懣は当然というべきであろう。
すでに、二月に入っている。
二月も半ばになると、京都の官軍総督府が、いよいよ〔官軍〕をひきいて江戸を目ざし、進軍を開始した。
このとき、官軍・大総督府は、
「たとえ、旧幕臣や諸藩が、徳川家のために、いかなる嘆願哀訴をなすとも、断じてゆるしてはならぬ。三月十五日に江戸城を総攻撃するつもりで、進軍されたい」
と、きびしい命令を下している。
「おれたちは、いったい、どうしたらいいのだ」
新選組の人びとも、
「いっそ、会津へ駆けつけ、われわれとは因縁ふかい前・守護職と行を共にしよう」
と、いい出す者がある。
「いや、幕府・遊撃隊と共に、官軍を迎え撃とう!!」
と、叫ぶ者がある。
しかし、近藤勇は、
「あくまでも新選組は、独自の行動を起すべし」
こういって、ゆずらない。

ゆずらないのなら、一日も早く指針をしめしてもらいたいのだが、なかなか勇の肚もきまらないのだ。

わずかな兵士をひきいて、勇は、どのように独自の道をえらぼうとしているのか……。

「わからん、おれには……」

原田佐之助が、いらいらして怒鳴ると、永倉新八は、

「そりゃあ、近藤さんにもわからぬのさ」

「ちぇっ。そんなことでどうする」

「ま、新選組の体面を考えているのだろう。いまさら、ほかの連中と一緒になってやるのは厭なのだろうよ」

「おれたちだけで、なにが出来るというんだ。ろくな鉄砲ひとつ、ありゃあしねえ」

「いかにもなあ……」

隊士たちの気も滅入ってくるばかりであるから、次第に、勇のいうことも聞かなくなる。

勇も、じりじりしていたのだが、こうしたとき、おもいがけぬはなしが出た。

いま、甲府の城は、在番として佐藤駿河守が兵をひきいて入っている。

新選組は、この甲府城へ入り、佐藤駿河守と共同で戦おうというのだ。

甲州は山国である。

城も堅い。
糧食も、じゅうぶんである。
甲府城を手に入れ、東海・東山の両道を進軍して来る官軍を、
「喰いとめよう!!」
と、いうのである。
この作戦は、甲州出身の隊士・結城無二三が進言したともいわれているが、土方歳三も熱心に勇を説きふせ、
「よし。それでゆこう!!」
ついに、勇も決意をかためた。
そうなれば、一時も早く……東山道の官軍が甲府城を占領する前に、甲府へ入らねばならない。
勇は、弦を放れた矢のように、うごきはじめた。
肩の鉄砲傷も、どうやら癒ったようだが、京都にいたころとくらべて、勇の体軀は見ちがえるほどに痩せ、顔貌もけわしい。
数日を経て……。
旧幕府の要人たちを歴訪しつづけていた勇が、隊士一同をあつめ、
「いよいよ、甲州へ出発する」
肩をそびやかし、らんらんと光る眼で、四十名ほどの同志をにらみつけるようにし、

「御公儀は、勝安房守殿の肝煎りで、大砲二門、銃器、弾丸を支給してくれることになった」

一同、おもわずざわめいた。

「軍用金・五千両も下しおかれる」

と新選組総長としての威勢を、懸命に固持するかのように、

「甲府で敵軍を押えつけてしまえば、ここへ将軍家をお迎えしたてまつることも、夢ではない」

と、いった。

隊名も〔甲陽鎮撫隊〕と決まった。

勇は若年寄格、土方は寄合席格という、数年前の幕府職名なら、大名に準ずるすばらしい身分と格式をあたえられての出発であるが……後になって考えれば、昭和の大戦における終戦昇格のようなものであった。

「諸君!!」

尚も勇は声を甲高く張り上げ、

「諸君は、どこまでも近藤を信じ、近藤に一命をささげてもらいたい」

ときめつけるようにいう。

原田佐之助が、永倉新八へ、

「近藤さんは、もう大名にでもなったつもりでいるのかな」

にやにやして、ささやいた。
永倉は苦笑しつつ、かるく、くびを振りながら、
「さてなあ……」
「そうだよ、そうにきまっているさ。どうだい、あの反っくりかえった恰好というものは、いっそこうなるとあわれに見える」
「ふむ……さびしいのだよ、近藤さんは……おれたちが自分から離れてしまうのじゃねえか、と、そればかり考えているのだ、と、おれはおもうね」
「けっ……負け戦さを何とか、もり返そうというときだぜ。上も下もねえ、みんなでちからを合せて、と……こういきてえな」
「ふ、ふふ……ま、いいではねえか」
永倉は、江戸育ちの神経のつかいかたの細かいところがあるし、勇とは、一種特別な親交も生まれた間がらだけに、つとめて、勇の身になってものを考えようとしているらしい。
新選組あらため〔甲陽鎮撫隊〕が、江戸を出発するのは、三月一日ときまった。
会合が解散してから、永倉新八は、浅草・花川戸にある〔布引そば〕という蕎麦屋の二階で、むかしから仲のよい剣術友達の市川宇八郎と会った。
市川も、永倉と同じように父親が松前伊豆守の家来で、永倉同様、親から勘当され、松前藩を追い出された〔剣術つかい〕なのである。

「行くのかね、甲州へ……」
「ああ行くよ。宇八郎さんも一緒に来ないか」
「とんでもねえよ、新さん。おりゃ、ごめんこうむりてえな」
「じゃあ、どうするつもりなんだ？」
「なんでも、彰義隊というものが出来たそうだね。上野に恭順なすっている上様をお守りしようというのらしい。こいつへ入ってみてもいいと考えているが……ま、どっちにしても、おれは薩摩や長州の奴らに楯つくつもりさ」
「そうか、ではまあ、好きにするさ」
「おい新さん。酒もいいが、ここの天ぷらはうめえぜ。どうだ？」
「それよりも、どうだろう宇八郎さん。甲州へ行って勝ち目はあるかね」
「ふ、ふん」
「何がおかしい？」
「なあ、新八さんよ。甲陽鎮撫などといって、体裁はいいがね。実のところ、新選組は、江戸を追っぱらわれたのじゃあねえのかい」
「え……？」
「邪魔だよ。近藤勇だの土方歳三だの……へ、へへ。永倉新八だのという強えお人たちが江戸にいてはね」
「だれの、じゃまに……？」

「慶喜公にも、勝安房守にもさ。勝安房というお人は、どこまでも戦さをせずに、鉄砲の音ひとつたてねえで、敵を江戸へ迎え入れようというのだ」
「むむ……」
「その勝さんがだよ、軍用金や大砲までくれて、甲州へ行ってもいいというのは、こいつおかしい。近藤先生、勝の手品に引っかかったのじゃあねえのか!!」
「しかし……」
「新選組が、江戸で、おもいきってあばれたら、こいつ勝安房は困るよ」
「ふうむ……」
「ま、いいや。行って来てみろよ、新八さん」
「宇八郎さんにそういわれちゃあ、何だか、ぞっとしねえなあ」
「しかし、うまく行けばめっけものさ。とにかく、やって見るこった」
同じ夜……。
近藤勇は、久しぶりで二十騎町の自邸へ泊った。
あれから、勇は、実兄の宮川音五郎に江戸へ来てもらい、兄の次男・勇五郎を、むすめ瓊子の聟にし、近藤家の後つぎにするはなしも、きまっていた。
甲州出陣のことを、妻のおつねに語ると、おつねは青くなった。
「大丈夫でございましょうか？」
「戦さに大丈夫ということはない。むろん、わしも死ぬつもりで出かける」

「まあ……」
「このごろ、隊士たちが、わしのいうことをきかなくなってなあ……」
「……？」
勇にしては、めずらしく本音を吐いたものである。
「さびしい……」
夜ふけて、寝間に二人きりとなってから、勇は、おもくて豊かな妻の乳房へ、やせこけた顔をうめ、つぶやくように、
「おつね。わしはいま……さびしい……さびしいのだよ」
この夫に対して、おつねは狂気のような情熱をもってこたえるより、術を見出せなかった。
勇も、渾身の愛撫を妻にあたえた。
この夜……。
この夫婦の愛のいとなみは終止符をうつ。
後日に、再会することを得たけれども、二人きりの時間をもつことは、この夜かぎり、なかったのである。

四

そのころ……。

飯田金十郎は、栗栖野の百姓家を出て、江戸に向っている。
傷は、まだ癒りきっていないのだが、なにしろ京都とは目と鼻の先だけに、落ちついて養生をしている気持にはなれない。
京都は、すでに〔官軍〕の本拠であり、いつどこから、大倉守がさしむける刺客が飛びこんで来るか知れたものではない。
（あぶない、ここにいては……）
あれほどに無茶で豪胆だった金十郎も、こうなると外の物音ひとつにも、おびえきってしまい、
（われながら、なんと、なさけないざまだ）
はらわたが、煮えくり返るようなおもいであった。
いまの金十郎は、近藤勇に片耳を切り落され、二度も決闘をいどみ、二度とも完敗を喫した剣客としてのうらみと、
（いつかは、近藤の首を討ってくれよう）
その執念をも忘れてしまっている。
そのかわり、
（大倉守め、ただではおかねえ！）
この怒りとうらみが、いまの金十郎の全身に燃えあがってきていた。
医者も呼ばず、太次郎のする手当だけでは、

（助からねえかな……？）

一時は、そうおもったこともあったが、

（どうしても助かりたい……そして、この首が胴をはなれても、大倉の野郎へ飛びつき、やつの喉笛を噛み切ってくれる）

この飯田金十郎の執念というものは、前に金ずくで人斬りをやっていたときとは別のものだ。

いまの金十郎の生きる目的は、大倉守の暗殺成功へ、ひたむきにかけられている。

「とにかく、ここを出たい」

と、金十郎が太次郎へもらすと、

「まだ、じゅうぶんに癒ってはいない」

「かまわん」

「ま、お前さまの躰は、なかなかに丈夫やから、あまりむりをせずに行くのなら……」

「おう、そうする。ながい間、いろいろと世話になった」

「あずかった金を……」

「いや、それはいらん」

「いらんことはないがな。もって行きなされ。そのかわり、半分はわしがもろておく」

「みんな、やるよ」
「半分でええ。わしも、少しは儲けたによって……」
「そうか……では、五両だけくれ。ともかく旅をしなければならんのだから……」
「五両でええのか!?」
「いいとも」
小刀は太次郎にあたえ、大刀のみを菰包みにし、ほかの荷物と共に背負い、金十郎は百姓の旅姿になった。
あたまに傷を受けてはいたが、顔面は無傷である。
躰に四か所の傷は、もう肉があがりつつあるところで化膿の心配はない、と、太次郎がいってくれた。
近くの竹藪から、太次郎が切りとってくれた竹の杖をつき、飯田金十郎は、
「では、これで……」
「気をつけて行きなされ」
「身状も訊かず、名も訊かず、よくもいままで、親切にしてくれたな」
「なに、はじめにお前さまが二十両もの大金をあずけたから、世話する気になったのや」
「すまぬ。名をいうておこう。飯田金十郎という者だ」
「へい、へい……」

一礼し、竹藪を出て行き、細い畑道に立ちどまった金十郎が振り返ると、太次郎は、にこにこしながら手をあげて見送ってくれた。

じわり、金十郎の双眸がうるんだ。

かつて彼が見せたことのない泪であった。

さすがに金十郎も、人の情に胸を嚙まれたものと見える。

そして江戸では……。

新選組の〔甲陽鎮撫隊〕が、鍛冶橋内の仮本営から甲府へ向けて出発をした。

出発に先立ち、旧幕府の諸隊や、募集によってかきあつめた者を合せて、約二百余の隊編制であった。

近藤勇は、若年寄格というので、大名が乗るような長棒引戸の立派な駕籠へ乗り、土方歳三は陣羽織をつけて騎乗である。

いよいよ出陣の間ぎわに、同志たち二十名ほどが、どこかへ逃げてしまい、勇と土方のほかには原田・永倉・沖田・斎藤・尾形など二十一名が、京都以来の新選組ということになる。

出発にあたり、近藤勇は軍費の件で、幕府の勘定方・榎本対馬守へ面会をしたとき、榎本が、

「お躰は、もうよろしいのか？」

と、やさしく、

「京以来、近藤うじも御苦労つづきでござったな」
「はあ……」
勇は、なにか哀しげな微笑をうかべ、
「六年前に、かの浪士隊募集に応じ、京へ上りましたときには、もはや妻子の顔も見おさめとこころを決めて出たものでござるが……こうして、いのちびろいをして江戸へもどり、妻や子と食膳をかこむ時を得ますと、やはり、うれしいものです」
「当然でござろう。それが、人の情と申すものです」
「はあ……しかし、国家大変のとき、このような気持になるのは、われながら、恥かしくてなりません」
「いや……いかに文武に秀でたるものであろうと、人の情を解せぬものは、禽獣同様でござろう」
「恐縮です」
榎本も勇も、徳川の世が音をたててくずれてゆくのを本能的に感じている。
それでいて勇は、もと新選組・総長としての〔過去〕を、ずっしりと背負っている。
この荷物は重い。きびしい重味であった。
この重い荷を捨て切れなかった人びとは、いやでも、徳川の栄光を、消えかかる残照の中に、ひたすら追いもとめてゆくことになる。

挽歌

一

〔甲陽鎮撫隊〕には、浅草の乞食頭・弾左衛門から手下の乞食や人足たちを差し出させたり、食いはぐれの浪人たちもふくまれて、とうてい一個の軍隊とはおもえない。

江戸を出て、一行が府中へ着くと、

「いよいよ出陣か。ともあれ、今夜は府中へ泊って下され」

府中に住む医者で、粕谷良順が、近藤勇を迎え、

「みなも、あなたのお顔をひと目なりともと、昨夜からあつまっておりましてな」

と、いう。

粕谷医師は、土方歳三の実兄である。

勇の生家がある上石原からも縁類の人びとや村人たちがつめかけて来ていて、大層な歓迎をうけた。

次の日は、日野へ入った。

日野では、これも土方の義兄・佐藤彦五郎が名主をつとめている。

ここでも大歓迎である。

郷土から出た近藤、土方が、いまは〔大名〕に準ずる身分と格式をあたえられ、一軍をひきいて出陣の途上に立ち寄ったというので、

「われわれも近藤先生のお供をして、甲府へ行こう！」

「土方先生と一緒に戦おう!!」

若者たちは興奮し、刀や槍を持ち出しては、ぞくぞくと佐藤邸へあつまって来る。

「ま、身分も若年寄格となったので、名前も、徳川家譜代の功臣であった大久保姓を名のることをゆるされましてな。このたび、大久保大和と名をあらためました」

近藤勇、このごろにしては、めずらしく酒杯を手に、佐藤彦五郎へ語った。

得意げにも見えぬことはない。

〔官軍〕は、まだ江戸に迫っていないし、まだまだ旧幕府の勢力と体制が、尾を引いて関東に残存している。

昭和の大戦のとき、終戦敗北の昭和二十年の春ごろまでは、何も知らぬ国民は日本の勝利を信じきっていたし、劇場では映画も芝居もやっていたものだが、それと同じようなものであったのだろう。

（まだ、まだ、やれる！）

勇も、甲府城へ乗り込むわが〔鎮撫隊〕に期待せざるを得ない。

しかし彼らは、江戸を出発して三日もたっているのに、まだ江戸の近くを、のんびりと進んでいたのである。

また一つには、寄せ集めの部隊だけに、出陣の景気を煽りたてて士気を高めようという気持でもあったのだろう。

勇は辞退をしたが、

「どうしても、行を共にしたい」

と、佐藤彦五郎の肝煎りで〔春日隊〕というものが一夜のうちにできた。

これは、勇の郷土の人びとがあつまり〔鎮撫隊〕のため、兵糧の調達や武器の運搬を引きうけようという、つまり〔輜重隊〕のような役目を、

「させてもらいたい!!」

というのである。

勇も土方も、この申し出を非常に心強くおもった。

「では、よろしくたのむ。この一戦に勝てば、諸君の将来についても、近藤、しかと引きうけよう」

ま、こういうより仕方がない。

翌四日。

鎮撫隊一行が、ふり出した雪の中を、ようやくに笹子峠を越え、駒飼の宿へ着いたところへ、

「官軍の東山道先鋒・約三千名が、板垣退助の指揮のもとに、甲府城へ入った」

という知らせが入った。

「しまった!!」

叫んだが、すでにおそい。おそすぎる。

たった一日ちがいで、敵軍のほうが先に甲府を占領してしまったわけだ。

江戸から甲府まで三十六里。

強行軍をもってすれば、一昨日の夜には、甲府城へ入ることを得ていたろう。

また甲府でも、城代・佐藤駿河守は、

「近藤うじは何をしているのだ」

と、待ちこがれていたのである。

甲陽鎮撫隊が来てくれるなら、佐藤駿河守も、城に立てこもって一戦を辞さぬ決意であったのだ。

官軍の使者がやって来て、城の明けわたしをせまっても、駿河守はたくみにいいのがれ、いいくるめ、一日に江戸を発したという鎮撫隊をじりじりしながら待っていたのだが、三千の官軍に包囲されてしまっては、どうにもならぬ。

ついに、城を明けわたしてしまった。

「急げ！」

鎮撫隊も必死で、勝沼まで急行したが、ここでまた、

「官軍は、後続の土佐・因州・松代の藩兵も加わり、全軍、甲府へ入った」

ことがわかった。

甲府まで、あと四里。

「これでは、とても勝味はない」

見きわめたやつども三十名ほどが、隊を脱け出し、どこかへ逃げてしまう。

「近藤さんも土方も、どうかしているのではねえか」

原田佐之助が、げっそりとして、永倉新八に、

「手前らの故郷へ立ち寄って、いい気になって、のんびり酒をのんだり大気焔をあげたり……その間に敵さんが城を乗っ取っちまった。はなしにも何もなりゃあしねえ」

「ふ、ふふ……」

「何が、おかしい!?」

「原田。お前さんも一緒になって酒をのんでいたじゃないか」

「けっ……勝手にしやがれ」

「ま、こうしたものさ。負け犬の勘は、にぶってくるものだよ」

土方歳三は、すぐに馬へ飛び乗り、神奈川にいる元旗本部隊の菜ッ葉隊へ救援をもとめに駆け去って行った。

永倉新八あらため杉村義衛翁が、後年に、こう語っている。

「ああしたとき、いざ、すべてのものが眼前へ、はっきりとあらわれてくるのを見るまでは、人間の眼も利かなくなっているものなのですねえ。勝沼まで来て、いかに、われわれが甘かったか……そりゃもう愕然としたもんです。官軍の方は、すっかり戦

さ仕度をととのえ、どしどしと、勝沼にいるわれわれへ向って押し出して来る。大砲や鉄砲で、そりゃもう、まるでつるべ撃ちというやつでしてな。近藤さんも真青になり、あたりの百姓たちをあつめて……徳川家のおんためにはたらくものは、御挽回(ごばんかい)の後、かならず恩賞いたす、なぞとよびかけたり、いやもう必死でしたよ。あつまって来たものもいるが、それより逃げ出す者のほうが多い。五日、六日と戦いましたが……とても勝てっこはありません。

近藤さんは、鎖帷子(くさりかたびら)を着込み、久しぶりに武装姿で、戦場を駆けまわりましたが、さすがに堂々たるものだった……しかし、とにかく駄目です。もう、それこそ散り散りになって、江戸へ逃げ帰りましたのです。神奈川へ飛んだ土方さんも消息不明だし、さすがの近藤さんもがっくりときて……」

勇は、そのとき永倉に、

「これではもう、挽回も出来ぬなあ。会津へ行って、前守護職の会津侯の下で討死をするより手段(て)はなくなったようだ」

と、いった。

江戸へ帰って来ると、がらり、様相は変っていた。

東海道を進んで来た官軍本営は、すでに江戸を包囲し、これを迎えた〔徳川終戦内閣〕の総理ともいうべき勝安房守は、官軍総参謀・西郷吉之助へはたらきかけ、江戸を無血開城するための会談をすませている。

徳川家としては……。

一　旧幕臣の抵抗をいっさい、みとめぬ。
一　前将軍・慶喜を水戸へ退隠させる。
一　だから官軍も、戦火の惨劇を江戸にあたえぬよう願いたい。

西郷は、すべてを勝にまかせ、みずから、京都へ駆けもどり、徳川慶喜謝罪のむねをつたえた。

こうした事情の裏側には、現代に至って尚、判然とせぬ複雑なかけひきや事件がいくつも起っては消え、この日本の内乱へつけこもうとする外国勢力のうごきも予断をゆるさなかった。

だが結局は、勝と西郷によってむすばれた一線が、たとえ、イギリスやフランスへはたらきかけることがあっても、断然、異国の権力が日本の領土を侵すことを、

「ゆるすまい!!」

とすることで一致を見た、といえる。

この〔内乱〕を一日も早く、日本人だけで、しめくくりをつけようというのだ。

「もう、江戸は駄目だねえ」

本所二ツ目にある大久保主膳正という旗本の屋敷を、とりあえず〔宿所〕として、

甲州から逃げ帰った元新選組残党が約十名。
「おれは、会津へ行くよ」
永倉新八が原田佐之助に、そういった。
「それにしても、近藤さんは、どうしているのだ。まだ、江戸へは帰っていないのか」
「土方先生も菜ッ葉隊を迎えに出て、あれっきりですな」
がやがやしているうちに、
「近藤氏がもどられた」
と、旧幕府医学所の松本良順から知らせがきた。

二

大坂から帰ってすぐに、鉄砲傷の治療をするため入院していた医学所へ、近藤勇がたどりついて間もなく、土方歳三も、ここへ帰って来たのである。
つい半月ほど前、甲州へ出発するときとは全く状態が変った。何しろ、官軍が江戸へ押しつめて来ているのだ。江戸城の接収は、まだおこなわれていないが、それも間近いとのことだし、新選組残党もうかうかとしてはいられない。
やがて——官軍の〔本軍〕ともいうべき東海道先鋒軍は、三月二十六日に、その先鋒部隊を江戸へ入らしめ、芝・増上寺へ駐屯せしめることになる。

甲州で、近藤勇の〔甲陽鎮撫隊〕を撃破した東山道の官軍は、十四日から十八日にかけて、四谷新宿から市ケ谷。さらに板橋駅を押えたし、北陸道をまわって来た官軍部隊は千住を扼し、ほとんど江戸市中は官軍の包囲網につつみこまれてしまっている。

しかし、旧幕臣らをあつめた〔彰義隊〕は、前将軍・慶喜が蟄居している上野山内を守護し、江戸市中を警備するという名目をもって、官軍に対抗しつつあった。総数約千五百といわれる。

あくまでも、天皇と官軍に対して恭順しようという前将軍や〔徳川終戦内閣〕にとっては、実にめいわくな存在であったろうが、去年の〔大政奉還〕以来のいきさつをかえりみれば、彼らの行動もむりとはいえぬ。

旧幕臣で、剣名を世にうたわれた〔遊撃隊〕の伊庭八郎が、こういっている。

「一滴の血も流さずに、三百年におよんだ天下の権を、将軍家みずからが一夜のうちに、いさぎよく手放したのだ。こいつは、いまだかつて、日本国にも外国にもなかったことではないか。こんなに新しいことはない、こんなに思いきったことはない。それもこれも、これ以上に無益な戦争をして血をながし、国土を荒らすことを将軍がおそれにおそれたからだ。くだくだしい事情や理屈はどうでもいい。かたちにあらわれたことは、この一事につきる。薩摩も長州も、よく政事の大権を手放してくれた。われわれも共にちからを合せ、国事にはたらこう……と、こういってくれてこそ、新しい世も生まれ、人も生まれよう。ところがどうだ。薩長めら、官軍の名をほしいまま

に分捕って、あくまでも徳川の息の根をとめなくては安心をしてねむれねえ。むりやりに、こっちを戦さに引きずりこみ、牙を鳴らして飛びかかってきたものだ。何が勤王だといいたい。こいつはつまり、織田・豊臣のころの天下とりと同じようなもんです。前将軍の死一等を減じたのみで、徳川の家来も領地もめちゃめちゃにふみにじらなくてはおさまらねえという……そのままに、こっちが平つくばり、ぺこぺことあたまを下げてしまったのでは、後世、徳川家や将軍のしたことが、みんな悪事のみ、ということにされてしまう。だから、私どもは戦うのですよ。これを微衷というのだ。つまり、人としての誠をつくすことだ」

伊庭八郎のみならず、いま東北の諸藩をあつめ、会津・若松の居城へたてこもった前京都守護職・松平容保の心境にしても、

「薩摩や長州を相手にするのではない。あくまでも天皇と朝廷に、われらのこころを知ってもらいたい」

のである。

さらに……。

旧幕府の海軍も、軍艦頭・榎本武揚の指揮下にあり、表面は、官軍に服従のかたちをとっているけれども、江戸湾へ集結した軍艦七隻、榎本の命令があれば、いつでも錨をあげて海上へ脱出するつもりなのである。

まだ、戦う場所は、いくらもあるのだ。

「とにかく、江戸を出なくてはならん」

と、土方歳三はいった。

となれば……。

江戸以西は、すでに官軍の勢力範囲であるから、どうしても、江戸の東から北へ、まだ旧幕府のちからが温存されている土地へ移らねばならぬ。

いざとなれば、会津が、最後の抵抗地帯になるであろう。

土方は、

「下総の流山へ移ろう」

と、いい出した。

永倉新八も原田佐之助も、こうなって来ると、近藤・土方のいうままにはならなくなってきている。

近藤勇は、甲州の敗戦以来、必死懸命に神経を張りつめている。

とにかく、いまのところ、京都以来の同志といえば、土方・永倉・原田ほか四、五名だけになってしまっている。

沖田総司は、江戸へもどって以来、持病の肺患が悪化し、甲州へも出陣しなかったし、いまは、知り合いの千駄ヶ谷にある植木屋の一間へかくれ、病床に臥している始末であった。

土方はさておき、永倉や原田たちに軽視されたくないという気持で一杯になり、こ

とごとに反発をしてくる二人へ、近藤勇が、
「何事にも、わしの采配に従ってもらいたい」
胸をそらして叱りつければつけるほど、永倉も原田も、
（いまさら何を威張り出すのだ、ばかばかしい。近藤さんもどうかしている）
露骨に不快の色を顔に出し、
「われわれは、近藤さんの家来ではない。同志です」
などと、いい出す。
「だまれ。総長のわしを差しおいて、身勝手なまねはゆるさん」
「身勝手もへちまもない、よせあつめの三十人ほどで何が出来るというのです。あなたが、そう申されるなら、もはや、これまでです」
「永倉。そりゃ、どういうことか!!」
「われわれは、われわれだけでやります」
ついに、永倉新八と原田佐之助が席を蹴って帰ってしまった。
勇は顔面蒼白、大刀をつかみかけたが、舌うちを鳴らして思いとどまり、
「勝手にせい!!」
出て行く二人の背へ声を投げつけるのが、精一杯のところであった。
近藤勇も、こうなっては土方歳三の意見を採らざるを得ない。
「よし。流山へ行こう」

こういったとき、勇の痩せこけた顔貌には、それまでのとげとげしい憔悴の色がうそのように消え、むりやりにも肩をそびやかし、威厳のかたちを失うまいとしていた姿勢も、急に、弱々しく萎えて、

「歳さん……」

突出した頬骨の下へ、試衛館のころのような笑くぼを見せ、

「どこへ行っても同じことだものな」

「総長……」

「やろう。やれるだけは……」

土方歳三は、もうこたえなかった。

どうにか、砲三門と小銃四百挺ほどを旧幕府の武器庫から引き出し、軍費も貰った。

〔徳川終戦内閣〕としては、終戦処理の邪魔になるような旧新選組の連中などは、

「一日も早く、江戸から出て行ってもらいたい」

ところであったから、土方歳三の交渉に応じたものであろう。

江戸を発ち、流山へ向おうとする前日の午後……。

二日ほど降りつづいた雨の絶え間に、牛込・二十騎町の留守宅で、勇の妻・つねが台所で洗いものをしていると、

「おい……」

勝手口の窓から、ちらと勇の顔がのぞいた。

「あれ……」
「瓊子は？」
「勇五郎と市ヶ谷八幡へ参詣にまいりました。あなた、さ、早う、おあがりあそばして……」
「うむ……」
編笠を片手に、勇が、ふらりと勝手口から台所の土間へ入って来た。
「あ、あなた……」
「みな、変りもないか」
「は、はい」
つねも、甲州での敗戦を勇五郎からきいている。
「さ、おあがりあそばして……」
「そうしてもおられぬ。ちょいと、用事のついでに、立ち寄ったのだ。今日は急ぐ。近いうちに、また来る」
「で、でも……」
「ま、いい。茶をくれんか」
「はい、はい……」
「つね……」
「は……？」

「お前は、やせたな。どうしたのだ、いかぬぞ、気をつけてくれぬと……」
「あの、肩の傷は……」
「お……この鉄砲傷か。あたたかくなってから、ずっとよい。肉もあがりきってな。それでも親ゆびがめりこむほどの穴ができたよ」
「ともあれ、おあがりあそばして……」
夕闇の中で、夫の顔がはっきりと見えぬのに、つねは茶をいれながら苛らだっている。
「あ、あの……」
「茶をくれい」
「はい」
「む……ああ……うまいな」
「あなた……」
「この家をな、なるべく早く始末をしてしまうがよい。宮川（近藤の実家）へ相談してもいいし、寺尾か福田に万事まかせてもよい」
寺尾・福田は勇の旧門人で、何かと留守宅のことに気をつかってくれている。
つねにも、夫のいわんとすることがよくわかった。
二十騎町のこの家は、官軍にとっては賊軍の将の一人ともいうべき近藤勇の留守宅なのである。

勇は、自分が流山へ去った後、妻子に危険がおよぶことを考えて、
「家の始末をするように……」
と、いったものであろう。
「このごろは、よく雨がふるな」
茶わんを置き、勇が、
「三日と晴れたためしがない」
「はい」
つねが立ちかけた。酒の仕度をするつもりであった。
酒の仕度をして、勇を座敷へあげるつもりであった。すぐに、それと感じて、
「つね。また来る」
勇が立った。
「まことでございますか？」
「来るさ、きっと来る」
「でも、あの……瓊子も、勇五郎も間もなく……」
「市ヶ谷八幡へ……？」
「あなたの御武運を……」
「そうか」
つねがとめる隙をあたえず、編笠を取った勇が、すっと立ち上ったかと思うと、も

う、勝手口の外へ出ていた。

「あっ……」

つねは、狼狽し、外へ走り出ようとした。

「かまうな。すぐに、また来る」

「あ、あなた……」

はだしで走り出たとき、勇は植込みの向うの枝折戸を開け、小さな門から出て行ってしまっていたのである。

この夕暮れの一時が、近藤夫婦の永別となった。

翌早朝……まだ暗いうちに、勇は江戸を発し、流山へ向った。

土方歳三は先発し、本営の準備にかかっている筈だし、砲三門その他の武器も分散して運び出している。

勇は騎乗で、野村利三郎ほか三名ほどをつれたのみであったという。

三

下総・流山は、江戸から七里余。

現在の千葉県・東葛飾郡・流山町である。

この町は、むかしから野田と共に、醤油や味醂の産地として名高い。

勇が流山へ着いて見ると、土方のはたらきもあって、江戸を脱出した旧幕臣や浪人

たちなぞもふくめ、百数十名（百名にみたなかったともいわれる）の一隊が編制されていた。

流山の大百姓の家が、本陣であった。

ここへ着いてからの近藤勇は、母屋の奥庭に面した部屋へこもったきり、すべてを土方歳三の手にゆだねた。

黙念として、毎日のように縁側へすわりこみ、晩春のみどりがしたたるような木や草をながめているのみであった。

土方は土方で、戦備に忙殺されているとはいえ、勇と顔を合せても、めったに口をきこうとはしない。

若い野村利三郎が心配をして、勇に、

「総長、土方先生と何かあったのですか？」

問うや、勇はほろ苦く笑って、

「向うもこっちも、たがいに、たがいの胸の底へふれたくないのだろうよ」

と、いった。

それでいて、流山へ来てからの勇には、敗走以来の悲痛な影が消え、わびしげではあったけれど、これまで背負いつづけてきた重い、きびしい荷物を、さばさばと放り捨てたかのような解放感が顔の表情にも挙動にもただよっているのである。

野村、今度は土方に、

「先生。総長は妙ですな？」
「そうかね」
「そう思われませんか」
「もう、近藤さんには戦意がないのさ」
土方は吐き捨てるようにいったが、
「しかし……私は、近藤さんの死場所を見つけてやりたい。そのことに、私のいのちをかけるつもりだ」
旧幕臣が、下総・上総へかけて脱出して来るので、土方は何とか、これらの人びとをあつめ、流山に勢力を結集せしめたい。
近藤勇が諦観の色の濃さを増すにつれ、土方歳三はあくまでも抗戦の闘志に燃えたつ。
だが……。
流山の臨戦体制がととのわぬうちに、早くも危急は迫った。
上野・下野の諸藩を平定し、武州・熊ヶ谷を経て板橋へ本陣をかまえている東山道・官軍の先鋒部隊三百が、流山から七里ほどはなれた粕壁へ進出して来た。
この官軍部隊をひきいるのは薩摩藩の有馬藤太である。
すでに彼は、近藤勇が流山に兵をあつめていることを探知していた。
粕壁へ出て一泊するや、有馬は俄然、兵をひきいて反転し、古利根川をわたり、北

葛飾の平地を、一挙に流山へ肉迫した。
「来た!!」
流山の町外れから江戸川の堤一帯を警戒していた番兵が、散開してせまる官軍を見つけて発砲しはじめる。
「歳さん、歳さん」
奥庭で、勇の声がする。
土方は、敵情の報告をうけていたが、すぐに、奥庭へ走りこんで行った。
「来たな」
「五、六百らしい」
「勝てるか。勝てまい?」
土方は口惜しげに唇をかむ。
まだこちらの戦備はととのっていない。
現に、銃声がしたら、三十名ほどが泡をくらって逃げてしまったようである。
「無理のようだね」
勇が、さびしげに微笑をし、
「よし」
と、いった。
「え……?」

「おれが、向うの本陣へ行ってみよう」
「ばかな。とんでもない」
「談合をしてくる。こっちは旧幕臣が、このあたりを警備しているだけのことだといえばよいさ」
「そんな……そんな甘いことが、やつらに、通用するものかどうか、京以来、さんざわかっている筈ではありませんか」
「ま、いい」
「よして下さい。行ったらいかん」
「歳さん。とめても行くよ」
勇は、さっさと身仕度をして、兵二人をつれ、本陣を出てしまったものだ。
「畜生……」
土方はわめき、すぐに兵をあつめ、みずからこれをひきい、勇の後方をまもった。いざとなったら、すぐに勇を援いに出るつもりであった。
官軍の本陣は、小谷堀とよばれる田地の小さな農家である。
ここへ、勇が兵二人をつれて乗りこんで来た。
隊長・有馬藤太はすぐに、
(近藤勇だ)
と、看破したが、

「大久保大和でござる」
名のった近藤勇へ、笑いかけて、
「何御用ごわす!?」
ものやわらかにきいた。
有馬の傍にいた副隊長格の香川敬三。これは水戸出身で、のちに土佐藩の陸援隊へ入った人物であった。
土佐藩では、いまだに坂本龍馬・中岡慎太郎（陸援隊長）暗殺の犯人を〔新選組〕と信じきっている。
それだけに、香川は、憎悪をこめたすさまじい視線を近藤勇へ投げつけていた。
そこへ行くと、薩摩藩は、つい二年前まで、徳川幕府と共に長州藩を追いのけようとしていたのだし、革命前夜の動乱期にも、もっとも犠牲が少なかっただけに、旧幕臣へ対しての余裕がある。勇が、先刻の応戦発砲のことをわびると、有馬藤太は、
「錦旗に対しての余裕がある。勇が、先刻の応戦発砲のことをわびると、有馬藤太は、
「錦旗に対したてまつり、発砲したのは、まさにゆるせぬ。なれど、こなたを官軍と知らずに発砲したと申されるか？」
「いかにも。不とどきの段々、まことに申しわけもござらぬ」
「大久保殿とか申されましたな」
「は――」
「ともあれ、一応は軍律によって貴公を問い糺さねばならん。粕壁の本営まで同道さ

れたい」
　すると言下に、勇がいった。
「承知いたした。なれど、後始末もあれば、しばらく御待ちねがいたい」
「よろしい」
　香川が憤然として何かいいかけるのへ、有馬が、
「隊長は、おいどんでごわす」
　ぴしりときめつけてしまった。
　勇は、いささかも悪びれず、悠々として、また流山の本陣へもどって来た。
「歳さん。もう、いかぬぜ」
「え……？」
「どっちみち、勝てないよ」
　すると土方が、
「もう、ここに残っているものは五十人ほどになってしまいましたよ」
「逃足も速いのだなあ、こっちは……」
「さ、われわれも逃げましょう」
「おれが逃げたら、追って来る」
「大丈夫だ。何とかなる」
「おれは逃げないよ」

「何ですと」
「もう、逃げるのはあきあきした」
「勇さん……」
「歳三。万事、ここで終りだ。おれはおれの好きにする。お前も好きにしてくれ」
近藤勇が、するどく、きめつけるようにいい、
「歳さんは、どこまでも戦うつもりなのだろう。それなら早く逃げろ。おれが時をかせぐ」
「あんたに時をかせいでもらいたくなぞ、ない、ない」
土方が、わめいて、勇の腕をつかむと、
「よせ」
勇は、ぱっとこれを振りはらい、
「いまさら、おれの気持がわからぬお前でもあるまい」
事もなげにいった。
京都以来、冷静無情の姿勢をくずさず、どちらかといえば情にもろい勇を引きずっていたかたちの土方歳三が、いま、両眼に熱涙をたたえ、勇に脱出をすすめ、たのんでいる。
それに反し、近藤勇は感情の激発もなく、淡々と、しかも断乎として、ここに居残ろうとしている。

「よせ。むだだよ」

静かに、土方のすすめを突放すその声に、ことばも絶えて青ざめた土方歳三が、ついにうなだれてしまったものだ。

四

夕暮れになってから、官軍の本陣へ、砲三門・小銃三百が、流山の百姓たちによってとどけられたけれども、近藤勇はあらわれない。

さすがにたまりかねて、有馬藤太が兵二名をつれて流山へ乗りこんで行くと、人影もない本陣で、近藤勇が四人ほどの部下に手つだわせ、身仕度をしているところであった。

すでに、土方歳三は同志数名と共に、流山を脱出している。

そのときにはもう、寄せあつめの兵たちは、好き勝手に逃げてしまっていたのだ。

「いや、お待たせしました」

勇は、亀綾の袷に黒紋付の羽織。きちんと袴をつけ、威儀を正して、うす暗い奥の間からあらわれた。

この亀綾の着物は、つねが手ぬいのもので、文久三年の春に〔浪士隊〕の一員として、勇が、はじめて京へのぼったとき、身につけていたものである。

そのときの〔初一念〕を忘れぬようにと、勇は、京へ行ってからも、京から逃げ帰

るときにも、この着物を手ばなさなかった。

むろん、つねへの愛情を絶えず、この亀綾の着物に感じていたかったからでもあろう。

野村利三郎と相馬主計の二人が、勇の乗った馬の両傍につきそい、官軍部隊と共に、粕壁へ到着したのは真夜中であった。

ここで、野村と相馬は勇に別れた。

有馬藤太が大正十二年になってから、こう語りのこしている。

「……翌朝。本営の前に網張りの罪人駕籠が出ている。香川敬三がやったことよ。わしは、近藤は一軍の大将である。士を遇するの道を知らんやつだ……と、香川にこういってな。すぐに網を除かせ、煙草盆や茶湯などを駕籠に入れたよ」

この駕籠に乗せられ、近藤勇は、間道づたいに、板橋の本営へ送られた。

有馬藤太は、勇の風格にすっかり魅せられ、板橋本営の参謀・伊地知正治へ宛てて、

「……大久保大和と名のっているが、まさに近藤勇と存ぜられる。実に立派な人物ゆえ、待遇もそれ相応にしていただきたい。また、近藤についての処分いっさい、自分にまかせてほしい」

と、手紙をつけてやっている。

有馬は、近藤を送り出してのち、当初の目的である宇都宮へ兵をすすめた。

ところが……。

有馬藤太は、宇都宮の戦争で重傷をうけ、横浜の病院へ後送されてしまったのである。

この隙に、例の香川敬三が、土佐の大軍監・谷守部と協力し、なんとしても、

「近藤勇の首をはねよ!!」

というので、ばたばたと事をはこんでしまった。

子母沢寛不朽の名著〔新選組始末記〕に、有馬藤太の語りのこしが、次のようにのせられている。

……拙者は、そのとき三十二歳。近藤は三十五歳であった。香川の奴は近藤の首をとった上に、それにあきたらず、塩づけにして京都へ送り、三条河原に晒した。実に、くやしいことであった。どうせ殺すなら拙者の手にかけてやりたかった。武士の情けさえ知らぬ香川ごときに殺られたのは、なんとしても心残りでたまらぬ。奥羽平定後に、拙者は香川に会ったから、

「なぜ、貴様は近藤を殺したんだ」

と、怒鳴ってやったら、

「近藤を生かして置くと、それを監視するために、莫大な兵力を要するから、仕方なく斬った」

という。拙者はむかむかして、

「馬鹿！」

といったきり、その後は、いかなる場合でも、再び彼とは口もきいたことはない。

（中略）近藤は敵であったが、徳川氏にとっては非常な忠臣じゃ。その上、彼は断じて皇室に鋒を向けるものではない。しかも神妙に降服している。地を換えて考えれば、決して憎むべき人物ではないのじゃ。中村半次郎（桐野利秋）や野津兄弟（後の鎮雄・道貫）なども、

「乃公等がいたら、決して殺させるんじゃなかった。立派な人物を惜しいことをした」

といって、非常に惜しんだ。近藤という人物は一種の英傑で、拙者はたしかに、大鳥圭介以上の人物であったと思う。

有馬は初対面のときから、よほどに勇へ好感を抱いていたものとみえる。

勇は、約二十日間。板橋の官軍本営において厳重な取調べをうけた。

有馬藤太の〔語りのこし〕にもあるように、官軍首脳部の中で、近藤勇の処分につき、連日のように激論が反復された。

薩藩・参謀の伊地知正治は、有馬から手紙をもらっていることだし、なんとか、この場では処刑をおこなわず、いったん京都へ護送しておいて、ゆっくり始末をつけたい。

ところが、土佐藩から出ている大軍監の谷守部を中心とする土佐派は是非にも、勇の首をはねてしまいたいのである。

京都以来、池田屋事件をはじめとして、土佐藩は新選組と宿命的な闘争をくり返してきているし、おまけに坂本龍馬暗殺の一件に強くこだわっているから、断じて勇をゆるすまいとした。

その背後には、官軍内部の各勢力が主導権を争う政治的な事情もあって、勝安房など旧幕臣と薩摩藩の〔平和的〕な秘密協定に神経をとがらせている土佐派の〔いらだち〕と怒りが内蔵されている。

それだけに、薩摩藩としても近藤勇一個のことから、官軍内部の確執が大きく波紋をひろげることをおそれた。

過激な土佐の主張に、薩摩がついに、ゆずった。

大軍監・谷守部は、

「我輩の苦心、少なからず」

と、いっている。

この谷守部、のちに谷干城（たてき）となって、西南戦争では、薩摩軍の東上を熊本城に迎え撃って、熊本を死守した。薩摩へ対する彼の敵愾（てきがい）は、十年後のそのとき、はなばなしく結実をとげたわけである。

近藤勇・断罪の処分書は次のごとくだ。

「右の者、元来浮浪の者にて、初め在京新選組の頭をつとめ、後に江戸に住居いたし、大久保大和と変名し、甲州並下総流山において官軍に手向ひいたし、或は徳川の内命を承り候といつはり唱へ、容易ならざる企および候段、上は朝廷、下は徳川の名をいつはり候次第、その罪、数ふるに暇あらず、よつて死刑に行ひ梟首せしむるものなり」

勇は、どこまでも大久保大和で通そうとしたが（初めにそう名のったからだし、事実、彼は大久保大和に改名していたのだから、そう名のりつづけたにすぎない）板橋の本営に、故伊東甲子太郎一派で油小路の決闘に九死に一生を得て逃げ終せた加納道之助が官軍の一員として参加しており、

「近藤うじ。めずらしいところで……」

と、声をかけた。

勇は、加納を見てにやりとしただけだが、加納は後に、

「いやもう、その時の近藤の顔色は今に目につくようで、はなはだ恐怖の姿でありました」

なぞといっている。

恐怖も何もない。勇は流山で捕えられたとき、すでに辞世をつくっている。

孤軍援絶作二俘囚一　顧二念君恩一涙更流

一片丹衷能殉レ節　　睢陽千古是吾儕

靡レ他今日復何言　　取レ義捨レ生吾所レ尊

快受電光三尺劍　　只将ニ一死一報ニ君恩一

四月四日

五

慶応四年四月二十五日。

近藤勇は、板橋宿の問屋場から山駕籠に乗せられ、三十名の鉄砲隊に警備され、板橋の刑場へ向った。

昼、少し前である。

前夜までは雨つづきでいたのが、この日、早朝からめずらしい晴天となった。

官軍は処刑にあたって、ま新しい衣服を勇にあたえようとしたが、

「いや、これで結構です」

妻つねが手ぬいの、あの亀綾の袷を着たままで、山駕籠へ乗った。

これを、勇の養子・勇五郎が見た。

これまでに数度、彼は勇の顔をひと目でも見たいとおもい、板橋へ足をはこんで来ていたが、この日、偶然に、勇が問屋場から刑場へ護送されるところへ出会ったもの

である。

「あっ……」

低く叫んだが、厳重な官軍鉄砲隊が山駕籠のまわりをかためているので近よることは出来ない。

勇は、瞑目していた。

土方歳三の顔が、永倉新八、井上源三郎、沖田総司の……そして、鳥羽伏見の戦闘で行方不明となった近藤周平の顔が、次々に脳裡をよぎってゆく。

ふしぎに、京でなじんだ女たちの顔がおもいうかばず、櫟林にかこまれた刑場の原へはこびこまれたときには、つねと瓊子の顔のみが、勇の全身を領していた。

「出ませい!!」

官軍の士官が大仰な声をかける。

出て、晴れわたった初夏の空を仰いで、勇が、

「恐れいるが……」

「何か？」

「髭を、あたっていただきたいのですが……」

「ひげ？」

「さらし首になるのでしょうから、あまり、むさ苦しいのは……」

「なるほど」

うなずいた士官に呼ばれ、兵が一人、勇のそばへ来た。
勇は、首の穴が掘られた、その前の筵の上へきちんとすわり、兵の剃刀でひげをそってもらった。
勇五郎は、竹の柵の外で、他の見物人にまじり、ぶるぶるとふるえながら、これを見守っている。
もう一人、このときの勇に特別な関心をよせて、
「ふうむ……うう……ふむ、ふむ……」
かすかに、うなり声を発しつつ見守っている男がいた。
五十をこえた旅の乞食坊主である。笠の内の彼の顔は、まさに飯田金十郎であった。
金十郎はいま、木曾街道から甲州を経て、江戸へ着いたばかりの、その足で、官軍往来するこのあたりをさまよい、大倉守をさがしていたのだ。
いま、金十郎は大倉を討つことのみへ、余生をかけている。勇への執念は消え果てた。
（ふむ……やるなあ……）
淡々とひげをあたらせている、かつての宿敵の姿に胸をうたれ、金十郎はひざのあたりが小きざみにふるえてくるのを、どうしようもなかった。
（近藤も、おれも、この七年間に何をしたというんだろう。あれだけ血をながし、諸方を駆けずりまわってからに、とうとう、たった一つ身につけた剣術すらも、この世

に生かしきれなかったのだものなあ）

勇は、剃り終った顔をぬれ手ぬぐいでふき、茶わんの水をもらい、ゆっくりとのんだ。

「ながながと、厄介をかけました」

と、官軍の一人にあいさつする勇の声が、勇五郎にも飯田金十郎にも、はっきりときこえた。

介錯は、横倉喜惣次といって岡田藩から出ている剣士である。

もう一人、若い官軍が、これも抜刀して横倉のすぐうしろで身がまえている。もし横倉が斬り損じたら、すぐに自分が勇の首へ切りつけるつもりらしい。

中年の横倉喜惣次、これをちらと見て、苦笑をした。

いかにも、

（ばかな……おれが斬り損なうわけがないのに）

とでもいっているような微笑であった。

近藤勇が、その横倉の苦笑を見て、これもにっこりとした。安心をしたようである。

勇と横倉の眼と眼が合い、どちらからともなく、かるく頭を下げ合った。

「では……」

と、横倉が刀をかまえる。

うなずいた勇は、みずから髻をつかみあげ、穴の前へ首をさしのべていった。

飯田金十郎は、明治三十四年七月に、八十七歳で病歿した。

三十も若い女房と一緒に、三河島で小さな〔めしや〕をいとなんでいたそうである。

金十郎は死ぬ二年ほど前に、こう語りのこしている。

「大倉守は、その後、大そうな出世をしましたがね。ええもう、ほかの勤王方の人たちと同じように、えらそうな名前に変えて……というよりも、大倉守なぞという名からして怪しいものなので……え、私も御承知のようにすっかり名前を変えましたが、勝ち犬と負け犬では大へんな違いでございますよ。ま、その大倉が、その後、なんという名前となったか。その名前をきいたら、あなた方はおろか、びっくりする方々がたんといるのじゃあございませんか。私も、あれからずいぶんとあいつの後をつけまわして……やつがね。オランダ国から帰朝したときに、一度、横浜で切りつけたことがあります。やりそこないまして、もう無我夢中で逃げたもんだが……世の中はふしぎでございますねえ。その大倉、もう病死しちまって、この世にはいないので——そして、私のようなものが、こうやって、ま、のんびりささやかながら落ちついて暮している。夢を見ているような気持でございますよ……ええ、ええ。近藤さんのお墓まいりには、年に一度、かならず行きます。多摩の龍源寺へね。あそこには近藤さんの胴体が埋まっているそうです。首の行方は今もって、わからないのだそうで……」

「近藤勇白書」と池波正太郎さん

中　一彌（画家）

池波正太郎氏の小説に、挿絵を描くようになった最初が「近藤勇白書」です。

若い頃から私は仕事の速度が遅く、遅い方では一番か二番といわれていました。それが禍して、出版社から仕事を頼んでくるのが少ないわけです。それにサラリーマンとは違い収入が不定期なところへ、私には古書集めという甚だ金遣いの荒い趣味がありました。家計はめちゃめちゃの火の車でした。

「近藤勇白書」にはあまり関係がありませんが、話の順序としておゆるしください。

価値のある昔の書物を、古典籍と古書店などでは呼んでいますがやはり一種の骨董品です。したがって高価で、古地図も同じ扱いです。江戸時代の元禄古地図など、手で彩色をしてあり、赤黄緑が古色を帯びてなかなか味わいがあります。

昭和三十七年の春頃でしたが、江戸初期の寛文年間に出板された「江戸大絵図」が、有名な古書店の目録で売りに出ました。

華麗な金泥模様の表紙の保存も完好で、五枚並べれば江戸全体が分る稀覯江戸図でした。ところが値段を見ておどろき、百二十万と知ってはこれはどうにもなりません。

諦めざるを得ませんでしたが、そんな古書道楽が続いたのです。挿絵の力量も落ちていたでしょう。

或る通信社の社長に、借金を申し込んだことがありました。生活が苦しくなって家を売ってしまったこともありました。何処から洩れたのか、書誌学の先生が、挿絵画家がそんな有様なんて信じられない、と何かで書いていたそうです。

昭和四十一年頃です。田中君という若い記者が、一度、池波正太郎さんに会ってみませんかと声をかけてくれたのでした。

池波正太郎氏に初めて会ったのは、氏がお宅を新しく建て替えられる前の少し古風な家でだった。鰻めしをご馳走になりました。ご母堂が、「わたしが淹れたお茶はおいしいのですよ」と仰しゃる茶をいただいていると、池波氏がいきなり書斎から持ってきた雑誌を示して、「今度これに連載ものを書くんですよ、挿絵を描いてもらえませんか」と言われたのです。初対面で、これを聞いた私は、よく謂われるところの夢かとばかりの思いがしました。

「近藤勇白書」の挿絵を描いたのはそれから間もなくでした。池波氏も、ご自分の作品の場をじわじわと広げておられました。

「近藤勇白書」は大そう力作でした。

私は記憶力が怪しくなったのであまり憶えていないのですが、池波氏は女をうまく登場させて、場面に色気を加えるのが見事でした。女を書くのが上手でしたから、私

もだいぶ女性を研究しましたが、「近藤勇白書」の頃はスケッチを生のまま使ったような女を描いたと思います。女の色気は曲者で、現実の女性に色気を感じても、それを絵に伴って引き出すには頭の中に充分こなれた女がいなければなりません。

私は女性を描くのに、気に入った女性を捜しにバーやクラブへ足を運びました。大勢の中からでも選び出せないものです。ようやく選んで声を掛けますが、渋る女性に頼み込んで、たいていは喫茶店で昼間の客の少ない時間帯に二時間ばかりスケッチします。週に二回を繰り返し続けますが、面白いことがあるのです。私がスケッチした女性が、そのクラブでナンバーワンの売れっ子になっているのを聞いてちょっと驚きました。またどうぞスケッチなさってくださいと言っていると伝え聞いて満足感を覚えたりしました。

しかしながら、小説の中に出てくるような女性は、現実にはめったにいないものです。作家の頭の中での産物だからです。挿絵画家も頭で創る素になる女のイメージを、たくさん頭に養っておく必要があります。日常目につく女性の顔だけでなく肢体のすべてから動体に至るまで絶えず頭に取り込んで、道路でも乗り物でも退屈する間はありません。

池波正太郎氏も自分の書く江戸は、頭で創っていたでしょう。私が池波氏に言ったことがありました。あなたの書かれる江戸はあなたの江戸です。そのあなたの江戸で、あなたの創った人物たちが自由自在に動き回るのは愉快でしょう、などと言いました。

絵描きが面白いことを言うものだ、くらいに聞いておられたと思います。

小説に書かれるような江戸時代からの大きな道路は、今も同じ位置に残っています。江戸の地図と現代の地図を較べると、それがよく分ります。現在の大通りは車が重なるみたいにひしめき人も溢れていますが、銀座通りなど健在です。その上を煉瓦にしたこともあったり、アスファルトになったり舗装しただけなのです。

私は関西育ちながら、仕事が時代小説の挿絵描きですから、江戸の町の花街などに特に興味があります。遊廓吉原が、最初に出来たその跡を探訪したことがありました。現代の人形町の東側にあったのです。

明暦年間と言っていますから江戸の初期に、振袖火事という大火で、初めの吉原は焼けてしまったのです。それでも四十年間くらい大繁昌したようです。何といっても、庄司甚右衛門（元武士）が、幕府に願い出て許可され造った遊廓ですから、日本中に知れ渡って大変な人気があったと思われます。

初期吉原跡地の堀だと、私が勘違いした浜町川は埋め立て工事中でしたが、旧吉原の堀を埋めてしまうのは惜しいと、しばらく眺めていたものです。大火ののち復興して、新しく町家が出来、四つの町名が、住吉町、高砂町、難波町、新和泉町、と付けられました。探訪した私が、文字が変った浪花町の辺りをスケッチしながら歩いていると、偶然、三味線の音色が流れてきたのです。格子の窓下に佇みましたが、やはり遊廓の跡地は、江戸の色町を忘れないのに違いないと思いました。

「近藤勇白書」の頃と同じ町でお暮しになっている池波正太郎氏未亡人を訪ねることがあります。お元気なのでありがたいです。そして数刻ののち、挿絵風に描写しますと、ちょん髷の老人が、駕籠を呼んでもらって夕暮空の下、未亡人に別れを告げて帰途につくのです。

本書中には、今日の人権擁護の見地に照らして、不当・不適当と思われる語句や表現がありますが、著者が故人であること、作品発表時の時代的背景を考え合わせ、原文のままとしました。

近藤勇白書

池波正太郎



角川文庫 14192

昭和四十七年十一月 一日 初版発行
平成十八年 四月二十五日 改版初版発行

発行者——井上伸一郎
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話 編集(〇三)三二三八—八五五五
営業(〇三)三二三八—八五二一
〒一〇二—八一七七
振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八
印刷所——旭印刷 製本所——BBC
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Toyoko IKENAMI 1972 Printed in Japan

い 8-6 ISBN4-04-132332-0 C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫ベストセラー

人斬り半次郎（幕末編）（賊将編）
池波正太郎

鹿児島藩士から〈唐芋〉と蔑称される郷士の出ながら、西郷に愛され、人斬りの異名を高めてゆく中村半次郎の生涯を描く。

にっぽん怪盗伝
池波正太郎

闇から闇を風のように駆け抜ける男たち。江戸爛熟期の市井の風物と社会の中に、色と欲につかれた盗賊たちの数奇な運命を描いた傑作集。

堀部安兵衛（上）（下）
池波正太郎

「世に剣をとって進む時、安兵衛どのは短命であろう。……」果して、若い彼を襲う凶事と不運。青年中山安兵衛の苦悩と彷徨を描く長編。

近藤勇白書
池波正太郎

「誠」の旗の下に結集した幕末新選組の活躍の跡を克明にたどりながら、局長近藤勇の熱血と豊かな人情味を浮き彫りにする傑作長編小説。

戦国幻想曲
池波正太郎

渡辺勘兵衛――槍をとっては一騎当千。二十歳の初陣に抜群の武功をたてるが…。変転の生涯を送る武将「槍の勘兵衛」の夢と挫折を描く力作長編。

英雄にっぽん
池波正太郎

戦国の怪男児山中鹿之介は十六歳の折、敵の猛将を討ちとって勇名は諸国に轟いた。悲運の武将の波乱の生涯と人間像を描く傑作長編。

夜の戦士（上）川中島の巻（下）風雲の巻
池波正太郎

塚原卜伝の指南を受けた丸子笹之助は、武田信玄に仕官。信玄暗殺の密命を受けていたがその器量と人格に心服し、信玄のために身命を賭そうと誓う。

角川文庫ベストセラー

仇討ち	池波正太郎	父の仇を追って三十年。今は娼家に溺れる日々…。「うんぷてんぷ」はじめ、仇討ちの非人間性とそれに翻弄される人間の運命を描いた珠玉八編を収録。
江戸の暗黒街	池波正太郎	女に飛びかかった小平次は恐ろしい力で首をしめあげ、短刀で心の臓を一突きに。江戸の暗黒街でならす名うての殺し屋の今度の仕事は。
西郷隆盛	池波正太郎	近代日本の夜明けを告げる激動の時代、明治維新に偉大な役割を果たした西郷隆盛の足どりを克明に追い、人間像を浮き彫りにする。
炎の武士	池波正太郎	武田勢に包囲された三河国長篠城に落城の危機が迫る。悲劇の武士の生き様を描く表題作をはじめ「色」「北海の猟人」「ごろんぼ佐之助」の4編を収録。
男のリズム	池波正太郎	東京の下町に生まれ育ち、生きていることのきめ細かな喜びを暮らしの中に求めた作家、池波正太郎。男の生き方のノウハウを伝える好エッセイ集。
卜伝最後の旅	池波正太郎	諸国で真剣試合に勝利をおさめた剣豪・塚原卜伝。武田信玄の招きを受けて甲斐の国を訪れたのは七十三歳の老境に達した春だった。会心の傑作集。
戦国と幕末	池波正太郎	深い洞察と独自の史観から、「関ケ原と大坂落城」「忠臣蔵と堀部安兵衛」「新選組異聞」の三部構成で綴るエッセイ。変換期の人間の生き方に迫る。

角川文庫ベストセラー

侠客	池波正太郎	町奴として江戸町民の信望厚い長兵衛は、恩人である旗本・水野十郎左衛門との対決を迫られていた。幡随院長兵衛の波乱の生涯を描く時代巨編。
賊将	池波正太郎	西郷隆盛一筋に生きた桐野利秋を描く表題作の他、「応仁の乱」「刺客」「黒雲峠」「秘図」「将軍」の、直木賞受賞直前の力作、計6編を収めた珠玉短編集。
闇の狩人(上)(下)	池波正太郎	盗賊の小頭・弥平次は、記憶喪失の浪人・谷川弥太郎を刺客から救うが、その後、失った過去を探ろうとする二人に刺客の手がせまる。
忍者丹波大介	池波正太郎	秀吉死去で再び立ち込めた戦乱の暗雲。信義を失った甲賀忍びの荒廃に見切りをつけた丹波大介は、信ずる者のために生きようと決意した。傑作長編。
本能寺(上)	池宮彰一郎	強烈な美意識と凄まじいまでの発想が、旧体制の既得権一切を破壊し尽くす。時代を凌駕する天才信長の壮絶な精神に迫る画期的歴史長編。
本能寺(下)	池宮彰一郎	新時代の構想を模索する信長は、明智光秀こそ後継者と思い定める。しかし、その決断には時代と隔絶した天才ゆえの悲劇が……。
四十七人の刺客(上)	池宮彰一郎	公儀が下した理不尽な処断に抗して、大石内蔵助は吉良上野介暗殺を決意する。両者の息詰まる謀略戦を描き、忠臣蔵三百年の歴史に挑んだ傑作。

四十七人の刺客(下)

池宮彰一郎

侍は美しく生き、美しく死ぬもの——。これは、亡き殿の仇討ではない。侍の本分に殉じるための合戦だ。そして、未曾有の戦いが幕を開けた。

その日の吉良上野介

池宮彰一郎

浅野はなぜ刃傷に及んだのか？　赤穂事件最大の謎の真因を巧みな心理描写で解き明かす表題作ほか、鮮やかな余韻を残す五篇の忠臣蔵異聞。

平家(一)

池宮彰一郎

平安末期、地下人と蔑まれた平氏に英傑が現れた。行き詰まった藤原官僚体制に挑み、新しい国家構想実現を図る、「改革者」清盛を描いた歴史巨篇。

平家(二)

池宮彰一郎

武門の頂点に立った清盛は、利害の一致する後白河上皇と意を通じ、政策を繰り出す。だが、改革を阻む最大の難敵は、後白河上皇その人であった。

平家(三)

池宮彰一郎

改革を急ぐ清盛が福原遷都を強行する一方、坂東では復仇を呼号する源頼朝が蹶起した。志半ばで病に斃れた清盛の大志は潰えるほかないのか？

平家(四)

池宮彰一郎

源平の争乱に彗星の如く登場した義経は、鮮やかな戦法で平家を滅亡に追い込む。しかしそこには、後白河法皇の千古不易の思想が秘められていた。

最後の忠臣蔵

池宮彰一郎

吉良邸討入から引揚げる途次、足軽・寺坂吉右衛門は大石内蔵助より密命を与えられる。過酷な後半生を生きた武士の信義と哀歓を描く連作四篇。

角川文庫ベストセラー

謀将 直江兼続(上)(下)
南原幹雄

謀将 真田昌幸(上)(下)
南原幹雄

城取りの家
南原幹雄

付き馬屋おえん 暗闇始末
南原幹雄

付き馬屋おえん 吉原御法度
南原幹雄

付き馬屋おえん 女郎蜘蛛の挑戦
南原幹雄

鉄砲三国志 大坂の陣外伝
南原幹雄

宿願の豊臣家覆滅を果たした家康にも徐々に老衰が忍び寄っていた。敗軍の将・直江が次に考えていた秘策とはなにか——。雄渾の大型歴史小説。

武田氏に仕えた真田幸隆は、信玄の謀将として頭角を現し、その子昌幸は真田家の独立を目指す。天下分け目の関ケ原に奇謀を揮った知将の生涯。

〈城取り〉で武功をあげた竹中家に生まれ、山城を攻略する半兵衛を描く表題作の他、戦国乱世を駆け抜けた男たちの生と死を綴った戦国武将伝。

江戸で日に千両が落ちる吉原。だが、快楽に酔いしれたつけは、翌朝待ったなしで回ってくる。貸金取り立てを請け負う馬屋の二代目おえんの活躍。

吉原の大見世で、おいらんの名代が札差に手込めにされた。名代への手出しはご法度だが、相手は上客。おえんの活躍が始まる。痛快連作時代小説。

江戸の不夜城・吉原で、今日も舞い込む見世からの依頼。女悪党、通称「女郎蜘蛛」との因縁の対決を始め、おえんが下す鉄槌の数々。痛快時代連作集。

国友、堺と共に、三大鉄砲鍛冶を誇った日野は存亡の危機にあった。何としても新製法を奪取せよ！鉄砲をめぐるもう一つの大坂の陣を描く時代長編。

角川文庫ベストセラー

付き馬屋おえん　南原幹雄

吉原では不始末をした遊女は容赦ない折檻に遭う。水鏡も私刑の一つだ。哀れな遊女を食い物にする悪党は許さない！　おえんの鉤縄が飛ぶ痛快連作。

吉原水鏡

明治新選組　中村彰彦

常陸笠間藩を脱藩、新選組隊士として各地を転戦した相馬主計。先に逝った者たちを想い日々を過ごす主計には数奇なめぐりあわせが待っていた――。

闘将伝　小説　立見鑑三郎　中村彰彦

桑名藩雷神隊の立見鑑三郎は冷静かつ大胆な戦術で数々の劣勢を勝ち戦に転じた。不屈の闘志で戊辰、西南、日清、日露の戦場を疾駆した名将の生涯。

明治無頼伝　中村彰彦

新選組三番隊長・斎藤一は戊辰戦争を会津藩と共に闘い、維新後も旧藩士の足跡を追う。時代の変化に与しなかった男の生の軌跡をたどる歴史長編。

海将伝　中村彰彦

日本海軍を育て上げたにもかかわらず自らの功を語らず、また、戦いのさなかにあっても人道を重んじ、明治のこころを貫いた海将・島村速雄の生涯。

新選組全史（幕末・京都編）（戊辰・箱館編）　中村彰彦

その魅力ゆえに、これまで真実と俗説が交錯して語られてきた新選組。膨大な史料を掘り起こし、通説を検討して綴る、新選組興亡史の決定版。

豪姫夢幻　中村彰彦

前田利家の四女、豪姫は秀吉の養女となり、やがて宇喜多秀家に嫁ぐが…。戦国の荒波に翻弄された豪姫の数奇な生涯を描いた長編歴史小説。

9784041323328

1920193007435

ISBN4-04-132332-0

C0193 ¥743E

定価：本体743円（税別）

幕末動乱のとき、真剣なら無類の強さを発揮する天然理心流の道場主・近藤勇は、志を同じくする土方歳三、沖田総司らと江戸から京に上り新選組を結成、尊皇攘夷、倒幕を画策する長州や薩摩など西南雄藩の活動家と闘う。芹沢鴨一派との内部抗争を経て、京の池田屋に長州藩の過激派を襲い、天下にその名を轟かせるが……。幕府瓦解の前夜、一瞬の光芒を放った新選組。その局長、近藤勇の激闘の日々と隊士との交情を熱く描く傑作。